新潟県埋蔵文化財調査報告書 第110集

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅶ

八 反 田 遺 跡
高　畑　遺　跡

（C地点・二期線）

２００２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅶ

八反田（はったんだ）遺跡
高畑（たかばたけ）遺跡

（C地点・二期線）

２００２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和63年に全線が開通した北陸自動車道は、長岡市で関越自動車道、上越市で上信越自動車道、滋賀県米原町で名神自動車道と接続し、東北・北陸地方と首都圏・関西地方を結ぶ一大動脈として、流通や地域の発展に大きく寄与してきました。また、平成12年には上越市と富山県朝日町間の四車線化工事が完了し、その果たす役割は益々大きくなるものと期待されています。

新潟県教育委員会では、昭和47年から北陸自動車道に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施し、これまでに5遺跡の調査成果を報告してまいりました。本書は、春日・木田地区遺跡群のうち、昭和59・60・62・63年の4年間発掘調査を行った八反田遺跡と、昭和59・62年の2年間発掘調査を行った高畑遺跡C地点及び二期線の発掘調査報告書であります。

八反田遺跡は、縄文時代前期と平安時代、中世の集落遺跡で土器・陶磁器類を中心に石製品・木製品・金属製品といった多様な遺物が出土しています。縄文時代前期の集落跡は、日本海側における縄文海進時の集落の動向を知る手がかりとなるでしょう。また、平安時代の集落跡は掘立柱建物や水田が検出され、沖積地の開発を進める集落の様子を垣間見せてくれます。中世では掘立柱建物や井戸を溝で囲む屋敷地が検出され、有力者の存在が窺われます。

高畑遺跡は平安時代から中世の集落跡で、遺構・遺物とも少量の出土でしたが、前回報告した地区の成果と併せ、より集落の様子を明らかにすることができました。

今回の調査結果が、上越地域における縄文時代、平安時代、中世の歴史を解明するための資料として広く活用され、併せて埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査から整理・報告まで多大なご協力とご支援を賜りました日本道路公団をはじめ、上越市教育委員会ならびに地元の方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟一

例　　言

1　本報告書は、新潟県上越市大字寺分字寺田1521番地ほかに所在する八反田遺跡及び、同市大字岩木字高畑に所在する高畑遺跡（C地点・二期線）の発掘調査記録である。

2　本調査は北陸自動車道の建設に伴い、日本道路公団から新潟県が受託したもので、発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が八反田遺跡を昭和59･60･62･63年度、高畑遺跡を昭和59･62年度に実施したものである。高畑遺跡の他の調査地点は『新潟県埋蔵文化財調査報告書第42集高畑遺跡』［寺崎ほか1986］で報告済である。

3　整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成13年度に財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）が県教委から受託しこれにあたった。

4　出土遺物及び調査に係る各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。遺物の註記は八反田遺跡の略記号「HT」とし、遺構番号及び取り上げ時の台帳番号を続けて記した。高畑遺跡は略記号「TA」の後にC地点は「C」、二期線は「(二)」を記して区別し、出土地点や層位を続けた。

5　八反田遺跡の遺構平面図の測量は、昭和59年度はシン航空写真株式会社に、昭和60年度はセントラル航業株式会社に委託して実施した。

6　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

7　第Ⅴ章木製品の樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

8　本文中の註は脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

9　遺物番号は遺跡ごとに種別に係りなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

10　本書の執筆は江口友子（埋文事業団主任調査員）、寺崎裕助（同　公団担当課長代理）がこれにあたり、編集は江口が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

　第Ⅲ章3-C・4-B-1）･･･寺崎

　上記以外･･･江口

11　遺構図のトレースから各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してDTPソフトにより実施し、デジタルデータから直接印刷した。

12　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

植木　宏　金子　拓男　小島　幸雄　小林　達雄　上越市教育委員会　高野　武男　田口　頌二
杉山　信二　楢崎　彰一　日本道路公団北陸支社　水澤　幸一　宮田　進一　室岡　博
秦　繁治　藤原　宏志　吉田　恵二　渡辺　誠

目　　次

第Ⅰ章　序　　説……1

1　調査に至る経緯……1

2　春日・木田地区各遺跡の調査概要……2

3　調査と整理作業……5

A　八反田遺跡一次調査（確認調査）の方法と結果……5
B　高畑遺跡一次調査（確認調査）の方法と結果……6
C　一次調査の体制……6
D　八反田遺跡二次調査（本調査）の方法と経過……7
E　八反田遺跡二次調査の体制……9
F　高畑遺跡（C地点・二期線）二次調査（本調査）の方法と経過……10
G　高畑遺跡（C地点・二期線）二次調査の体制……10
H　八反田遺跡・高畑遺跡（C地点・二期線）整理の体制……11

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……12

1　地理的環境……12

2　周辺の遺跡と歴史……13

A　縄文時代……13
B　弥生時代……13
C　古墳時代……13
D　奈良・平安時代……15
E　中　　世……16
F　近　　世……16

第Ⅲ章　八反田遺跡……18

1　調査の概要……18

A　グリッドの設定……18
B　調査区画の呼称……18
C　基本層序……19
D　遺構・遺物の検出状況……20

2　遺　　構……21

A　遺構の記述・表記方法……21
B　遺構図版について……21
C　遺構各説……21

3　遺　　物……27

A　中世の土器・陶磁器……27
B　平安時代の土器・陶器……31
C　縄文土器……35
D　その他の土器……35
E　土製品……36

F　木　製　品…… 36
G　石　製　品…… 37
H　石　　器…… 38
I　銭　　貨…… 38
J　鉄　　滓…… 39

4　ま　と　め…… 40
A　遺　　構…… 40
B　遺　　物…… 41

第Ⅳ章　高畑遺跡（C地点・二期線）…… 44

1　調 査 の 概 要…… 44
A　グリッドの設定…… 44
B　基　本　層　序…… 44

2　遺　　構…… 45

3　遺　　物…… 46
A　土　　器…… 46
B　木　製　品…… 47
C　石　製　品…… 47

4　ま　と　め…… 47

第Ⅴ章　木製品の樹種同定…… 49

A　は　じ　め　に…… 49
B　試 料 と 方 法…… 49
C　結　　果…… 52
D　考　　察…… 52

《要　　約》…… 56

〈引用文献〉…… 57

別表　各種遺物観察表…… 59

挿図目次

第 1 図　春日・木田地区の遺跡群 …… 3
第 2 図　八反田遺跡一次調査トレンチ位置図 …… 5
第 3 図　高畑遺跡一次調査トレンチ位置図 …… 6
第 4 図　位置と周辺の遺跡分布図 …… 14
第 5 図　八反田遺跡グリッド設定図 …… 18
第 6 図　八反田遺跡基本土層図 …… 19
第 7 図　中世土器・陶磁器器種分類 …… 28
第 8 図　平安時代土器・陶器器種分類 …… 32
第 9 図　八反田遺跡出土銭貨 …… 38
第10図　八反田遺跡土器・陶磁器の構成 …… 折込
第11図　高畑遺跡グリッド設定図 …… 44
第12図　高畑遺跡基本土層図 …… 45
第13図　高畑遺跡Ａ地点遺構配置図 …… 48
第14図　八反田遺跡・高畑遺跡出土木材組織
顕微鏡写真１ …… 53
第15図　八反田遺跡・高畑遺跡出土木材組織
顕微鏡写真２ …… 54
第16図　八反田遺跡・高畑遺跡出土木材組織
顕微鏡写真３ …… 55

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡一覧表 …… 15
第 2 表　八反田遺跡時代別遺構数 …… 20
第 3 表　八反田遺跡銭貨観察表 …… 39
第 4 表　八反田遺跡鉄滓重量表 …… 39
第 5 表　高畑遺跡の動態 …… 47
第 6 表　八反田遺跡出土木製品樹種同定結果 …… 50
第 7 表　高畑遺跡出土木製品樹種同定結果 …… 50
第 8 表　八反田遺跡時期別樹種同定結果集計 …… 52
第 9 表　八反田遺跡中世遺物別樹種同定集計結果 · 52

図版目次

図版 1　八反田遺跡遺構全体配置図（中世）
図版 2　八反田遺跡遺構全体実測図（中世１）
図版 3　八反田遺跡遺構全体実測図（中世２）
図版 4　八反田遺跡遺構全体実測図（中世３）
図版 5　八反田遺跡遺構全体実測図（中世４）
図版 6　八反田遺跡遺構全体実測図（中世５）
図版 7　八反田遺跡遺構全体実測図（中世６）
図版 8　八反田遺跡遺構全体配置図（平安時代）
図版 9　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代１）
図版10　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代２）
図版11　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代３）
図版12　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代４）
図版13　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代５）
図版14　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代６）
図版15　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代７）
図版16　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代８）
図版17　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代９）
図版18　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代10）
図版19　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代11）
図版20　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代12）
図版21　八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代13）
図版22　八反田遺跡遺構全体配置図（縄文時代）
図版23　八反田遺跡遺構全体実測図（縄文時代１）
図版24　八反田遺跡遺構全体実測図（縄文時代２）
図版25　八反田遺跡遺構全体実測図（縄文時代３）
図版26　八反田遺跡遺構全体実測図（縄文時代４）
図版27　八反田遺跡加賀街道変遷図（近世）
図版28　八反田遺跡遺構個別図（中世１）
図版29　八反田遺跡遺構個別図（中世２）
図版30　八反田遺跡遺構個別図（中世３）
図版31　八反田遺跡遺構個別図（中世４）
図版32　八反田遺跡遺構個別図（中世５）
図版33　八反田遺跡遺構個別図（平安時代１）
図版34　八反田遺跡遺構個別図（平安時代２）
図版35　八反田遺跡遺構個別図（平安時代３）
図版36　八反田遺跡遺構個別図（縄文時代）
図版37　八反田遺跡土器・陶磁器１
図版38　八反田遺跡土器・陶磁器２
図版39　八反田遺跡土器・陶磁器３
図版40　八反田遺跡土器・陶磁器４
図版41　八反田遺跡土器・陶磁器５
図版42　八反田遺跡土器・陶磁器６
図版43　八反田遺跡縄文土器
図版44　八反田遺跡その他の土器・土製品
図版45　八反田遺跡木製品１
図版46　八反田遺跡木製品２
図版47　八反田遺跡木製品３
図版48　八反田遺跡木製品４
図版49　八反田遺跡木製品５
図版50　八反田遺跡石製品１

図版51　八反田遺跡石製品２・石器
図版52　高畑遺跡遺構全体配置図（Ｃ地点）
図版53　高畑遺跡遺構全体配置図（二期線）
図版54　高畑遺跡遺構個別図（1）
図版55　高畑遺跡遺構個別図（2）
図版56　高畑遺跡土器・陶器・木製品１
図版57　高畑遺跡木製品２・石製品

写真図版目次

図版58 遺跡周辺空撮写真
図版59 八反田遺跡遺構１　中世遺構完掘(八反田地区)
図版60 八反田遺跡遺構２　縄文時代・平安時代・中世遺構完掘（P.R.7東地区１・２層目）
図版61 八反田遺跡遺構３　平安時代・中世遺構完掘（A・B地区)、SE303(東)・306（東）・307（東）
図版62 八反田遺跡遺構４　SE307(東)・313(東)・314（東）・323（東）・504（東）・508（東）
図版63 八反田遺跡遺構５　SE906（東）・924（東）・1018・1019
図版64 八反田遺跡遺構６　SE1043・1044・1046・1216
図版65 八反田遺跡遺構７　SE1217・1218・1226・1245、SK33（AB）
図版66 八反田遺跡遺構８　SK33（AB）・1241、SB1-SK6、SD1（AB)、SB1-SK16（AB）
図版67 八反田遺跡遺構９　SK1201、SD302（東）・311（東）・319（東）・320・(東）903（東）
図版68 八反田遺跡遺構10　SD904(東)・905(東)・961(東)・965(東)～967(東)・1051・1052・1200・1202・1215（東）
図版69 八反田遺跡遺構11　平安時代遺構完掘（八反田地区）
図版70 八反田遺跡遺構12　平安時代遺構完掘（P.R.7東地区３・４層目）
図版71 八反田遺跡遺構13　平安時代遺構完掘（P.R.7西・P.R.7地区）
図版72 八反田遺跡遺構14　平安時代遺構完掘（水路東・水路西・水路中央・Ｃ地区）
図版73 八反田遺跡遺構15　SB808(西)・814（西)、8C3グリッド・SE1(水東)、SE335(東)・505（東）・901（東）
図版74 八反田遺跡遺構16　SE1086・1114・1419・1420
図版75 八反田遺跡遺構17　SE1425・1426、SK2（AB）・3（AB）
図版76 八反田遺跡遺構18　SK34(西)・303（C.B.6）・304（C.B.6）・803（西）・804（西）・810（西）
図版77 八反田遺跡遺構19　SK925（東）・1416・SD208（東)、SX209（東)、SD54（AB）・60（AB）
図版78 八反田遺跡遺構20　縄文時代遺構完掘（八反田地区、P.R.7東地区５層目）・SI500（東）・SI500-SK4
図版79 八反田遺跡遺構21　SI922（東）・1471・1472、SD300、加賀街道
図版80 八反田遺跡遺物１
図版81 八反田遺跡遺物２
図版82 八反田遺跡遺物３
図版83 八反田遺跡遺物４
図版84 八反田遺跡遺物５
図版85 八反田遺跡遺物６
図版86 八反田遺跡遺物７
図版87 八反田遺跡遺物８
図版88 八反田遺跡遺物９
図版89 高畑遺跡遺構１　Ｃ地点SB1-P4・P6・P12
図版90 高畑遺跡遺構２　Ｃ地点黒色河川曲物、SK1、P14・23・24・11、SD1・2
図版91 高畑遺跡遺構３　Ｃ地点SB2、黒色河川
図版92 高畑遺跡遺構４　二期線完掘、SE1
図版93 高畑遺跡遺物１
図版94 高畑遺跡遺物２

第Ⅰ章　序　　説

北陸自動車道建設に伴う上越市春日・木田地区の発掘調査は、昭和57年度の一次調査に始まり、昭和60年の夏に二期線分を残して大半の二次調査が終了した。二期線分についても昭和62・63年の2か年で終了している。法線内での調査対象面積は約61,000㎡で、この中には6遺跡（木田遺跡・池田遺跡・一之口遺跡・八反田遺跡・鉄砲町遺跡・高畑遺跡）が含まれる。これらの整理作業は昭和59年度から断続的に実施しており、今までに池田遺跡［1985］、高畑遺跡［1986］、一之口遺跡［1986・1994］、鉄砲町遺跡［1995］木田遺跡［2001］の調査報告書が刊行されている。そして本書が北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書の最終巻である。

1　調査に至る経緯

北陸自動車道は総延長480㎞に及ぶもので、起点を新潟市におき、日本海沿岸の新潟・富山・石川・福井の各県を経由し滋賀県米原町で名神高速道に接続する一大高速自動車道である。この路線は各県の主要都市を連絡し、さらに関西方面に直結させるものであり、関連する地区はもとより地域の開発促進に係る役割はきわめて大きいものがある。

昭和45年8月、この一大事業に対して文化財保護部局である県教育委員会は在地研究者に依頼して新潟から長岡間の埋蔵文化財包蔵地の調査を行った。長岡から上越までの区間の埋蔵文化財については昭和46年1月20日付で在地研究者である室岡博、中村孝三郎、金子拓男、花ヶ前盛明の各氏に自動車道建設及びそれに係る可能性のある遺跡について状況調査を依頼し文書による回答を提出してもらった。上越市（当時、直江津市・高田市）を担当した花ヶ前氏はこのなかで15遺跡を報告している。

昭和48年4月25日、長岡から上越までの路線発表があり、県教育委員会は逐次遺跡の分布調査を実施した。上越市については国指定史跡春日山城跡が関連することになり、その取扱について昭和52年7月12日、53年3月27日、4月18日、7月11日、54年4月18日、6月11日に県教育委員会は日本道路公団と協議し、路線や施行方法等について話を進め、保護に万全を期した。

春日山城に係ることが予想された法線近接の通称御馬山地区が上越市教育委員会によって発掘されたが、遺構等の存在は確認されなかった。また、平地部については、法線内の宅造地域及び法線に近い畑地の一部が試掘され、後者からは古代・中世の遺物が出土した。また、この調査期間中に随時行われた付近の遺跡分布調査によって、法線内の岩木地区から木田地区までの畑地の大部分には古代・中世の土器類が散布していることが知られるに至った。この地区にはまた鉄砲町、一之口等中世の民衆生活に由来すると考えられる小字名が散見されることは、研究者からつとに指摘されていたところでもあった。このように、現在の微高地には土器類が散布している事実及び文献上の研究成果等の考察から、この地区一帯は微高地はもとより、現在畑地として使用されている地域にも遺物、遺構が埋在していることが想定されるに至ったのである。そこで、昭和56年2月2日の協議で「春日山城の本城は解決したが、山地から木田部落までの平地は調査が必要である」旨県教育委員会が提示し、同年10月1日の協議で「春日山城下の調査を実施してほしい」との依頼が日本道路公団から出され、昭和57年2月10日付けで昭和57年度発掘調査

遺跡として文書依頼された。昭和57年8月12日、県教育委員会は日本道路公団上越工事々務所庶務課長、同担当工事長と現地で立会い協議し、調査方法、面積等について打合せを行い、調査用基準杭打設を指示した。調査は法線内の微高地で土器散布の多い中屋敷地区の畑地一帯を発掘調査し、同時に調査期間内に木田地区北端から春日山城の山地までの法線内全域の試掘を実施することとし、8月23日から11月6日までを調査期間とした（以上、『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集一之口遺跡東地区』第Ⅱ章第1節を引用）。

2　春日・木田地区各遺跡の調査概要

春日・木田地区の各遺跡では、縄文時代から近世にかけての多くの遺構・遺物が検出され、当該地域の歴史を考える上で貴重な資料を多く提供している。成果については、最新巻の木田遺跡［北村2001］でまとめられているが、一部訂正があるため、改めて掲載する。

池田遺跡

調査面積：3,500㎡

調査年度：昭和58年度

報 告 書：『新潟県埋蔵文化財調査報告書第38　池田遺跡』［寺崎ほか1985］

概　　要：平安時代から近世を中心とする遺跡で、畑跡と思われる畝状遺構、水田跡、溝状遺構9条、土坑7基等の遺構と土師器・須恵器・中近世陶磁器等の遺物が検出された。水田跡は約1,400㎡の範囲で確認されており、道路と思われる大畦畔と中・小畦畔により区画された一辺9～15mの水田跡から構成されている。出土遺物や土層の検討から、13世紀後半～17世紀前半頃の所産と考えられている。出土遺物は土器・陶磁器類が大半であるが、いずれも細片で全体でも2,000点余りと少ない。

一之口遺跡西地区

調査面積：11,930㎡

調査年度：昭和57・58年度

報 告 書：『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集　一之口遺跡西地区』［坂井ほか1986］

概　　要：平安時代を中心とした遺跡であり、掘立柱建物15棟、井戸10基、土坑・溝等の遺構と土師器や灰釉陶器等の土器類、木製品、鉄製品等の遺物が検出されている。遺構では10世紀前半と考えられる掘立柱建物と井戸・土坑がセットになった居住区が数単位存在し、周辺には畑を伴っている。掘立柱建物の中には柱掘形が一辺1mを超える大規模なものがあり、付近からは灰釉陶器が集中して出土すること等から有力者層の居宅が想定されている。出土遺物は平箱で約20箱であるが、大半が土師器で須恵器は少ない。時期的には9世紀後半～10世紀前半が中心で、井戸及び土坑から出土した良好な一括土器は、上越地域の土師器編年を考える上で貴重なものである。

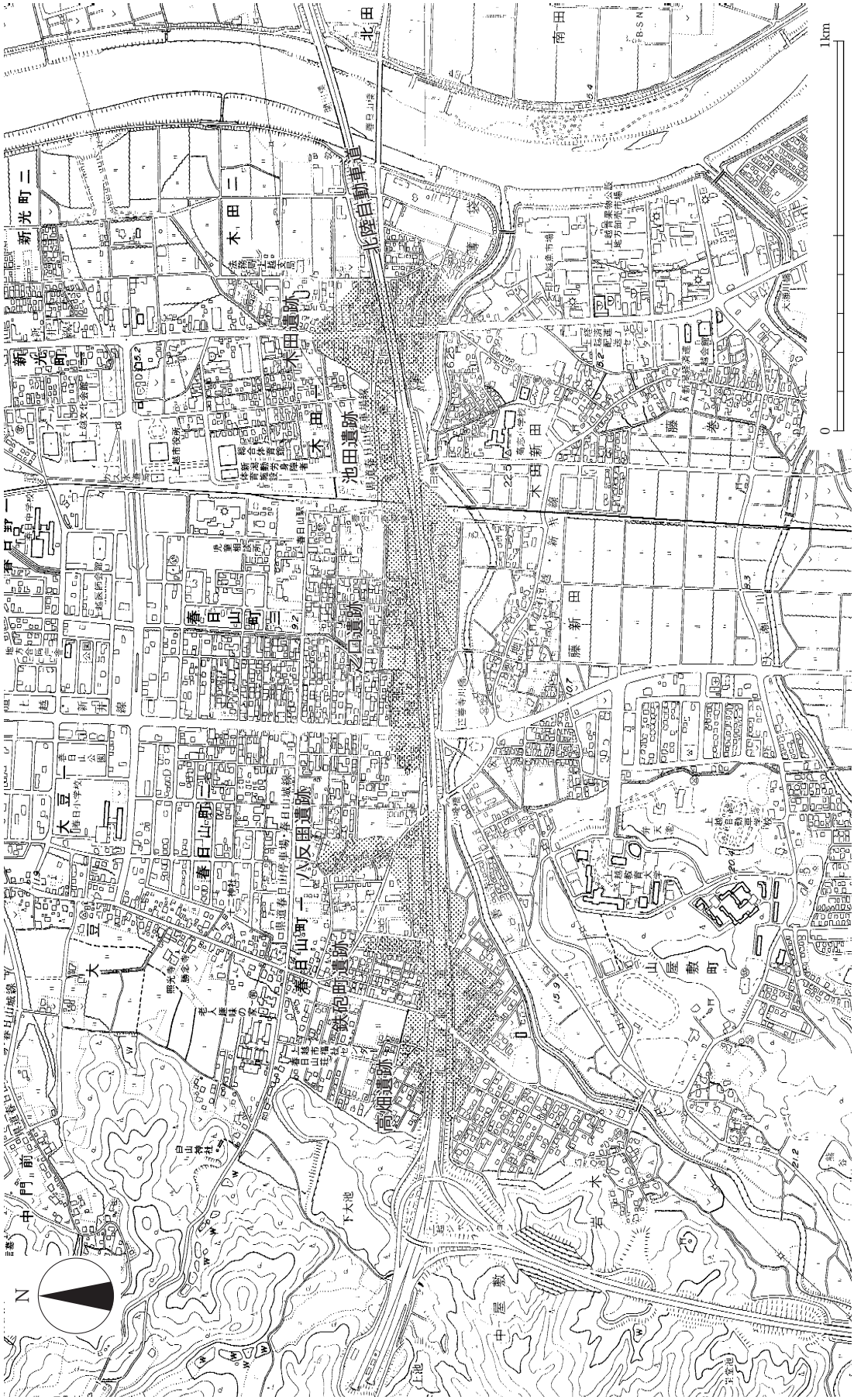
一之口遺跡東地区

調査面積：11,200㎡

調査年度：昭和58・59年度

報 告 書：『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区』［鈴木ほか1994］

概　　要：古墳時代前期・古墳時代後期・古代～中世の遺構・遺物が検出されているが、主体となるのは古墳時代後期である。古代～中世の遺構では井戸1基を除いて大半が古代の所産であり、特に23棟検出された掘立柱建物については、一之口遺跡西地区で検出された10世紀前半のものとは様相を異にし、計



第１図　春日・木田地区の遺跡群

画的な配置を有している。遺物では11世紀前半の土器が層位ごとに多量に出土しており、当該期の土器様相を知る上で貴重な資料である。古墳時代後期は竪穴建物21棟以上と多数の土坑・ピットが検出され、6世紀前半～7世紀後半の大規模集落と考えられた。住居規模の小型化やカマドの出現等が看取され、竪穴建物からまとまって出土した土器と共に、県内で資料の少なかった該期の様相を明らかにした。古墳時代前期では多数の不定形土坑が注目され、墓坑の可能性が考えられている。また、土器も遺構内から良好な一括資料が出土している。

鉄砲町遺跡

調査面積：10,793㎡（一期線分：9,320㎡、二期線分：1,473㎡）

調査年度：昭和59・60年度（一期線分）、昭和62・63年度（二期線分）[1)]

報 告 書：『新潟県埋蔵文化財調査報告書第65集　鉄砲町遺跡』［藤巻ほか1995］

概　　要：平安時代～中世にかけての集落跡であり、掘立柱建物、井戸、土坑、溝等の遺構と平箱で約180箱の遺物が出土している。遺構は出土遺物等から、平安時代中期と平安時代末期～中世の二時期に分けられる。前者では掘立柱建物3棟、井戸3基、土坑34基、溝5条等が検出されている。また、後者では井戸26基、土坑82基、溝50条等である。出土遺物は土師器、須恵器を中心に珠洲、青磁等の陶磁器類と木製品や石製品等多彩な種類が認められる。時期的にはⅠ期（9世紀末～10世紀）、Ⅱ期（12世紀前半）、Ⅲ期（14世紀～15世紀前半）の三期に大きく分けられる。

高畑遺跡

調査面積：3,568㎡（一期線分：3,278㎡、二期線分：290㎡）

調査年度：昭和58・59年度（一期線分）[2)]、昭和62年度（二期線分）

報 告 書：『新潟県埋蔵文化財調査報告書第42集　高畑遺跡』［寺崎ほか1986］（一期線分A・B地点）

概　　要：平安時代～中世にかけて断続的に営まれた遺跡であり、竪穴建物2棟、掘立柱建物3棟、井戸24基、土坑7基等が検出されている。出土遺物は少なく、平箱で数箱程度である。平安時代の遺構としては、竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、井戸3基等で、出土遺物から9世紀後半と11世紀後半の二時期の所産と考えられる。中世では掘立柱建物2棟、井戸10基等が検出され、14世紀後半～15世紀前半の珠洲壺・片口鉢や青磁碗が出土している。C地点及び二期線分は今回報告する。

木田遺跡

調査面積：4,176㎡

調査年度：昭和57～60年度

報 告 書：『新潟県埋蔵文化財調査報告書第105集　木田遺跡』［北村2001］

概　　要：平安時代～近世にかけての集落遺跡であるが、中心は中・近世である。平安時代は11世紀前半を中心とし、掘立柱建物2棟、溝2条、土坑1基、井戸1基が検出されている。中世は14世紀から15世紀前半頃の遺構群と、14世紀前半頃の屋敷地と思われる遺構群がある。15世紀後半から16世紀にか

1）木田遺跡［北村2001］4頁で、鉄砲町遺跡二期線分は未刊行とされているが一期線分と共に報告済みである。また、鉄砲町遺跡で報告されているNo.362（二期線A地区SE1出土）の砥石は、高畑遺跡（二期線A地区SE1）出土の誤りである。本書図版57No.21に再報告する。

2）高畑遺跡［寺崎ほか1986］7頁註1で、「C地点については、当初高畑遺跡の範ちゅうとして調査する予定であった。しかし、遺跡立地や調査状況からかんがみて、鉄砲町遺跡西地区と連続する可能性が強いと考えられるため、鉄砲町遺跡に含めた。」とあるが、鉄砲町遺跡には含まれておらず未報告であるので、本書で高畑遺跡C地点として報告する。

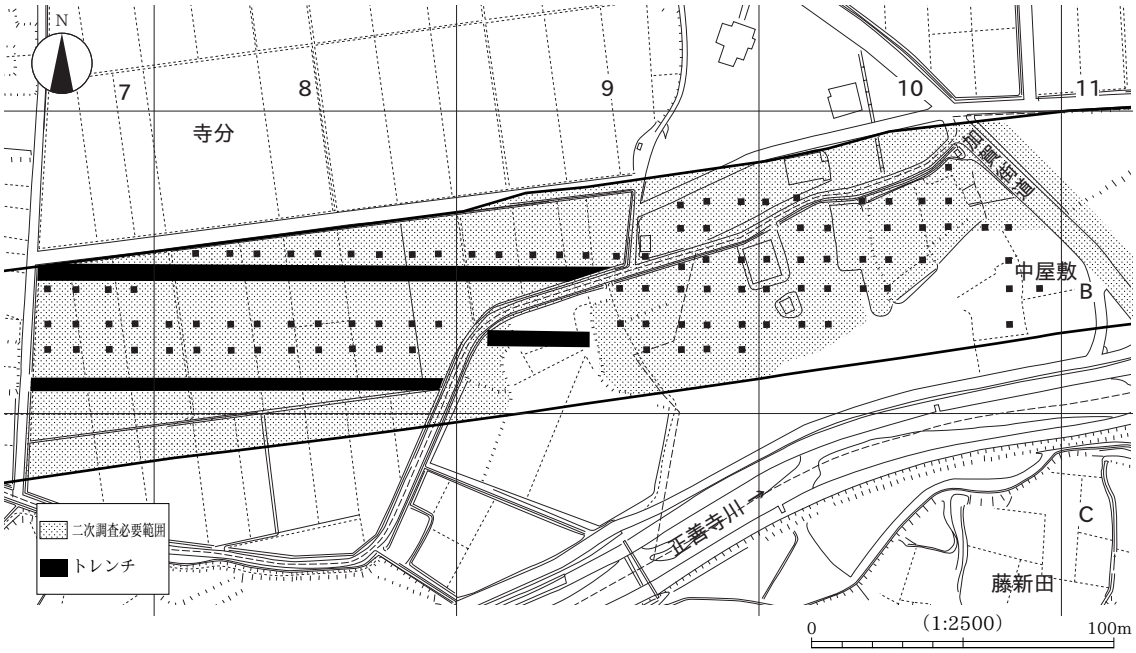
けての遺物は散発的に出土しているが遺構は明確でなく、断絶期と思われる。掘立柱建物５棟、溝７条、土坑11基、井戸33基と多数のピットが検出されている。土師器、珠洲焼、舶載磁器、古瀬戸、木製品等が出土している。近世の中心は17世紀中葉、18世紀後葉、19世紀中葉の３段階に分かれ、16世紀後半には成立していたと思われる近世「木田村」の集落構造変化の一端が読み取れる。掘立柱建物、溝16条、土坑８基、井戸24基、と多数のピットが検出されている。遺物は肥前陶磁器を中心に瀬戸美濃、越中瀬戸などが出土している。

3　調査と整理作業

A　八反田遺跡一次調査（確認調査）の方法と結果

春日・木田地区における一次調査期間は昭和57年８月23日から11月６日までの延べ55日間である。一次調査はトレンチ発掘とグリッド発掘を併用して行った。トレンチ発掘では法面バケット着装のバックホーを用い、幅2mのトレンチを階段状に発掘した。グリッド発掘では原則として100㎡に４㎡の割合で試掘グリッドを設定し、人力で発掘を行った。そして遺物が出土又は遺構が検出された時点で遺跡と認定して発掘を停止した。しかし、その結果、沖積地等で最も重要とされている層序の把握が不充分となり、その後の調査に支障をきたした。

八反田遺跡の現状は宅地・畑地・水田で、段丘上や正善寺川によって段丘化しつつある沖積地に立地する。標高は12から14mを測り、遺跡の範囲は東西約330m、南北約70mで面積は23,000㎡である。トレンチおよび試掘グリッドは107箇所に設定し、発掘面積は2,093㎡である。なお、遺跡は法線外にも広がっている。遺跡の南限は自然堤防上では堤防がとぎれるまでと考えられるが、沖積地では推定不可能であった。しかし、法線の南側に遺跡が延びることは確実である。遺構は確認されなかったが、縄文土器、古式土師器、須恵器、中・近世陶磁器などが出土していることから、縄文時代、古墳時代～近世にかけての遺物包含地と考えられる［寺崎ほか1985］。



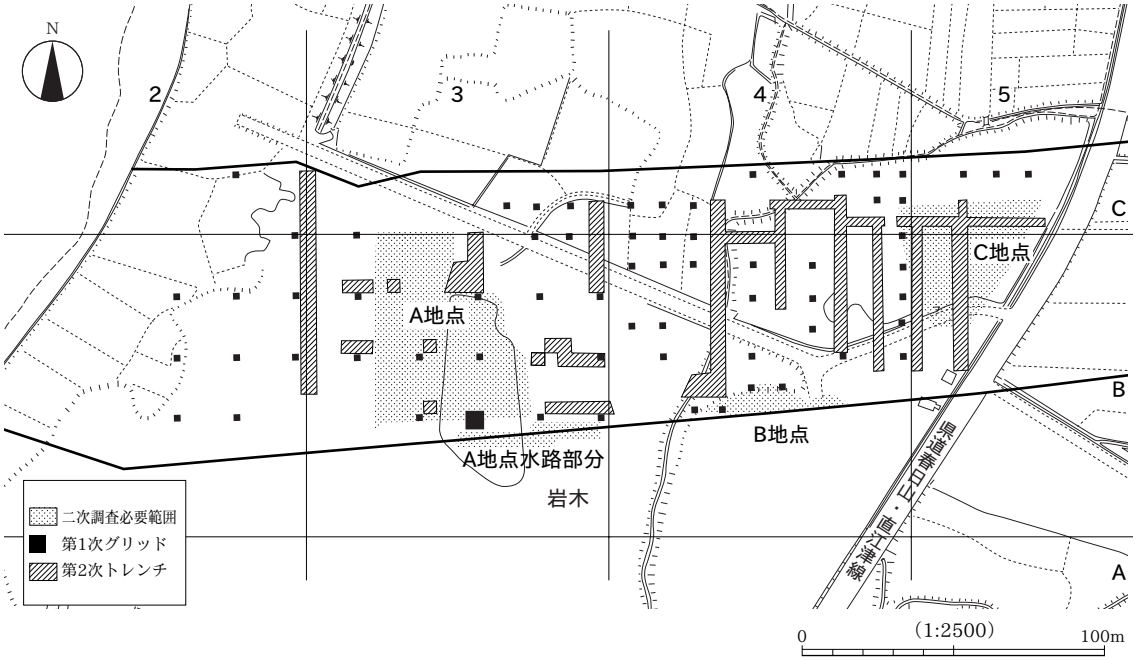
第２図　八反田遺跡一次調査トレンチ位置図

B　高畑遺跡一次調査（確認調査）の方法と結果

高畑遺跡の現状は宅地・畑地などである。一次調査は第１次調査と第２次調査の２回行われた。

第１次調査は昭和58年４月12日～21日までである。調査対象面積は約24,000㎡であり、調査面積は408㎡（全体の1.7％）であった。調査は当初10×10mグリッドの南西隅に２×２mのグリッドを設け、バックホーにより掘り下げた。遺跡の傾向を把握した後、２×2mのグリッドを20×20mに１箇所設けた。グリッド総数は94で、遺物はその内40箇所（約42％）で出土している。遺物は旧水田面と考えられる。Ⅰ層から土師器・須恵器・珠洲焼・近世陶磁器・古銭等が出土した。4C4Xj、4C5Vj・Xjでは唯一平安時代の遺物包含層（Ⅳ層黒褐色土）が確認された（C地点）。また、断片的に確認された６層（灰黒色土）からも土師器が出土している。表土下3.5～４mの地点で確認されている礫層（７層）からも土師器片が３片出土している。遺構は他の箇所と比べて一段高い3B8Xjグリッド付近で、平安時代の竪穴建物（推定）１・ピット２基が検出されたが遺物包含層は確認されていない（A地点）。

第２次調査は昭和58年５月12日から６月24日である。調査対象面積は約22,000㎡であり、調査面積は約3,000㎡で全体の13.6％に及んだ。調査方法は大グリッドの2Cと3Cの境界を起点として40m毎に幅５mのトレンチを南北に設定した。第２次調査では二次調査の範囲をさらに明確にするように努めた。その結果、遺跡範囲はA（約2,600㎡）・C（約3,200㎡）の２地点に絞られた。また、4B12Xcの南東側に隣接する地点では、工事用道路建設中に遺物が採取され、B地点として登録された［寺崎ほか1986］。



第３図　高畑遺跡一次調査トレンチ位置図

C　一次調査の体制

八反田遺跡［昭和57年度］

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　久間　健二）

管　　理　総　　括　南　　義昌（新潟県教育庁文化行政課長）

　　管　　理　歌代　荘平（　　同　　課長補佐）

庶　　務　飯口　　猛（　　同　　主任）
若杉　幸三（　　同　　主事）
伊藤　和子（　　同　　主事）
調　　査　調査指導　金子　拓男（　　同　　埋蔵文化財係長）
調査担当　横山　勝栄（　　同　　文化財主事）
調 査 員　寺崎　裕助（　　同　　学芸員）
田海　義正（　　同　　学芸員）
高橋　　勉（　　同　　嘱託員）

高畑遺跡［昭和58年度］

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　久間　健二）
管　　理　総　　括　高橋　　安（新潟県教育庁文化行政課長）
管　　理　歌代　荘平（　　同　　課長補佐）
庶　　務　飯口　　猛（　　同　　主任）
高橋　幸治（　　同　　主事）
藤枝　セツ（　　同　　主事）
調　　査　調査指導　中島　栄一（　　同　　埋蔵文化財係長）
調査担当　木村　宗文（　　同　　文化財主事）
調 査 員　寺崎　裕助（　　同　　学芸員）
肥田野弘之（　　同　　嘱託員）
丸山　謙司（　　同　　嘱託員）

D　八反田遺跡二次調査（本調査）の方法と経過

1）昭和59年度

調査期間は7月3日～11月25日である。遺構は気球方式の写真測量によって図化した。これは調査期間内における遺構実測作業の軽減、ひいては調査期間の短縮、及び完成図面の納品による基礎整理作業の軽減を目的とした。その後の作業として原図の要・不要部の確認と校正がかなりの時間を要し、基礎整理期間内に校正を終了することができなかった。

カルバートボックス6地区

以下C.B.6とする。旧加賀街道と重なる部分で舗装道路以前の路面が3面、道路にともなう溝、中世の珠洲焼が出土した溝が検出された。路面の最上位は近・現代であるが、下位2面は近世である。道路に沿って並木を形成していた松の根の跡、最下位の路面の脇から寛永通宝のサシが出土した。

水路地区

平安時代の井戸、土坑が検出され、土師器の坏が多く出土した。他に灰釉陶器も出土した。また、井戸の底部付近からは曲物が多く出土した。

プレロード7地区

以下P.R.7とする。平安時代の溝状遺構が検出された。中世の掘立柱建物の近くから五輪塔の一部が出土した。他に中世の珠洲系陶器、古代の土師器、須恵器が出土した。

プレロード７東地区

以下P.R.7東とする。９～10列の微高地上の褐色土は分析の結果平山ローム層に対比され、微高地は平山段丘の埋没地形であることが明らかになった。また、旧地形面を覆う黒色土（化石土壌）が検出され縄文土器も出土した。遺物包含層は台地上で１層（中世～縄文まで撹乱状）、台地周辺の沖積地で２～３層（埋没段丘の斜面も含む）である。中世の遺構は掘立柱建物、井戸、溝が検出された。平安時代も掘立柱建物、井戸、溝が検出された。縄文時代は竪穴建物、ピットが検出された。遺物は中世の珠洲系陶器、椀、箸が出土した。平安時代の遺物は土師器、須恵器が出土した。縄文時代の遺物は前期前半の関山式や前期後半の諸磯式土器が出土した。

プレロード７西地区

以下P.R.7西とする。平安時代の掘立柱建物や土器溜り、中世から古代の水田畦畔状遺構が検出されている。遺物は中世の珠洲系陶器と平安時代の土師器、須恵器が出土している。土器溜りは９世紀末～10世紀にかけての土師器が出土した。

2）昭和60年度

調査期間は４月16日～７月16日である。グリッド杭に沿って幅1mのトレンチを掘削し、層序の確認を行った後、法面バケット着装のバックホーで遺構確認面まで徐々に掘り下げ遺構確認を行った。遺構実測は前年に引き続き写真測量を導入した。発掘予定面積は2,600㎡であったが、遺構確認面が３面検出されたため、発掘面積は5,000㎡に上った。10Cグリッド以東の調査を行った。調査範囲は埋没段丘東斜面及びその周辺の沖積地で、遺構確認面は中世（南北朝期）、平安時代、縄文時代前期の３面が確認された。遺構は中世・平安時代の掘立柱建物、井戸、土坑、溝、縄文時代前期の竪穴建物が検出された。遺物は中世の珠洲系陶器、中世陶磁器、平安時代の須恵器、土師器、縄文時代前期の土器、石器、木製品が出土した。このように本遺跡は中世春日山城の創始、平安時代の開発を考える上で重要な遺跡である。また、数少ない縄文時代前期の集落跡であった。また、埋没段丘上に立地していることから、遺構及び遺物が層位的に把握されたほか、日本海沿岸における縄文前期の海進海退など地質学の分野にも貴重な資料を提供した。

3）昭和62年度

調査期間は９月11日から11月４日である。当初予定面積は1,680㎡であったが実質調査面積は512㎡である。平安時代～中世の畦畔、溝、ピットが検出された。遺物は浅箱２箱で土師器、須恵器、灰釉陶器、珠洲焼等が出土している。

4）昭和63年度

調査期間は７月18日から９月２日である。当初予定面積は2,220㎡であったが実質調査面積は2,084㎡であった。遺構平面図は写真測量を行った。平安時代の掘立柱建物の柱穴２基、ピット数十基、平安時代から中世の水田跡畦畔、近世ころの土坑15基、平安時代の溝７条、縄文時代早期から前期の遺物包含層が検出された。このうち溝は昭和59・60年度調査のものと連続し、ほとんどが北北東から南南西方向に掘削されている。水田畦畔は調査区の南側にさらに広がっている。縄文土器は４点出土しており、その内１点は早期の楕円押型文土器である。当時では上越市内で初めての出土であった。調査区中央部の約200㎡は以前の宅地化と調査前の工事で削平されており、遺構は検出されていない。東側の加賀街道寄りは、旧地表面が深く道路法面との関係から調査できなかった。

E　八反田遺跡二次調査の体制

一期線［昭和59年度］

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　久間　健二）

管　　理　総　　括　高橋　　安（新潟県教育庁文化行政課長）
　　管　　理　大越　敏夫（　　同　　課長補佐）
　　庶　　務　菊池　　脩（　　同　　庶務係長）
　　高橋　幸治（　　同　　主事）

調　　査　調査指導　中島　栄一（　　同　　埋蔵文化財係長）
　　調査担当　岡本　郁栄（　　同　　文化財主事）水路地区
　　寺崎　裕助（　　同　　学芸員）
　　調 査 員　山本　　肇（　　同　　学芸員）
　　鈴木　俊成（　　同　　嘱託員）
　　遠藤　孝司（　　同　　嘱託員）
　　國島　　聡（　　同　　嘱託員）
　　田中　　靖（　　同　　嘱託員）
　　肥田野弘之（　　同　　嘱託員）

一期線［昭和60年度］

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　有磯　邦男）

管　　理　総　　括　高橋　　安（新潟県教育庁文化行政課長）
　　管　　理　田中　浩一（　　同　　課長補佐）
　　庶　　務　菊池　　脩（　　同　　庶務係長）
　　高橋　幸治（　　同　　主任）

調　　査　調査指導　中島　栄一（　　同　　埋蔵文化財係長）
　　調査担当　寺崎　裕助（　　同　　文化財専門員）
　　調 査 員　田海　義正（　　同　　文化財専門員）
　　高橋　保雄（　　同　　文化財専門員）
　　池田　敏郎（　　同　　文化財専門員）
　　田中　　靖（　　同　　文化財調査員）

二期線［昭和62年度］C地区

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　有磯　邦男）

管　　理　総　　括　大塚　克夫（新潟県教育庁文化行政課長）
　　管　　理　矢部　　亮（　　同　　課長補佐）
　　庶　　務　土田　　玲（　　同　　主事）

調　　査　調査指導　中島　栄一（　　同　　埋蔵文化財係長）
　　調査担当　鈴木　俊成（　　同　　文化財専門員）
　　調 査 員　高橋　昌也（　　同　　文化財専門員）
　　竹田　和夫（　　同　　文化財専門員）

二期線［昭和63年度］A・B地区

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　田中　邦正）

管　　理　総　　括　大塚　克夫（新潟県教育庁文化行政課長）

　　管　　理　矢部　　亮（　　同　　課長補佐）

　　庶　　務　境原　信夫（　　同　　主事）

調　　査　調査指導　中島　栄一（　　同　　埋蔵文化財係長）

　　調査担当　田海　義正（　　同　　文化財専門員）

　　調 査 員　山本　幸俊（　　同　　文化財専門員）

　　佐藤　俊幸（　　同　　文化財専門員）

　　梶　　良成（　　同　　文化財専門員）

　　本間　桂吉（　　同　　文化財調査員）

F　高畑遺跡（C地点・二期線）二次調査（本調査）の方法と経過

C地点

調査期間は昭和59年10月23日、11月1から11月17日である。当初予定面積は3,200㎡であったが実質調査面積は1,348㎡である。平安時代の掘立柱建物、土坑、ピットが検出された。また、埋没した河川跡も検出された。遺物は浅箱9箱程度で土師器、須恵器の他、埋没河川から曲物も出土した。

二期線

調査期間は昭和62年9月1日から9月11日、9月24から10月15日である。当初予定面積は570㎡であったが、法面に亀裂が生じ安全勾配を1：1から1：1.8にしたため、実質発掘面積は290㎡となった。盛土から遺構確認面までは、遺構・遺物に注意しながらバックホーで徐々に掘削した。井戸1基、土坑1基、溝状遺構2条と柱穴多数を検出したが、西側に位置する2条の溝は微高地の縁辺にあり、井戸・柱穴を中心とする東側の居住範囲を区切っている。覆土の違いから平安時代と中世の2時期に分かれるものと考えられ、昭和58・59年度に調査したA地点東地区で検出された遺構群の伸びと思われる。井戸からは下駄が出土した。他に土師器と五輪塔の一部、砥石などが浅箱に1箱ほどが出土している。

G　高畑遺跡（C地点・二期線）二次調査の体制

C地点［昭和59年度］

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　久間　健二）

管　　理　総　　括　高橋　　安（新潟県教育庁文化行政課長）

　　管　　理　大越　敏夫（　　同　　課長補佐）

　　庶　　務　菊池　　脩（　　同　　庶務係長）

　　高橋　幸治（　　同　　主事）

調　　査　調査指導　中島　栄一（　　同　　埋蔵文化財係長）

　　調査担当　岡本　郁栄（　　同　　文化財主事）

　　調 査 員　寺崎　裕助（　　同　　学芸員）

　　田中　　靖（　　同　　嘱託員）

　　肥田野弘之（　　同　　嘱託員）

二期線［昭和62年度］

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　有磯　邦男）

管　　理　総　　括　大塚　克夫（新潟県教育庁文化行政課長）

　　管　　理　矢部　　亮（　　同　　課長補佐）

　　庶　　務　土田　　玲（　　同　　主事）

調　　査　調査指導　中島　栄一（　　同　　埋蔵文化財係長）

　　調査担当　鈴木　俊成（　　同　　文化財専門員）

　　調 査 員　高橋　昌也（　　同　　文化財専門員）

　　竹田　和夫（　　同　　文化財専門員）

H　八反田遺跡・高畑遺跡（C地点・二期線）整理の体制

出土遺物の水洗・註記作業は調査現場で発掘調査と並行して行った。その後、本格的な整理作業は、埋文事業団の発足後に県教委から埋文事業団が委託を受けて、平成13年4月から14年3月まで埋文事業団で行った。遺構図面の整理、遺物の接合・復元・実測・トレースなどの作業は整理職員が行った。

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

整　　理　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　須田　益輝（事務局長）

管　　理　長谷川司郎（総務課長）

庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）

整理総括　岡本　郁栄（調査課長）

整理指導　北村　　亮（調査課整理担当課長代理）

整理担当　江口　友子（　　同　　主任調査員）

作　　業　小山たか子　田辺恵美子　広野　澄　室塚真弓　渡辺和子（以上、嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

八反田遺跡は上越市大字寺分字寺田1,521番地ほかに所在し、現状は宅地・畑地・水田で春日・木田地区では唯一安定した基盤層である平山層の段丘上及び周辺の沖積地に立地する。標高は12～14mを測る。高畑遺跡は上越市大字岩木字高畑ほかに所在し、沖積平野（高田面）の正善寺川によって形成されたと考えられる自然堤防上、またはその周囲の沖積地に立地する。標高は16mを測る。上越地方の地勢については『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区』［鈴木ほか1994］に詳しいので、以下に引用する。

春日・木田地区遺跡群の立地する高田平野は、新潟県南西部に位置する堆積平野である。その東側を縁取るように海岸と平行して、上越市五智～柿崎町にかけて長さ約20㎞にわたって潟町砂丘が発達し、海岸と平野を区画している。潟町砂丘は幅平均１～1.5km、標高10～50mを計る起伏に富んだ海岸砂丘で、上部は新期砂丘層によって、下部は潟町砂層と呼ばれる古期砂丘砂層によって構成される。北東部では、海から直接そびえる米山（993m）をはじめとする米山山地が柏崎平野との境をなしている。南東から北東部にかけては菱ヶ岳（1,129m）、天水山（1,090m）、黒倉山（1,289m）等のそびえる東頸城山地によって区画され、この山地の南西部が信越国境をなしている。東頸城山地は徐々に高度を下げながら北東方向に伸び、刈羽郡につづいている。西側は姫川右岸から東に広がる西頸城山地がある。西頸城山地には、北から鉢巻山（412m）、南葉山（949m）、重倉山（1,029m）、大毛無山（1,429m）、容雅山（1,499m）等の山々がそびえ、北から南に行くに下がって次第に高度を増し、最高所は火打山の2,462mである。東頸城山地、西頸城山地ともに大半が新第三紀の堆積岩で形成され、この未凝結の地層のために山間地域は日本でも有数の地滑り地帯となっている。また、南側には活火山である妙高山（2,446m）がそびえ立つ。

高田平野には、これらの三方を囲む山から多くの河川が流入している。最大の河川は西頸城山地南部に源流を持つ関川である。関川は妙高山東麓をぬけて、片貝川・矢代川・正善寺川等西頸城山地西部から流れ出す河川を合流しながら北流して日本海へそそぐ。南東部からは櫛池川・大熊川が流れ出し、平野部南西よりの地域で関川と合流する。高田平野の南西部から南東部にかけては飯田川・櫛池川・大熊川・関川・矢代川などの河川が運搬してきた堆積物によって形成される扇状地が発達している。

これらの河川によって造られた高田平野は、その大部分が２段の沖積段丘によって形成されている。両者は段丘崖をもって上位の高田平野面と下位の関川面とに区分されている。この段丘崖は関川河口付近ではあまり明瞭に認められないが、南に行くにしたがって比高を増し、最大で約6mを計る。高田面は、礫層と砂質・シルト層の互層からなる高田層によって形成され、高田平野の大部分を占める。標高は約６～36mを計り、海岸部へ向かって下降している。縄文海進時に内湾であったところに河川による堆積作用を受けて形成されたものと考えられている。現在においても平野北東部の大潟町・JR北陸本線土底浜駅から上下浜駅間の海岸砂丘背後には、旧大潟をはじめ朝日池・鵜ノ池などが潟湖として、その痕跡を残している。この周辺においては、縄文時代から断続的に古代に至るまでの遺跡が集中して分布し、天然の港

として潟湖を利用する集落が営まれていたものと思われる。また、高田面上の河川沿いの地域や旧河道に沿った地域には河川が繰り返し洪水を起こすことによって形成された自然堤防が発達している。特に飯田川や保倉川・旧保倉川河道に沿った地域で顕著である。関川面は関川やその支流が高田面を削って形成されたもので、関川やその支流に沿って認められるに過ぎない。関川の氾濫原との比高は約１～2mを計る。関川面においても特に関川・矢代川の河道に沿った地域に自然堤防が発達している。

高田平野の東縁部から西縁部にかけた山地の麓には部分的に洪積台地があり、平野の一部をなしている。これは三段に区分されており、最上部の面からそれぞれ、飯喰沢面・愛の風面・平山面と呼ばれている。飯喰沢面は赤色土壌・くされ礫層とローム層をのせ、浦川原村山本山山地の最高位面・板倉町飯喰沢～西貝屋の西側の山地、新井市濁川採石場の最上部等わずかに見られるにすぎない。赤色土壌とローム層を伴う粘土層と砂礫層をのせる愛の風面は、浦川原村山本山（標高140～190m）、板倉町山越（標高200～250m）、新井市濁川採石場（標高220～250m）等に見られる。砂礫層と粘土層のほかローム層をのせる平山面には、西縁部の灰塚・平山・岩木・山屋敷等の集落をのせる段丘や菅原神社をのせる段丘等がある。

2　周辺の遺跡と歴史

周辺の遺跡について第４図の範囲を対象に発掘調査が行われた遺跡を中心に概観する。北陸自動車道関係の春日・木田地区遺跡群については第Ⅰ章第２節に詳しいので割愛した。遺跡名は新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードに拠った。

A　縄　文　時　代

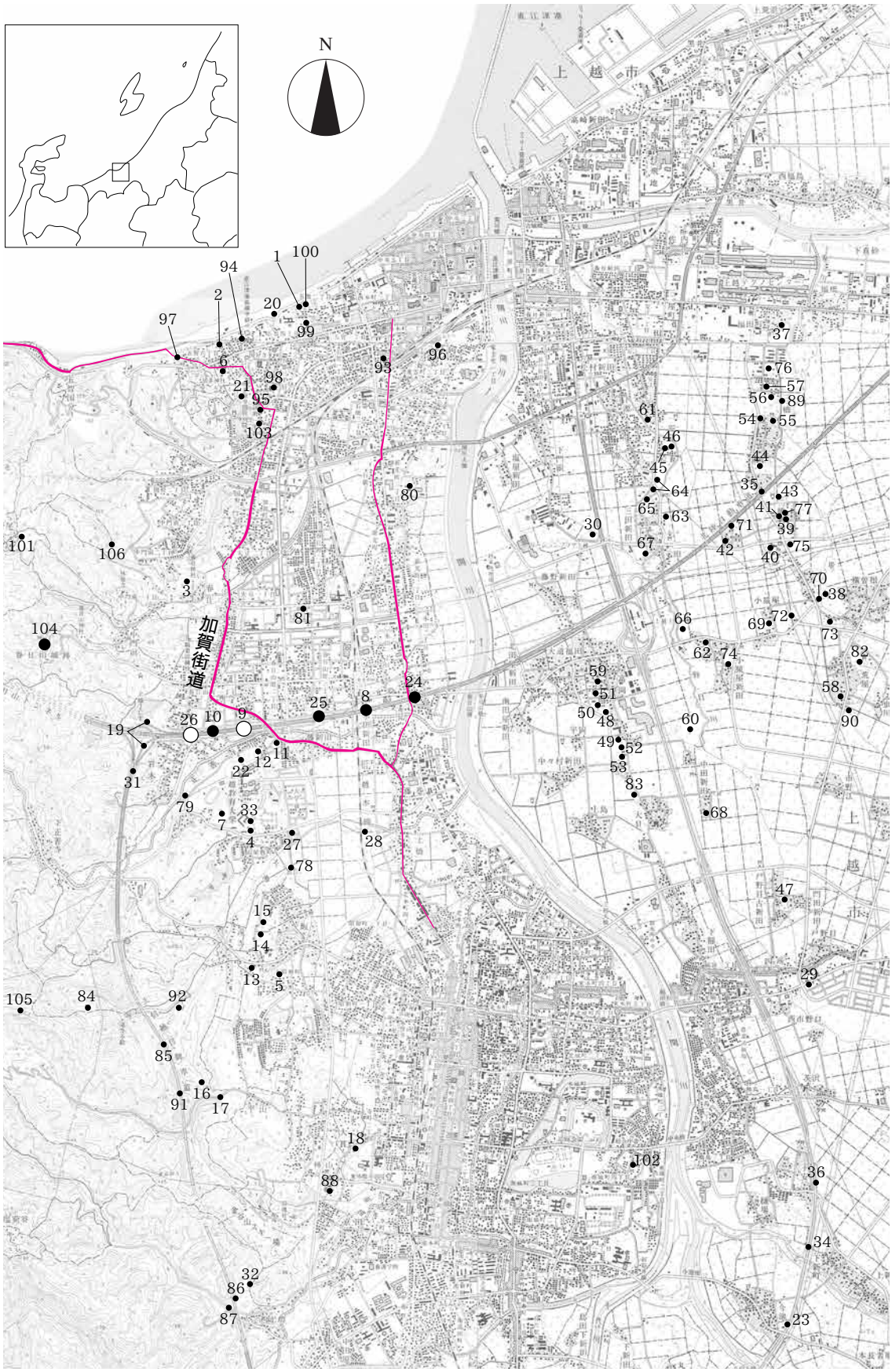
全体的に中期から晩期の遺跡が多く見られる。前期の遺跡は、八反田遺跡と後述する善光寺浜遺跡等わずかである。西側丘陵部にある炭山遺跡は早期後半の集石１基と集石土坑３基が検出されている。また、後期後半は、直径5m前後で円形の竪穴建物４棟を検出した［三ツ井1997］。山屋敷Ⅰ遺跡［岡本ほか1979］は、竪穴建物54棟、土坑17基が検出された縄文中期が主体の集落跡である。出雲遺跡［岡本ほか1979］は八反田遺跡と同様に平山層に立地する縄文中期前葉の遺跡である。竪穴建物１棟が検出されている。善光寺浜遺跡は、詳細分布調査で発見された地表面下3mにある縄文前期の遺跡で、諸磯ｃ式土器、鍋屋町Ⅰ・Ⅱ式土器や石斧、石匙、石鏃、尖頭器等が出土している。

B　弥　生　時　代

中島廻り遺跡［小島1991］では、後期末葉の土器片が少量あり、子安遺跡では、周溝墓・土坑などに後期後半のまとまった資料がある。本郷新田遺跡、池山遺跡は詳細分布調査によって発見されたもので、詳細は不明である。平山段丘上では、山畑遺跡［岡本ほか1979］で終末期の竪穴建物１棟等が検出されている。裏山遺跡は、弥生後期の高地性環濠集落で竪穴建物８棟、環濠３条が検出されている［小池ほか2000］。ひとつの高地性集落全域が発掘調査された例は、県内では初例である。出土した11点の鉄製品のうち鋤先が６点と多数を占めることは北陸全域でも特異である。ほかに玉作り関係の遺物も出土している。

C　古　墳　時　代

子安遺跡［上越市教委1993］では、古墳時代初期の「周溝遺構」が２基あり、SX004は直径15m程



〔国土地理院発行１：25,000　高田東部（平成10年）、高田西部（平成11年）、潟町（平成９年）〕

第４図　位置と周辺の遺跡分布図

No.	遺跡名	時代時期	No.	遺跡名	時代時期	No.	遺跡名	時代時期	No.	遺跡名	時代時期
1	善光寺浜	縄文前・古墳中・平安	28	本郷新田	弥生、古墳、奈良、平安、近世	55	屋敷添	平安	82	くぼの	平安、中世
2	居多浜	縄文中・古墳中	29	中島廻り	弥生後、古墳初～平安	56	沢田	平安	83	角畑	平安
3	春日山土橋	縄文中・後	30	芝切	古墳	57	下畑	平安	84	伝吉祥寺跡	中世
4	山屋敷Ⅰ	縄文中	31	裏山	弥生後	58	荒屋	平安	85	滝寺古窯跡	平安
5	茶新田A	縄文後・晩	32	向橋窯跡	奈良、平安	59	梨子ノ木	平安	86	海道	平安
6	居多	縄文後・晩、古墳前	33	山屋敷Ⅱ	奈良、平安	60	若宮	平安	87	報恩寺	平安
7	出雲	縄文中	34	下新町	奈良、平安	61	西袋	平安	88	池ノ入	奈良
8	池田	縄文晩、古墳、中世	35	宮野	平安、室町	62	子猿屋観音堂	平安	89	中江下	中世
9	八反田	縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世	36	子安	弥生後、古墳初、平安、中世、近世	63	北原遺跡B地点	平安	90	荒屋沢田	奈良
10	鉄砲町	縄文、平安～中世	37	福田屋敷添	平安	64	一番割	平安	91	大貫古窯跡	平安
11	小西野	縄文、古墳	38	横曽根一番割	平安	65	北原遺跡A地点	平安	92	平山	平安
12	池山	縄文、弥生後、古墳	39	岡原	平安	66	古苗代	平安	93	安国寺跡	南北朝
13	茶新田B	縄文	40	橋子田	平安	67	駒林	平安	94	北塚	鎌倉～室町
14	飯小学校裏（仮称）	縄文、平安、近世	41	大野	平安	68	越前	平安	95	愛宕国分寺跡	室町
15	飯北（仮称）	縄文、平安	42	谷内遺跡B地点	平安	69	横ノ浦	平安	96	至徳寺跡	室町
16	狼谷Ⅰ	縄文	43	下押出	平安	70	下野	平安	97	居多神社旧社地	室町
17	狼谷Ⅱ	縄文	44	舞台野	平安	71	谷内遺跡A地点	平安	98	光源寺供養等	室町
18	新田畑	縄文、古墳～近世	45	天池遺跡B地点	平安	72	蔵屋敷	平安	99	浜善光寺石塔群	室町
19	炭山	縄文早・後、平安、中世	46	天池遺跡A地点	平安	73	竹之内	平安	100	善光寺浜石塔群	室町
20	青山	古墳後	47	屋敷付	平安	74	沢田	平安	101	宮野尾五輪塔	室町
21	金谷	古墳	48	塩地場	平安	75	上押出	平安	102	三長字稲荷石塔	室町
22	山畑	古墳前、奈良、平安	49	塩地場B	平安	76	深谷	平安	103	山崎窯跡	室町
23	今池	古墳前、奈良、平安、中世	50	観音堂遺跡B地点	平安	77	大野Ⅱ	平安	104	春日山城	南北朝
24	木田	古墳、奈良、平安、中世	51	観音堂遺跡A地点	平安	78	仏香	平安	105	滝寺砦	室町～安土
25	一之口	古墳、平安、中世	52	新道農協倉庫北	平安	79	板橋	平安	106	長池山砦	室町
26	高畑	古墳、平安、中世、近世	53	新道農協倉庫南	平安	80	高畑	平安			
27	藤巻西（仮称）	古墳、平安	54	寺屋敷	平安	81	四ツ屋	平安			

第１表　周辺遺跡一覧表

度と推定されている。中島廻り遺跡でも、古墳時代初期の「古墳」が２基発見されており、隅丸方形の周溝をもつ１号墳の規模は長辺16m、短辺14mを測る。これらの遺構は内部主体を持たないために、「墓制の一形態」と推定されているが、不明な点が多い。山畑遺跡では前期の竪穴建物２棟と土坑１基、６世紀後半から７世紀前半の竪穴建物32棟が検出されている。

D　奈良・平安時代

現在の福井・石川・富山・新潟の北陸地方を一国として設置された広大な越国は、持統天皇３年（689）から同天皇６年（692）の間に、越前・越中・越後に３分割され、北陸道北端の越後国が蝦夷の国と国境を接する辺境の国となった。この間の持統天皇４年（690）に、二度目の全国的な戸籍（庚寅年籍）が作成されており、この折に越国は分割されたと見られる。この時点での越後国は阿賀野川以北の沼垂郡、磐船郡の２郡、そして北の辺境の出羽（庄内）地方を含む範囲で、北方の境は確定していなかった。大宝２年（702）に越中国より頸城・魚沼・古志・蒲原の４郡が越後国に編入された後、越後国府は頸城郡に移転したと考えられる。国府がおかれたと考えられる上越市周辺には、奈良・平安時代の遺跡が多く存在する。本長者原廃寺［小島ほか1984］は越後国分寺の有力候補地であり、今池・下新町遺跡［坂井ほか1984］は国府や国司館に関連する遺跡と考えられている。また、全県的にみても上越市では石製帯金具が多く出土しており、宮野遺跡［戸根ほか1985］、四ツ屋遺跡［秦ほか1988］［小島1989］、新田畑遺跡、

高津遺跡で９点出土している。行政組織が多く所在した影響とも考えられる。

E　中　　世

中世に入ると、越後の国は源頼朝の知行国となり、鎌倉幕府による支配が強まっていく。その後、南北朝の騒乱の中で貞治元年（1362）に上杉憲顕が国司・守護兼帯となり、国府を掌握し守護代長尾氏と共に越後の支配体制を確立していくことになる。以後、永禄４年（1560）に謙信が上杉憲政から上杉の名跡と関東管領職を譲り受けるまで、守護上杉氏、守護代長尾氏による阿賀野川以南の越後支配が続けられる。鎌倉時代以前の越後国府は、『倭名類聚抄』に「国府在頸城郡」とあることから、10世紀前半には頸城郡に所在していたことが明らかであるが、具体的な比定地は諸説あるものの確定はしていない。しかし、仁治２年(1241)の『法橋庄円奉書写』に「府中」がみえており、それ以降は文献中にも府中・府内が散見されるようになる。少なくとも鎌倉時代前期には、現在の直江津地区に国府がおかれていた可能性が考えられている。府中には嘉暦２年（1327）創建と伝えられる時宗の応称寺（後に称念寺）、至徳年間（1384～1387）創建の至徳寺、足利尊氏の発願により全国に設けられた安国寺等の寺院が集中し、南北朝期には政治・文化の中心となっていた。その後、中世を通して守護代長尾氏の本拠地となる春日山城も、14世紀末までには府中守護所の要害として築城されていた可能性が指摘されている。

16世紀に入ると、永正４年（1507）からの永正の乱や享禄３年（1530）の享禄の乱を経て、守護代長尾為景が守護上杉定実から実質的な支配権を奪取し、天文17年（1548）に子の景虎が家督を相続することになる。景虎はその後謙信と名を改め、越後国内の統一と周辺諸大名との領国争奪戦を繰り返す。また、謙信没後に起こった御館の乱（1578）で勝利し上杉家を継いだ景勝は、秀吉に臣従して豊臣大名化していくが、この過程において春日山要害は郭群の増設、門・城道等の整備を進め、しだいに戦国期城郭として居城化した春日山城へと強化されていく。最終的な府中の範囲は、春日山城と御館の所在する直江津を含めて関川と正善寺川に挟まれた約4km四方の地域と想定されており、春日・木田地区遺跡群も府中域に所在する。直江津から高田にかけての関川左岸の自然堤防上には、中世府中と信濃を結ぶ主要街道が通っていた可能性があり、近世の今町街道となったものであろう。近世の街道は、慶長19年（1614）に松平忠輝によって高田城が築城され、福島城から城下町が移転したことにより、主街道が今町(直江津)を直接通る必要がなくなり、北陸から信濃を結ぶ街道（加賀街道）は山沿いに変更された。

F　近　　世

加賀街道は、主に近世、北陸街道のうち、越中国との国境から西頸城郡の「浜通」（「正保御国絵図」）を経て、高田城下、陀羅尼口を通って高田町札の辻までの一七里一四町四二間をさし、冬場「十一月より二月迄雪中牛馬往還不罷成候」（前掲史料）の状況であった。地域によっては越中路といい、西浜では上道といった。近世になると京都と越後を結ぶよりは北国街道に接続して江戸往来に頻繁に利用された。加賀藩とその支藩が参勤交代の交通路として多く利用した。高田紺屋町（高田本町七丁目）の交差点にあった道標（明和三〈1766〉年建立）には、「左　加ゝ　みち　右　於ゝ支う道」と刻まれている。加賀藩主の江戸参勤は慶長七(1602)年に始まる。同藩の参勤の通路は、費用・日数の点や街道の混雑度から越後から北国街道・中山道を廻る下街道が利用された。同藩の参勤に同行する人数は約千人で、継立馬は約650疋であった。加賀藩参勤の往路は、金沢城下を出立して四日目に越中泊宿（富山県朝日町）に到着し、難所である、親不知・駒返（青海町）の波付きの状況と姫川の水量を調査させ、通行可能な日まで泊

宿に滞在し、通行可能になると翌日一気に糸魚川まで通行して第五泊目の泊まりとした。第六日目は、継立人馬等で糸魚川宿から名立宿まで、名立宿から中屋敷まで、中屋敷宿から高田宿まで継立同宿泊まりとした。第七日目は、高田宿から信州牟礼宿までの通行であった［亀井ほか1991］。現在も街道筋には往時をしのばせる松並木がわずかに残る。加賀藩によって植えられた黒松で、無断で切ることや、馬をつなぐことも禁止されていた［皆森2001］。今回発掘調査の対象になった範囲の最上面は昭和43・44年頃まで使用していたという。

第Ⅲ章　八反田遺跡

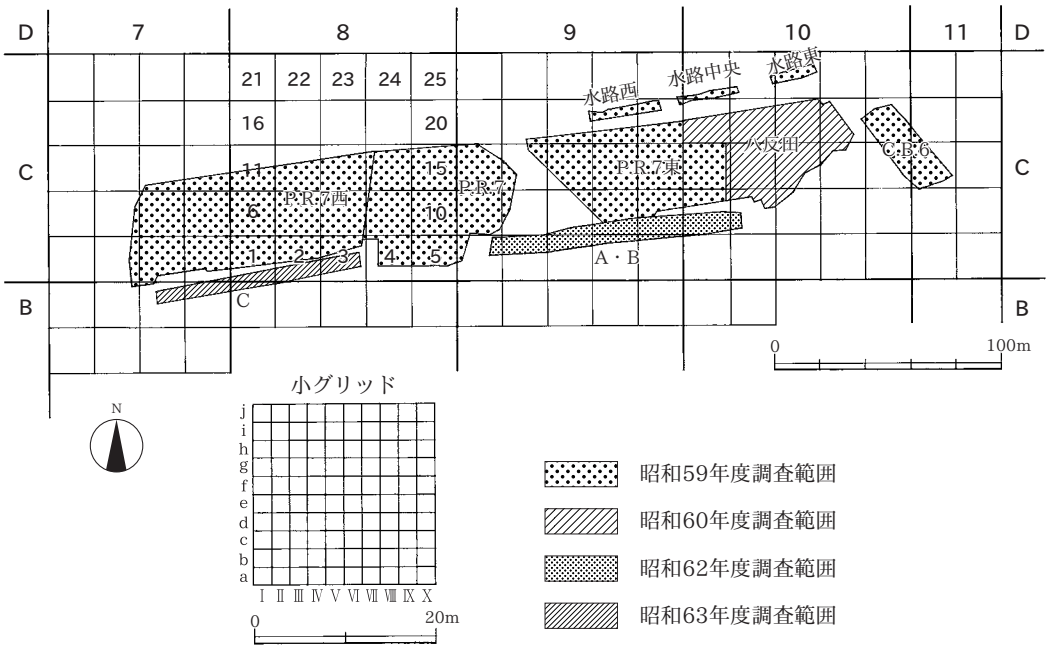
1　調査の概要

A　グリッドの設定

春日・木田地区遺跡群は、北陸自動車道道路法線上約2,200mの長さに達し、その範囲に統一的な調査区を設定した。グリッドは大・中・小グリッドに区分し、大グリッドは100×100mを1区画とし、南西コーナーを基点に東西方向を算用数字1、2、3…、南北をアルファベット（大文字）A、B、C…と呼称した。中グリッドは、大グリッドの中をさらに20×20mを1区画とした、25区画に細分したものである。呼称は同じく南西コーナーを基点に算用数字で表した。小グリッドは中グリッドを細区分するもので、遺跡群の調査では最小単位の区分となる。2×2mを1区画として、同じく中グリッドの南西コーナーを基点に東西方向をローマ数字Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ…、南北方向をアルファベット（小文字）a、b、c…と呼称し、中グリッドを100区画に細分した。そして、それぞれの地点の呼称は大・中・小の順で9C15Ⅴf区等と呼称した。

B　調査区画の呼称

八反田遺跡の調査範囲は、既存の道路や地形を元に西から1～5a・5b地区という区画が設定されていたが、途中の中断を挟み調査が4年にわたったことや、実際の工事工程に基づく調査範囲の分割でこの区画の呼称はほとんど使われていない。それに変わり工事名が使用されているので、報告についてもこの工事名（P.R.7：プレロード7、C.B.6：カルバートボックス6）を基本的に使用することとする。なお、



第5図　八反田遺跡グリッド設定図

「P.R.7西」という区画名は調査中に「1残西」という名称を使用していたが、「P.R.7西」という表現に統一した。また、昭和60年の調査範囲は区画名に「八反田」という遺跡名を使用し違和感があるが、各種図面の表記をそのまま使用した。二期線Ａ・Ｂ地区のＡ地区は、実際は旧地表面が深く道路法面との関係から調査ができていないが、表記は「二期線Ａ・Ｂ」をそのまま使用する。水路部分については3つに分断されているので、東から「水路東」「水路中央」「水路西」と表記する。

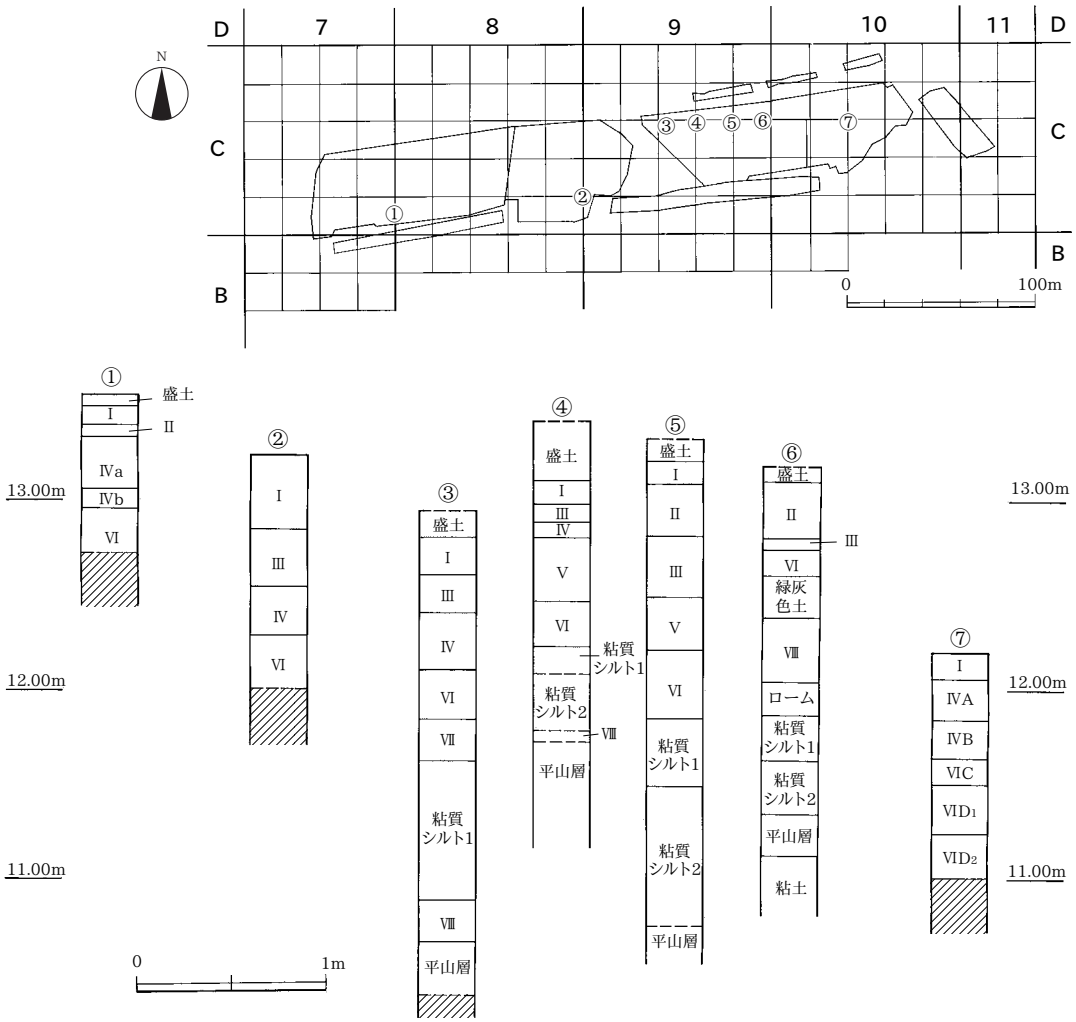
Ｃ　基　本　層　序

八反田遺跡の調査範囲は、東西500m・南北70mにも及び、層序は一様ではない。昭和59年度調査のP.R.7東地区では、台地の平坦部分が春日・木田地区で唯一安定した基盤層である平山層と確認され、遺跡はこの平山段丘上とその周辺の沖積地に、縄文時代前期から中世まで断続的に営まれたことが確認された。遺物包含層はⅡ・Ⅲ層が中世、Ⅳ・Ⅵ層が平安時代、ⅥD1・ⅥD2層が縄文時代中期以降、Ⅷ層が縄文時代前期に所属する。

盛土：高速道路工事に伴う盛土。

Ⅰ層：褐灰色土　旧水田耕作土である。

Ⅱ層：黄褐色砂質土　中世の遺物包含層である。



第６図　八反田遺跡基本土層図

Ⅲ層：褐色土　Ⅱ層に下層の灰色粘土がブロック状に混合する。中世の遺物包含層である。

Ⅳ層：褐色土　暗褐色土がブロック状に混合する。平安時代遺物包含層である。

Ⅳａ層：暗褐色土　平安時代、中世遺構確認面である。

Ⅳｂ層：灰白色シルト　砂・炭化物を少量含む。

ⅣＡ層：灰黄色土　水田耕作土である。

ⅣＢ層：暗褐色土　平安時代遺物包含層である。

Ⅴ層：オリーブ褐色粘土

Ⅵ層：にぶい黄褐色土　１～2mmの炭化粒をわずかに含む。平安時代の遺物包含層である。

ⅥＣ層：灰色土～灰黄褐色土

ⅥＤ1層：褐色土　縄文時代遺物包含層である。

ⅥＤ2層：暗褐色土　縄文時代遺物包含層である。

Ⅶ層：赤みを帯びた黄褐色シルト　縄文時代遺構確認面である。

緑灰色土層：ロームから旧河川への落込みでのみ確認される層である。平安時代と縄文時代の遺物包含層の間層である。

Ⅷ層：黒色土　平山層の直上にあり、炭化物を多量に含む。下部において平山層の礫を混合する。縄文時代前期遺物包含層である。層厚は数cm～40cmを測る。

粘質シルト層１：明黄褐色土から緑灰色粘質シルト　沖積地の堆積土である。暗褐色の粘土ブロックを含む。

粘質シルト層２：明緑灰色シルト　沖積地の堆積土である。

平山層：にぶい黄色土　平山段丘を形成する堆積物である。

D　遺構・遺物の検出状況

遺跡は最も安定した基盤層である平山段丘の平坦面に形成され、主に中世・平安時代・縄文時代の３時期の遺構・遺物が多数検出されている。各時代の検出遺構数は第２表のとおりである。

中世の遺構は、平山段丘の西側平坦面で、掘立柱建物１棟とそれを取り囲むように多数の溝と井戸・土坑・ピットが検出された。土器・陶磁器、木製品等の遺物の多くもこの平坦面からの出土である。平山段丘の西側斜面から沖積地に変わる地点に掘立柱建物が１棟検出された。

平安時代の遺構は、調査区全面で検出されているが、平山段丘の平坦面が集落の中心で掘立柱建物３棟と杭列、多数の井戸、土坑、ピットが検出されている。沖積地の最も西側の調査区でも掘立柱建物が２棟検出されている。沖積地で検出された水田跡は、平安時代から中世にかけてのものである。遺物は、土師器・須恵器を中心に緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。

縄文時代の竪穴住居も平山段丘の平坦面の西側に１棟、東側に３棟検出された。遺物は縄文土器が浅箱で２箱、石器が１／２箱と少量であった。

近世では加賀街道の路面が４面検出され、側溝と見られる溝が検出され、近世陶磁器及び寛永通寶のサシが出土している。

	縄文時代	平安時代	中　世	近　世	時期不明
SI	4	0	0	0	1
SB	0	5	2	0	0
SA	0	2	0	0	0
SE	0	22	57	0	16
SK	1	36	26	1	19
SD	0	38	71	4	36
SX	2	2	3	0	4
P	0	194	193	1	46
その他	0	3	0	5	0

第２表　八反田遺跡時代別遺構数

2　遺　　構

A　遺構の記述・表記方法

個々の遺構を説明するに当たって、本文の記述・表記方法を以下のように統一した。遺構の説明は各時代の種別ごとに行う。遺構番号は調査地区単位で種別に関係なく、ある程度通し番号が付けられているが、一部に種別ごとの通し番号が付けられている。また、同一の遺構種別・番号が複数ある場合には、番号の後に（　）で地区名の略称を付し、重複を防いだ。遺構名の一部については、下記のような略称を用いた。竪穴建物：SI、掘立柱建物：SB、杭列：SA、井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、ピット：P、不明遺構：SX

B　遺構図版について

遺構図版は検出された層位ごとではなく、各時代別に「遺構全体配置図（1：600）」と、これを分割拡大した「遺構全体実測図（1：200）」を作成した。図中の等高線は0.2m単位である。P.R.7東地区については、5面で遺構確認が行われているが、特に1枚目の層では縄文時代～中世までの遺構が複雑に検出されているため、調査中に作成された覆土の時期を記した略図を基に時期分けをした。2～5枚目の層には、時期を記した略図が作成されなかったので、2枚目を中世、3・4枚目を平安時代、5枚目を縄文時代の遺構図版に組入れた。このため、若干の時期の齟齬が生じている可能性がある。個別図は1：40を基本に作成した。また、溝については、セクションのみ個別図を作成し、平面図は分割図にセクションポイントを表示して対応した。C.B.6地区については、近世～現代までの加賀街道の路面の変化がわかるように「変遷図（1：300）」を作成した。本文中の遺構の規模は上端の長軸×短軸の最大値、深さは確認面からの最大値を表している。

C　遺　構　各　説

1）中　　世

a　掘 立 柱 建 物（図版4・13）

SB907（東）　10C11グリッド検出の3間×3間の総柱建物である。北側及び南側のいくつかのピットは規模が小さいため、庇になる可能性もある。柱間は2.2m程である。この建物を取り巻くようにSD502（東）、SD503（東）がある。また、隣の10C12グリッドでは多数のピットが検出され、建物があった可能性もあるが、図上での復元は行っていない。10mほど離れた南西側に最大の井戸SE504（東）がある。

SB4　9C6グリッドで検出された1間×2間の掘立柱建物である（図版13）。P4から永樂通寶（第9図6）、その他のピットの底から開元通寶（第9図1）が7枚重なって出土している。

b　井　　戸（図版28～30・61～65）

検出された井戸はすべて素掘りの井戸で、深さは0.5m～1.0m前後の比較的浅いものが多い。

SE300（東）　9C14グリッドで検出された楕円形の井戸である。断面形はU字形で、規模は1.12m×0.89m、深さ1.40mである。1層から中世陶器が出土している。

SE303（東） 9C9グリッド検出の円形の井戸である。断面形は階段状で、規模は0.8m×0.77m、深さ0.61mである。珠洲の甕及び蒔絵の横櫛（181）が出土している。

SE306（東） 9C14グリッドで検出された円形の井戸である。断面形はU字形で、規模は0.85m×0.68m、深さ0.67mである。

SE307（東） 9C9グリッド検出の楕円形の井戸である。断面形は階段状で、規模は0.77m×0.64m、深さ0.77mである。

SE314（東）・SK313（東） SE314（東）は9C13グリッド検出の長方形の井戸である。北西側に2段のステップがあり、東南側はほぼ垂直に掘削されている。規模は1.74m×0.75m、深さは0.94m以上である。SK313（東）に切られる。

SE323（東） 9C14グリッド検出の井戸である。トレンチで壊され半分程度しか検出できていないが、ほぼ円形と見られる。断面形は箱状で規模は（1.12m）×（1.02m）、深さ1.23mである。

SE504（東） 10C6・11グリッド検出の円形の井戸である。3.5m×3.5mと最大で、上部のテラスに柱穴が検出され、上屋が存在した可能性も考えられる。白磁皿（4）、瓶子（6）等が出土している。

SE507（東） 10C6・11グリッド検出の方形の井戸である。断面形は箱状で、規模は1.36m×1.28m、深さ0.92mである。北側にあるSD503を切っている。P568との切り合い関係は不明である。

SE508（東） 10C11グリッド検出の方形の井戸である。断面形は箱状で、規模は1.1m×0.98m、深さ1.30mである。覆土は単層である。

SE900（東） 9C10・15グリッド検出の円形の井戸である。断面形は箱状で、規模は0.87m×0.84m、深さ1.10mである。3層上部に大量の礫が含まれる。井戸を埋めるときの祭祀に伴うものか。

SE902（東） 9C10・15グリッド検出の円形の井戸である。一部攪乱で壊されているが、断面形は箱状で、規模は1.0m×0.86m、深さ1.24mである。4層上面に礫を少量含む。

SE906（東） 9C10・15グリッド検出の井戸である。平面形は円形で断面形は台形状、規模は0.94m×0.82m、深さ0.58mである。覆土は炭化物を含む。

SE924（東） 9C15グリッド検出の楕円形の井戸である。断面形は箱状で、規模は1.8m×1.38m、深さ0.89mである。上層の覆土に炭化物を含む。

SE1017 10C18グリッド検出の円形の井戸である。断面形は箱状で、規模は0.82m×0.8m、深さ0.54mである。

SE1018 10C18グリッド検出の円形の井戸である。断面形は台形で、規模は1.32m×1.12m、深さ0.82mである。覆土は炭化物を含む3層と4層が互層になって堆積している。

SE1019 10C18グリッド検出の円形の井戸である。断面形は箱状で、規模は1.12m×1.12m、深さ1.22mである。覆土の上層は酸化鉄を含み、下層は炭化物を含む。

SE1042 10C18グリッド検出の方形の井戸である。断面形は底面が階段状で、規模は1.16m×1.05m、深さ0.86mである。

SE1043 10C18グリッド検出の円形の井戸である。断面形は箱状で、規模は0.82m×0.76m、深さ0.78mである。覆土は単層である。

SE1044 10C18グリッド検出の円形の井戸である。断面形は箱状で、規模は0.62m×0.6m、深さ0.66mである。覆土は単層である。

SE1046 10C18グリッド検出の不整楕円形の井戸である。断面形はU字状で、規模は1.12m×

0.88m､深さ1.16mである。2層から漆器の椀（195）が出土している。他に須恵器・珠洲が出土している。

SE1216　10C17グリッド検出の方形の井戸である。断面形は箱状で、規模は0.9m×0.86m、深さ1.02m以上である。

SE1217　10C17グリッド検出の不整形な井戸である。南西側に小さく張り出したステップがある。規模は0.89m×0.7m、深さ0.92m以上である。

SE1218　9C9グリッド検出の円形の井戸である。断面形は箱状で、規模は0.72m×0.69m、深さ1.1m以上である。

SE1226　10C17グリッド検出の不整形な井戸である。断面形は箱状で、規模は0.89m×0.7m、深さ0.92m以上である。一部排水溝で切られている。

SE1245　10C16グリッド検出の不整形な井戸である。断面形は箱状で、規模は1.35m×0.85m、深さ1.06m以上である。

c　土　　坑（図版30・31・65・66）

SK33（AB）　9C8グリッド検出の長方形の土坑である。断面形は台形で規模は3.0m×1.6mで深さ0.32mである。長軸方向に柱穴が2ヶ所検出され、珠洲が出土している。調査時の所見では9C10グリッドで検出されているSK29（AB）（規模3.15m以上×1.50m、深さ0.2m）とともに中世の竪穴状遺構の可能性が指摘されている。SK29（AB）から遺物は全く出土していない。

SK1201　10C17グリッド検出の長方形の土坑である。断面形は箱状である。規模は1.8m×1.5m深さ0.28mである。覆土は単層でSD1200に切られる。

SK1211（東）　9C20グリッド検出の土坑である。トレンチで半分以上破壊され、全体の平面形は不明である。残存部の断面形は台形で、規模は2.1m以上、深さ0.73m以上である。出土遺物は珠洲甕、擂鉢、中世土師器、糸巻、容器の底板等が多数出土している。

SK1241　10C16・17グリッド検出の楕円形の土坑である。断面形は台形で規模は2.60m×1.56mで深さ0.77mである。

d　溝（図版31・32・67・68）

SD1　二期線AB地区のほぼ南北に走る溝である。平安時代の掘立柱建物SB1－SK16を切っている。覆土は単層である。珠洲、中世土師器が出土している。

SD302（東）　9C9グリッドで検出された溝である。覆土は単層である。方向はN－90°－Eである。

SD311（東）　9C9グリッドで検出された溝である。覆土は単層である。方向はN－24°－Eである。

SD319・SD320　9C13グリッド検出の溝である。覆土はいずれも単層で炭化物を少量含む。SD319の方向はN－87°－Eで、SD320の方向はN－84°－Eである。

SD903（東）・SD962（東）・SD963（東）　SD903（東）は9C10・15グリッド検出で中世のピットに一部切られている。幅1.9m、深さ0.7m、断面形はV字状である。SD962（東）は9C9・14・15グリッド検出で幅0.72m、深さ0.36m、断面形はU字状である。SD963（東）は9C15グリッド検出で、幅0.84m、深さ0.38m、断面形は階段状である。方向はいずれもN－45°－Eである。

SD904（東）　9C10・15グリッド検出の溝である。幅1.44m、深さ1.06m、断面形は階段状である。覆土は中世第2面の黄砂である。方向はN－35°－Eである。

SD905（東） 9C10・15グリッド検出の溝である。幅2.44m、深さ0.48m、断面形は階段状である。覆土は中世第一面の黒色土である。方向はN－4°－Wである。中世土師器、珠洲擂鉢が出土している。

SD965（東）・SD966（東）・SD967（東） SD965（東）は2層からビニール、ガラスなどが出土していることから攪乱を受けているとみられる。SD966（東）は9C15グリッド検出でSD967（東）を切っている。方向はN－65°－Eで珠洲壷（44・45）が出土している。SD967（東）は深さ0.62mで、方向はN－75°－Eで天目碗が出土している。

SD961（東） 9C9・10・15グリッド検出の溝である。幅0.75m、断面形は台形状で深さ0.44mである。方向はN－17°－Eである。

SD1051・SD1052 SD1051は10C18グリッド検出で幅1.5m、深さ0.28m断面形は階段状である。方向はN－78°－EでSD1052を切っている。SD1052も10C18グリッド検出で深さ0.28m、方向はN－58°－Eである。

SD1200・SD1202 SD1200は10C17グリッド検出で深さ0.48m、SD1202を切っている。方向はN－9°－W。SD1202も10C17グリッド検出で深さ0.56m、方向はN－58°－Eである。

SD1215（東） 9C18グリッド検出の溝である。断面形は弧状で幅0.78m、深さ0.27mである。ほぼ南北方向に走る。

2）平　安　時　代

a　掘 立 柱 建 物（図版9・20・71・73）

SB1 二期線10C6・7グリッド検出である。柱穴2基の内SB1－SK2は円形の柱穴で断面は漏斗状である。柱間は3.1mである。

SB2・SB3 10C12・13グリッドで検出されている。SB2は1間×4間、桁行き方向の柱間は2.5m前後、梁行き方向の柱間は5.0m前後である。SB3は1間×3間で桁行き方向の柱間は2.20m前後、梁行き方向の柱間は4.0m前後である。

SB808（西）・SB814（西） SB808（西）は7C4グリッド検出で2間×3間以上、SB814（西）も7C4グリッド検出で1間×2間である。SD813（西）あるいは水田畦畔との切り合いは不明である。

b　杭　　列（図版20）

掘立柱建物と重複して検出されているが、新旧関係は不明である。

SA1455 10C12グリッドでSB2と重複してほぼ南北方向に6本検出されている。

SA1456 10C13グリッドでSB3と重複して北西にやや傾いて4本検出されている。

c　井　　戸（図版33・34・73～75）

SE335（東） 9C15グリッド検出の円形の井戸である。断面形は半円形である。規模は0.92m×0.88m、深さ0.4mである。黒色の腐植土が堆積していた。用途不明の木製品（223）が出土している。

SE505（東） 10C11グリッド検出の方形の井戸である。断面形は整った箱状である。規模は1.08m×1.06m、深さ1.06mである。底面には厚く黒色土が堆積する。

SE901（東） 9C19・15グリッド検出の円形の井戸である。断面は階段状で北側に2段のステップがある。規模は1.55m×1.36m、深さ1.10mである。覆土はレンズ状に堆積している。

SE1086　10C17グリッド検出の井戸である。平面形は不整な楕円形である。断面の東側は緩い階段状で、西側はほぼ垂直に掘削されている。規模は1.35m×1.06m、深さ1.34m以上である。

SE1114　10C17グリッド検出の不整な円形の井戸である。断面形は箱状である。底面に堆積する４層に小石を少量含む。規模は0.8m×0.75m、深さ0.92mである。

SE1419　10C12グリッド検出の不整な円形の井戸である。断面形は箱状である。規模は1.5m×1.26m、深さ1.48m以上である。

SE1420　10C13グリッド検出の不整な方形の井戸である。規模は0.92m×0.8mと小さいが深さは1.89mと完掘された井戸の中では深い方である。西側に小さな張り出しがある。

SE1425　10C12グリッド検出の円形の井戸である。断面は箱状で規模は1.07m×0.56m、深さ1.28m以上である。

SE1426　10C12・13グリッド検出の楕円形の井戸である。規模は1.52m×1.26m、深さは2.38mと最も深い。

d　土　　坑（図版34・35・75～77）

SK3（AB）　10C6グリッド検出の方形の土坑である。規模は1.78m×1.6m、深さ0.38mで断面形は台形状である。覆土は単層で、フイゴの羽口、土師器、須恵器が出土している。

SK34（西）　7C9グリッド検出の長方形の大型土坑である。3.64m×2.24m、深さ0.23mである。東側に４ヶ所に凹みがある。

SK303　10C20グリッド検出の不整形な土坑である。断面は弧状である。規模は2.42m×0.86m、深さ0.33mである。

SK304　10C20グリッド検出の方形の土坑である。規模は1.7m×1.58m、深さ0.17mで弧状である。

SK506（東）　10C11グリッド検出の不整楕円形の土坑である。東側に小孔があるが、SK506に切られた遺構の可能性もある。規模は2.08m×1.55m、深さ0.46mである。

SK803（西）　8C8グリッド検出の長方形の土坑である。断面は弧状である。規模は0.9m×0.7m、深さ0.15mと浅い。

SK804（西）　8C8グリッド検出の円形の土坑である。断面形はU字状である。規模は0.26m×0.25m、深さ0.28mである。

SK810（西）　7C9グリッド検出の楕円形の土坑である。断面形は弧状である。規模は1.04m×0.8m、深さ0.16mと浅い。

SK812（西）　7C9グリッド検出の長方形土坑である。規模は1.8m×1.2m、深さ0.26mで断面形は弧状であるが、西側はやや凹凸がある。

SK925（東）　9C10グリッド検出の不整楕円形の土坑である。断面形は弧状である。1.52m×0.75m、深さ0.28mである。

SK1416　10C13グリッド検出の円形土坑である。断面形は台形状である。規模は0.95m×0.88m、深さ0.79mである。覆土は単層である。

SK1456　10C7グリッド検出の長方形土坑である。断面形は箱状である。規模は0.92m×0.73m、深さ0.73mである。覆土は単層である。

e 不 明 遺 構（図版35）

SX209（東） 10C12・13グリッド検出の方形の不明遺構である。東南側に張り出しを持ち、中央を中世の溝SD208（東）に切られている。規模は2.7m×2.42m深さ0.25mで断面形は箱状である。

f 溝（図版35・77）

SD54（AB） 9C4・9グリッド検出の溝である。幅0.54mで深さ0.28m、断面形は階段状である。方向はN－15°－Eである。

SD60（AB） 9C4・9グリッド検出の溝である。一部上層の溝に切られている。深さ0.87mで覆土はレンズ状に堆積している。方向はN－34°－Eである。

g 畔　　畔（図版9～11・14）

P.R.7西地区及び二期線C地区で畦畔が検出されている。P.R.7西地区で検出された畦畔は幅0.5～0.6mでほぼ東西を意識して大きく区画している。二期線C地区の畦畔は幅1.0m程度で一辺6～8m程度の小区画を形成している可能性がある。出土遺物から平安時代～中性にかけての水田と考えられる。

3）縄 文 時 代

a 竪 穴 住 居（図版24・25・36・78・79）

縄文時代の竪穴住居はいずれも掘り込みが浅く掘方は明確でない。SI1313、SI1471は調査時には方形と認識していたが、本来は円形～楕円形であった可能性が高い。

SI1313 10C7グリッド検出の方形の竪穴住居で、調査範囲際で全体の1／4程度しか検出できていないが、1辺3.5m程度と推定される。方向はN－30°－Eである。縄文前期の土器（148）が出土している。標高は12.4mである。

SI1471 10C12・17グリッド検出の方形の竪穴住居でほぼ南北方向を向いている。東側半分は斜面が崩落したためか検出できていない。南北の幅は4.0mである。北側には不明遺構SX1135、SX1136がある。

SI1472 10C12グリッドで炉跡のみが検出されている。SI1471、SI1472とも標高は11.80mである。

SI500（東） 10C11グリッド検出、縄文前期の円形の竪穴住居である。規模は4.5m×3.6m、標高は12.8mである。中央を中世の溝SD501（東）に大きく切られている。

SI922（東） 最も西側の9C10・15グリッドで検出された、方形の竪穴住居である。標高は最も高い13.20mで規模は3.8m×3.2mである。方向はN－10°－Wである。須恵器が1点出土しているが、周辺に縄文土器も散布しており、時期は不明である。

4）加 賀 街 道（図版27・79）

近世加賀街道の路面の変遷図は図版27にまとめた。第4面に伴うと見られる道路側溝SD300、SD301のうちSD300から約53枚の銭貨がサシの状態で出土した。このうち文字が判読できるものは1697年から1747年、1767年から1784年に鋳造された「新寛永」といわれる寛永通寶（第9図9～14）が最も多い。同じくSD300から17世紀後半の京焼風唐津（164）が1点出土している。第2～4面から出土した近世陶磁器は肥前系がほとんどで18世紀後半～大正・昭和戦前までのものが少量混在し

て出土しているため、第２面～第４面の時期差は明確でない。第１面の近・現代の路面は昭和43、44年ころに舗装されるまで使用されていた。SD300の下面にSD302が検出され、珠洲が出土している。加賀街道に先行する路面の側溝の可能性がある。

3　遺　　物

遺物は、土器・陶磁器、土製品、木製品、石器・石製品、銭貨、鉄滓等がある。土器・陶磁器については中世・平安時代・縄文時代の各時代別に遺構出土、包含層出土の順に報告する。出土数の少ない古式土師器・近世陶磁器については、その他の土器として報告する。土製品、木製品、石器・石製品については種別ごとに報告する。中世・平安時代の土器・陶磁器については器種分類図を作成した。

A　中世の土器・陶磁器（図版37～39・80・81）

中世の土器は珠洲を主体とし、中世土師器がそれに続き一定量出土している。国産の陶器は瀬戸・美濃が主体で、越中瀬戸、越前焼、瓦器と見られる破片が数点出土している。中国産陶磁器は青磁・白磁・青白磁、染付が出土している。

1）　器　種　分　類

a　白　　磁

中国産の白磁で碗（27）・皿（51）がある。破片数は11点で個体数もほぼ同数である。全体の器形がわかるものは少ない。

b　青　　磁

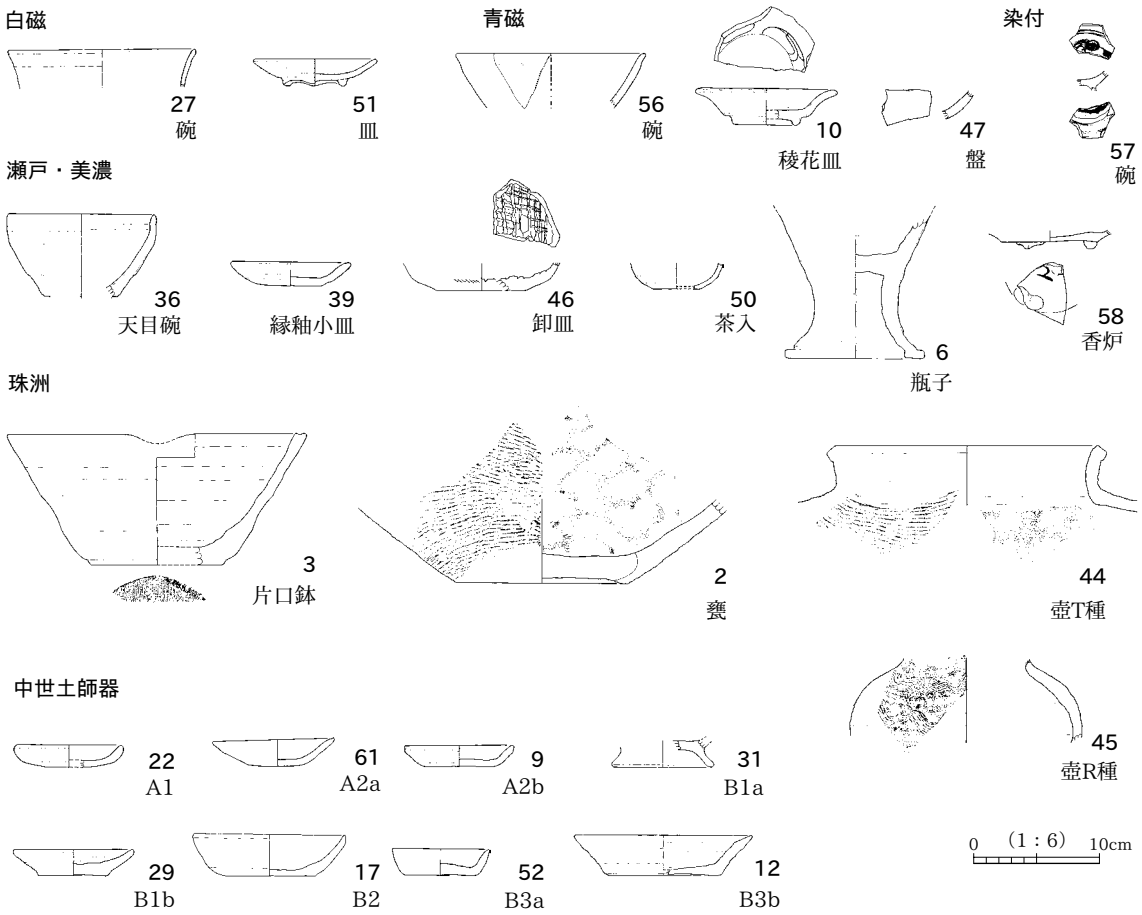
中国産の青磁で龍泉窯系の鎬連弁文の碗（56）や稜花皿（10）、盤（47）がある。破片数は23点で個体数もほぼ同数である。全体の器形がわかるものは少ない。実測出来ていないが同安窯系の劃花文碗が１点出土している。

c　染　　付

中国産の磁器で呉須を使って文様を書いたものである。15世紀後葉以降大量に輸入されるようになる。図化した１点（57）のみで全体の文様・器形は不明である。

d　瀬 戸 ・ 美 濃

天目の碗（36）５点・瓶１点・器種不明３点で瀬戸・美濃の主体を成し、ほぼ個体数も同数である。他に茶入が１点（50）出土している。筒形香炉（58）は筒形の体部に貼り付けた３足の脚がつくもので１点のみである。瓶子（6）は脚部のみの出土である。鉄釉が掛けられ口のすぼんだ器形になると考えられる。１点のみの出土である。縁釉小皿（39）は口縁のみに灰釉が掛けられたものである。６点出土し15世紀代のもと見られる。卸皿は内面に格子の卸目をもち灰釉が掛かる。底部は回転糸切りで３点出土している。14世紀代前半と見られる。瀬戸・美濃の編年については藤沢良祐の編年区分［藤沢1997］に従った。



第７図　中世土器・陶磁器器種分類

e　珠　　洲

中世の遺物で最も多く、甕・壺・片口鉢の３種類が出土している。甕、壺は紐叩打整形（T種）で外面に平行打圧痕、内面に円形押圧痕が見られる。また、壺には紐轆轤整形（R種）で外面に櫛目波状文等が見られる。片口鉢は卸目のある擂鉢と卸目のない捏ね鉢の２種類がある。吉岡の編年区分［吉岡1994］からⅠ期は12世紀後半～12世紀末、Ⅱ期は13世紀前半～中葉、Ⅲ期は1250～1280年、Ⅳ期は1280～1380年、Ⅴ期は1380～1450年、Ⅵ期は1450～1480年に相当する。出土遺物の多くはⅢ期～Ⅴ期の範囲に入るものが多いと見られる。

f　中 世 土 師 器

中世の遺物では珠洲についで多く、すべて皿である。大きさで小皿とすべきものも有るが、境界が明瞭で無く、すべて皿として報告する。スス、タールが付着し灯明皿とすべきものもある。手法及び形状、胎土の様子等から以下のように分類した。

A類：手づくね成形土師器

１類：横ナデが弱く、胎土に微砂粒を多く含む。

底径がやや狭い丸底状を呈し、体部を短く屈曲させる。

２類：横ナデが強く、胎土精良。

ａ：底径は小さく平底で体部は直線的に開き、口縁端部はわずかに外反する。いわゆる京都系といわれるものである。

ｂ：底径が広く、外面の口縁やや下を指１本分だけ強く横ナデするため、体部中央部に稜を持つ。

Ｂ類：ロクロ成形土師器

１類：古代以来の在地における土師器の系譜を強く引く北陸系といわれるもの。

ａ：有台皿。胎土は精良。

ｂ：皿。小さな底部から体部は直線的に短く立ち上がる。胎土は微砂粒を多く含む。

２類：手づくね皿を模倣したと思われるロクロ成形土師器皿。底部に板状圧痕を有する。胎土は浅黄橙色を呈し、微砂粒を多く含むものが多い。

３類：いわゆる関東系といわれるもの。胎土は浅黄橙～にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良なものが多い。

ａ：体部が直線的に立ち上がり、箱状を呈するもの。

ｂ：体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が大きく外反するもの。

2）遺　物　各　説

ａ　遺構出土土器・陶磁器（1～54）

SE206（東）　１は珠洲の片口鉢である。口径は40.8cmである。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に櫛目波状文が施される。１単位７条の卸目が施され、底部内外面は磨耗が顕著である。

SE303（東）　２は珠洲の甕の底部で底径は18.4cmである。外面は平行打圧痕、内面は円形押圧痕で成形されている。

SE924・335（東）　３は珠洲の片口鉢で卸目は施されず捏ね鉢と見られる。底部は静止糸切りである。口縁端面はわずかに凹む。形態からⅢ期に相当する。

SE504（東）　４は白磁の皿である。高台は磨耗している。５も白磁の皿で高台内は硯に転用され墨痕が多く残る。高台内に「十三」の墨書が見られる。高台の平面形はいわゆる三日月形高台である。白磁はいずれも15世紀代のものと見られる。６は瓶子の脚部で鉄釉が掛かる。形態から古瀬戸後期様式の瓶子Ⅲ類と思われる。15世紀前半ころのものか。７は珠洲の片口鉢の口縁部で櫛目波状文が施され。１単位９条の卸目が施される擂鉢である。８も片口鉢の擂鉢で櫛目波状文及び１単位８条の卸目が施される。

SE1316　９は中世土師器の皿で手づくねのA2b類である。胎土は精良で12世紀後半のものと見られる。

SE1414　10は青磁の稜花皿である。蛇の目高台となり、色調は黄褐色を呈する。口縁内面に線刻文があり、15世紀末ころのものと見られる。

SE1465　11はロクロ成形の中世土師器の皿である。胎土に砂粒を含み、底部に板状圧痕が見られる。

SK1（AB）　12は中世土師器の皿である。口縁端部は大きく外反し薄くなっている。

SK968（東）　13は15世紀代の中世土師器の皿である。ロクロ成形で胎土は精良である。

SK1211（東）　14～19は中世土師器の皿である。すべてロクロ成形・回転糸切りで、16以外は胎土に砂粒を含み底部に板状圧痕が見られる。12世紀末ころのものである。16のみ関東系といわれるもので胎土は精良で15世紀代と見られる。20は珠洲の片口鉢である。１単位18条の卸目が10本施される。口

縁は外傾し端面は平らに整形されており、Ⅲ期のころのものである。21は珠洲の甕である。底径は22.0cmである。出土遺物の時期幅が12世紀末、13世紀後半、15世紀代とばらつきがある。

SK1336　22・23は中世土師器の皿で胎土に砂粒を含む。22は手づくねのいわゆる京都系で、底部は丸底状を呈し、体部は短く屈曲する。23はロクロ成形の土師器で、底部は薄く作られているが体部は厚い。24は白磁の皿で貫入が入る。25は平安時代の灰釉陶器の長頸瓶と見られる。頸内面にまで釉が掛かる。26は平安時代の横瓶の体部である。体部は丸みを持つ。外面は平行線文タタキ、内面は成形時に絞って出来たヒダと指頭圧痕が顕著で当て具痕は不明である。閉塞部分は破損している。

SK1338　27は口禿の白磁の碗である。釉は薄く灰白色を呈する。推定口径は14.6cm程である。

SK1460　28はロクロ成形の中世土師器の皿である。底部は約1.0cmと厚い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は薄く成形される。

P569（東）　30は瀬戸・美濃の縁釉小皿である。底部は回転糸切りで、灰釉が口縁部のみに掛かる。古瀬戸後Ⅳ古期で15世紀中葉のものである。

SD333（東）　35は珠洲の壺Ｒ種の体部である。櫛目波状文で加飾されており、Ⅲ期ころのものと見られる。胎土は精良である。

SD502（東）　36は瀬戸・美濃の天目碗である。素地はにぶい黄橙を呈する。37は珠洲の甕の口縁部でⅢ期と見られる。38は平安時代の灰釉陶器である。底部内面全体に釉が斑に残るので広口と見て壺とした。高台は扁平で外側に広がる。外面の底部から3.0cm上に幅1.0cmの縄状のものを掛けた痕跡が残る。

SD503（東）　39は瀬戸・美濃の縁釉小皿である。底部は回転糸切りである。口縁部のみに灰釉が掛かる。底部内面は磨耗しタールが付着し灯明皿に転用か。古瀬戸後Ⅳ新期15世紀後半のものである。

SD905（東）　41は中世土師器の皿である。手づくね成形で胎土は精良である。42は珠洲の片口鉢で底部は板状の圧痕または、静止糸切りの痕跡が残る。1単位12条の不揃いの卸目が施されている。底部内面は使用による磨耗が顕著である。43は平安時代の無台坏である。底部切り離しは回転糸切りで頸城産とみられる。胎土に黒色粒が大量に含まれる。

SD966（東）　44は珠洲の壺Ｔ種である。外面は平行打圧痕、内面は円形押圧痕が残る。口縁端部は方形で端面は平らである。45は珠洲の壺Ｒ種である。肩に2本の櫛目波状文が加飾されている。

SD1078　46は瀬戸・美濃の卸皿の底部である。底部は回転糸切りである。卸目は不揃いの格子である。内外面に灰釉が掛かる。古瀬戸中Ⅲ期様式と見られる。14世紀前半頃のものである。

SD1081　47は青磁の小型の盤である。簡略化された連弁文が施される。素地は灰白色を呈し緻密である。48は瀬戸・美濃の卸皿である。外面はロクロナデの凹凸が顕著である。灰釉が掛かり、卸目は格子状を呈する。口縁部形態から古瀬戸中Ⅲ期様式のものと見られる。14世紀前半頃のものである。49は甕Ｔ種で形態からⅣ期の可能性がある。

SD1204　50は瀬戸・美濃の茶入れである。体部下半は丁寧なロクロケズリ、底部は回転糸切りである。内面に鉄釉が掛かる。素地は灰黄褐色を呈し精良である。時期は明確でない。

SD1236　51は白磁の皿である。畳付以外全体に釉が掛かる。高台は4ヶ所の抉りが入る削り輪高台である。

SD1254　52・53は関東系といわれる中世土師器で15世紀代のものである。底部が厚く体部は短く立ち上がる。

SD1303　54は青磁の皿である。細片のため詳細は不明である。

b　包含層出土土器・陶磁器（55～65）

青磁　55は無文の青磁の碗である。胎土は灰色で緻密さを欠く。16世紀初頭ころのものである。56は龍泉窯系の青磁の碗で鎬連弁文が施されている。14世紀初頭ころのものである。

染付　57は中国染付で碗としたが細片のため詳細は不明である。素地は白色で緻密である。

瀬戸・美濃　58は瀬戸の筒形香炉の底部である。内面にススが残存している。三足の貼付け高台が付く。全体の器形は不明であるが、14～15世紀代のものか。底部内面に２文字程度の墨書があるが判読できていない。59は瀬戸の天目碗である。素地はにぶい黄橙色を呈する。古瀬戸後期で15世紀代のものか。

中世土師器　60・61・63は手づくね成形のいわゆる京都系といわれるものである。いずれも胎土は精良で、16世紀代のものである。62はロクロ成形で回転糸切りである。胎土は砂粒を含む。15世紀代の関東系である。64はロクロ成形で底部に板状の圧痕がつくものである。

珠洲　65は珠洲の片口鉢である。口縁に櫛目波状文が施される。卸目は見えない。Ⅴ期に相当する。

B　平安時代の土器・陶器（図版39～42・81～83）

歴史的には12世紀後半までを平安時代にするのが一般的と思われるが、今回の報告では11世紀末までを古代の土器とした。

1）器　種　分　類

a　土　師　器

無台椀（82～91）　ロクロ成形で底部切り離しは回転糸切り無調整がほとんどである。糸切り後に底部と体部下半にロクロケズリを施すものがわずかにある。径高指数（器高÷口径×100）と法量の組み合わせで分類した。また、黒色土器も形態が共通することから。統一した基準で分類を行った。径高指数での分類では35以上をＡ類、30～34をＢ類、25～29をＣ類、24以下をＤ類とした。口径からの分類は2cm刻みとし、大きいものからⅠ類（14.1cm以上）、Ⅱ類（12.1～14.0cm）、Ⅲ類（10.0～12.0cm）とした。

有台皿（66）　「ハ」の字状の高台が付く。高台部のみで全体の器形は不明である。

小甕（143）　煮炊具で小型のもの。頸部が強く「く」の字を呈するものと弱いものとがある。

長甕（101）　煮炊具で長胴の体部をもつもの。口縁が上につままれるもの、丸く成形されて玉縁状を呈するもの等がみられる。

鍋（106）　煮炊具で口径が大きく底部は丸底である。口縁が横に開くものと口縁端部が上につままれるものがある。

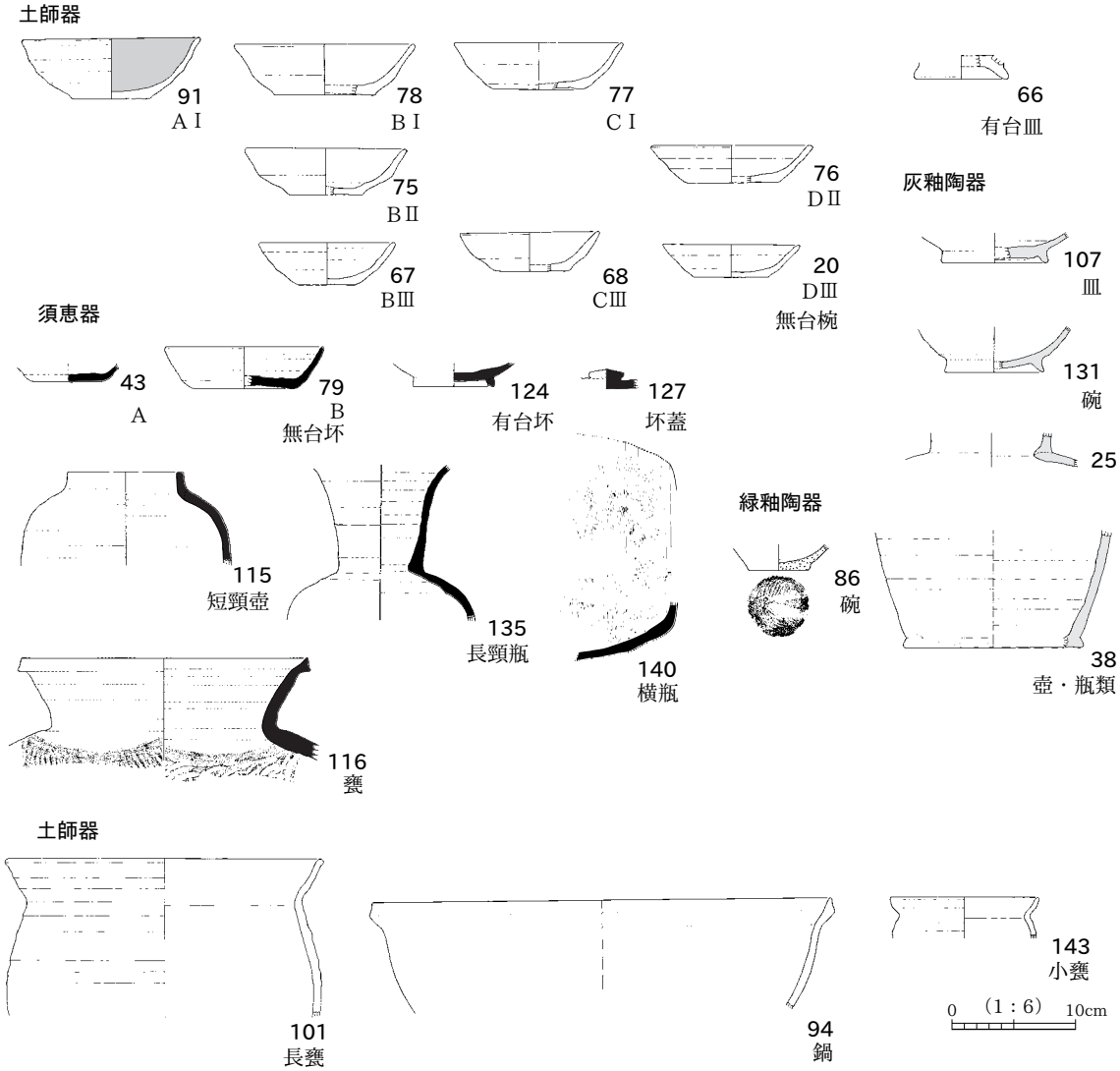
b　須　恵　器

無台坏（43・79）　ロクロ成形で、底部切り離しはＡ類：回転糸切り、Ｂ類：ヘラ切りの２種がある。出土数は少ない。

有台坏（124）　全体の器形がわかるものは無く、出土数も少ない。

坏蓋（127）　有台坏に付属するものである。全体の器形がわかるものはない。

短頸壺（115）　頸部が広く、直立した短い口縁が付くもの。



第８図　平安時代土器・陶器器種分類

長頸瓶（135）　頸部が細く、長いラッパ状の口縁が付くものである。底部のみで口縁部形状が不明なものは壺・瓶類とした。

横瓶（140）　俵形の体部に短い口縁が付くもの。側面で閉塞している。

甕（116）　外面はタタキ具、内面は当て具によって成形される。

c　緑　釉　陶　器

碗（86）　１点のみの出土である。底部は回転糸切りである。

d　灰　釉　陶　器

10世紀後半～末の東濃・虎渓山１号窯式のものが主体である。

皿（107）　高台の付く身の浅い器形と推定されるが、全体の器形がわかるものはない。

椀（131）　高台の付く身の深い器形と推定されるが、全体の器形がわかるものはない。

壺・瓶類（25・38）　長頸瓶の頸の一部が出土しているが、全体の器形がわかるものはない。

2）遺　物　各　説

a　遺構出土土器・陶器（66～117）

SB1－SK2　66は土師器の有台の皿である。高台は厚く「ハ」の字に開く形である。端部は丸く調整されている。

SE1（水東）　67～78は水路東地区のSE1に大量に一括廃棄された土師器の無台椀である。体部の立ち上がりに指1本分だけ強くナデられ、稜が作られるものが多い。胎土はおおむね精良である。11世紀後半～末ころのものと思われる。

SE1309　79は須恵器の無台坏である。口径は11.7cmで底部切り離しはヘラ切りである。佐渡小泊産である。

SE1458　80は須恵器の壺の口縁部である。口縁端部は外反する。口径は14.0cmで小泊産か。81は須恵器の甕の口縁部である。口径は26.0cmで中型の甕である。外面は平行線文タタキ、内面は同心円文の当て具で整形されている。口縁端部はわずかに外反する。外面に自然釉が大量に付着する。

SK3（水東）　82～84は土師器無台椀である。85は灰釉陶器の椀である。高台は細くわずかに「ハ」の字状に開く。

SK6（水東）　86は緑釉陶器の椀である。緑釉陶器はこの1点のみである。底部外面以外にオリーブ黄色の釉が薄く掛かる。平高台が削りだされ、切り離しは回転糸切りである。素地は灰白色を呈し軟質である。京都洛西産で9世紀末ころと見られる。

SK807　87～89は土師器無台椀BⅢ類である。87は焼成が軟質である。88・89の胎土は精良である。90・91は内外面に黒色処理されているが、炭素が吸着しているのは部分的である。口縁端部がわずかに外反する。92も黒色土器無台椀である。内外面に黒色処理され、内面は炭素が全面に吸着しているが、外面は口縁の一部のみである。93は土師器の小甕で内面にわずかにカキメが残る。94は土師器の鍋で口縁端部は上部につままれる。SK807出土遺物は9世紀後半～10世紀初頭ころのものとみられる。

SK1212　95は土師器の無台椀である。胎土は砂を含み、外面の剥落が顕著である。11世紀前半代と見られる。

SX969（東）　96は壺・瓶類の突帯の部分である。肩に近い部分と考えられる。

P12　97は無台椀である。98は黒色土器無台椀である。内外面に黒色処理を行っているようだが、炭素の吸着は部分的に付着するのみである。胎土は砂粒をわずかに含む。体部立ち上がりに指一本分強く横ナデしている。99は長甕の口縁部である。口縁端部は上につままれている。P12出土遺物は9世紀後半～10世紀初頭ころのものと見られる。

P21（西）　100は無台坏である。小泊産と見られ、口縁部に重ね焼痕および自然釉の付着が見られる。

P217（東）　101は長甕である。口縁部は長く、端部はほぼ丸く整形されている。剥落が顕著であるが、ロクロナデ以外の調整はみられない。

P305（東）　102は灰釉陶器の碗の口縁部である。口縁端部は外反する。釉は刷毛掛けのようである。

P521（東）　103～105は土師器無台椀である。103は底部が厚く、立ち上がりと口縁部が強くナデられ、体部中央に稜を持つ。11はロクロナデの凹凸が顕著で口縁部は肥厚する。103・105に比べ軽量である。106は土師器の長甕である。外面はロクロナデの凹凸が顕著で、わずかにカキメが見える。

P538（東）　107は灰釉陶器の皿である。外面に釉がわずかに見える。底部は厚い。高台に籾痕が見ら

れることから、虎渓山１号窯式に後続する谷迫間２号窯式（12世紀前半）の可能性がある。高台内面にヘラの跡が残り調整は丁寧でない。

P1083　112は灰釉陶器の皿である。胎土は普通で他の灰釉陶器と比べ緻密さに欠け軽量である。高台は三日月高台状を呈し畳付は磨耗している。

SD22　113・114は無台椀である。113の体部は内弯しながら立ち上がり、114の体部立ち上がりは強くナデられ、口縁部は大きく外反する。胎土は精良である。

SD117　115は短頸壺である。外面にカキメが施される。口縁端部は磨耗する。116は口径23.0cmの中型の甕である。口縁部は外反し、端部は上にわずかにつままれる。体部外面は平行線文タタキ、内面は同心円文当て具痕が見える。

SD351（東）　117は壺あるいは小型の甕の口縁部である。口縁端部はわずかに外反する。

b　包含層出土土器・陶器（118～147）

無台椀　119は底面と体部立ち上がりに幅1cmのロクロケズリが施される。胎土は精良である。120～122は10C17グリッドで一括取り上げされたものである。胎土は砂粒を含む。11世紀前半ころか。

無台坏　123は出土地不明である。底部はヘラ切りで小泊産である。

有台坏　124は有台坏で周囲は転用するためか打ち欠かれている。高台は外端接地である。見込みは磨耗が顕著である。125は底径が10.4cmと大型の有台坏になると推定される。体部は稜を持って立ち上がる。

坏蓋　126・127は有台坏に付く蓋である。ツマミのみの残存で全体の器形は不明である。126は幅が広く扁平であるが、127は幅も小さく高さは126に比べてやや高い。

灰釉陶器碗　128～131は灰釉陶器の碗である。すべて底部資料で全体の器形を知りえるものはない。虎渓山１号窯式のものと見られるが、高台の形状は多様である。釉は主に内外面刷毛掛けと見られる。

灰釉陶器皿　132～134は灰釉陶器の皿である。碗類と同じく虎渓山１号窯式と見られる。132は口縁部のみである。端部はやや長めに外反する。133は素地に黒色の含有物が吹き出ている。134の高台は内端接地で高台内は墨溜めとして利用されたようである。高台内に磨耗痕は認められず、周囲は転用時に打ち欠いている。

壺・瓶類　135は長頸瓶で小泊産である。体部は肩が張らず丸みを持った器形である。136は壺・瓶類の底部である。高台の接地面は平らで使用により磨耗している。137は高い高台が付くものである。高台の半ばから外側に引き出され、端部は外端接地である。内面は布状のものでナデられる。球形の体部が付く短頸壺になる可能性がある。138は内面の自然釉が底面全体に掛かることから短頸壺の可能性が高い。139は壺・瓶類の突帯部分のみである。140は横瓶である。端面が角張る器形である。外面は格子目タタキ、内面は同心円文当て具痕である。

甕　141は甕の口縁部である。口縁端部及び２段目の突帯も引出しによるものである。厚さ1.7cmとかなり厚く大甕になると思われる。142も甕の口縁部で波状文が１条と沈線が２条引かれている。

長甕　144～146は長甕である。144の口縁部は外反し、内外ハケメで調整される。146は全体の縦半分がほぼ残存している。内面を上に出土しているが、掘り方は無く詳細は不明である。外面は全面にススが付着しているが、内面には全く付着していない。

C　縄　文　土　器（図版43・83）

本遺跡からは、少量ではあるが前期～後期までの土器が遺構及び包含層から出土している。出土地点はいずれも9C・10Cといった埋没段丘の頂部平坦面や東側緩斜面である。なお、AB地区から押型文土器が1点出土しているとされているが、整理の段階で押型文土器は確認できていない。

148は口縁が突起状の波状を呈し、口縁部が外反する深鉢である。口径は25cm余りと推定できる。文様は、口縁に半截竹管の押引きによる数条の爪形文が横位に平行し、波頂部には同様の爪形文が渦巻状に配されている。それらの下位には、RL原体の縄文地上に半截竹管を用いた平行沈線で斜格子目文が描かれ、格子目交点には円形竹管による刺突が施されている。

149は胴部破片と考えられ、羽状縄文が施されている他は、小片のため詳細は不明である。

150も149と同様に小片で詳細は不明である。縄文が施される。

151はいわゆる肋骨文が施された口縁部破片である。152・153はいずれも縄文が施されている胴部破片である。152はLR原体が施され、上端部に刻み目が残る。153は羽状縄文が施文されている。
154はやや内弯気味で波状を呈する口縁部破片である。口縁に棒状工具による点列が3列めぐり、その下位は器面が荒れて不明瞭であるが、幅の狭いループ縄文が施されているようである。土器自体軽いと感じられることから、繊維はより多く含まれているものと考えられる。155は154と同タイプであり、胎土・器厚や雰囲気も似ており、出土グリッドが一部で重なっていることから同一個体の可能性が高い。口縁の刺突列下には幅8mm余りのループ縄文が施文されている。156は、胴部～頸部～口縁部下半にかけての破片である。胴部は筒状に立ち上がり、頸部～口縁部下半にかけては大きく外反する。頸部は径22cm余りと推定される。文様は、口縁部文様と胴部文様に2分できる。口縁部文様は、縄文地上に幅3mm余りの半截竹管で、縦位の平行沈線文を密に施して集合沈線化している。胴部文様は、縄文地上に口縁部文様と同一の半截竹管で、縦方向を原則とした平行沈線文を描いている。器壁は薄い。157は口縁部破片でほぼ真直ぐ立ち上がるが、口縁内面は外反気味になる。文様は、口縁に棒状工具で横位の刻みが施された縦長隆体が添付され、そこから棒状工具を用いた4本の横位沈線が延びている。それ以下にも同様な手法の沈線が右下がりに延びる。158はキャリパー形深鉢の胴部破片と考えられる。磨消縄文地上に幅広の縦位沈線が垂下している。縄文原体はLRと考えられる。159は土坑状を呈する自然の落ち込みから出土した。口径31cm余りの大型深鉢で、胴部下半はやや外傾気味に立ち上がり、胴部上半はやや膨らみ、口縁部はほぼ直立で、口縁は外反する。地文として原体Lの撚糸が施文され、その上に横位入り組み状の渦巻文や縦位連弧状文及び横位区画文が幅3mm余りの多載竹管を用いた平行沈線で描かれている。口縁と胴部の横位区画及び胴部の縦位区画は隆帯で区画され、口縁と胴部の横位区画の隆帯上には絡状体圧痕文が押圧されている。160は口縁部破片で、器面が荒れていて詳細は不明である。押型文土器との指摘があるが、その部分は斜縄文のようにも見える。161は注口土器の注口部である。

D　その他の土器（図版44・83）

162～164は近世陶磁器である。162は越中瀬戸のヒダ皿である。釉は鉄釉で内禿である。17世紀前葉～中葉ころと見られる。163は初期伊万里で17世紀初頭に位置付けられる。見込みに鳥の文様が描かれる。底部は砂目である。164は加賀街道第3面SD300出土の京焼風唐津の碗である。素地はにぶい黄橙で、透明釉が畳付以外全面に掛かる。17世紀後半のものである。

165～172は弥生時代～古墳時代の土器である。165は古墳時代の古式土師器の甕である。内外面ハケメで調整される。内面体部の一部にヘラケズリも見られる。166は弥生時代後期末の月影式の壺と見られる。口縁帯に疑凹線が５条わずかに確認できる。169も弥生後期末の月影式土器の甕であろう。口縁帯が発達し７条の疑凹線が深く施される。胎土は１～2mm程度の長石・石英・チャートを大量に含み粗雑な印象を受ける。体部および底面までハケメで調整されている。167・168は同一個体で古墳時代前期初頭の東海地方のＳ字状口縁台付甕である。体部外面は鋭利なハケメで調整される。器壁は極めて薄く外面にススが付着している。口縁部形状からＣ類に分類され、廻間Ⅲ式期［赤塚1990］に所属すると考えられる。168は体部上半部の破片で内面に指頭痕が残る。胎土はにぶい黄橙色を呈し白色粒子を含む。胎土分析は行っていないが、搬入品の可能性がある。県内では中頸城郡妙高村大洞原Ｃ遺跡［三ツ井ほか1997］、同中郷村籠峰遺跡［川村ほか2000］、同村横引遺跡［立木1996］、新井市斐太遺跡上ノ平・矢代山第24号住居址［駒井・吉田1962］、三島郡西山町高塩Ｂ遺跡［坂井ほか1983］、新潟市緒立Ｃ遺跡［渡辺1994］にわずかに出土例がある。170は古墳時代の甕の底部で外面は赤彩されている。171は古墳時代の器台または高坏の脚部で、丁寧にナデられる。172は古墳時代後期の坏または高坏で、内面は磨かれ黒色処理されている。

Ｅ　土　製　品（図版44・83）

羽口　浅箱で約２箱出土しているが、３点のみ実測した。173はSE608で直径は7.6cm、孔径は2.8cmである。174は直径7.5cm、孔径2.3cmである。175は直径7.2cm、孔径2.5cmである。

研磨具　176は中世の珠洲の甕片を転用しており、外面に平行打圧痕、内面に円形押圧痕が残る。全体を使用しており磨耗は顕著である。177は平安時代の須恵器の甕片を転用したものである。外面に平行線文タタキ、内面に同心円文当て具痕が残る。178は須恵器瓶などの体部成形時に、一時的に閉塞し、口縁部接合のため切り取った時の円板か。しかしこの場合焼成は行われない可能性が高いが、これは焼成され自然釉が大量に付着している。裏面に竹串で刺したような未貫通の孔がある。全体が摩滅している。

手づくね土器　179は平安時代の土師質の手づくね土器と見られる。直径4.5cm、高さ1.9cmである。調整は粗雑である。

土器片円板　180は縄文時代前期の土器片円板である。SI500のP1出土である。羽状縄文が施される。外面にススが付着している。

Ｆ　木　製　品（図版45～49・84～87）

八反田遺跡では、多くの井戸が検出されていることから木製品が多く出土しているが、中世の食膳具の主体といわれる漆器の椀・皿類は少なく、容器の曲物が主体である。器種ごとに報告する。

横櫛　181は中世の井戸SE303（東）出土の蒔絵の横櫛である。歯は34本で全体は黒漆で塗られ、棟に銀のようなもので橋のような蒔絵が施される。材質は櫛の材料によく使われるイスノキである。

箸　182・183は中世の井戸SE330（東）出土の箸である。182は20.5cm、183は23.1cmでともにスギである。184～189は中世井戸SE924出土のスギ材の箸である。長さはおよそ16.0～21.0cmまでと様々で、断面は三角形や方形、扁平なものがある。このSE924（東）からは他に26本の箸と板片が１点出土している。井戸祭祀に伴うものと考えられる。

漆器　194はSE504（東）出土の椀である。腐食が進み立ち上がりが垂下している。内外面の文様は

不明である。195はSE1046出土の椀である。内面に文様あるいは文字が書かれている。196はSE1201出土の皿である。外面の一部にケズリ痕が有り、面取りしている可能性がある。197はSK4（水東）出土の皿である。内面に樹木の文様が描かれている。素材はクリである。198は漆器類の素材の荒型か。材はクリで同じクリ材の197と同一の井戸から出土している。

曲物　曲物の多くは、側板の上から木釘を打ち込んで結合した釘結合曲物である。底あるいは蓋と判断したものはそれぞれ底板、蓋板としたが、釘孔などの無いものは円形板とした。199は円形板である。周囲に釘孔はない。200は円形の曲物で高さは6.9cmと浅い。底板に釘孔はない。側板は1列2段上内下外綴じである。側板のケビキは端部に2本の縦平行線を入れ、その後は斜平行線に入れている。側板との結合方法は不明である。202は釘結合曲物の柄杓である。木釘は4ヶ所打ち込まれている。柄は残っていないが、孔径から直径は1.2cm程度と推定される。側板の柄差込孔の向いに、柄の先端を差し込むわずかに貫通する程度の孔が開けられている。1列3段外綴じである。203は筒型曲物である。箍の幅は3.0cmで箍のつくものはこの1点のみである。204は中央部のみしか残存していないが、3本の木釘が残り把手の付く蓋と推定される。208は底板に側板がわずかに残っている。木釘は0.3cm程度の方形で6箇所を留めている。底・側板とも内面に黒漆が残っているが、刷毛目が残ることから漆を入れた容器の可能性が高い。また、208に付く側板の可能性のある206の内面にも漆が残るが、厚さが均一でなく表面に凹凸があることからも漆容器の可能性が高い。1列4段外綴じである。209は底板あるいは蓋で縁が薄くなるように調整されている。表面の3ヶ所の釘孔は把手部分かとも思われる。210は用途が不明である。表面は丁寧に整形しているが裏面は粗雑である。2ヶ所に樺皮紐があるが樺皮結合曲物とするには結合箇所が不足であり、切り込みの方向が結合に適さない。213は2列綴じでケビキは縦平行線に幅0.5cm間隔で入れている。内面に黒漆が塗布されている。216は底板である。側面に釘孔はない。内面に黒漆が残り刷毛目が明瞭に残る。

桶　217は桶の側板である。内面に黒漆が残り、外面に細い箍状の変色した部分が残る。口縁部は高さが不揃いである。木目の細かい板と粗い板があるが、すべてスギである。

指物　218はスギの箱状の指物である。口縁がやや開く台形状を成す。底板は長方形で長辺の板接着部には側板の木目の圧痕がついている。

糸巻　221・222はSK1211（東）出土で同一個体の可能性のある枠木4本からなる糸巻である。横木は2枚の板を十字形に相欠きでかみ合わせるもので、中心に軸孔が開いている。221の横木にのみ軸孔の横に小孔がある。枠木と横板の結合は木釘である。枠木の中央は断面形がカマボコ状を呈し、両端は削って棒状を呈する。このSK1211（東）からは6.5個体分の糸巻の部材が出土している。

不明木製品　223は釘孔が3ヶ所開いており、容器の把手の可能性がある。中央に2ヶ所の切り込みがあるが、使用痕は見えない。

部材　219・220はSE1417出土である。219は杭あるいは部材と思われる。両端面を加工している。220は長さ128.2cm、幅17.4cmである。建物の部材と思われるが詳細は不明である。上面は面取りしている。下面の一部は幅3.0cm、深さ5.0cm削り、更に幅1.0cm深さ1.0cmの溝を入れている。219・220ともにコナラ属コナラ節である。

G　石　製　品（図版50・51・87・88）

石製品には石鉢、磨石、砥石がある。時期的には平安時代～中世の石製品が中心であるが、縄文時代～古墳時代の土器も出土していることから、これらの時期のものも含まれると推定される。出土状態や形態

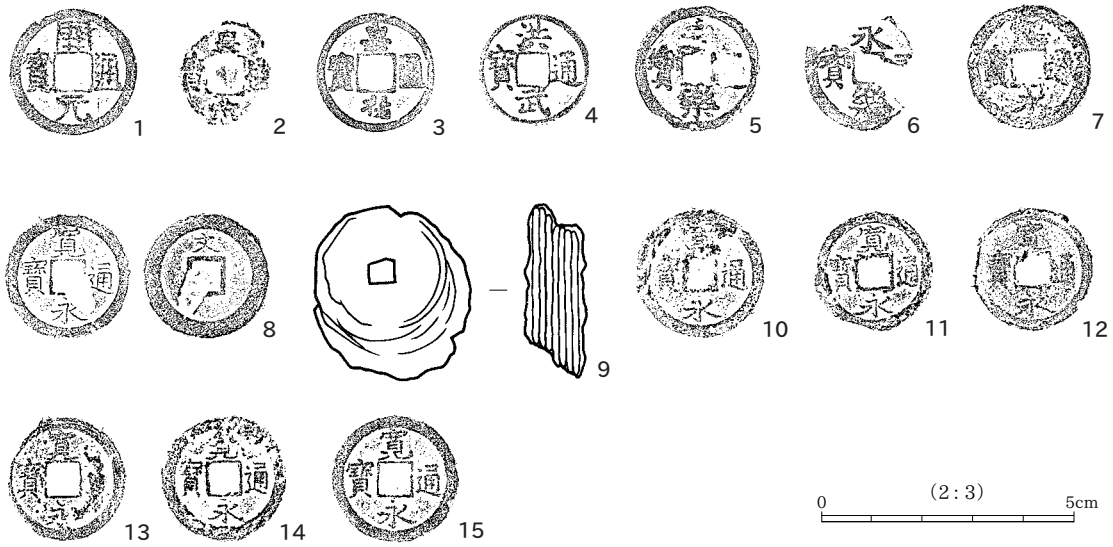
で縄文時代の石器と判断したものは次項で述べる。224は妙高山麓産の角閃石安山岩の石鉢で、底部は破損している。外面にススが付着している。時期はおおよそ15～16世紀代か。225は敲石で中央の凹凸はわずかで、周囲に磨面がある。時期は明確でない。226～242は平安時代～中世の砥石である。230は平安時代のSB2－P1461出土の砥石である。深さ1～2mm程の筋3条が平行に刻まれている。砥面は3面で左側面の研磨が顕著である。根固め石に利用されたようだが、平安時代以前の砥石が転用されている可能性が高い。231は平安時代のP1462出土で砂岩製の砥石である。砥面は2面で正面に2本の浅い筋がある。部分的にススが付着している。平安時代以前の砥石の可能性もある。

H　石　　器（図版51・88）

すべて縄文時代の石器である。総量は浅箱の1／2程度である。報告したもの以外に石鏃の破片1点と未成品1点があるのみである。243～245はSI500出土で土器の時期から前期のものと見られる。243は黒曜石の凹基無茎石鏃である。1mm程度の白色の挟在物をわずかに含む。尖頭部側縁が内弯状に膨らむ。244は石鏃の未成品である。245は不定形石器の未成品である。246は凹基無茎石鏃である。尖頭部側縁が内弯状に膨らみ、基部の凹状が浅い。247は柳葉形を呈する尖頭器である。凝灰岩製で長さ3.6cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmである。248は横形石匙である。縦長剥片を使用している。つまみは小型でやや左よりに作られ、左側縁は丸く、右側縁はやや鋭利に整形されている。249は頁岩製の篦状石器である。縦長剥片を使用し、右側面から下部に剥離が施される。250は頁岩製の不定形石器で縦長剥片を使用している。251は安山岩製の小型の礫石錐である。長軸の両端を打ち欠き、縄掛け部を作り出している。重さは80.0gである。252は安山岩製の敲石である。両面に敲打痕の凹凸が顕著に残る。

I　銭　　貨（第9図・図版88）

銭貨は開元通寶から寛永通寶まで約70枚出土している。文字が判読できたものについて観察表を作成した。1の開元通寶は9C6グリッドの掘立柱建物SB4のピットから出土している。底面から7枚重なっ



第9図　八反田遺跡出土銭貨

報告No.	整理No.	出土位置 遺構	グリッド	層位	地区	分類	器種	銭種	国名	初鋳年	法量(cm) 長さ	幅	備考
1	5	SB4-P	9C6		P.R.7	銅製品	銭貨	開元通寶	南唐	960	2.5	2.5	掘立柱建物柱穴内出土。
2	13		9C6	Ⅳ層上	P.R.7	銅製品	銭貨	皇宋通寶	北宋	1038			
3	4	SE1460	10C13		八反田	銅製品	銭貨	嘉祐通寶	北宋	1056	2.3	2.3	基底部より出土。
4	2	SE1311	10C8		八反田	銅製品	銭貨	洪武通寶	明	1368	2.2	2.2	
5	3		8C8	Ⅳa層	P.R.7西	銅製品	銭貨	永樂通寶	明	1408	2.5	2.5	
6	14	SB4-P4	9C6	Ⅳ層上	P.R.7	銅製品	銭貨	永樂通寶	明	1408			掘立柱建物柱穴内出土。
7	15	SD320	9C13		P.R.7東	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1636	2.4	2.4	古寛永1636～1659年鋳造。
8	12	P954(東)	9C15		P.R.7東	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1668	2.4	2.4	新寛永（文銭）1668～1683年鋳造。
9	11	SD300	10C15他		C.B.6	銅製品	銭貨	寛永通寶？					約53枚がサシの状態で出土。
10	10	SD300	10C15他		C.B.6	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1697	2.5	2.5	新寛永1697～1747年、1767～1781年鋳造。
11	9	SD300	10C15他		C.B.6	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1697	2.3	2.3	新寛永1697～1747年、1767～1782年鋳造。
12	8	SD300	10C15他		C.B.6	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1697	2.4	2.3	新寛永1697～1747年、1767～1783年鋳造。
13	7	SD300	10C15他		C.B.6	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1697	2.4	2.3	新寛永1697～1747年、1767～1784年鋳造。
14	6	SD300	10C15他		C.B.6	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1697	2.5	2.5	新寛永1697～1747年、1767～1785年鋳造。
15	1		9C4	Ⅳ層	AB	銅製品	銭貨	寛永通寶	日本	1697	2.5	2.5	新寛永1697～1747年、1767～1786年鋳造。

第３表　八反田遺跡銭貨観察表

て出土したことから、柱穴に埋納された可能性が高い。同じくSB4－P4からは6の永樂通寶が出土した。加賀街道第３面のSD300から約53枚のサシの状態で寛永通寶が出土した。この寛永通寶は1697～1747年、1767～1786年鋳造の「新寛永」である。

J　鉄　　滓

本遺跡からはP.R.7東地区、八反田地区の中世の溝を中心に21,470gの鉄滓が出土している。特に中世の掘立柱建物SB907（東）の東側に隣接するSD502（東）からは127点5,359gが出土している。分析は行っていない。第４表に重量等を掲載する。

遺構名	グリッド	個数	重量(g)
SE508（東）	10C11	27	949
SE925（東）	9C15	1	35
SE1054	10C13	5	157
SE1080	10C18	1	9
SE1309	10C12	3	17
SK3（水東）		4	124
SK209（東）	10C12	3	85
SK1212	10C17	1	28
SK1336	10C18	1	44
SK1337	10C19	5	96
SK1338	10C18	1	4
SK1416	10C13	1	28
SX970（東）	10C11	1	29
SX1418	10C13	1	11
SX1423	10C12	4	172
SD22（東）	8C15	23	141
SD26	8C15	10	89
SD301（東）	9C14	5	434
SD502（東）	10C11	127	5,359

遺構名	グリッド	個数	重量(g)
SD922（東）	9C15	1	13
SD966（東）	9C15	1	47
SD1020(東)		1	80
SD1078	10C18	1	27
SD1081	10C19	19	886
SD1082	10C19	2	89
SD1202	10C11	4	102
SD1254	10C11	38	3,587
SD1256	10C11	4	117
SD1308	10C13	1	14
SD1317	10C19	1	9
SD1329	10C18	24	794
SD1342	10C14・19	9	119
SD1408	10C12	1	16
P221	10C12	2	89
P224	10C12	1	122
P226	10C12	1	14
P236	10C12	1	47
P240	10C12	2	27

遺構名	グリッド	個数	重量(g)
P241	10C12	2	89
P245	10C12	2	50
P249	10C12	3	67
P255		2	38
P568	10C11	3	31
P586	10C11	1	107
P945	9C15	2	65
P1038	10C18	1	84
P1441	10C13	1	49
	9C15	6	191
	9C20	1	171
	10C7	1	26
	10C11	34	2,157
	10C12	3	113
	10C16	4	1,209
	10C17	5	120
	10C18	24	1,776
	10C19	63	2,822
不明		4	151
合計		500	23,326

第４表　八反田遺跡鉄滓重量表

4 ま と め

A 遺　　構

八反田遺跡は縄文時代前期、平安時代、中世に主に集落が形成されていた。ここでは時期別に集落の様相を見ていきたい。

1）縄 文 時 代

八反田遺跡は、南の山屋敷地区から舌状に延びる平山段丘の先端部分に、竪穴住居が平坦面の縁辺を巡るように４棟建てられ、集落を形成している。標高は12～13mを測る。縄文時代の遺物は、前期から後期まで少量出土しているが、竪穴住居から出土している遺物は前期前半のものである。この前期前半という時期は、後氷期の中でも最温暖期にあたり、縄文海進のピークであったといわれる。その後、高田面は古墳時代初頭から段丘化し始め、何層かの洪水堆積物によって覆われながら、平安時代には完全に段丘化したと考えられる［岡本1999］。この過程で平野西縁の平山段丘の先端部とそこに営まれた縄文時代前期の八反田遺跡も、高田面の下に埋没したものと考えられる。

2）平 安 時 代

平安時代の集落の中心は縄文時代と同じく平山段丘上であるが、沖積地の開発が進み、鉄砲町遺跡との間約200mには水田が耕作されており、この水田は中世まで続く。掘立柱建物SB1～3と柵列SA1455・1456はいずれも平坦面の東端で検出されているが、西側にもピット群があることから、さらに多くの建物があったものと推定される。SI922（東）は時期不明の竪穴住居であるが、須恵器が1点出土していることから平安時代の竪穴住居の可能性も残る。この集落は出土遺物から、9世紀後半以降に水田開発を目的として新しく成立した集落と考えられる。鉄砲町遺跡と集落の成立、存続時期は重なっており、2・3棟の建物と井戸、畑、土坑などがひとつの単位としてまとまる、小規模の散村となっている状況もほぼ同じである。このように水田近くに成立した遺跡は、「住耕一体型」の集落［坂井1999］ともいわれる。

段丘北側の沖積地のSE1（水東）では11世紀後半～終末の土師器椀が大量に廃棄されている。このような土師器一括廃棄遺構は10世紀前半～11世紀前半以降に多く認められ、饗宴（儀礼）が行われていたことを示唆し、古代末～中世への過渡期の様相を示すものである。

P.R.7西地区で検出された掘立柱建物SB808（西）・814（西）は、八反田遺跡より距離的に近い鉄砲町遺跡との関連性が高いものと考えられる。明確に掘立柱建物からの出土とは確定できないが、同グリッドから9世紀後半～10世紀初頭の遺物が出土していることから、鉄砲町Ⅰa期［藤巻ほか1995］（9世紀末～10世紀前半）の建物と考えられる。

3）中　　世

中世も平安時代と集落の中心に変化はないが、掘立柱建物、井戸、ピット群を中心とする範囲を区画する溝が検出されており、屋敷地を形成していたと考えられる。西に12度程傾いて掘削された4本の溝（SD905・502（東）、1408～1200、1208）とほぼ直交する溝で、大きく3つのブロックを形成している。

最も西の10C11グリッドを中心とするブロックは、検討の余地が残るが西端をSD905（東）とすると、30.0m程度の方形区画となる。総柱の掘立柱建物SB907（東）と直径4.0m程の大井戸SE504（東）が、屋敷地の中核的建物と考えられる。このブロックは出土遺物から15世紀代が中心と見られる。多くのピット群があり、さらに建物が建つものと考えられる。北側には三角形の小ブロックがあり、井戸、土坑、ピット、溝が検出されている。標高は13.0m前後である。

10C12グリッドの西側を中心とする中央のブロックは東西13.0m南北24.0m程の区画で、多数の井戸とピット群が検出されている。北側には長方形の小ブロックがあり、土坑、ピット、溝が検出されている。標高は12.6mである。東側の10C12・13・17・18グリッドを中心とするブロックは井戸とピット群が検出されているが、西側の２ブロックと比較してそう多くはない。東端はSD1081で南端は不明で方形かあるいは不整形になる可能性もある。標高は12.0mである。

この３つのブロックは、西側のブロックが最も面積も広く標高も高い。中央のブロックは、面積は狭いが標高は東ブロックより高いという状況になっている。このことから、屋敷地内の溝による区画は階級差を表している可能性が高い。遺物では梅瓶、四耳壺など領主クラスが持つような特殊な輸入陶磁器等は見られないが、茶陶として瀬戸・美濃産の天目碗や茶入れ、香炉等があり、喫茶をたしなむ有力者の存在が想定できる。さらに糸巻、荒型、漆容器等の出土により屋敷地周囲に工房の存在も窺える。

P.R.7地区で検出されたSB4は１間×２間と規模は小さい。P4から永樂通寶（1408年初鋳）が出土していることから15世紀以降の建物と考えられる。集落の中心からは130mほど離れ、水田に囲まれた１軒屋的様相を示す。

B　遺　　物

1）縄　文　時　代

本遺跡出土の縄文土器は、前期・中期・後期に大別できる。ここでは、その編年的位置付け・系統等について見てみたい。

前期の土器（148～155・160）　148は半截竹管による格子目文が施文されていることから、いわゆる格子目文土器［寺崎1991］と呼ばれている土器である。この土器は、長野県北部～新潟県上越地方を中心に分布しているが、その広がりは北関東～中部高地～北陸地方と広範囲におよび各型式間にまたがって存在する。本県では、刈羽郡刈羽村に所在する刈羽貝塚出土土器［八幡1958］を指標とする刈羽式土器［寺崎1997］を構成するひとつの類型である。時期は、格子目文の交点に円形竹管の刺突が加えられているといった古い要素も見られるが、爪形文が施文されていることから関東地方の諸磯ｂ式に並行する可能性が高い。151は肋骨文が施文されているということから、中魚沼郡中里村泉龍寺遺跡の第Ⅲ群土器［中村ほか1963］に類例を求めることができる。関東地方の諸磯ａ式土器に並行する。152は泉龍寺遺跡第Ⅲ群土器の類例などから、151のようなタイプの胴部と考えられる。154・155は胎土に繊維を含み、口縁に幅狭の文様帯が認められ、以下は縄文が施されていることから、西蒲原郡巻町新谷遺跡の６群土器［前山1994］に類似する。系統を東北地方北部［武藤1978］や道南地方［加藤1982］に求めることができる北系の土器である。関東地方の関山Ⅰ式土器に並行するものと考えられる。149・160は胎土に繊維を含んでいることから中葉以前、153は胎土中に繊維を含まない羽状縄文土器といった特徴から、諸磯式に並行する可能性がある。150は胎土の状況から中葉以前の可能性がうかがえる。

中期の土器（156・158・159）　156は幅狭の半截竹管で施文されていることから、159とほぼ同時期の所産であろう。いずれも北陸地方の新保式土器や関東地方の五領ヶ台式土器の古手に並行する。158は磨消縄文に縦位幅広沈線という手法からして後葉に比定されよう。系統は、このような手法から判断して、関東地方の加曽利Ｅ式あるいは東北地方南部の大木９式に求めることができる。加曽利ＥⅢ式や大木９式の新に並行するものと考えられる。159は大形で、撚糸の絡条体圧痕文が認められることや地文が木目状撚糸文であること及び平行沈線文の施文具である半截竹管が幅狭であるという特徴から、初頭でも古手と考えられる。撚糸の絡条体圧痕文は、その系譜を東北地方の円筒式土器に求めることができると予想され、本県では、剣野Ｅ遺跡［金子1967］をはじめ多くの遺跡で出土している。類例は、長野県北部や群馬県においても確認されている。

後期の土器（157・161）　157は中郷村上中島遺跡の６群１類土器［立木（土橋）1999］や同村籠峰遺跡の後期第９群土器1Ｂ類［國島・梅川2000］に類例が求められる。これらの報告では後期末葉～晩期あるいは後期に位置付けられていることから後期末葉当りに編年されるのが妥当であろう。系統は、関東地方の安行式との関係が指摘［國島・梅川2000］されている。161は無文の注口部というだけで際立った特徴が無く、後期後半という編年は想定できるが系統等の詳細は不明である。

2）平安時代から中世初期

土器・陶磁器を中心に編年的位置付けを検討する。第10図に主要な遺物の構成を示した。遺物は平安時代～中世まで断続的に出土しているが、大きく２時期に区分した。平安時代の中ごろに当る９世紀後半から中世初期に当る13世紀終末までを第Ｉ期とした。Ｉ期はa、bの前後に細分され、Ｉａ期は９世紀後半～11世紀末までの古代の土器様相を残す時期。Ｉｂ期は中世土師器が出現する12世紀前半から珠洲Ⅲ期（1250～1280）の時期までである。

Ｉａ期初めの食膳具は、小泊産の無台坏（79・123）、有台坏（124・125）、坏蓋（126・127）が主体で、頸城産と見られる回転糸切りの無台坏（43）をわずかに含む。貯蔵具は横瓶（26・140）壺・瓶類（96・115・117・135～138・143）、甕（109・116・139）がある。土師器無台椀（87～89）も少量含まれる。黒色土器は大型のＡＩ類（91・92）と中型のＢⅡ類（90・98）の二つの法量がある。煮炊具は土師器の小甕、長甕、鍋があり、口縁端部が上方に屈曲するものが主体で、口縁端部が屈曲しないものはやや新しい様相か。この器種構成等から、時期は９世紀後半～10世紀初頭に相当すると思われる。京都洛西産と見られる９世紀終末の軟質の緑釉陶器（86）が１点含まれる。続いて10世紀後半～終末の東濃産虎渓山１号窯式の灰釉陶器碗（85・102・128～131）・皿（107・112・132～134）、瓶類（25・38）が現れ、同期の土師器無台椀は体部が薄手（84・97・110）のものが少量見られる。虎渓山１号窯式の灰釉陶器は、鉄砲町遺跡でも一定量出土している。続く11世紀前半の土師器無台椀は器高が低く小型のＤⅢ類（95・121・122）が一定量有り、有台皿（66）がわずかに認められる。11世紀後半～終末の土師器無台椀（67～78・82～84）はSE1（水東）で良好な一括資料があり、分類ではＢⅢ・ＣⅢ類に集中する。

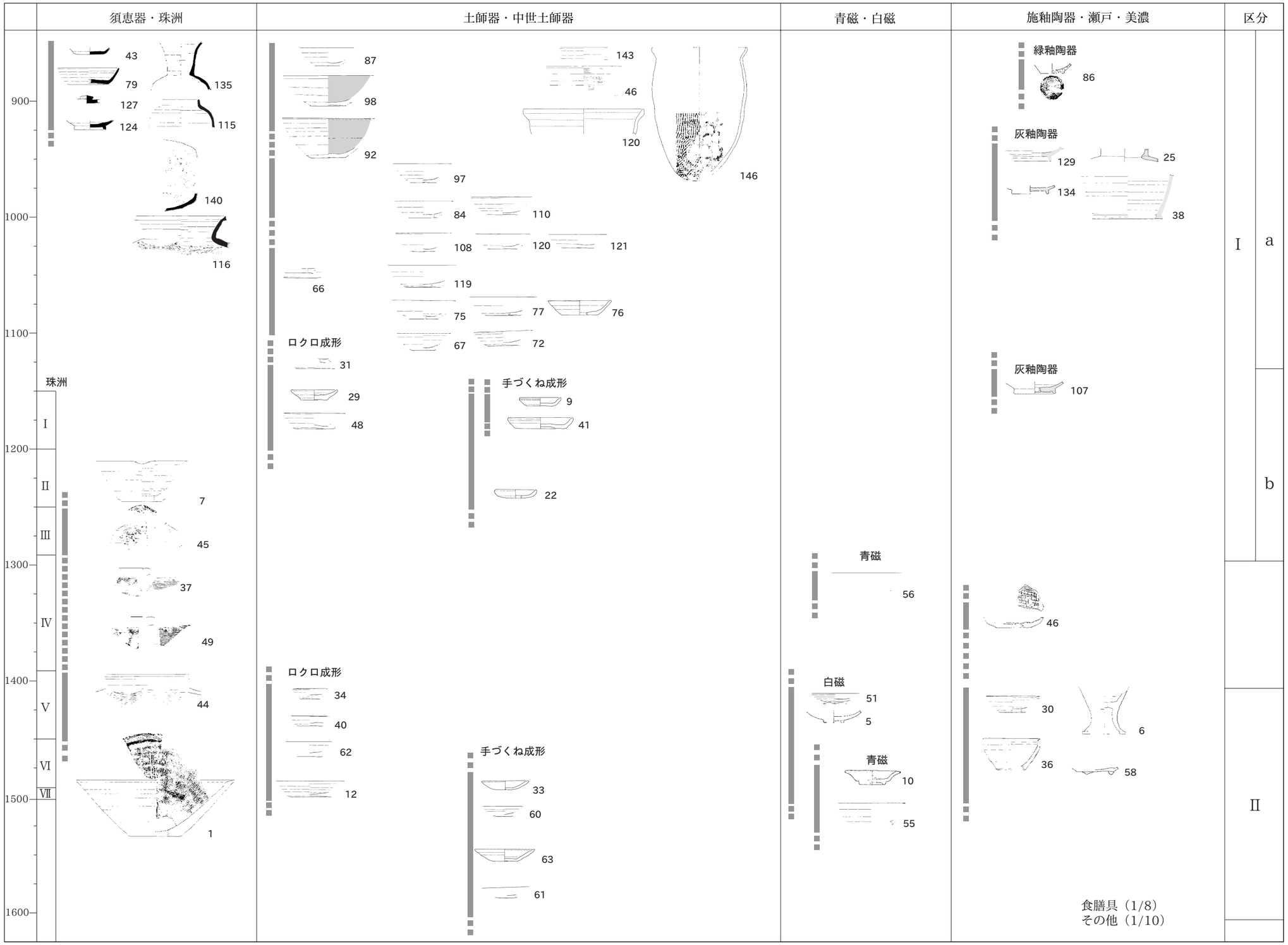
Ｉｂ期は12世紀前半の中世土師器の出現を始まりとする。中世土師器には北陸系のロクロ成形のものと京都系の手づくね成形のものがある。ロクロ成形土師器は有台皿（31）がわずかに見られる。底部に板状の圧痕を有する特徴的な皿（11・14・15・17～19・64）が主体を成し、伝至徳寺跡［笹澤・水澤2001］などの類例から12世紀終末ころのものと見られる。京都系手づくね土師器（9・41）は12

世紀後半に位置付けられ、12世紀中葉～13世紀前半に位置付けられるもの（22）もわずかに出土している。また、12世紀前半ころの可能性がある高台に籾跡を残す灰釉陶器（107）が出土している。珠洲はⅢ期が主体である。片口鉢は水平口縁で端面がわずかに窪むもの（3）と、口縁端部は外傾し端面を平直に仕上げるもの（20）がある。壺R種（35）は櫛目波状文が加飾される。甕（37）はやや丸みを帯びた方頭のくの字状の口縁である。

3）中　　世

中世はⅠb期に始まるが中心となる時期は15～16世紀でⅡ期とした。

珠洲はⅤ期（1380～1450）が中心であり、実測できたものは口縁部に櫛目波状文を施す片口鉢（1・7・8）が多い。42の片口鉢はは底部のみであるがⅤ～Ⅵ期ごろの可能性が高い。44の壺T種は長頸で直立ぎみの方頭状の口縁部形状からⅤ期と見られる。49の甕は円頭のくの字口縁という形状からⅣ期の可能性がある。瀬戸・美濃はおおむね15世紀代に収まる遺物が出土しているが、大窯期の遺物もわずかに出土している。卸皿（46・48）は古瀬戸中Ⅲ期様式と見られ14世紀前半ころのものである。縁釉小皿は30が古瀬戸後Ⅳ古期で15世紀中葉、39は古瀬戸後Ⅳ新期で15世紀後半ころと見られる。香炉（58）は14～15世紀代、天目碗（36・59）は古瀬戸後期で15世紀代と見られる。6の瓶子は鉄釉が掛かり、器形から15世紀前半ころのものとしたが、産地は瀬戸・美濃とするには胎土に1～3mmの砂を多く含む等の問題が残る。50の茶入れは明確な時期は不明であるが、他の茶道具と同時期にそろえられたものとすると15世紀代の可能性がある。貿易陶磁の青磁は14世紀初頭の鎬連弁文の碗（56）が最も古く、同安窯系の劃花文碗の小片もある。稜花皿（10）は15世紀末、無文の碗（55）は16世紀初頭のものである。白磁（4・5・24・28・51）は15世紀代のものが主体である。青白磁、染付（57）の小片も1点づつ出土している。中世土師器はロクロ成形の関東系（12・13・16・28・32・34・40・52・53）といわれる15世紀代のものが多い。この後、手づくね成形の京都系（33・60・61・63）の15世紀末～16世紀代の中世土師器に変わる。中世土師器のこのような製作技法と系統の転換は、政治的な動向が背景にあったものとされる［品田1999］。



第10図　八反田遺跡　土器・陶磁器の構成

第Ⅳ章　高　畑　遺　跡（C地点・二期線）

1　調 査 の 概 要

本書では高畑遺跡のC地点および二期線について報告する。A地点西地区・東地区・水路地区、B地点については『新潟県埋蔵文化財調査報告書第42集　高畑遺跡』［寺崎ほか1986］で報告済である。

A　グリッドの設定

春日・木田地区遺跡群のグリッド設定は、八反田遺跡第三章1節A項に詳述してあるので、ここでは割愛する。高畑遺跡の調査範囲は3B～5BCグリッドに位置する。

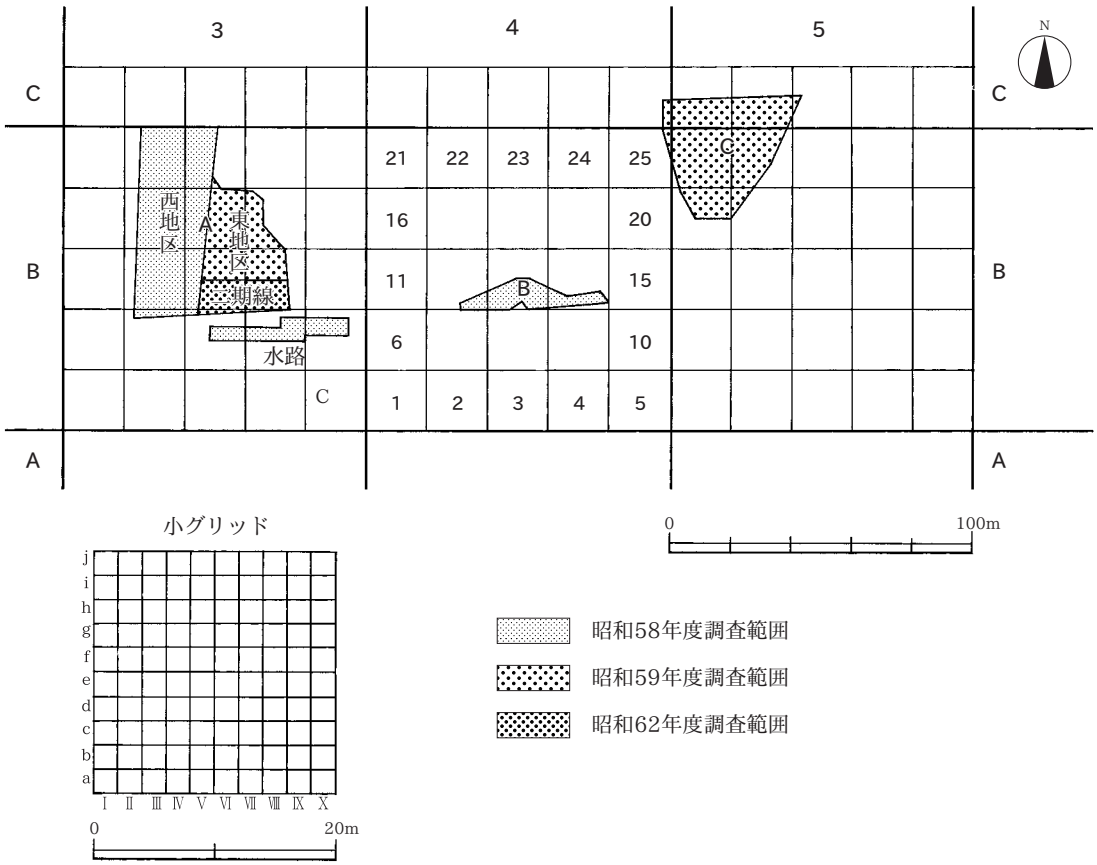
B　基　本　層　序

二期線とC地点は約120m離れ、土質も違いがあるのでそれぞれの地点ごとに説明する。

二期線（①～③）自然堤防上に位置するA地点東地区の範疇である。

Ⅰ層：黒褐色土　表土

Ⅱ層：暗褐色土　炭化物を含む。昭和58年調査のⅣb層に相当する。



第11図　高畑遺跡グリッド設定図

Ⅲ層：にぶい黄褐色土　炭化物を含む。昭和58年調査のⅣｃ層に相当する。

Ⅳ層：黄褐色土　地山。昭和58年調査のⅥ層に相当する。

Ｃ地点（④～⑧）自然堤防の微高地上に位置する。

Ⅰ層：黄褐色土　盛土　高速道路工事に伴うものである。

Ⅱ層：灰褐色土　旧表土

Ⅲ層：灰色土　　炭化物を含む。

Ⅳ層：灰白色土　酸化鉄を含み、地点によって砂質、粘土質、シルト質に変化する。

Ⅴ層：黒褐色土　Ⅳ層が部分的に混入する。平安時代遺物包含層である。

Ⅵ層：黄灰色土　酸化鉄、炭化物を含む。

Ⅶ層：黒褐色土　河川の最上層である。

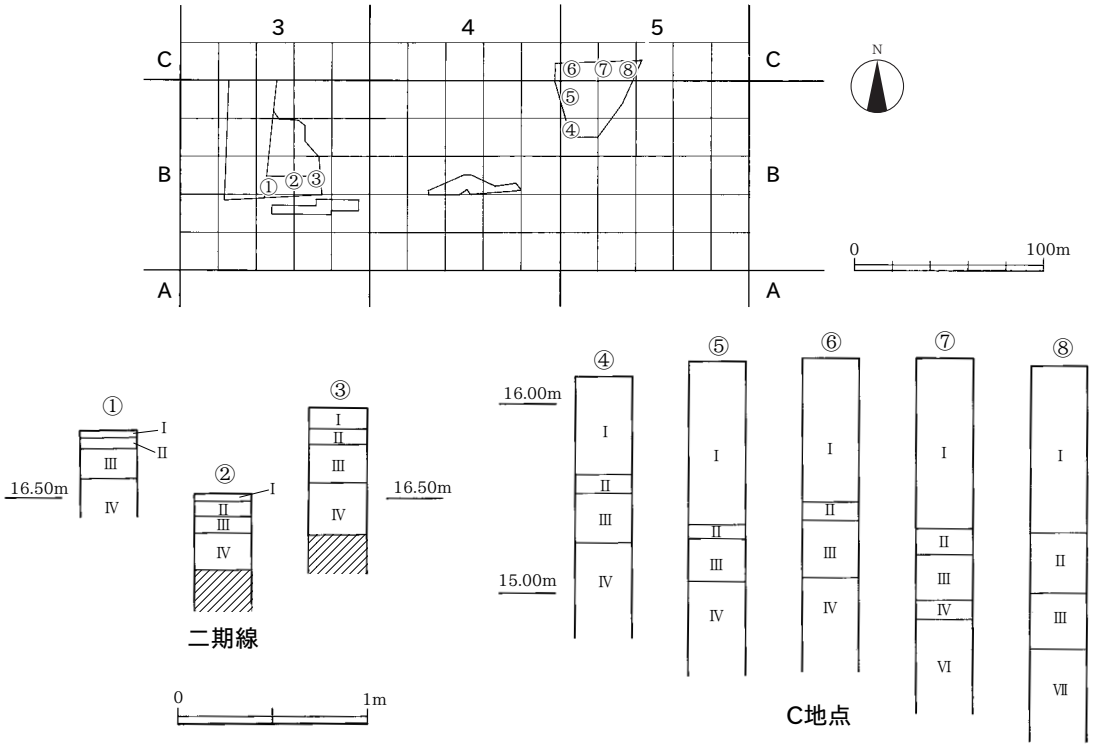
2　遺　　構（図版52～55・89～92）

二　期　線　調査区の南側は大きく攪乱されていた。

SE1　3B13グリッド検出の平安時代の井戸である。規模は2.14m×1.94m深さ2.32mである。下駄（20）、砥石（21・22）、五輪塔（23）が出土している。覆土に大量の礫を含む（図版55）ことから井戸を埋める際に祭祀が行われたものとみられる。周囲に多数の柱穴があり、建物があったと推定されるが、復元できていない。

P11　3B13グリッド検出の不整形なピットである。断面形は中心が北に寄ったＶ字状である。

SD1・2　SE1の西側に２本並列して検出された。幅は1.2m程で、深さは0.1m程度と浅く、南西か



第12図　高畑遺跡基本土層図

ら北西に向かって緩やかに傾斜する。方向はＮ－40°－Ｅである。

Ｃ　地　点

SB1　5C1グリッド検出、平安時代の総柱の掘立柱建物である。３間×３間で柱間は1.6mと2.6mである。柱の掘り方は20.0cm前後と細く、柱根は９基の柱穴で残存しており、主に角柱を使用している。SB2と方向を同じくする。

SB2　5C1グリッド検出の掘立柱建物である。１間×２間以上の身舎に３面あるいは４面に庇が付く。身舎の柱間は2.6m、庇の柱間は1.8mと2.6mである。桁行きの方向はほぼ南北である。11基検出された柱穴の内、２基で柱根が残存していた。

SK1　5C1グリッド検出の平安時代の土坑である。掘り込みは浅く、覆土に炭化物を含む。SB2の南に隣接することから、SB2に付属する土坑の可能性がある。

P23　5C2グリッド検出の円形のピットである。SB2の東に隣接する。底部はやや外側に張り出して掘り込まれている。土器がまとまって出土している。

P24　5C1グリッド検出の不整形のピットである。SB2と重複して検出されているが、切り合い関係は不明である。土器が４点出土している。

河川跡　SB1・２の東南側12mほど離れて東側から曲がって北東方向に流れる。幅約5.0m、深さ0.5～0.9mで曲物（18・19）が出土している。

3　遺　　物（図版56・57・93・94）

高畑遺跡出土の遺物は土器・陶器、石製品、木製品合わせて二期線１箱、Ｃ地点９箱である。報告に当たり遺物の種別に関係なくすべて通し番号を付した。また、器種ごとの器形や法量等による細分は行っていない。

Ａ　土　　器

土師器（1～7）　１～７はすべてＣ地点出土の無台碗である。すべてロクロ成形回転糸切りである。１は小さな底部から体部は直線的に立ち上がる。２～４は体部立ち上がりに指１本分強くナデられ稜ができ、口縁は外反する。５の体部は内弯しながら立ち上がり、口縁端部のみ外反する。６は大きい底部を持つ。７のみ内面が黒色処理され、体部は内弯しながら立ち上がる。

灰釉陶器（8～11）　すべてＣ地点SB1、SB2周辺からの出土である。器種には椀（８～10）と壷・瓶類（11）がある。８・９はの内面にのみ釉が掛けられ、口縁端部は強く外反する。９の高台の貼り付けは粗雑である。10は全体の器形は不明であるが、高台が三日月状を呈することから光ヶ丘１号窯式段階の可能性がある。11は小型の壷あるいは瓶で底径は6.0cm、体部下半はケズられる。10以外は猿投窯Ⅶ期第１形式［齊藤1994］段階の可能性がある。

土師器鍋（12）　Ｃ地点出土である。口径は26.0cm、口縁端部は上につまみあげられている。体部は内外カキメ調整である。

珠洲（13）　13は片口鉢の底部である。内面に11条の卸目が確認できる。内面の磨耗が顕著である。外面に縄状の圧痕が巡る。焼成は不良で浅黄橙色を呈する。

Ｂ　木　製　品

柱根（14～17）　14はSB1－P3出土の柱根である。腐食が進み元の形は不明だが、他の柱根と同じならば、本来は長方形の角材であった可能性が高い。底部は平らに加工されている。15もSB1－P6の柱根である。底部は細くなるように面取り加工がされている。芯持ちの角材である。16はSB1－P12の柱根である。これも腐食が進んでいるが、長方形の角材か。底部は斜めに加工されている。中央に抉りがある。17はSB1－P14の柱根である。底部は平らに加工しようとしているようである。中央に抉りがあり、上部は斜めに切られている。

曲物（18・19）　18・19はＣ地点河川跡出土の曲物である。18は底板のみである。19は柄杓でほぼ完形に近く残りはよい。口径は13.0cm、柄の直径は1.0cmである。柄を挟んで２列綴じである。柄はやや斜めに側板を２箇所突き抜けて付く。側板のケビキは内面両端部にのみ縦方向に入れられている。底板の目釘孔は４ヶ所である。

下駄（20）　二期線SE1出土の平安時代の連歯下駄である。前壺を台のやや右よりにあけ、後壺を歯の内側にあけている。歯は台と同じ幅で、断面形は方形である。平面形は隅円長方形で長さ19.2cm、幅11.2cm厚さ5.1cmである。台の上面にはかかとによる摩滅痕が顕著である。

Ｃ　石　製　品

砥石（21～23）　21は『新潟県埋蔵文化財調査報告書第65集　鉄砲町遺跡』［藤巻ほか1995］で報告されていたものだが、高畑遺跡二期線SE1出土の遺物であるので改めて報告する。実測図は鉄砲町遺跡からの転載である。平安時代の砥石である。断面が正方形に近い直方体である。正面に砥面をもち、上下側面を除く４側面に深い砥筋が見られる。22もSE1出土の砥石である。正面に深い砥筋が見られる。裏面中央には敲打による凹凸が見られる。長さ18.4cm幅12.4cm厚さ7.1cm、重量は1,950gである。

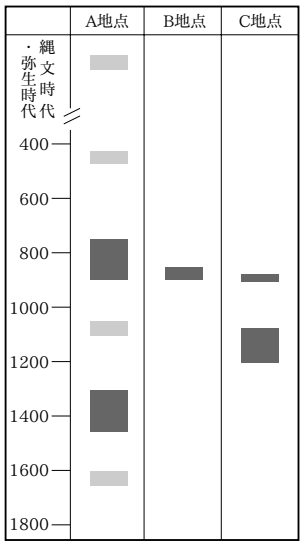
五輪塔（23）　二期線SE1出土の五輪塔の風輪である。石材は角閃石安山岩で風化が顕著である。ホゾの幅は5.5cmである。

４　ま　と　め

第５表に高畑遺跡各地点の遺跡の動態を表した。

二期線

井戸１基、土坑１基、溝状遺構２条と多数の柱穴が検出された。調査区西側で検出されたSD1・２は微高地の縁辺にあたり、Ａ地点東地区で検出されたSD129とともに井戸、柱穴を中心とする居住区を区画するものと考えられる。残念ながら居住区の中心と考えられる範囲は調査できておらず、詳細は不明である。遺構は覆土の違いから二時期に分かれる。調査範囲がＡ地点東地区の範疇と考えられることから、今回報告の遺構もほぼ同時期（９世紀後半、14～15世紀）と考えられる。遺物はＡ地点東地区分と合わせても３箱と少ない。土器は平安時代の土師器の椀、鍋、長甕等の破片が出土しているが、小片で実測可能な



第５表　高畑遺跡の動態

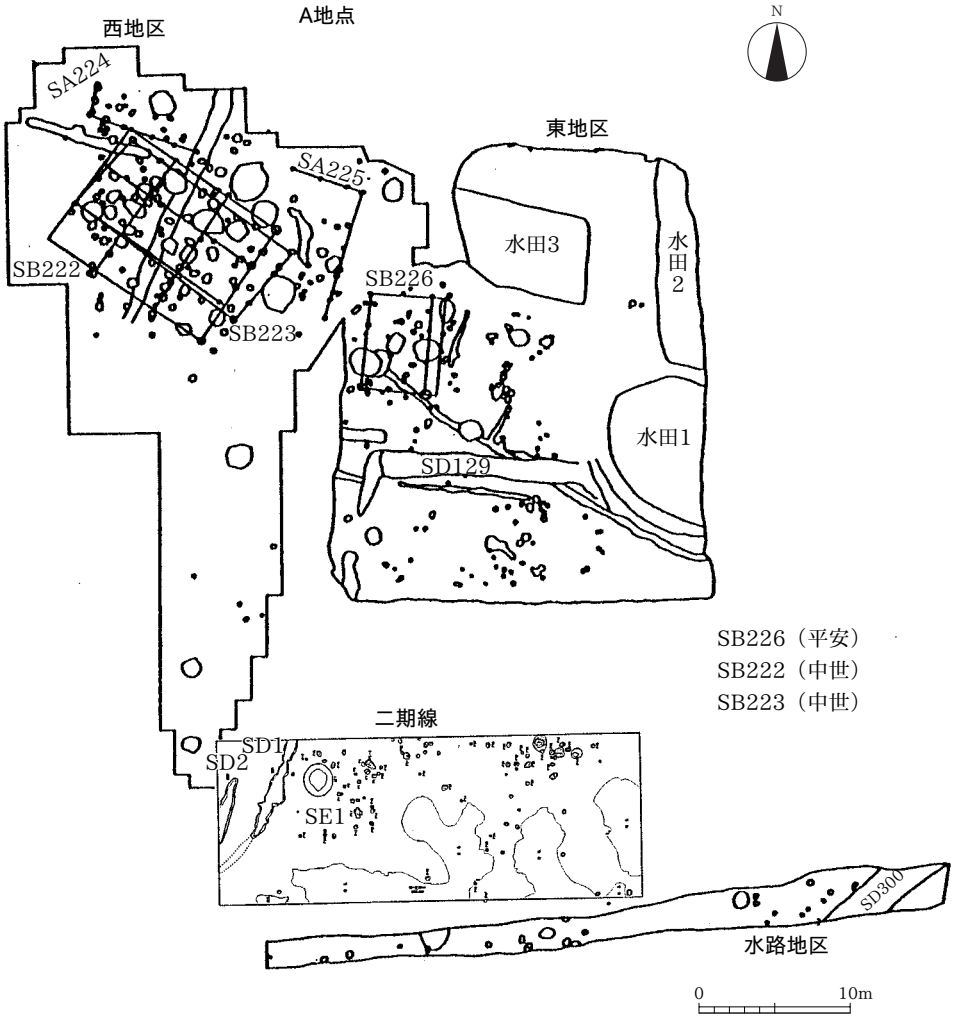
ものは無かった。

Ａ地点は縄文土器、古式土師器、奈良時代の須恵器、近世陶器等が散発的に出土しているが、遺跡の中心は平安時代と、中世である。Ａ地点は自然堤防上に居住域があり、周囲の沖積地に水田が開かれていた。この自然堤防はさらに南側に延びることから集落も延長する可能性が高い。

Ｃ地点

Ｃ地点は平安時代の掘立柱建物２棟、土坑１基、ピット14基、河川跡が検出された。遺物は土師器無台椀、灰釉陶器、鍋、珠洲等が出土している。土器は掘立柱建物周辺から出土していることから、掘立柱建物に伴うものと考えられる。土器は二時期有り９世紀終末と11世紀終末～12世紀代ころのものである。２棟の掘立柱建物がどちらの時期に所属するかは不明である。集落は９世紀終末にピークを迎えるが、一旦廃絶され、再び11世紀終末～12世紀代にピークを迎えている。

Ｃ地点と約50mの距離で近接しているＢ地点では、自然堤防の崖線上に９世紀後半の竪穴建物や井戸が検出されている。Ｂ地点とＣ地点は同一の自然堤防上にあり、遺物の時期も重なることから同一の集落と考えられる。竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落である。



第13図　高畑遺跡Ａ地点遺構配置図　（［寺崎ほか1986］第39図を加筆・修正）

第Ⅴ章　木製品の樹種同定

松葉礼子（パレオ・ラボ）

A　は　じ　め　に

新潟県上越市春日・木田地区にある八反田遺跡・高畑遺跡から出土した木製品の樹種を同定した。同定対象試料の年代は平安時代と中世で、容器や箸などの日常生活用具や柱根などの木製品が中心である。今まで新潟県で行われた樹種同定結果では奈良～平安時代や中世ではスギが多い結果が得られている。一之口遺跡東地区［パリノ・サーヴェイ株式会社1994］や13～15世紀の大武遺跡［松葉2000］、中近世の天王前遺跡、有明的場遺跡、石川遺跡［パリノ・サーヴェイ株式会社1998］の結果ではスギが多く確認されている。一方、中頸城郡柿崎町にある新保遺跡では他の遺跡と比較して室町時代にヒノキがスギよりも多い結果があり［松葉2001］、時期や地域によって利用樹種に違いがある可能性が指摘される。今回これらの遺物を同定することにより、従来得られている結果とどのような違いがあるのかを明らかにすることを目的として樹種を同定した。

B　試 料 と 方 法

同定した試料は合計54点である（第６・７表）。これらの内訳は八反田遺跡が50点、高畑遺跡が４点である。

同定には、木製品から直接片刃剃刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の３方向作成した。これらの切片はガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定はこれらの標本を光学顕微鏡下で観察し、現生標本との比較して行った。主要な分類群を代表する標本については写真図版に示し、同定根拠は後述する。なお、同定に用いられた標本はプレパラート番号（NGT425～478）を付し財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

1）ト　ウ　ヒ　属　*Picea* Pinaceae　写真図版1a～1c:NGT426

軸方向・放射方向両樹脂道を共に持つ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の量は多い。成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管と放射細胞間道からなり、単列のものと紡錘形のものがある。放射組織の上下端には放射仮道管があり、角張った有縁壁孔縁が見られる。放射柔細胞の垂直壁には単穿孔が数珠状を呈しているように見える。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で、１分野に２～４個存在する。

2）ス　　ギ　*Cryptomerica japonica* (L.Fil.) D.Don Taxodiaceae 写真図版2a～2c:NGT438

軸方向・放射方向両細胞間道をもたない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、成長輪界は明瞭。晩材の量が多い。樹脂細胞は早材から晩材にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔組織からなり単列。分野壁孔は大型のスギ型で１分野に２個ある。

報告No.	整理No.	出土位置 遺構	グリッド	層位	地区	時期	分類	器種	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	木取り	樹種同定結果 樹種	試料No.
185	10	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	(15.4)	0.7		柾目	スギ	NGT 446
184	11	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	(13.5)	0.7		柾目	スギ	NGT 447
189	12	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	18.8	0.7		柾目	スギ	NGT 448
196	23	SE 1201	9C20			中世	食膳具	漆器皿	10		1.5	横木	ブナ属	NGT 435
195	24	SE 1046	10C18				食膳具	漆器椀	13.8		3.3	横木	ブナ属	NGT 432
197	26	SK 4					食膳具	漆器皿			0.3		クリ	NGT 437
183	1	SE 330	9C9				食膳具	箸	23.1	0.7		柾目	スギ	NGT 449
182	2	SE 330	9C9				食膳具	箸	20.5	0.7		柾目	スギ	NGT 450
192	3	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	20.8	0.9		柾目	スギ	NGT 439
190	4	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	18.9	0.9		板目	スギ	NGT 441
193	5	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	20.9	0.9		板目	スギ	NGT 440
187	6	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	16.7	0.7		柾目	スギ	NGT 442
191	7	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	20.3	0.6		柾目	スギ	NGT 443
186	8	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	15.8	0.9		柾目	スギ	NGT 444
188	9	SE 924	9C15			中世	食膳具	箸	(16.8)	0.8		柾目	スギ	NGT 445
194	25	SE 504	9C20			中世	食膳具	漆器椀				横木地斜め	ブナ属	NGT 433
223	13	SE 335	9C15			平安	不明	不明	11.1	2.8	2	板目	スギ	NGT 431
210	14	SE 1344	10C18				容器	曲物底板	23.3	(21.8)	0.5	柾目	ヒノキ	NGT 430
205	21-1	SE 1203	10C17			中世	容器	蓋板	16.5	(11.9)	1.4	柾目	トウヒ属	NGT 426
204	21-2	SE 1203	10C17			中世	容器	蓋板	(16.8)		0.8	板目	スギ	NGT 425
217	21-3	SE 1203	10C17			中世	容器	桶側板			19	柾目	スギ	NGT 427
217	21-3	SE 1203	10C17			中世	容器	桶側板			19	柾目	スギ	NGT 428
213	28	SE 1458				中世	容器	曲物側板				板目	ヒノキ	NGT 434
203	35	SE 1019	10C18			中世	容器	筒形曲物	15.1	14.4	9.4	底板：板目	ヒノキ	NGT 451
203	35	SE 1019	10C18			中世	容器	筒形曲物	15.1	14.4	9.4	側板：柾目	ヒノキ	NGT 452
201	15	SE 200	10C12			中世	容器	底板	16.5	(15.7)	1	柾目	ヒノキ	NGT 457
216	17	SK 1220	9C20				容器	底板	16.4	15.6	1.2	柾目	サワラ	NGT 461
211	18	SE 1426	10C13			平安	容器	円形板	(16.2)		0.8	柾目	ヒノキ	NGT 436
212	19	SE 1458	10C12				容器	円形板	(14.5)	(14.4)	0.6	柾目	スギ	NGT 429
215	22	SK 1211	9C20				容器	円形板	19.9	(19.4)	0.7	柾目	スギ	NGT 470
208	27	SE 1246	10C16			中世	容器	曲物底板	19.5	19.3	1.3	柾目	サワラ	NGT 453
208	27	SE 1246	10C16			中世	容器	曲物側板	19.5	19.3	1.3	柾目	ヒノキ	NGT 454
206	27-1	SE 1246	10C16			中世	容器	曲物側板			1.3	柾目	ヒノキ	NGT 455
209	27-2	SE 1246	10C16			中世	容器	曲物底板	20.3	20.2	1.2	柾目	ヒノキ属	NGT 456
219	33	SE 1417	10C13			平安	部材	不明	46.8	5.1		丸木	コナラ属コナラ節	NGT 471
220	44	SE 1417	10C13			平安	部材	不明	128.2	17.4		芯持丸太	コナラ属コナラ節	NGT 476
202	38	SE 323	9C14			中世	容器	曲物柄杓	9.6	10		底板：板目 側板：柾目	スギ	NGT 438
199	37	SE 1	9C19			平安	容器	円形底板		12.1	0.5	柾目	ヒノキ	NGT 458
200	36	SE 1	9C19			平安	容器	曲物底板	(6.5)	19.9		底板：柾目	ヒノキ	NGT 459
200	36	SE 1	9C19			平安	容器	曲物側板	(6.5)	19.9		側板：柾目	ヒノキ	NGT 460
221	39	SK 1211	9C20			不明	紡織具	糸巻	214	15.1		枠木：板目	スギ	NGT 463
221	39	SK 1211	9C20			不明	紡織具	糸巻	214	15.1		横木：柾目	スギ	NGT 464
222	40	SK 1211	9C20				紡織具	糸巻	21.4	14.4		枠木：板目	スギ	NGT 465
222	40	SK 1211	9C20				紡織具	糸巻	21.4	14.4		横木：板目	スギ	NGT 466
181	43	SE 303	9C14		P.R.7東	中世	装身具	蒔絵横櫛	9.7	4.6	0.8		イスノキ	NGT 468
214	16	SK 4				平安	容器	曲物底板	19.9	19.1	1	柾目	サワラ	NGT 467
198	34	SK 4				平安	容器	荒型？	8.4	12.4	(10.3)	芯持ち丸太	クリ	NGT 469
218	20	SE 1226	10C17			中世	容器	指物	(19.2)	(17.7)	1.2	底板	スギ	NGT 462
218	20	SE 1226	10C17			中世	容器	指物	(19.2)	(17.2)	1.2	側板	スギ	NGT 477
218	20	SE 1226	10C17			中世	容器	指物	(19.2)	(17.2)	1.2	側板	スギ	NGT 478

第６表　八反田遺跡出土木製品樹種同定結果

報告No.	整理No.	出土位置 遺構	グリッド	層位	地区	時期	分類	器種	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	木取り	樹種同定結果 樹種	試料No.
18	30				C	平安	底板		15	15	0.8	柾目	ヒノキ	NGT 474
14	41	SB1-P6	5C1		C	平安	建築部材	柱根	32.8	18.6	14.3	芯持ち丸太	クリ	NGT 473
15	42	SB1-P14	5C1		C	平安	建築部材	柱根	32.8	17.4	12.7	芯持ち角材	ハンノキ属ハンノキ節	NGT 472
19	45				C		容器	曲物柄杓				側板:柾目	スギ	NGT 475

第７表　高畑遺跡出土木製品樹種同定結果

3）ヒ　ノ　キ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. Cupressaceae 写真図版3a～3c:NGT434

軸方向・放射方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭。晩材の量は少ない。樹脂細胞が早材と晩材の境に接線状に散在しており、その放射方向壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔組織のみからなり単列である。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で１分野に２個程度ある。

4）サ　ワ　ラ *Chamaecyparis pisifera (Sieb. et Zucc.)* Endl. Cupressaceae 写真図版4a～4c:NGT467

軸方向・放射方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、成長輪界は明瞭。晩材の量は少ない。樹脂細胞が早材と晩材の境に接線状に散在しており、その放射方向壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列である。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で１分野に２個程度ある。

5）ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* Subgen. *Alnus* Butulaceae 写真図版5a～5c:NGT472

小型の道管が単独あるいは放射方向に複合して散在する散孔材。道管の直径は成長輪界付近でわずかに減少する程度であるが、道管の密度は晩材において低くなる。道管は20本前後の横棒からなる階段状穿孔板を持つ。放射組織は単列と集合放射組織があり、いずれも平伏細胞のみから構成されている。道管放射組織間壁孔は小型で密である。

6）ク　　リ *Castanea creneta* Sieb. et Zucc. Fagaceae 写真図版6a～6c:NGT473

成長輪の始めに大型の丸い道管が１～２列並ぶ環孔材。晩材部では徐々に径を減じた薄壁の角張った道管が火炎状に配列する。道管は単穿孔板を持つ。木部柔組織は晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列で平伏細胞のみからなる。道管放射組織間壁孔は対列状である。

7）ブ　ナ　属 *Fagas* Fagaceae 写真図版7a～7c:NGT435

小型の丸い道管が密に均一に散在する散孔材。道管の直径は成長輪界付近で減少する。道管は単穿孔板と横棒が10本以下の階段状穿孔板を持つ。放射組織はすべて平伏細胞のみから構成されているが１～10列まで幅がある。

8）コナラ属コナラ節 *Quercus Sect.* Prinus Fagaceae 写真図版8a～8c:NGT476

成長輪の始めに大型で丸い道管が１列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が火炎状に散在する。放射組織はすべて平伏細胞であるが、大きさは明らかに２階級あり単列と10列前後に達する大型のものから構成される。道管放射組織間壁孔は楕円形の対列状～柵状。軸方向柔組織は晩材部で３細胞幅以下の帯状に分布する。

9）イ　ス　ノ　キ *Distylium racemosum Sieb. et Zucc. Hamamelidaceae* 写真図版9a～9c:NGT468

小型で丸い道管がまばらに均一に散在する散孔材。成長輪界は不明瞭。道管の直径もほとんど変化しない。軸方向柔組織は短接線状で、しばしば柔組織中に結晶を持つことがある。道管の穿孔は横棒が10

本以下の階段状穿孔板をもつ。放射組織は２列で平伏細胞と２～５細胞高程度の方形、直立細胞からなる縁辺部から構成される。

C 結　　果

同定した結果針葉樹４樹種と広葉樹５樹種の計９樹種が確認された。八反田遺跡で最も多く確認された樹種はスギで、50点中26点を占めている。次に多いのはヒノキ11点で、針葉樹が大部分を占めていることが分かる。ヒノキは曲物を中心に確認されており、平安時代のヒノキ４点も曲物である。広葉樹はいずれも櫛、漆器、不明などの製品で、広葉樹が積極的に選択される製品に確認されている。

高畑遺跡では、底板にヒノキ、曲物柄杓にスギ、柱根にハンノキ属ハンノキ節とクリが確認されている。最も多く確認された八反田遺跡の中世を製品ごとに結果を検討する（第９表）。曲物ではヒノキが多いが、桶、指物、箸、蓋などにはスギが利用されており、結果的にはスギが最も多い樹種になっている。漆器にはブナ属、横櫛にはイスノキが利用されていた。イスノキは本州では伊豆以南の太平洋沿岸の暖帯に自生している常緑高木で新潟県には自生していない。イスノキは材質が緻密であるため櫛として適しており、分布圏外から頻繁に出土する樹種である。

樹種	平安	中世	時期不明	総計
トウヒ属		1		1
スギ	1	17	8	26
ヒノキ	4	6	1	11
サワラ	1	1	1	3
ヒノキ属		1		1
クリ	1		1	2
ブナ属		2	1	3
コナラ属コナラ節	2			2
イスノキ		1		1
総計	9	29	12	50

第８表　八反田遺跡時期別樹種同定結果集計

樹種	曲物	桶側板	指物	箸	蓋	漆器椀･皿	蒔絵横櫛	総計
トウヒ属					1			1
スギ	1	2	3	10	1			17
ヒノキ	6							6
サワラ	1							1
ヒノキ属	1							1
ブナ属						2		2
イスノキ							1	1
総計	9	2	3	10	2	2	1	29

第９表　八反田遺跡中世遺物別樹種同定集計結果

D 考　　察

これらの結果から平安時代以降スギやヒノキなどの針葉樹が多く利用されていることがわかった。ヒノキが比較的多く確認されているため新保遺跡の結果に近いと考えられるが、八反田遺跡でのヒノキは曲物だけに多い特徴があり、一概に新保遺跡の結果と比較できない。イスノキ以外の広葉樹は漆器類のブナ属などが確認されているが、他遺跡でも確認できる結果である。同定対象試料が曲物などの容器類や箸など全国的に針葉樹が利用される製品が多いことも結果に影響していると考えられる。

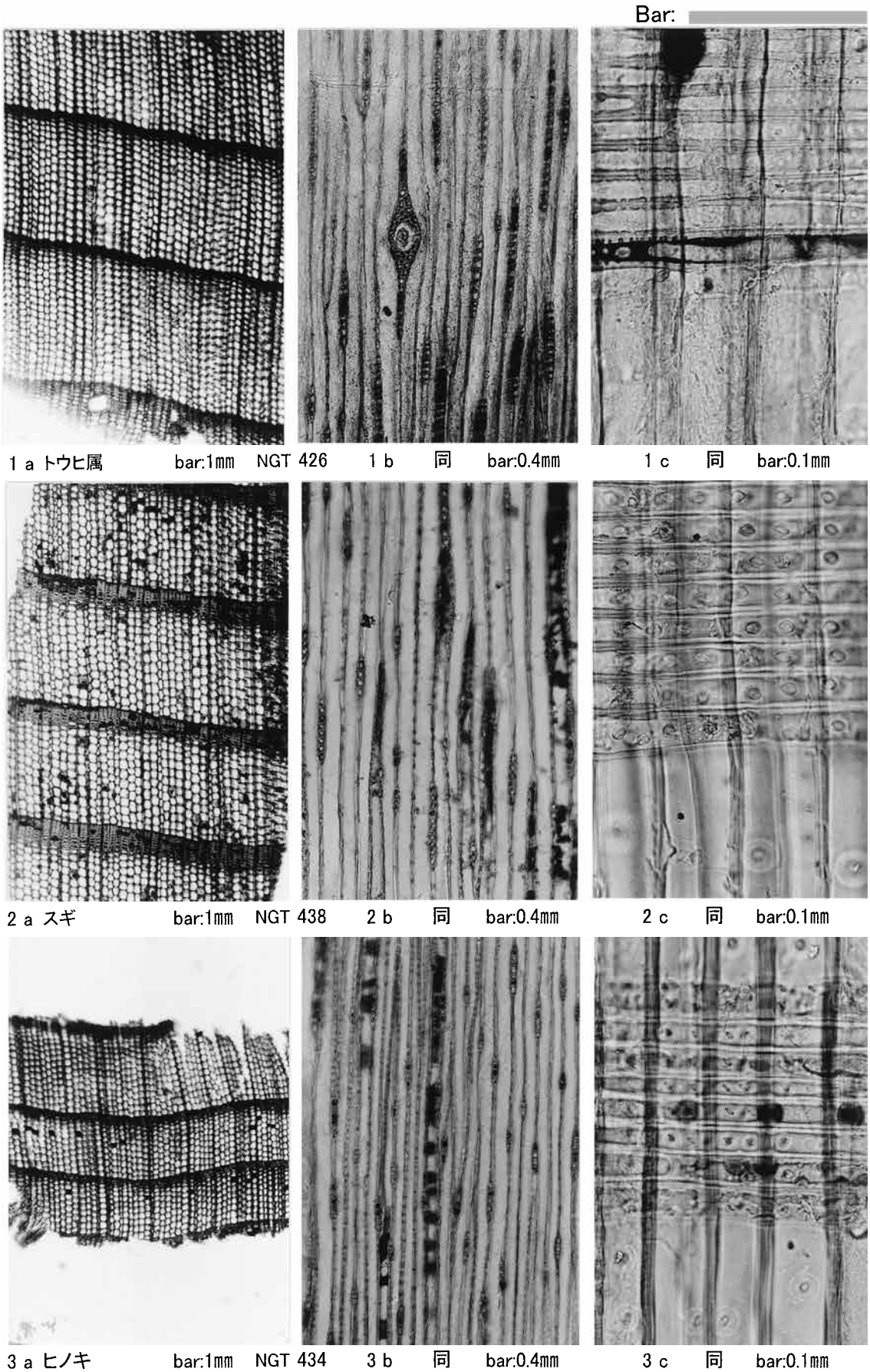
〈引用文献〉

松葉礼子 2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財報告書第97集　大武遺跡Ⅰ（中世編）』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団42-47

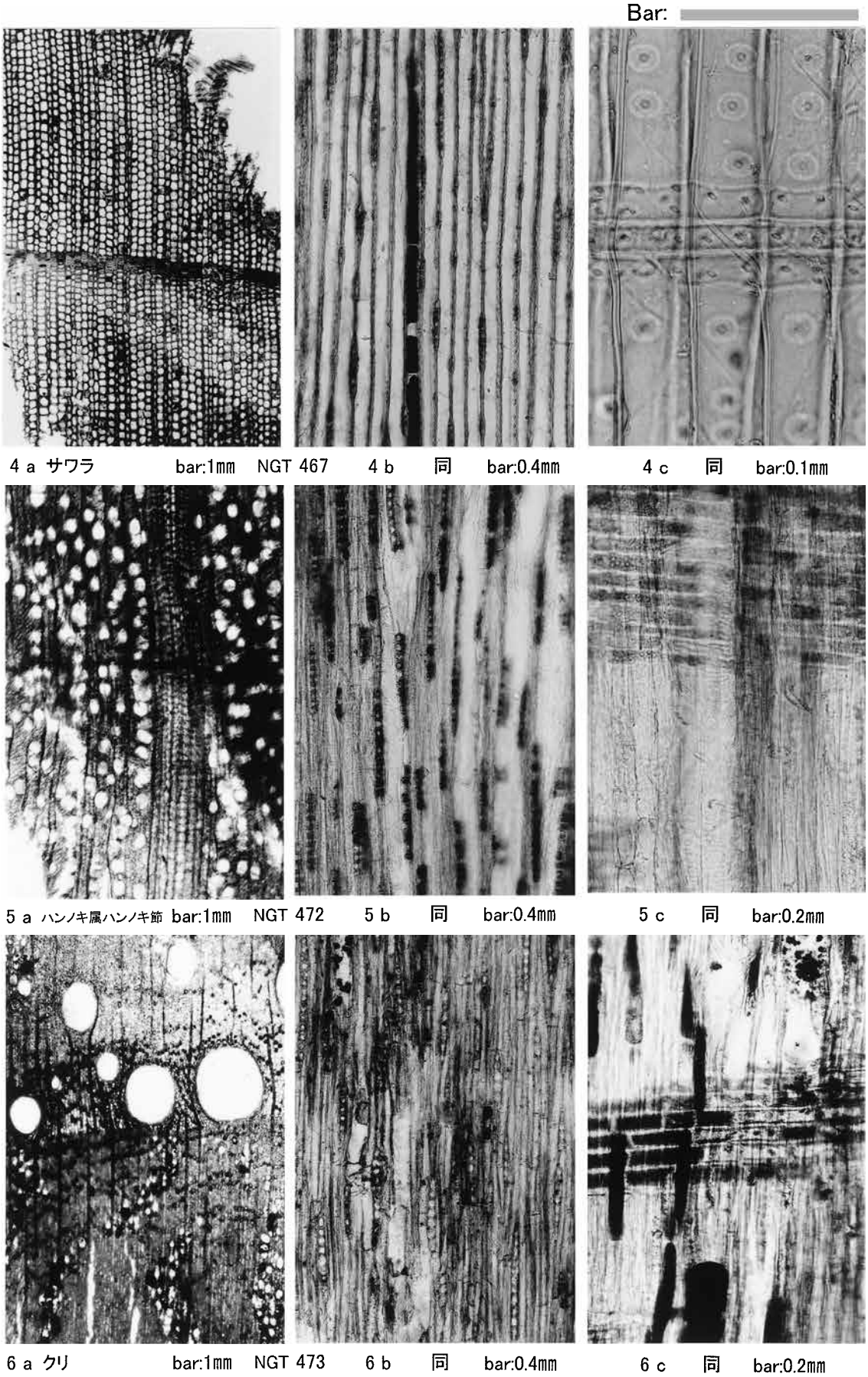
松葉礼子 2001 「新保遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財報告書第103集　新保遺跡』新潟県教育委員会・（財)新潟県埋蔵文化財調査事業団78-82

パリノ・ザーヴェイ株式会社　1994　「一之口遺跡東地区から出土した木質遺物および種実遺体の同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区（本文編)』新潟県教育委員会・（財)新潟県埋蔵文化財調査事業団147-167

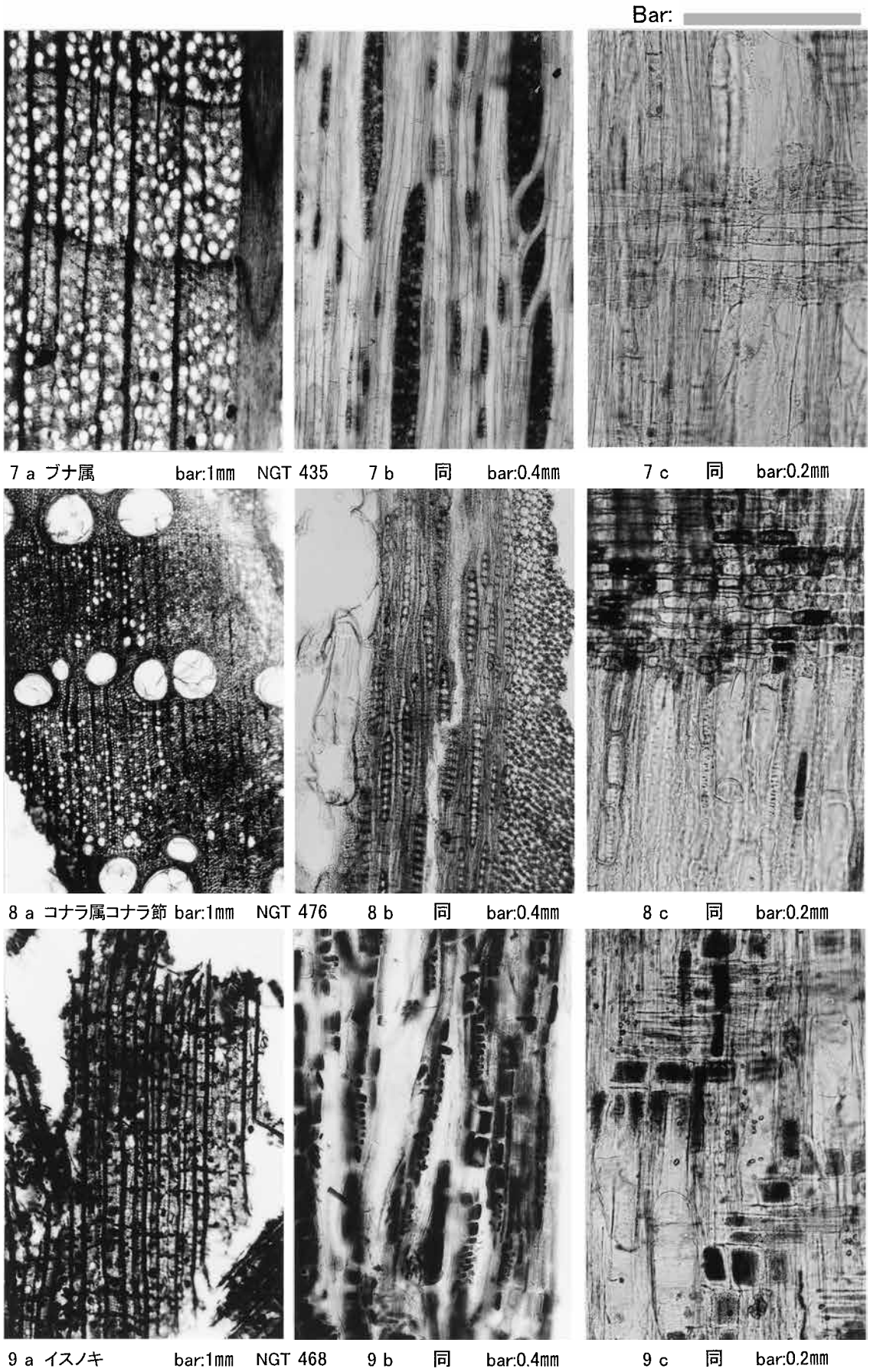
パリノ・サーヴェイ株式会社　1998　「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第89集　天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団46-57.



第14図　八反田遺跡・高畑遺跡　出土木材組織顕微鏡写真1



第15図　八反田遺跡・高畑遺跡　出土木材組織顕微鏡写真２



第16図　八反田遺跡・高畑遺跡　出土木材組織顕微鏡写真３

要　　約

八反田遺跡

1 八反田遺跡は新潟県南西部の上越市大字寺分字寺田1,521番地ほかに所在し、春日・木田地区では唯一安定した基盤層である平山段丘上及び周辺の沖積地に立地する。

2 遺跡の標高は12～14mを測る。

3 発掘調査は北陸自動車道の建設に伴い、昭和59・60・62・63年の４年間にわたり実施し、調査面積は15,106㎡である。

4 調査の結果、縄文時代前期、平安時代、中世の集落及び近世の加賀街道の一部が検出された。

5 中世は平山段丘の頂部平坦面を中心に掘立柱建物２棟、井戸、土坑、ピット、溝が検出されている。掘立柱建物を区画するように掘削された溝があり、屋敷地を形成していた可能性が窺える。遺物は土器では珠洲が大半を占め、中世土師器、瀬戸・美濃、青磁、白磁、染付等が一定量出土している。他に蒔絵の横櫛、箸、漆器、曲物、糸巻等の木製品、砥石等の石製品が出土している。

6 平安時代では、中世と同じく平山段丘の頂部平坦面を中心に掘立柱建物３棟、井戸、土坑、ピット、溝、杭列が検出されている。また、沖積層で掘立柱建物が２棟検出されている。水田も検出されているが、平安時代～中世にかけてのものである。遺物は須恵器、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。

7 縄文時代では、平山段丘の頂部平坦面に竪穴建物が５棟検出された。前期の諸磯ａ・ｂ式や関山Ⅰ式土器に並行する土器が出土していることから、前期の集落と考えられる。石器は石鏃、石匙、箆状石器、石錘などが少量出土している。

8 近世では、江戸時代に加賀藩が参勤交代に使用した加賀街道の路面が３面検出され、側溝から寛永通寶のサシが出土した。

9 弥生時代末～古墳時代の土器が少量出土しているが、県内で出土例の少ない東海地方から搬入された可能性のあるＳ字状口縁台付甕が出土している。

10 フイゴの羽口、鉄滓は平安時代の遺構からも散発的に出土しているが、主に中世の遺構からまとまって出土していることから、中世を中心とするものと考えられる。

高畑遺跡（Ｃ地点・二期線）

1 高畑遺跡は上越市大字岩木字高畑ほかに所在し、沖積平野（高田面）の正善寺川によって形成された自然堤防上及び周囲の沖積地に立地する。

2 標高は16mを測る。

3 発掘調査は北陸自動車道の建設に伴い、Ｃ地点を昭和59年度、二期線を昭和62年度の２年間にわたり実施し、調査面積は1,507㎡である。他の調査地点はすでに『新潟県埋蔵文化財調査報告書第42集高畑遺跡』で報告されている。

4 Ｃ地点は平安時代の掘立柱建物２棟、土坑、河川跡が検出され、遺物は平安時代の土師器、灰釉陶器、中世の珠洲等が出土している。河川跡から曲物も出土している。

5 二期線は井戸１基、土坑１基、溝２条と多数のピットが検出されている。時期は平安時代～中世にかけてのものである。砥石、下駄、五輪塔が出土している。

引用文献

赤塚次郎　1990　『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集　廻間遺跡』（財)愛知県埋蔵文化財センター

岡本郁栄ほか 1979　『新潟県上越市岩木地区遺跡群発掘調査報告書』　上越市教育委員会

岡本郁栄　1999　「序章第１節４海進・海退と平野」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院

皆森禮子　2001　「街道筋に残る加賀藩の面影」『ほっと　ほくりく』April．2001　No.1　（社)北陸建設弘済会

加藤邦夫　1982　「縄文尖底土器」『縄文文化の研究』雄山閣出版

金子拓男　1967　「新潟県柏崎市剣野Ｅ地点遺跡出土遺物について」『信濃』第19巻２号　信濃史学会

亀井　功ほか 1991　『新潟県歴史の道調査報告書第一集　加賀街道・松本街道』　新潟県教育委員会

川村浩司　2000　「第Ⅲ章１節Ｄ古墳時代前期～中期の土器」『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ』遺物編　新潟県中郷村教育委員会

北村　亮　2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第105集　木田遺跡』　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

國島　聡・梅川勝史　2000　「第Ⅱ章２節Ｂ　後期の土器」『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ』遺物編　新潟県中郷村教育委員会

小池義人ほか 2000　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集　裏山遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小島幸雄　中村恵美子　1984　『新潟県上越市本長者原廃寺確認調査概要』　上越市教育委員会

小島幸雄　1989　『新潟県上越市四ッ屋遺跡発掘調査報告書』　上越市教育委員会

小島幸雄　1991　『新潟県上越市中島廻り遺跡発掘調査報告書』　上越市教育委員会

駒井和愛・吉田章一郎　1962　『斐太』慶友社

齊藤孝正　1994　「東海地方の施釉陶器生産ー猿投窯を中心にー」『古代の土器研究会第３回シンポジウム　古代の土器研究ー律令的土器様式の西・東３　施釉陶器ー』　古代の土器研究会

坂井秀弥ほか 1983　『高塩Ｂ遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会

坂井秀弥　1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』　新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか 1986　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集　一之口遺跡西地区』　新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか 1999　「第４章第１節　総論」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院

笹澤正史・水澤幸一　2001　「伝至徳寺跡の遺物様相～中世前半として～」『上越市史研究』第６号　上越市

品田高志　1999　「第５章３節１　中世土師器」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院

上越市教育委員会　1993　「Ⅳ．子安遺跡」『新潟県上越市内遺跡確認調査概要』

鈴木俊成・春日真実　1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区』　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木(土橋)由里子ほか　1996　「第Ⅲ章　横引遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　横引遺跡・籠峰遺跡・柳平遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木(土橋)由里子　1999　「第Ⅴ章　上中島遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第94集　西福田新田遺跡・郷清水遺跡・上中島遺跡・上滝ノ沢遺跡・中の原Ｄ遺跡・窪畑Ｂ遺跡』新潟県教育委員会・(財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

寺崎裕助・鈴木俊成ほか　1985『新潟県埋蔵文化財調査報告書第38　池田遺跡』　新潟県教育委員会

寺崎裕助ほか 1986　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第42集　高畑遺跡』　新潟県教育委員会

寺崎裕助　1991　「縄文時代前期後半の格子目文土器について」『新潟考古学談話会会報』第８号　新潟考古学談話会

寺崎裕助　1997　「吉川町古町Ｂ遺跡について」『新潟考古学談話会会報』第17号　新潟考古学談話会

戸根与八郎ほか　1985　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第32　宮野遺跡』　新潟県教育委員会

中村孝三郎・小林達雄・金子拓男　1963　「新潟県中魚沼郡中里村泉龍寺遺跡調査報告書」『上代文化』第33輯　國學院大學考古学会

秦　繁治・中村美恵子　1988　『新潟県上越市四ッ屋遺跡発掘調査報告書』 四ッ屋遺跡調査団
藤澤良祐　1997　「中世瀬戸窯の動態」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第５輯　(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
藤巻正信・横田　浩　1995　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第65集　鉄砲町遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
三ッ井朋子　1997　「炭山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成８年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
三ッ井朋子ほか　1997　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第85集　大洞原Ｃ遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
武藤康弘　1978　「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究」『考古学雑誌』第74巻第２号　日本考古学会
八幡一郎　1958　『刈羽貝塚』 新潟県教育委員会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
渡辺ますみほか　1994　『緒立Ｃ遺跡』 黒埼町教育委員会（2001年新潟市と合併）

八反田遺跡　土器・陶磁器・土製品観察表（1）

残存率は口縁部を対象とする。

報告No.	整理No.	取上げNo.	出土位置 遺構	出土位置 グリッド	出土位置 層位	出土位置 地区	種別	器種	分類	時期	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調（内／外）	焼成	残存率 x/16	手法	備考
1	69	508・606	SE206（東） P327（東）	10C12 9C14		P.R.7東	珠洲	片口鉢		V期	40.8	13.8	14.5	緑灰	並	1	口縁端部櫛目波状文。1単位7条の卸目。	底部内外面磨耗。海綿骨針。
2	170	511・554	SE303（東） SK303（東）	9C14		P.R.7東	珠洲	甕		中世		18.4		灰	並	0	外面平行打圧痕、内面円形押圧痕。底部砂目。	海綿骨針多量。
3	66	493・546	SD966 SE924 335（東）	9C15		P.R.7東	珠洲	片口鉢		III期	23.6	10.6	10.4	灰	並	8	静止糸切り。卸目未確認。	底部内面磨耗。
4	100	520	SE504（東）	10C11		P.R.7東	白磁	皿		15C		4.0		灰白	不良	0		高台磨耗。
5	142	431・520	SE504（東） SD503（東）	10C11		P.R.7東	白磁	皿		15C		4.2		灰白	良	0		高台内墨書「十三」。硯に転用。
6	73	431・520 651	SD503（東） P569（東） SE504（東）	10C11 10C6		P.R.7東	瀬戸・美濃	瓶子		15C前？		11.1		にぶい黄橙／暗褐	良	0	鉄釉	底部内面鉄釉付着。
7	71	520	SE504（東）	10C11		P.R.7東	珠洲	片口鉢		V期				緑灰	並	1	口縁端部櫛目波状文。1単位9条の卸目。	口縁部磨耗。海綿骨針。
8	70	520	SE504（東）	10C11		P.R.7東	珠洲	片口鉢		V期				緑灰	並	1	口縁端部櫛目波状文。1単位8条の卸目。	
9	19	1644	SE1316	10C13		八反田	中世土師器	皿	A2b	12C後	8.6	5.4	1.7	にぶい黄橙	良	14	手づくね成形。	胎土精良。京都系。
10	97	1646	SE1414	10C12		八反田	青磁	稜花皿		15C末	11.2	5.2	2.8	黄褐	良	2	口縁内面線刻文。蛇の目高台。	
11	29	1847	SE1465	10C13		八反田	中世土師器	皿	B2	12C末		7.4		にぶい橙	並	0	ロクロ成形。底部板状圧痕。	砂粒。
12	34		SK1（AB）			AB	中世土師器	皿	B3b	15C	13.9	9.2	3.2	浅黄橙	良	3	ロクロ成形。回転糸切り。	
13	24	559	SK968（東）	9C15		P.R.7東	中世土師器	皿	B3a	15C	8.0	5.6	1.9	黒褐	良	4	ロクロ成形。回転糸切り。	胎土精良。
14	25	1051	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	中世土師器	皿	B2	12C末	8.0	6.0	1.9	浅黄橙	並	13	ロクロ成形。回転糸切り。底部板状圧痕。	砂粒。
15	27	1055	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	中世土師器	皿	B2	12C末	8.6	5.8	2.1	淡黄	並	15	ロクロ成形。回転糸切り。底部板状圧痕。	灯明皿タール、スス。砂粒。
16	6	1057	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	中世土師器	皿	B3a	15C	10.0	7.2	2.8	橙	並	2	ロクロ成形。回転糸切り。	関東系。
17	9	1055	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	中世土師器	皿	B2	12C末	12.5	7.5	3.3	浅黄橙	並	13	ロクロ成形。回転糸切り。底部板状圧痕。	砂粒。
18	16	1055	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	中世土師器	皿	B2	12C末	13.0	8.8	3.2	浅黄橙	並	12	ロクロ成形。回転糸切り。底部板状圧痕。	砂粒。
19	26	1057	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	中世土師器	皿	B2	12C末	13.6	10.0	2.6	明黄褐	並	2	ロクロ成形。回転糸切り。底部板状圧痕。	
20	72	560・561	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	珠洲	片口鉢		III期	30.8	12.4	12.6	緑灰	並	8	静止糸切り。1単位18条の卸目10本。	底部内面磨耗。
21	3	560	SK1211（東）	9C15・20		P.R.7東	珠洲	甕		中世		22.0		灰	並	0	外面平行打圧痕、内面円形押圧痕。底部砂目。	海綿骨針。
22	39	1723	SK1336	10C18		八反田	中世土師器	皿	A1	12C中～13C前	8.3	7.3	1.8	にぶい黄橙	良	7	手づくね成形。	砂粒。京都系。
23	30	1723	SK1336	10C18		八反田	中世土師器	皿	B	中世	10.8	7.4	2.9	橙	良	6	ロクロ成形。回転糸切り。	砂粒。
24	146	1723	SK1336	10C18		八反田	白磁	皿		中世	11.1			灰白	良	3		外面下半部スス。
25	95	1723	SK1336	10C18		八反田	灰釉陶器	瓶		10C後～末				灰白／オリーブ灰	良	0	頸内面釉が掛かる。	
26	85	1723	SK1336	10C18		八反田	須恵器	横瓶		9C後～10C初				灰	不良	0	外面平行線文タタキ。内面指頭圧痕。	外面磨耗。
27	101	1807	SK1338	10C18		八反田	白磁	碗		中世	(14.6)			灰白	良	1	口禿	
28	32	1850	SK1460	10C13		八反田	中世土師器	皿	B3a	15C	9.6	5.8	2.8	橙	並	1	ロクロ成形。回転糸切り。	
29	123	86	P568（東）	10C11		P.R.7東	中世土師器	皿	B1b	12C後	9.3	5.5	2.0	にぶい黄橙	並	5	ロクロ成形。回転糸切り。	
30	148	651	P569（東）	10C6		P.R.7東	瀬戸・美濃	縁釉小皿		15C中	10.6	5.5	3.3	淡黄	良	2	回転糸切り。	
31	58	1107	P941（東）	9C15		P.R.7東	中世土師器	有台皿	B1a	12C前？		7.8		にぶい橙/にぶい褐色	良	0	ロクロ成形。	胎土精良。
32	12	1104	P968（東）	9C15		P.R.7東	中世土師器	皿	B3a	15C	7.4	5.8	1.8	にぶい黄橙	良	8	ロクロ成形。回転糸切り。	灯明皿タール。
33	35	1451	P1012	10C11		八反田	中世土師器	皿	A2a	15C末	9.8	3.0	1.8	浅黄橙	並	13	手づくね成形。	京都系。灯明皿タール。胎土精良。
34	33	1459	P1014	10C11		八反田	中世土師器	皿	B3a	15C	6.8	4.2	2.1	にぶい黄橙	良	2	ロクロ成形。回転糸切り。	灯明皿タール。
35	82	411	SD333（東）	9C14		P.R.7東	珠洲	壺R種		III期				灰	良	0	櫛目波状文。	胎土精良。
36	98	998	SD502（東）	10C11		P.R.7東	瀬戸・美濃	天目碗		15C	11.6	5.6	6.5	黒褐	並	1		
37	76	429	SD502（東）	10C11		P.R.7東	珠洲	甕		III期				青灰	並	1	外面平行打圧痕。内面円形押圧痕。	
38	88	430・1605	SD502（東）・ 1254	10C11		八反田・ P.R.7東	灰釉陶器	壺		10C後～末		14.5		灰黄／オリーブ灰	良		ロクロケズり。刷毛掛け。	
39	147	431	SD503（東）	10C6・11		P.R.7東	瀬戸・美濃	縁釉小皿		15C後半	9.2	5.2	2.0	浅黄	良	6	回転糸切り。灰釉。	内面底タール。
40	17	993	SD766（東）	9C15		P.R.7東	中世土師器	皿	B3a	15C	7.6	5.2	1.9	にぶい黄橙	良	3	ロクロ成形。回転糸切り。	灯明皿タール。胎土精良。
41	56	1007	SD905（東）	9C15		P.R.7東	中世土師器	皿	A2b	12C後	13.0	10.7	2.3	橙	並	2	手づくね成形。	胎土精良。
42	67	448	SD905（東）	9C15		P.R.7東	珠洲	片口鉢		V～VI期		13.6		灰白／灰	並	0	底部板目？又は静止糸切り。1単位12条の卸目。	底部内面磨耗。
43	54	449	SD905（東）	9C15		P.R.7東	須恵器	無台坏	A	9C後～10C初		5.4		灰白	良	0	回転糸切り。	底部内面磨耗。頸城産か。

八反田遺跡　土器・陶磁器・土製品観察表（2）

残存率は口縁部を対象とする。

報告No.	整理No.	取上げNo.	出土位置 遺構	出土位置 グリッド	出土位置 層位	出土位置 地区	種別	器種	分類	時期	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	色調（内／外）	焼成	残存率 x/16	手法	備考
44	77	488	SD966（東）	9C15		P.R.7東	珠洲	壺T種		V期	21.2			灰	並	1	外面平行打圧痕。内面円形押圧痕。	
45	81	487	SD966（東）	9C15		P.R.7東	珠洲	壺R種		III期				灰	並	0	外面体部櫛目波状文２条	
46	140-2	822・1596	SD1078	10C13		八反田	瀬戸・美濃	卸皿		14C前		7.0		にぶい黄橙	良	0	灰釉。回転糸切り。	
47	141	1386	SD1081	10C18・19		八反田	青磁	小型盤		中世				オリーブ灰	良	0	簡略化された蓮弁文。	
48	140-1	1386	SD1081	10C13		八反田	瀬戸・美濃	卸皿		14C前	13.2			にぶい黄橙	良	6	灰釉。	
49	75	1391	SD1081	10C19		八反田	珠洲	甕		IV期				青灰	良	1	外面平行打圧痕。内面円形押圧痕。	
50	144	1343	SD1204	10C17		八反田	瀬戸・美濃	茶入れ		中世		3.6		暗褐色／灰黄褐	良	0	ヘラケズリ。回転糸切り。内面鉄釉。	
51	143	1370	SD1236	10C16		八反田	白磁	皿		15C	9.5	5.0	2.1	灰白	並	2	畳付以外全体に釉。削り輪高台、４ヶ所の抉り。	
52	22	1606	SD1254	10C11		八反田	中世土師器	皿	B3a	15C	7.6	5.5	2.0	橙	良	13	ロクロ成形。回転糸切り。	関東系。
53	28	1606	SD1254	10C11		八反田	中世土師器	皿	B3a	15C	9.4	6.8	2.4	浅黄橙	並	9	ロクロ成形。回転糸切り。	灯明皿タール。
54	145	1308	SD1303	10C13		八反田	青磁	皿		中世	11.2			オリーブ黄	良	1		近世遺構。
55	136	275		7C15	IVa層	P.R.7西	青磁	碗		16C初	13.4			オリーブ灰	良	2		
56	137	311		8C6	IVa層	P.R.7西	青磁	碗		14C初	14.8			オリーブ灰	良	2	鎬蓮弁文。	龍泉窯系。
57	150	48				C.B.6	染付	碗		中世				灰白	良	0		
58	138	284		7C9	IVb層	P.R.7西	瀬戸・美濃	香炉		14C～15C		7.6		黒／灰白	良	0	回転ヘラ切り。三足の貼付け高台。	内面スス。底部墨書。胎土精良。
59	99	883		9C15		P.R.7東	瀬戸・美濃	天目碗		15C	12.0			黒褐	並	1		
60	112	223		7C4		P.R.7西	中世土師器	皿	A2a	16C	8.6	4.1	2.0	橙	良	6	手づくね成形。	京都系。胎土精良。
61	122	160		9C6		P.R.7	中世土師器	皿	A2a	16C	9.5	4.0	2.2	橙	良	15	手づくね成形。	内面指圧痕。京都系。胎土精良。
62	41	1293		10C8		八反田	中世土師器	皿	B3a	15C	10.0	5.2	3.0	橙	並	3	ロクロ成形。回転糸切り。	関東系？砂粒。
63	115	158		9C16	IV層	P.R.7	中世土師器	皿	A2a	16C	12.2	5.6	2.4	橙	良	13	手づくね成形。	京都系。胎土精良。
64	48	1243		10C17		八反田	中世土師器	皿	B2	12C末	12.4	8.8	3.4	浅黄橙	並	2	ロクロ成形。回転糸切り。板状圧痕。	砂粒。
65	68	929		10C11		P.R.7東	珠洲	片口鉢		V期	37.8			緑灰	並	1	口縁端部櫛目波状文。卸目未確認。	
66	38		SB1-SK2	10C6		AB	土師器	有台皿		11C前半		7.3		橙	並	0		
67	51	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	BIII	11C後～末	10.8	4.7	3.4	橙	並	3	回転糸切り。	
68	8	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	CIII	11C後～末	11.0	6.2	3.2	橙	並	7	回転糸切り。	
69	23	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	CIII	11C後～末	11.3	5.0	3.0	にぶい黄橙	並	1	回転糸切り。	
70	1	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	BIII	11C後～末	11.3	5.5	3.5	橙	並	14	回転糸切り。	
71	15	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	BIII	11C後～末	11.3	6.0	3.5	にぶい黄橙	並	4	回転糸切り。	
72	40	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	CIII	11C後～末	11.6	6.0	3.3	橙	並	9	回転糸切り。	
73	21	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	CIII	11C後～末	11.6	5.4	3.0	にぶい黄橙	並	6	回転糸切り。	
74	14	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	BIII	11C後～末	11.7	5.9	3.6	橙	並	8	回転糸切り。	
75	47	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	BII	11C後～末	12.6	5.9	3.7	橙	並	2	回転糸切り。	
76	10	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	DII	11C後～末	12.7	7.6	2.9	にぶい橙	並	3	回転糸切り。	
77	18	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	CII	11C後～末	13.4	7.2	3.7	にぶい橙	並	3	回転糸切り。	
78	44	1	SE1（水東）	10C23		水路東	土師器	無台椀	BIII	11C後～末	14.2	8.0	4.2	橙	並	3	回転糸切り。	
79	53	1739	SE1309	10C12		八反田	須恵器	無台坏	B	9C後～10C初	12.8	8.0	3.3	灰	良	3	ヘラ切り	底部内面磨耗。小泊。
80	63	1802	SE1458	10C12		八反田	須恵器	壺		9C後～10C初	14.0			灰白	良	3		
81	80	1802	SE1458	10C12		八反田	須恵器	甕		9C後～10C初	26.0			灰オリーブ	良	1	外面平行線文タタキ。内面同心円文当て具痕。	自然釉。
82	20	8	SK3（水東）			水路東	土師器	無台椀	DIII	11C後～末	11.0	6.0	2.6	橙／にぶい黄橙	良	1	回転糸切り。	底部外面スス。
83	4	8	SK3（水東）			水路東	土師器	無台椀	CIII	11C後～末	11.3	5.8	2.9	明赤褐	良	10	回転糸切り。	
84	7	8	SK3（水東）			水路東	土師器	無台椀	CIII	10C末	12.0	6.0	3.4	橙	良	5	回転糸切り。	
85	93	9	SK3（水東）			水路東	灰釉陶器	碗		10C後～末		8.0		灰オリーブ	並	0	内面刷毛掛け。	内外面漆。
86	96	15	SK6（水東）			水路東	緑釉陶器	碗		9C末		4.9		オリーブ黄	不良	0	回転糸切り。	
87	106	244	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	無台椀	BIII	平安時代	11.4	4.8	3.6	浅黄橙	並	1	回転糸切り。	
88	107	234・247	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	無台椀	BIII	平安時代	11.4	5.0	3.9	にぶい橙	良	1	回転糸切り。	

八反田遺跡　土器・陶磁器・土製品観察表（3）

残存率は口縁部を対象とする。

報告No.	整理No.	取上げNo.	出土位置 遺構	グリッド	層位	地区	種別	器種	分類	時期	法量（cm） 口径	底径	器高	色調（内／外）	焼成	残存率 x/16	手法	備考
89	104	241	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	無台椀	BIII	平安時代	12.0	5.4	4.0	にぶい黄橙	良	3	底部切り離し不明。	
90	105	238・247	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	黒色土器無台椀	BII	平安時代	12.6	5.2	4.2	黒／にぶい黄橙	良	3	内面研磨。回転糸切り。	
91	103	243	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	黒色土器無台椀	AI	平安時代	14.2	6.3	4.9	にぶい黄橙／黒褐	良	11	回転糸切り。	内外面スス。
92	102	236	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	黒色土器無台椀	AI	9C後半	18.5	7.0	8.1	黒／灰黄	良	6	回転糸切り。内面磨き。	
93	108	232・246	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	小甕		平安時代	12.6			にぶい褐	並	2	内面カキメ。	内外面スス。
94	109	245	SK807（西）	8C8		P.R.7西	土師器	鍋		平安時代	37.0			橙	良	2		
95	45	1425	SK1212	10C17		八反田	土師器	無台椀	DIII	11C前半	11.0	6.0	2.7	橙	不良	1	ロクロ成形。回転糸切り。	外面剥落顕著。砂粒。
96	62	703	SX969（東）	9C15		P.R.7東	須恵器	壺・瓶類		9C後～10C初				浅黄	並	0	突帯のみ	
97	113	72	P12	8C5		P.R.7	土師器	無台椀	BI	10C後	12.4	5.2	3.8	橙	良	11		
98	114	72	P12	8C5		P.R.7	土師器	黒色土器無台椀	BII	9C後～10C前	18.3	7.0	6.2	褐	良	12	内外面丁寧なナデ。回転糸切り。	砂粒。
99	119	72・119	P12	8C5	IV層	P.R.7	土師器	長甕		9C後～10C前	21.6			にぶい橙	良	3		
100	125	215	P21（西）	7C4		P.R.7西	須恵器	無台坏	B	9C後～10C前	11.7			青灰	良	5		重ね焼き痕。自然釉。小泊。
101	50	1169	P217（東）	10C12		P.R.7東	土師器	長甕		9C後～10C前	25.6			褐色	並	4		剥落顕著。
102	175	602	P305（東）	9C14		P.R.7東	灰釉陶器	碗		10C後～末				灰白	良	1	刷毛掛け？	
103	5	621	P521（東）	10C11		P.R.7東	土師器	無台椀	CIII	平安時代	10.2	4.8	3.0	にぶい橙	良	6	回転糸切り。	内外スス。
104	11	621	P521（東）	10C11		P.R.7東	土師器	無台椀	CIII	平安時代	10.4	4.8	2.9	橙	良	11	回転糸切り。	
105	43	621	P521（東）	10C11		P.R.7東	土師器	無台椀	CIII	平安時代	10.7	5.4	3.1	橙	並	7	回転糸切り。	
106	57	621	P521（東）	10C11		P.R.7東	土師器	長甕		9C後～10C初	(24.5)			灰褐	良	1	カキメ。	
107	91	631	P538（東）	10C11		P.R.7東	灰釉陶器	皿		12C前		8.6		黄褐／灰白	良	0	高台に籾痕。外面に灰釉残る。	底部内面磨耗。高台内調整粗雑。
108	2	1088	P541（東）	10C11		P.R.7東	土師器	無台椀	BIII	11C前半	11.2	4.5	3.8	橙	並	9	ロクロ成形。回転糸切り。	
109	78	671	P943（東）	9C15		P.R.7東	須恵器	甕		9C後～10C初	44.0			灰オリーブ／暗オリーブ	良	1		自然釉。
110	13	688・689	P975（東）	9C15		P.R.7東	土師器	無台椀	CII	10C末	13.0	6.0	3.6	にぶい黄橙	良	2	回転糸切り。	
111	59	1103	P977（東）	9C15		P.R.7東	土師器	長甕		平安時代	19.6			にぶい橙	並	2		
112	36	1541	P1083	10C18		八反田	灰釉陶器	皿		10C後～末		8.4		浅黄	良	0		
113	116	196	SD22	9C6・11		P.R.7	土師器	無台椀	BII	平安時代	12.4	5.5	3.9	橙	良	10		
114	117	196	SD22	9C6・11		P.R.7	土師器	無台椀	BI	平安時代	14.4	6.8	4.4	にぶい黄橙	良	4		
115	130	97・98・172	SD117	8C4	IV層	P.R.7	須恵器	短頸壺		9C後～10C初	(9.2)			灰白	良	1	カキメ。	自然釉。口縁端部磨耗。
116	129	91・97・172	SD117	8C4	IV層	P.R.7	須恵器	甕		9C後～10C初	23.0			灰	良	2	外面平行線文タタキ、内面同心円文当具痕。	
117	64	418	SD351（東）	9C14		P.R.7東	須恵器	壺		9C後～10C初	19.6			灰	並	2		
118	52	1229		10C12	VIB層	八反田	土師器	無台椀	BII	平安時代	12.6	5.6	3.9	にぶい橙	並	1	回転糸切り。	
119	110	283		7C9	IVb層	P.R.7西	土師器	無台椀	BI	平安時代	14.4	7.2	4.5	橙	良	6	ロクロケズリ。回転糸切り。	
120	49	862		10C17		八反田	土師器	無台椀	CIII	11C前半	10.8	6.0	3.1	にぶい橙	並	4	ロクロ成形。回転糸切り。	砂粒。
121	37	862		10C17		八反田	土師器	無台椀	DIII	11C前半	11.6	6.6	2.7	橙	良	3	ロクロ成形。回転糸切り。	
122	31	862		10C17		八反田	土師器	無台椀	DIII	11C前半	11.6	5.8	2.6	にぶい橙	並	5	ロクロ成形。底部切り離し不明。	砂粒。
123	55						須恵器	無台坏	B	9C後～10C初		6.8		灰	並		ヘラ切り	小泊。
124	126	278		7C4	IVb層	P.R.7西	須恵器	有台坏		9C後～10C初		6.5		灰白	良	0		見込磨耗痕。周囲打ち欠き。
125	83	1696		10C11		P.R.7東	須恵器	有台坏		9C後～10C初		10.4		青灰	良	0	ロクロケズリ。	
126	60	781		9C15	IV層	P.R.7東	須恵器	坏蓋		9C後～10C初				灰白	良	0		小泊。ツマミ3.2cm
127	61	821		10C13		八反田	須恵器	坏蓋		9C後～10C初				灰白	良	0		ツマミ2.8cm
128	135	289		7C9	VI層	P.R.7西	灰釉陶器	碗		10C後～末		5.0		灰白	並	0	内外刷毛掛け。	
129	92	1787		10C16～18		八反田	灰釉陶器	碗		10C後～末		7.7		オリーブ灰／灰白	良	0	内刷毛掛け。	
130	134	289		7C9	VI層	P.R.7西	灰釉陶器	碗		10C後～末		7.8		浅黄	並	0	高台端部面取り。内外刷毛掛け。	見込み重ね焼き痕。
131	90	1303		10C18	I～III層	八反田	灰釉陶器	碗		10C後～末		7.8		オリーブ灰／灰白	並	0	内面斑に釉付着。	
132	176	1829		10C17	III層	八反田	灰釉陶器	皿		10C後～末				灰白	良	1	内外刷毛掛け。	
133	94	845		9C15		P.R.7東	灰釉陶器	皿		10C後～末		7.2		明青灰	良	0	内外釉付着。	底部内面磨耗。
134	89	18				水路東	灰釉陶器	皿		10C後～末		7.8		オリーブ灰	並	0	内外刷毛掛け。	高台内硯に転用。
135	74	1293・1294		10C8	III層	八反田	須恵器	長頸瓶		9C後～10C初				灰	並	0		小泊。
136	132	335		8C1	IVb層	P.R.7西	須恵器	壺・瓶類		9C後～10C初		11.8		青灰／暗灰	良	0	刷毛掛け。	
137	128	331		8C12	IVb層	P.R.7西	須恵器	壺・瓶類		9C後～10C初		11.8		灰	良	0		球形の体部が付く短頸壺か？

八反田遺跡　土器・陶磁器・土製品観察表（4）

残存率は口縁部を対象とする。

報告No.	整理No.	取上げNo.	出土位置 遺構	グリッド	層位	地区	種別	器種	分類	時期	法量（cm） 口径	底径	器高	色調（内／外）	焼成	残存率 x/16	手法	備考
138	127	347		7C5	IVb層	P.R.7西	須恵器	壺・瓶類		9C後～10C初		12.9		灰	不良	0		
139	131	314		8C8	IVa層	P.R.7西	須恵器	甕		9C後～10C初				青灰／赤灰	良		面取り。	
140	84	308・364		8C3・7	IVa･b層	P.R.7西	須恵器	横瓶		9C後～10C初				灰白／灰	並	0	外面格子目タタキ、内面同心円文当て具痕。	
141	65	722		10C11	I層	P.R.7東	須恵器	甕		9C後～10C初				暗青灰	良	1	ハケメ。	
142	79	132		8C9	IV層	P.R.7	須恵器	壺・瓶類		9C後～10C初				暗オリーブ灰	良	1	波状文。沈線２条。	自然釉。
143	42	43			VIC層	C.B.6	土師器	小甕		9C後～10C初	11.8			にぶい黄褐	良	3		
144	46	751		10C16	I層	C.B.6	土師器	長甕		9C後～10C初	19.2			橙／浅黄橙	不良	3	カキメ。ハケメ。	
145	111	347		7C5	IVb層	P.R.7西	土師器	長甕		9C後～10C初	23.2			にぶい橙	並	2		
146	159	336.337		8C3		P.R.7西	土師器	長甕		9C後～10C初	24.0			にぶい黄橙	良	5	カキメ。外面平行線文タタキ、内面指頭圧痕。	
147	120	119		8C5	IV層	P.R.7	土師器	鍋		9C後～10C初	30.8			にぶい橙	良	2		外面剥落顕著。
148	171	1283	SI1313	10C7		八反田	縄文土器	深鉢		縄文前期	25.0			浅黄～灰黄	並		爪形文。縄文RL。斜格子目文。	外面スス状炭化物。
149	179	1854	SI1471-P1	10C12		八反田	縄文土器	深鉢		縄文前期				黒／にぶい黄橙	良		繊維。石英。羽状縄文。	外面スス状炭化物。
150	180	1859	SI1472	10C12		八反田	縄文土器	深鉢		縄文前期				灰黄褐／褐灰	両		縄文	白色粒。雲母。
151	166	810・368	SI500	10C11		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文前期				灰黄	良		肋骨文。	白色粒。雲母。
152	165	810	SI500	10C11		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文前期				灰黄褐	並		縄文LR。	内外面スス状炭化物。白色粒。褐色粒。
153	167	982	SI500	10C11		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文前期				灰褐／黒褐	良		羽状縄文。	白色粒。
154	161	937		9C13		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文前期				浅黄橙／褐灰	並		繊維。点列３列。ループ縄文。	白色粒。
155	162	941		9C14～19		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文前期				浅黄橙／褐灰	並		繊維。刺突列。ループ縄文。	白色粒。
156	172	867		9C14		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文中期				浅黄～黄褐	並		縄文。縦位平行沈線文。	白色粒。内外スス状炭化物。
157	164	909		9C14		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文後期				にぶい黄橙	並		横位刻みが施された縦長隆帯。４本横位沈線。	黒色粒。外スス。
158	163			9C20		P.R.7東	縄文土器	深鉢		縄文中期				にぶい黄橙	並		磨消縄文。縦位沈線。縄文LR。	白色・黒色粒。外スス。
159	173	1847・1849		10C17		八反田	縄文土器	深鉢		縄文中期	31.0			にぶい黄橙／にぶい黄褐	良		撚糸L。渦巻文。縦位連弧状文。絡条体圧痕文。	白色粒。白色礫。
160	178	1878		10C17		八反田	縄文土器	深鉢		縄文前期				にぶい褐	良		繊維。斜縄文又は楕円押型文か	白色粒。チャート。
161	181	1558		10C17		八反田	縄文土器	注口土器		縄文後期				黒／にぶい黄橙	良			
162	174	155		9C4	IV層	AB	越中瀬戸	ヒダ皿		17C前半～中葉	13.4			暗褐	良	2	ロクロケズリ。内外面鉄釉。	
163	149	111		8C5		P.R.7	肥前陶磁器	皿		17C初頭		6.1		明青灰	良	0	見込に鳥の模様。底部砂目。	初期伊万里
164	300	31	SD300			C.B.6	肥前陶磁器	碗		17C後半		4.5		にぶい黄橙	良	0	畳付以外全体に透明釉。	京焼風唐津
165	152	1337	SD1202	10C17		八反田	古式土師器	甕		古墳	13.8			黒褐／にぶい黄橙	並	1	外面ハケメ、内面一部ケズリ。	
166	151	85	P143	8C15		P.R.7	弥生土器	壺		弥生後期	12.4			黒褐／浅黄	並	3	疑凹線５条。	月影式
167	153				表土	二期線1T	古式土師器	有台甕		古墳前期	12.2			にぶい黄橙／褐灰	並	1	「S」字状口縁台付甕、ハケメ。	
168	153				表土	二期線1T	古式土師器	有台甕		古墳前期				にぶい黄橙／褐灰	並	0	ハケメ。	
169	154	1191		9C15		P.R.7東	弥生土器	甕		弥生後期	18.8	2.7		灰／浅黄橙	不良	1	疑凹線７条。ハケメ。ヘラナデ。	月影式土器。
170	168			7C10	IVb層	P.R.7西	古式土師器	甕		古墳		2.5		黄橙	並	0		外面赤彩。
171	124	86	P568（東）	10C11		P.R.7東	古式土師器	器台・高坏		古墳		9.2		にぶい黄橙	並	0	ナデ。	
172	177			8B23		C	古式土師器	坏・高坏		古墳後期	16.0			黒／灰	並	2	内面黒色、ミガキ。外面ナデ。	
173	158	1044	SE608				土製品	羽口		中世	7.6			浅黄	良		孔径2.8cm。	
174	157	714		10C11		P.R.7東	土製品	羽口		中世	7.5			浅黄	良		孔径2.3cm。	
175	156	1561		10C18		八反田	土製品	羽口		中世	7.2			浅黄橙、灰黄	良		孔径2.5cm。	
176	87	1606	SD1254	10C11		八反田	土製品	研磨具		中世	5.7	5.2	1.4	灰／灰白	並		外面並行打圧痕、内面円形押圧痕。	珠洲甕片転用。全体に磨耗顕著。
177	133	320		8C3	IVb層	P.R.7西	土製品	研磨具		平安時代	長5.5	幅6.3	厚1.3	灰／灰白	良		外面平行線文タタキ、内面同心円文当て具痕。	須恵器甕類の破片転用。
178	86	1808	SK1340	10C14～19		八反田	土製品	研磨具		平安時代	4.3	5.2	0.8	灰オリーブ／灰白	良		部分的に磨耗顕著。裏面に未貫通の穴あり。	須恵器瓶類の閉塞のための円板か。
179	169				I'層		土製品	手づくね土器		平安時代	4.5	4.0	1.9	橙	並			
180	160	370	SI500-P1	10C11		P.R.7東	土製品	土器片円板		縄文前期				にぶい黄褐／黒	良		羽状縄文。	外面スス。

八反田遺跡　木製品観察表

報告No.	整理No.	出土位置 遺構	出土位置 グリッド	出土位置 層位	出土位置 地区	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	樹種同定結果 木取り	樹種同定結果 樹種	樹種同定結果 試料No.	備考
181	43	SE303（東）	9C9・14		P.R.7東	装身具	蒔絵横櫛	長 9.7	幅4.6	厚0.8		イスノキ	468	歯34本。黒漆塗り。棟に銀？の橋？の蒔絵。
182	02	SE330（東）	9C9		P.R.7東	食膳具	箸	長20.5	幅0.7		柾目	スギ	450	
183	01	SE330（東）	9C9		P.R.7東	食膳具	箸	長23.1	幅0.7		柾目	スギ	449	
184	11	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長(13.5)	幅0.7		柾目	スギ	447	
185	10	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長(15.4)	幅0.7		柾目	スギ	446	
186	08	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長15.8	幅0.9		柾目	スギ	444	
187	06	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長16.7	幅0.7		柾目	スギ	442	
188	09	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長(16.8)	幅0.8		柾目	スギ	445	
189	12	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長18.8	幅0.7		柾目	スギ	448	
190	04	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長18.9	幅0.9		柾目	スギ	441	
191	07	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長20.3	幅0.6		柾目	スギ	443	
192	03	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長20.8	幅0.9		柾目	スギ	439	
193	05	SE924（東）	9C15		P.R.7東	食膳具	箸	長20.9	幅0.9		板目	スギ	440	
194	25	SE504（東）	10C6・11		P.R.7東	食膳具	漆器椀				横木地斜め	ブナ属	433	底径：9.0cm。内外朱漆で文様。16C。
195	24	SE1046	10C18		八反田	食膳具	漆器椀	13.8		3.3	横木	ブナ属	432	底径：7.0cm。見込みに文様。13C後半。
196	23	SE1201（東）	9C20		P.R.7東	食膳具	漆器皿	10.0		1.5	横木	ブナ属	435	底径：8.5cm。表面にケズリ痕。
197	26	SK4（水東）			水路東	食膳具	漆器皿			0.3		クリ	437	見込みに朱漆で文様。
198	34	SK4（水東）			水路東	食膳具	荒型？	8.4	12.4	(10.1)	芯持ち丸太	クリ	469	
199	37	SE1（水西）	9C19		水路西	容器	円形板		12.1	0.5	柾目	ヒノキ	458	釘孔なし。
200	36	SE1（水西）	9C19		水路西	容器	曲物	(6.5)	19.9		底板：柾目、側板：柾目	ヒノキ	459・460	釘孔なし。底板径19.0cm厚さ1.0cm。1列2段上内下外綴じ。
201	15	SE200（東）	10C12		P.R.7東	容器	円形板	16.5	(15.7)	1.0	柾目	ヒノキ	457	
202	38	SE323（東）	9C14		P.R.7東	容器	曲物柄杓	9.6	10.0		底板：板目、側板：柾目	スギ	438	底板径：9.9cm。_4ヶ所。柄の径1.2cm。1列3段外綴じ
203	35	SE1019	10C18		八反田	容器	筒形曲物	15.1	14.4	9.4	底板：板目、側板：柾目	ヒノキ	451・452	箍幅：3.0cm。底板径：13.9cm。
204	21-2	SE1203	10C17		八反田	容器	蓋板	(16.8)		0.8	板目	スギ	425	目釘痕。
205	21-1	SE1203	10C17		八反田	容器	蓋板	16.5	(11.9)	1.4	柾目	トウヒ属	426	目釘痕。内面黒漆塗布。
206	27-1	SE1246	10C16		八反田	容器	曲物側板			15.0	柾目	ヒノキ	455	内外黒漆。1列4段外綴じ。
207	27-3	SE1246	10C16		八反田	容器	曲物底板	19.4	18.9	1.3	柾目			
208	27	SE1246	10C16		八反田	容器	曲物底板	19.5	19.3	1.3	柾目	底：サワラ側：ヒノキ	453・454	縁に側板、目釘残存。内面黒漆塗布。
209	27-2	SE1246	10C16		八反田	容器	曲物底板	20.3	20.2	1.2	柾目	ヒノキ属	456	縁と、内面に目釘痕。
210	14	SE1344	10C18		八反田	容器	円形板	23.3	(21.8)	0.5	柾目	ヒノキ	430	
211	18	SE1426	10C13		八反田	容器	円形板	(16.2)		0.8	柾目	ヒノキ	436	
212	19	SE1458	10C12		八反田	容器	円形板	(14.5)	(14.4)	0.6	柾目	スギ	429	内面黒漆塗布。
213	28	SE1458	10C12		八反田	容器	曲物側板				板目	ヒノキ	434	内面黒漆塗布。
214	16	SK4（水東）			水路東	容器	曲物底板	19.9	19.1	1.0	柾目	サワラ	467	目釘残存。
215	22	SK1211（東）	9C20		P.R.7東	容器	円形板	19.9	(19.4)	0.7	柾目	スギ	470	
216	17	SK1220（東）	9C20		P.R.7東	容器	底板	16.4	15.6	1.2	柾目	サワラ	461	内面黒漆塗布。漆刷毛幅：1.6cm。
217	21-3	SE1203	10C17		八反田	容器	桶側板			19.0	柾目	スギ	427・428	内面黒漆塗布。
218	20	SE1226	10C17		八反田	容器	指物	(19.2)	(17.7)	1.2	底板：板目　側板：板目	スギ	462・477・478	側板：長（21.4）幅（18.1）厚（15.7）cm。
219	33	SE1417	10C13		八反田	部材	不明	46.8	5.1		丸木	コナラ属コナラ節	471	両端、側面に加工痕。
220	44	SE1417	10C13		八反田	部材	不明	128.2	17.4		芯持丸太	コナラ属コナラ節	476	切り込み幅1cm、深6cm。裏面にキズ。
221	39	SK1211（東）	9C20		P.R.7東	紡織具	糸巻	長21.4	幅15.1		枠木：板目、横木：柾目	スギ	463・464	横木長さ（13.0）、幅2.3cm、厚さ0.9cm、軸孔径1.2cm、小孔径0.6cm
222	40	SK1211（東）	9C20		P.R.7東	紡織具	糸巻	長21.4	幅14.4		枠木：板目、横木：板目	スギ	465・466	横木長さ13.4cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm、軸孔径1.2cm、釘孔径0.3cm。直径15.1cm。
223	13	SE335（東）	9C15		P.R.7東	不明	不明	11.1	2.8	2.0	板目	スギ	431	目釘痕。把手か。

八反田遺跡　石製品・石器観察表

報告No.	整理No.	取上げNo.	出土位置				種別	器種	時期	法量（cm・g）				石材	備考
			遺構	グリッド	層位	地区				長さ	幅	厚さ	重量		
224	27	1263		10C17	I' 層	八反田	石製品	石鉢	中世	径28.0			884.0	角閃石安山岩	15から16世紀代
225	03	1396	SE1203	10C17		八反田	石製品	磨石類	平安時代～中世	11.0	9.1	5.4	759.5	石英斑岩	
226	15	549	SE1200（東）	9C20		P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	(8.5)	3.6	3.4	136.5	凝灰岩	
227	12	1412	SE1203	10C17		八反田	石製品	砥石	平安時代～中世	(6.9)	2.9	1.4	29.8	凝灰岩	
228	19	569	P211	10C12		P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	11.5	2.8	2.4	110.9	凝灰岩	
229	23	646	P564	10C11		P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	(5.3)	2.1	2.0	33.1	凝灰岩	
230	28	1908	P1416				石製品	砥石	平安時代～中世	25.2	13.5	6.7	3430.0	砂岩	
231	29	1909	P1462	10C12		八反田	石製品	砥石	平安時代	17.1	10.6	5.7	1202.0	砂岩	裏面スス付着
232	26	388	SD315	9C14		P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	(7.3)	2.7	2.5	62.0	凝灰岩	
233	20	391	SD316	9C14		P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	(6.1)	6.2	2.5	123.4	凝灰岩	
234	24	398	SD332	9C14		P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	(6.7)	3.4	3.3	115.9	凝灰岩	
235	25	1610	SD1081	10C19		八反田	石製品	砥石	中世	(8.9)	3.0	2.2	68.2	凝灰岩	
236	16	1716	SD1329	10C18		八反田	石製品	砥石	平安時代～中世	(10.4)	5.1	3.0	224.4	砂岩	
237	14	808		7C4		P.R.7西	石製品	砥石	平安時代～中世	14.3	4.3	3.1	257.4	凝灰岩	
238	18			9C4・9		AB	石製品	砥石	平安時代～中世	(8.9)	7.8	7.0	602.5	砂岩	
239	22	730		9C9	I層	P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	5.1	2.4	0.7	10.9	鳴滝産凝灰岩	仕上げ砥石
240	13	733		9C13	I層	P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	(6.6)	6.2	2.0	149.6	凝灰岩	
241	21	858		10C17		P.R.7東	石製品	砥石	平安時代～中世	(3.1)	3.5	0.5	9.6	鳴滝産凝灰岩	仕上げ砥石
242	17						石製品	砥石	平安時代～中世	(3.5)	1.9	1.2	14.5	石英？	
243	11	374	SI500	10C11		P.R.7東	石器	石鏃	縄文時代	1.3	1.5	0.3	0.5	黒曜石	
244	10	374	SI500	10C11		P.R.7東	石器	石鏃	縄文時代	2.5	1.6	0.5	1.2	凝灰岩	未成品
245	7	374	SI500	10C11		P.R.7東	石器	不定形石器	縄文時代	(2.4)	(2.2)	0.5	2.8	黒色頁岩	未成品
246	09	630	P537	10C11		P.R.7東	石器	石鏃	縄文時代	1.7	1.3	0.4	0.9	無斑晶質安山岩	
247	08			8B24	I～IV層	二期線	石器	石鏃	縄文時代	3.6	1.9	0.7	2.9	凝灰岩	
248	32	705	SX970			P.R.7東	石器	石匙	縄文時代	2.9	4.1	0.8	8.3	無斑晶質安山岩	
249	01	933		9C14		P.R.7東	石器	箆状石器	縄文時代	8.4	4.8	1.9	76.3	頁岩	
250	02	976				P.R.7東	石器	不定形石器	縄文時代	(6.4)	4.7	1.1	33.0	頁岩	
251	05	1882		10C13	縄文黒	八反田	石器	石錘	縄文時代	5.7	5.3	2.9	80.0	安山岩	長軸方向打ち欠き
252	04	1873		10C17	VIII層	P.R.7東	石器	敲石	縄文時代	8.8	7.7	3.7	262.9	安山岩	

高畑遺跡　土器・陶器観察表

残存率は口縁部を対象とする。

報告No.	整理No.	出土位置				種別	器種	時期	法量（cm）			色調（内／外）	焼成	残存率x/16	手法	備考
		遺構	グリッド	層位	地区				口径	底径	器高					
1	3		5C1	Va層	C	土師器	無台椀	平安時代	9.5	4.8	2.7	浅黄	並	9	回転糸切り	
2	12		5C1	Va層	C	土師器	無台椀	平安時代	10.0	4.0	2.6	にぶい黄橙	良	7	回転糸切り	
3	4		5C1	Va層	C	土師器	無台椀	平安時代	10.7	5.2	2.9	橙	良	6	回転糸切り	
4	7			礫層	C	土師器	無台椀	平安時代	13.0	6.0	4.4	にぶい褐／にぶい橙	良	4	回転糸切り	旧正善寺川礫層
5	1		5C1	Va層	C	土師器	無台椀	平安時代	13.7			浅黄	並	2		風化顕著。
6	13		5C1	Va層	C	土師器	無台椀	平安時代		7.0		にぶい黄橙	並	0	回転糸切り	
7	2		5C1	Va層	C	土師器	黒色土器無台椀	平安時代	11.4	4.6	4.4	黒褐／にぶい黄橙	並	1	回転糸切り	
8	5		5C1	Va層	C	灰釉陶器	碗	平安時代	18.0	8.8	5.6	灰白	良	2	内面のみ釉掛け	
9	6		5C1	Va層	C	灰釉陶器	碗	平安時代	14.6			灰白	並	2	内面のみ釉掛け	
10	9		5B21	VIe	C	灰釉陶器	碗	平安時代		8.0		灰白	良	0		
11	10		5C1	Va層	C	灰釉陶器	壺・瓶類	平安時代		6.0		灰白／灰オリーブ	良	0	ロクロケズリ	
12	8			Va層	C	土師器	鍋	平安時代	26.2			にぶい黄橙	良	1	カキメ	
13	11		5B21	VIe	C	珠洲	片口鉢	中世		16.0		浅黄橙	不良	0	1単位11条の卸目	

高畑遺跡　木製品観察表

報告No.	整理No.	出土位置				種別	器種	法量（cm）			樹種同定結果			備考
		遺構	グリッド	層位	地区			長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	試料No.	
14	41	SB1－P6	5C1		C	建築部材	柱根	32.8	18.6	14.3	芯持ち丸太	クリ	473	角材？
15	42	SB1－P14	5C1		C	建築部材	柱根	36.0	17.4	12.7	芯持ち角材	ハンノキ属ハンノキ節	472	縄かけの溝？有り。
16	31	SB1－P12	5C1		C	建築部材	柱根	18.5	12.8	5.5				
17	32	SB1－P3	5C1		C	建築部材	柱根	12.7	12.0	5.8				
18	30	河川			C	容器	底板	15.0	15.0	0.8	柾目	ヒノキ	474	
19	45	河川			C	容器	曲物柄杓	口13.0	底12.7	高10.4	底板：板目、側板：柾目	スギ	475	柄径1.0cm
20	29	SE1			二期線	装飾品	連歯下駄	19.2	11.2	5.1	芯持ち板目			

高畑遺跡　石製品観察表

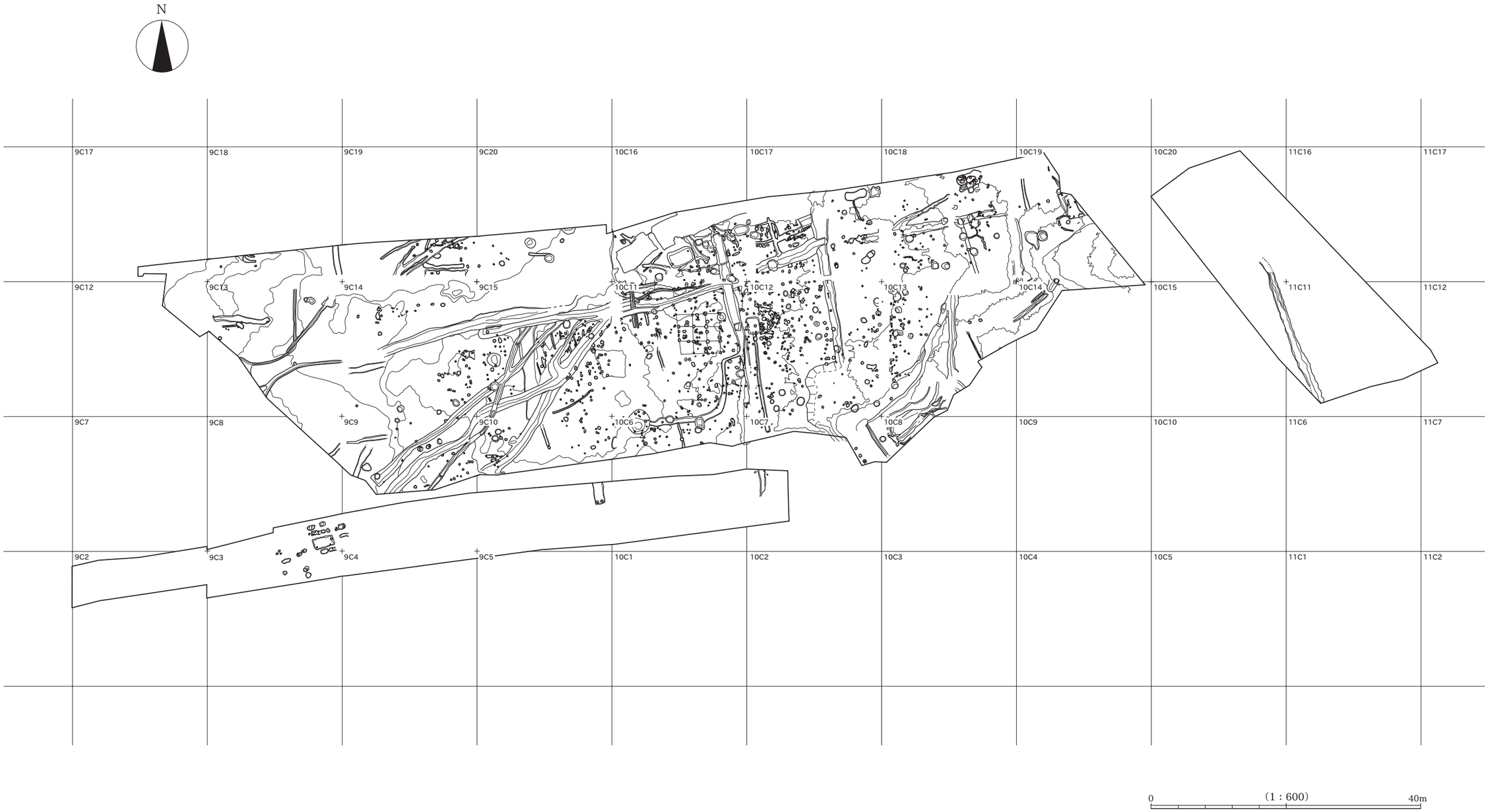
報告No.	整理No.	出土位置				種別	器種	時期	法量（cm）			石材	備考
		遺構	グリッド	層位	地区				長さ	幅	厚さ		
21	362	SE1	3B13	青灰白粘土	二期線	石製品	砥石	平安時代	14.0	5.3	5.2	凝灰岩	
22	30	SE1	3B13		二期線	石製品	砥石類		18.4	12.4	7.1	凝灰岩	重さ1,950g。裏面敲打痕有り。
23	31	SE1	3B13		二期線	五輪塔	空風輪			14.7	8.2	角閃石安山岩	宝珠欠損。ホゾ幅5.5cm。風化顕著。重さ2,360g

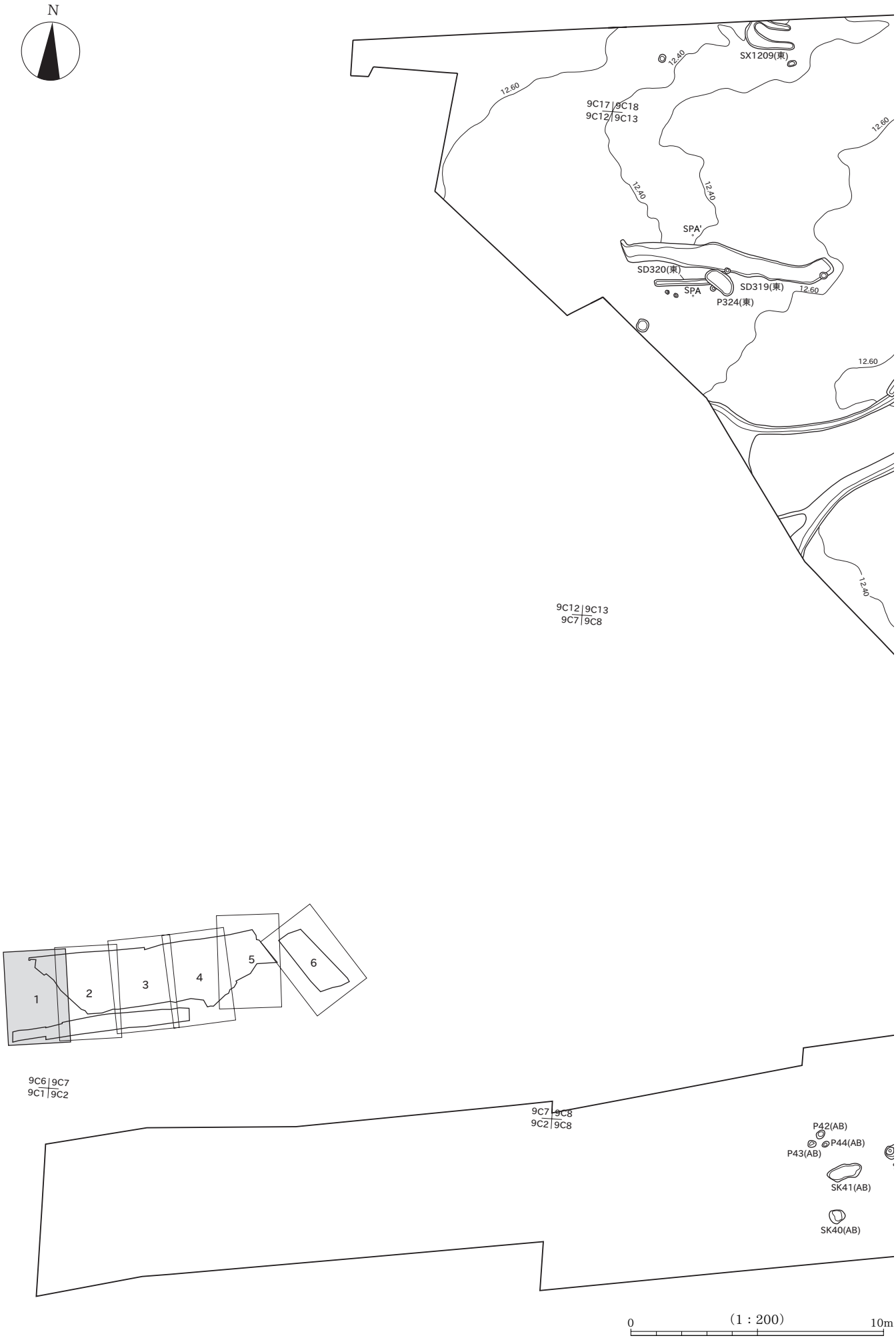
図　　版

凡　例

遺物の種別等は図面図版中、実測図にトーンで次のように表示した。

- 断面黒塗り　須恵器
- 断面網掛け　緑釉陶器
- 断面網掛け　灰釉陶器
- 内面網掛け　黒色土器
- 断面網掛け　繊維を含む縄文土器
- 断面白抜き　上記以外の土器
- スス
- タール
- 墨痕
- 黒漆
- 赤彩
- 鉄滓
- 研磨面


N
9C17
9C18
9C19
9C20
10C16
10C17
10C18
10C19
10C20
11C16
11C17
9C12
9C13
9C14
9C15
10C11
10C12
10C13
10C14
10C15
11C11
11C12
9C7
9C8
9C9
9C10
10C6
10C7
10C8
10C9
10C10
11C6
11C7
9C2
9C3
9C4
9C5
10C1
10C2
10C3
10C4
10C5
11C1
11C2
0
(1 : 600)
40m


N
SX1209(東)
12.40
12.60
9C17/9C18
9C12/9C13
12.60
12.40
12.40
SPA'
SD320(東)
SD319(東)
SPA
P324(東)
12.60
12.60
12.40
9C12/9C13
9C7/9C8
1
2
3
4
5
6
9C6/9C7
9C1/9C2
9C7/9C8
9C2/9C8
P42(AB)
P44(AB)
P43(AB)
SK41(AB)
SK40(AB)
0
(1：200)
10m

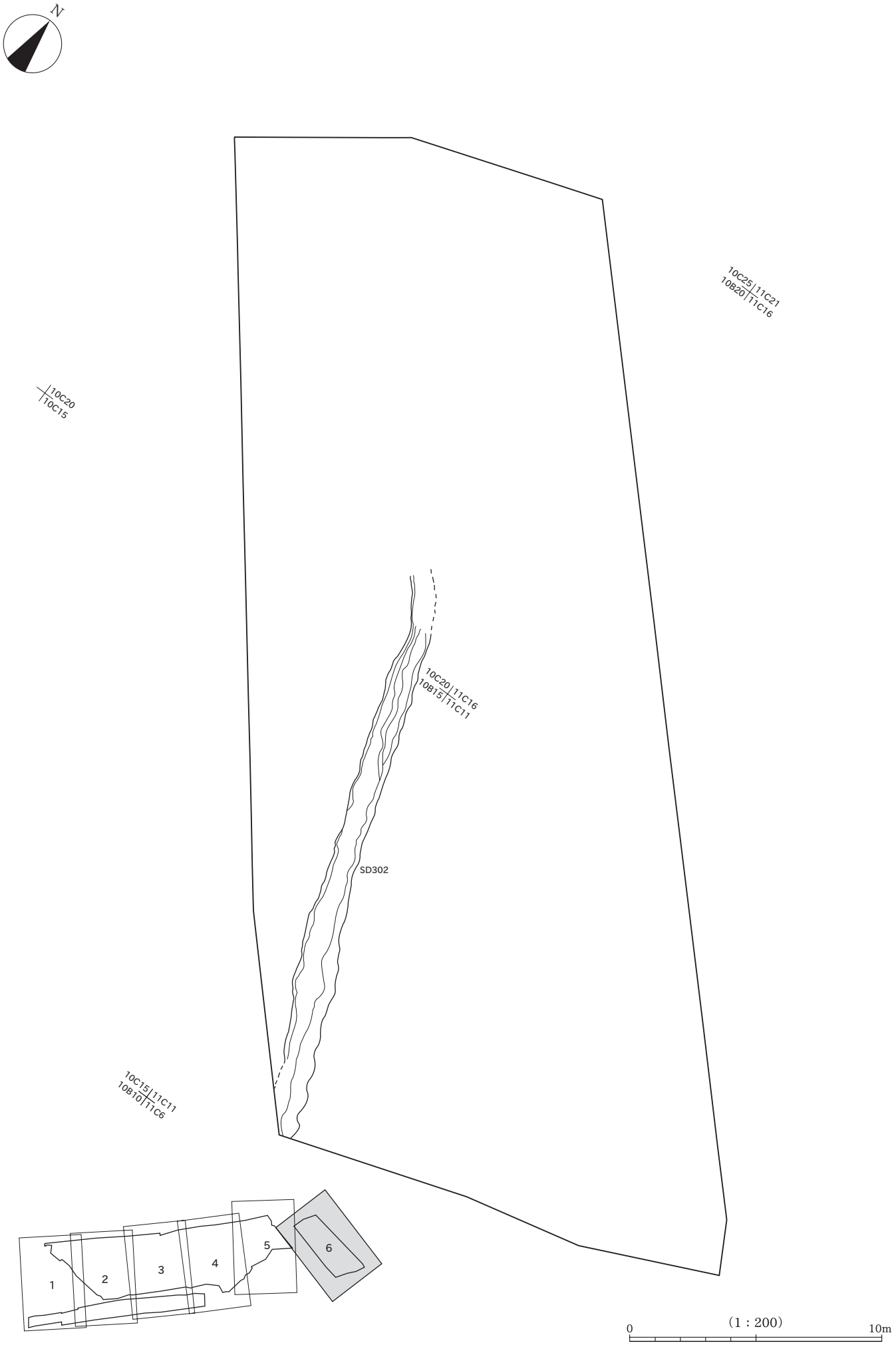
八反田遺跡遺構全体実測図（中世２）

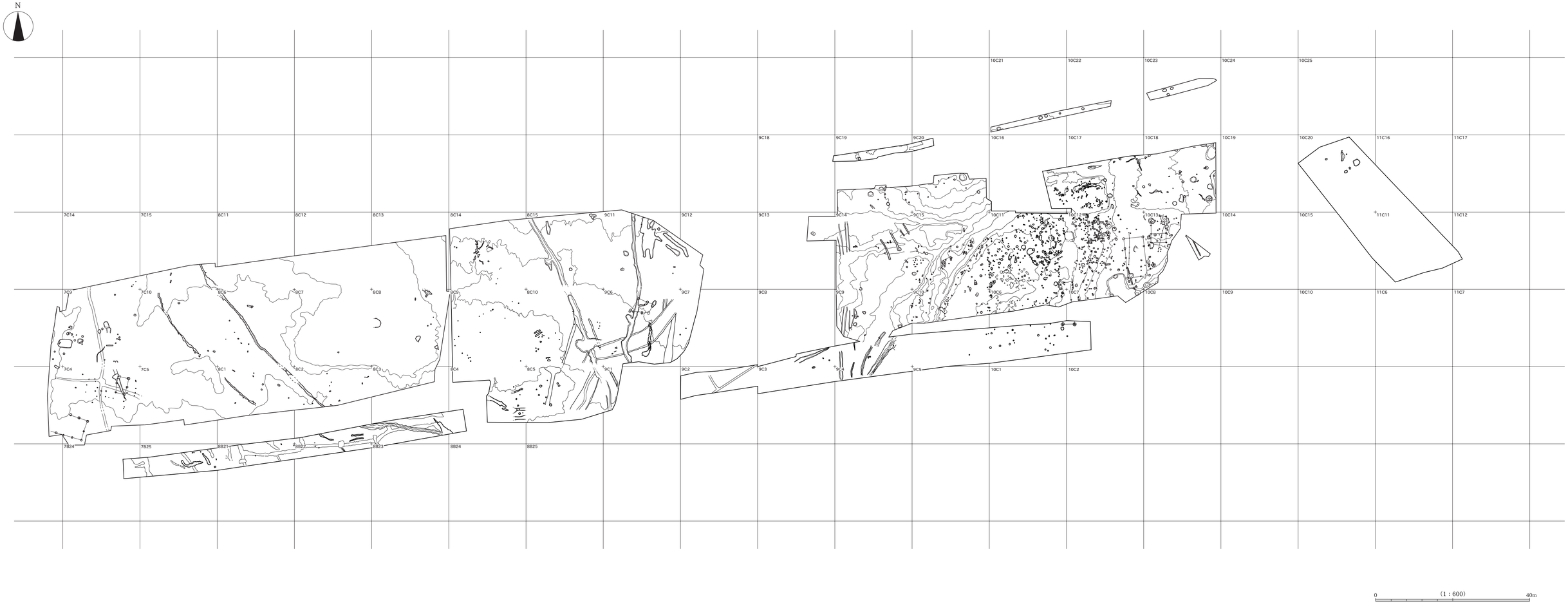
N
SK1211(東)
SE1200(東)
SE1217(東)
SE1202(東)
SE1201(東)
P1257
SE1236
SD1236
SD1238
SK1237
SD1240
SD1239
SE1250
SE1245
P1248
P1247
P1249
SD585(東)
SD501(東)
P582(東)
P583(東)
P567(東)
9C20|10C16
9C15|10C11
SE584(東)
SD595(東)
SPA
SD965(東)
SD966(東)
SD967(東)
SD964(東)
P931(東)
SD918(東)
SD917(東)
SPA'
SE924(東)
SD961(東)
SD962(東)
SD919(東)
SD915(東)
P951(東)
SE920(東)
P928(東)
P908(東)
SD909(東)
SD963(東)
SD914(東)
P923(東)
P933(東)
P932(東)
P939(東)
P940(東)
SD905(東)
SD910(東)
P941(東)
P942(東)
P943(東)
P944(東)
P945(東)
P946(東)
SE906(東)
SD903(東)
SD921(東)
SE900(東)
SD904(東)
P949(東)
P587(東)
9C15|10C11
9C10|10C6
SE588(東)
SE504(東)
P1010
P1012
P1009
SD593(東)
P1008
P5(東)
P525(東)
P1(東)
SB907(東)
SB907-P519(東)
SB907-P517(東)
P516(東)
SB907-P540(東)
P1003
P528(東)
P1006
SB907-P520(東)
P1007
SD591(東)
P1001
P1000
P539(東)
P554(東)
P538(東)
P1011
P558(東)
P553(東)
P559(東)
SD503(東)
SD589(東)
SE507(東)
P568(東)
P569(東)
P550(東)
SK29(AB)
1
2
3
4
5
6
9C10|10C6
9C5|10C1
0
(1：200)
10m

八反田遺跡遺構全体実測図（中世４）

N
10C23 | 10C24
10C18 | 10C19
10C24 |
10C19
SD1324
P1031
P1038
P1028
P1035
P1024
P1034
SD1079
P1036
P1033
P1029
P1030
P1032
P1027
SE1039
P1025
SK1322
P1083
P1084
P1040
SE1041
SX1328
SD1078
P1053
SE1046
SD1078
SK1020
SK1320
SD1051
P1026
SD1321
P1045
P1023
SE1017
SE1019
SK1337
SK1319
P1054
SD1022
水路跡
SE1018
P1048
SD1081
SE1080
SE1081
SK1340
10C18 | 10C19
10C13 | 10C14
SD1342
10C19 | 10C20
10C14 | 10C15
SD1321
P1073
SD1305
SD1306
SD1303近世
1307
10C13 | 10C14
10C8 | 10C9
11.80
11.60
11.40
11.20
11.00
10.80
10.60
10.40
1
2
3
4
5
6
0
(1：200)
10m

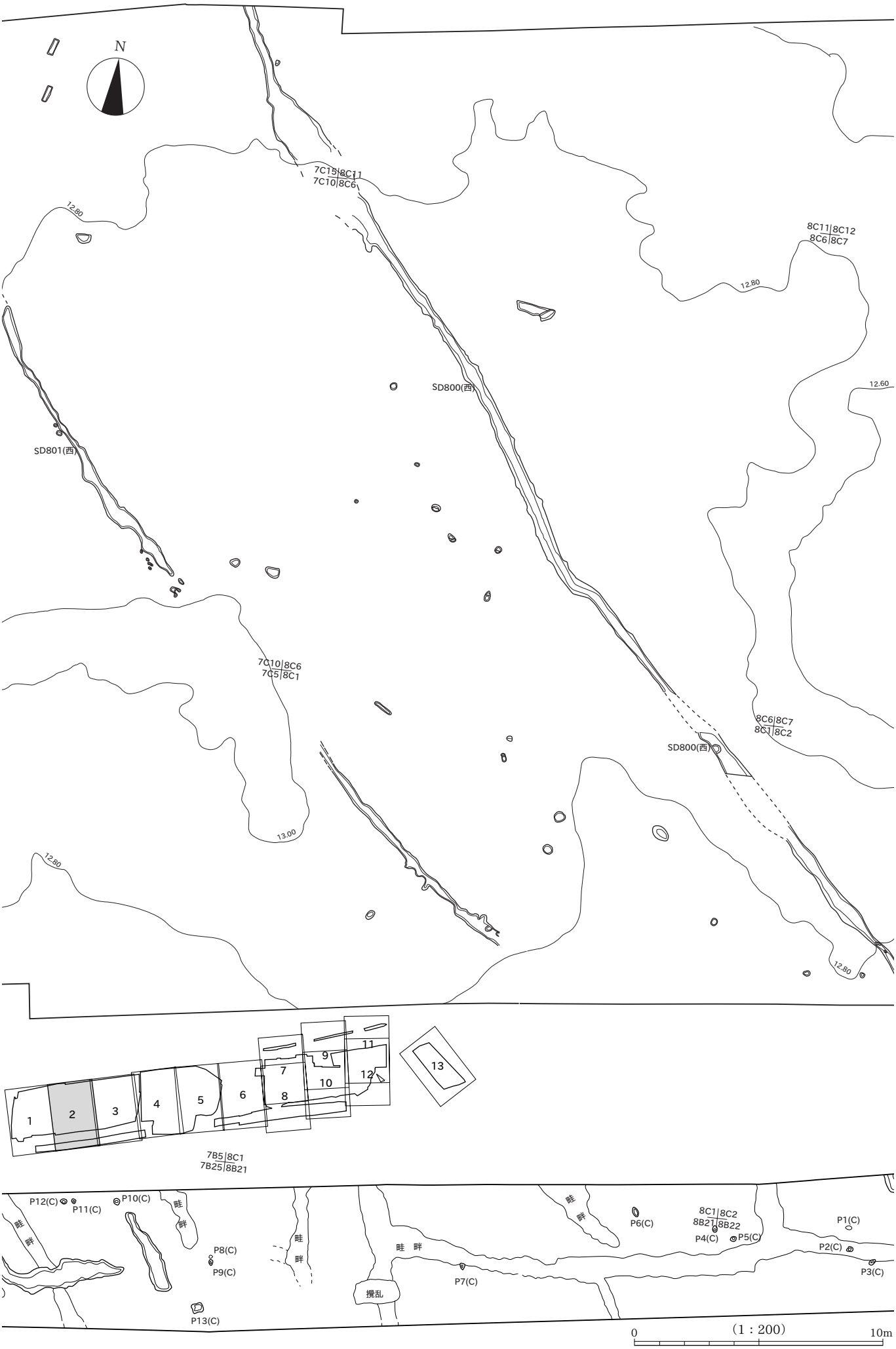
八反田遺跡遺構全体実測図（中世6）




N
7C14
7C15
8C11
8C12
8C13
8C14
8C15
9C11
9C12
9C13
9C14
9C15
10C11
10C12
10C13
10C14
10C15
11C11
11C12
7C9
7C10
8C6
8C7
8C8
8C9
8C10
9C6
9C7
9C8
9C9
9C10
10C6
10C7
10C8
10C9
10C10
11C6
11C7
7C4
7C5
8C1
8C2
8C3
8C4
8C5
9C1
9C2
9C3
9C4
9C5
10C1
10C2
7B24
7B25
8B21
8B22
8B23
8B24
8B25
9C18
9C19
9C20
10C16
10C17
10C18
10C19
10C20
11C16
11C17
10C21
10C22
10C23
10C24
10C25
0
(1：600)
40m

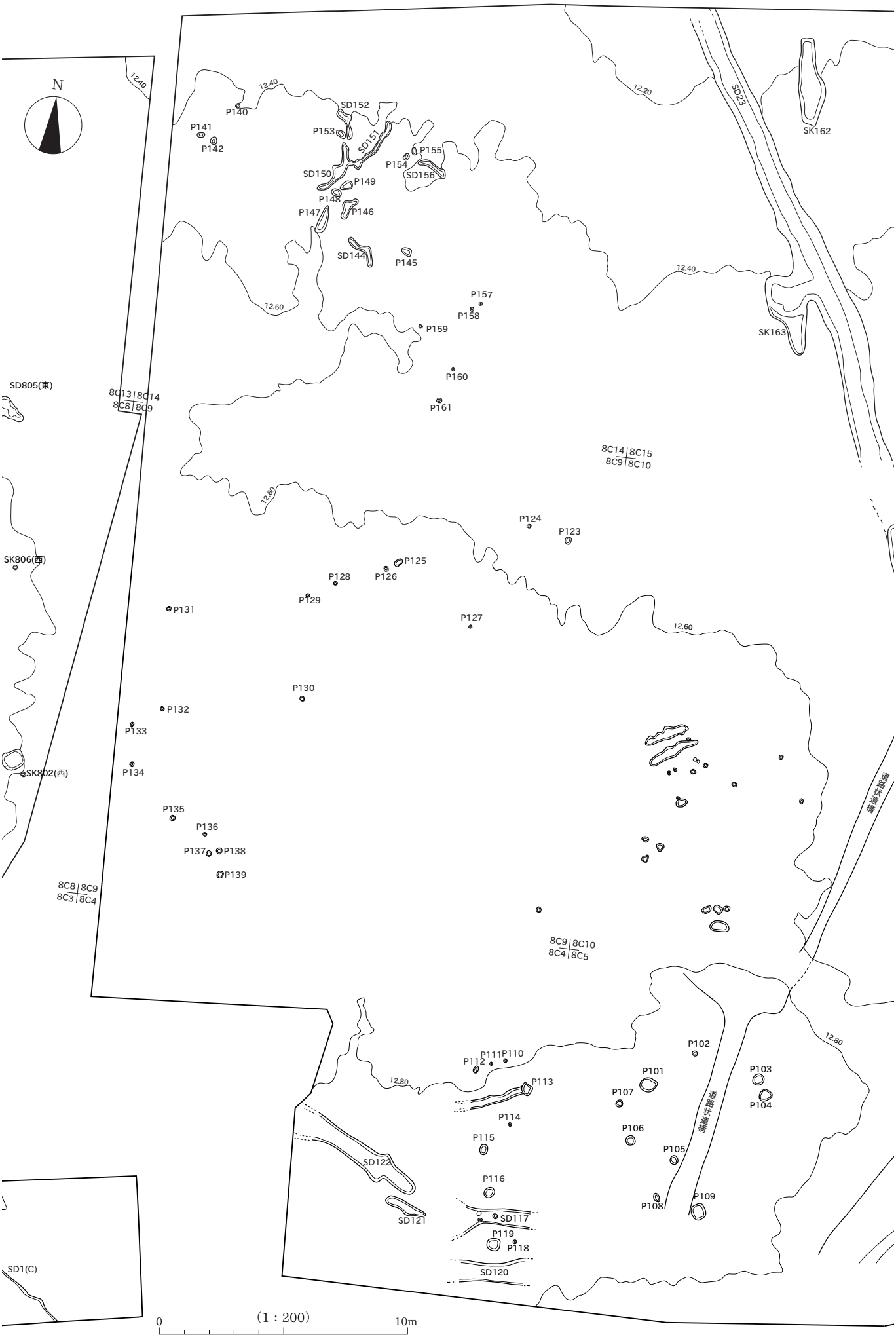
N
7C13|7C14
7C8|7C9
7C14|7C15
7C9|7C10
12.80
SK812(西)
SD813(西)
SK34(西)
SK809(西)
7C8|7C9
7C3|7C4
7C9|7C10
7C4|7C5
畦畔
P28(西)
SB814(西)
SD813(西)
P29(西)
SB808(西)
7C3|7C4
7B23|7B24
7C4|7C5
7B24|7B25
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
畦
畔
0
(1：200)
10m

八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代２）



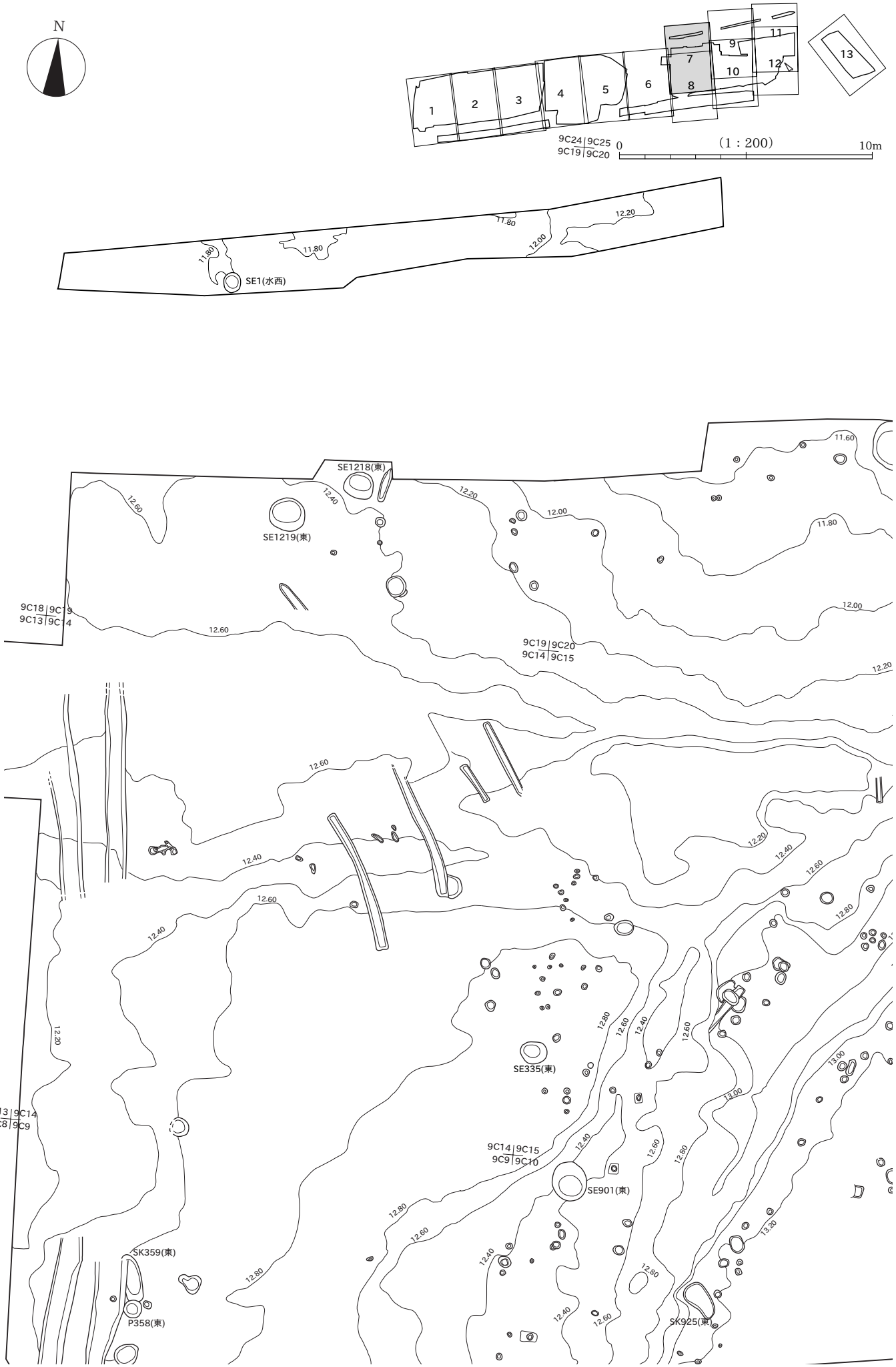
N
12.60
8C12|8C13
8C7|8C8
SD805(東)
12.60
SK806(西)
SK804(西)
SK807(西)
SK803(西)
SK802(西)
12.80
8C7|8C8
8C2|8C3
12.60
12.80
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
撹乱
SD3(C)
SD2(C)
SD1(C)
SD4(C)
撹乱
P3(C)
8C2|8C3
8B22|8B23
0
(1：200)
10m

八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代４）

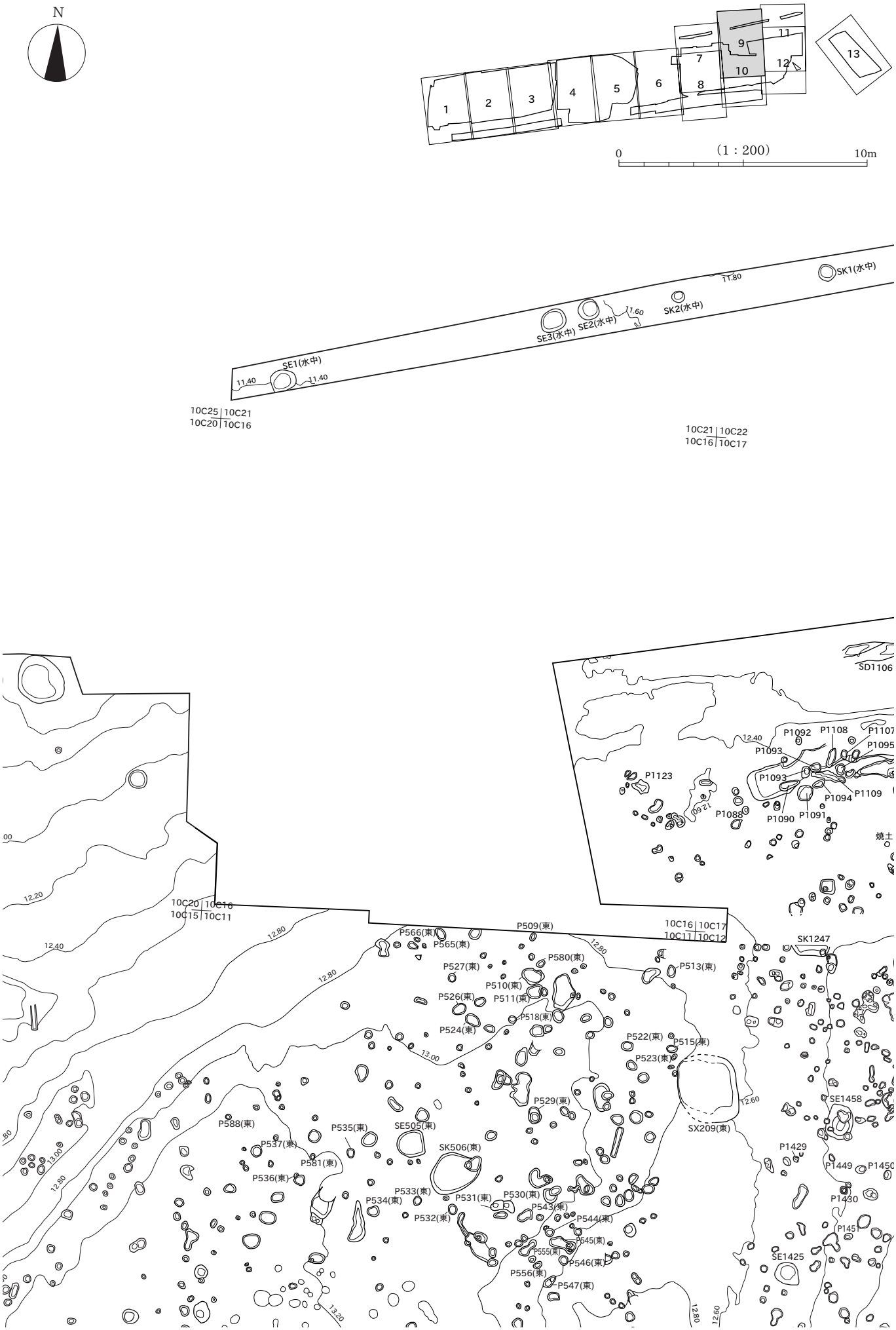


SK164
12.20
5C16|5C17
5C11|5C12
N
P143
SD22
12.40
5C15|5C11
5C10|5C6
5C11|5C12
5C6|5C7
SB4（中世）
P5
P4
P3
SD2
P8
P7
P6
SK21
SD23
SPA'
SD
SD24
道路状遺構
SD25
SPA
SD22
SD20
5C10|5C6
5C5|5C1
5C6|5C7
5C1|5C2
12.60
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
0
(1：200)
10m

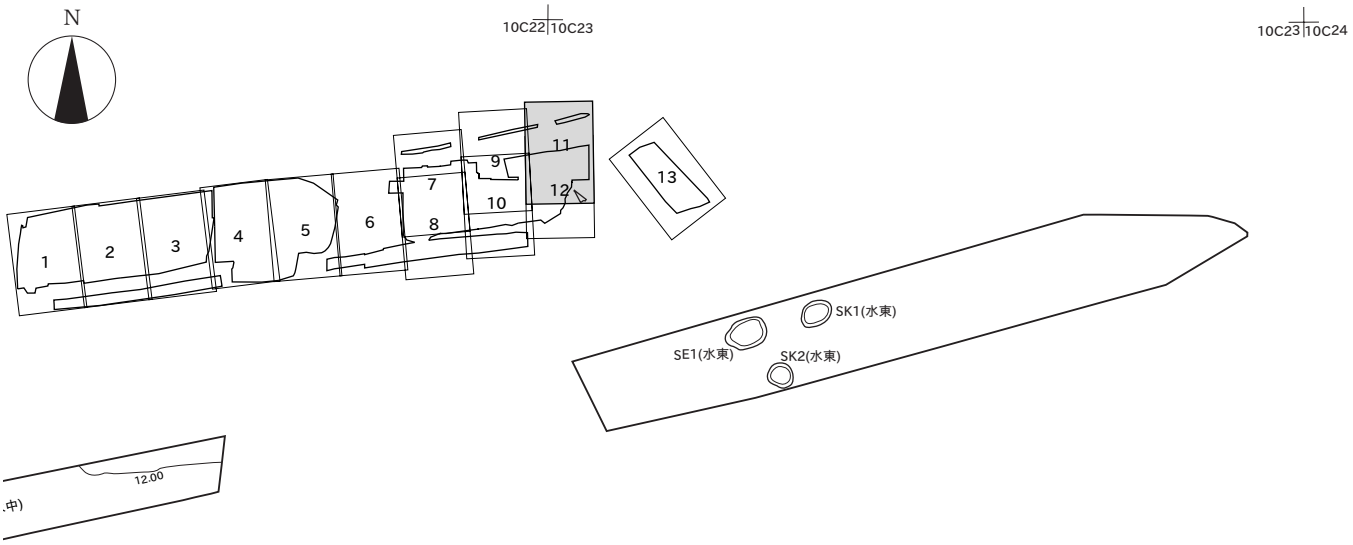
八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代６）

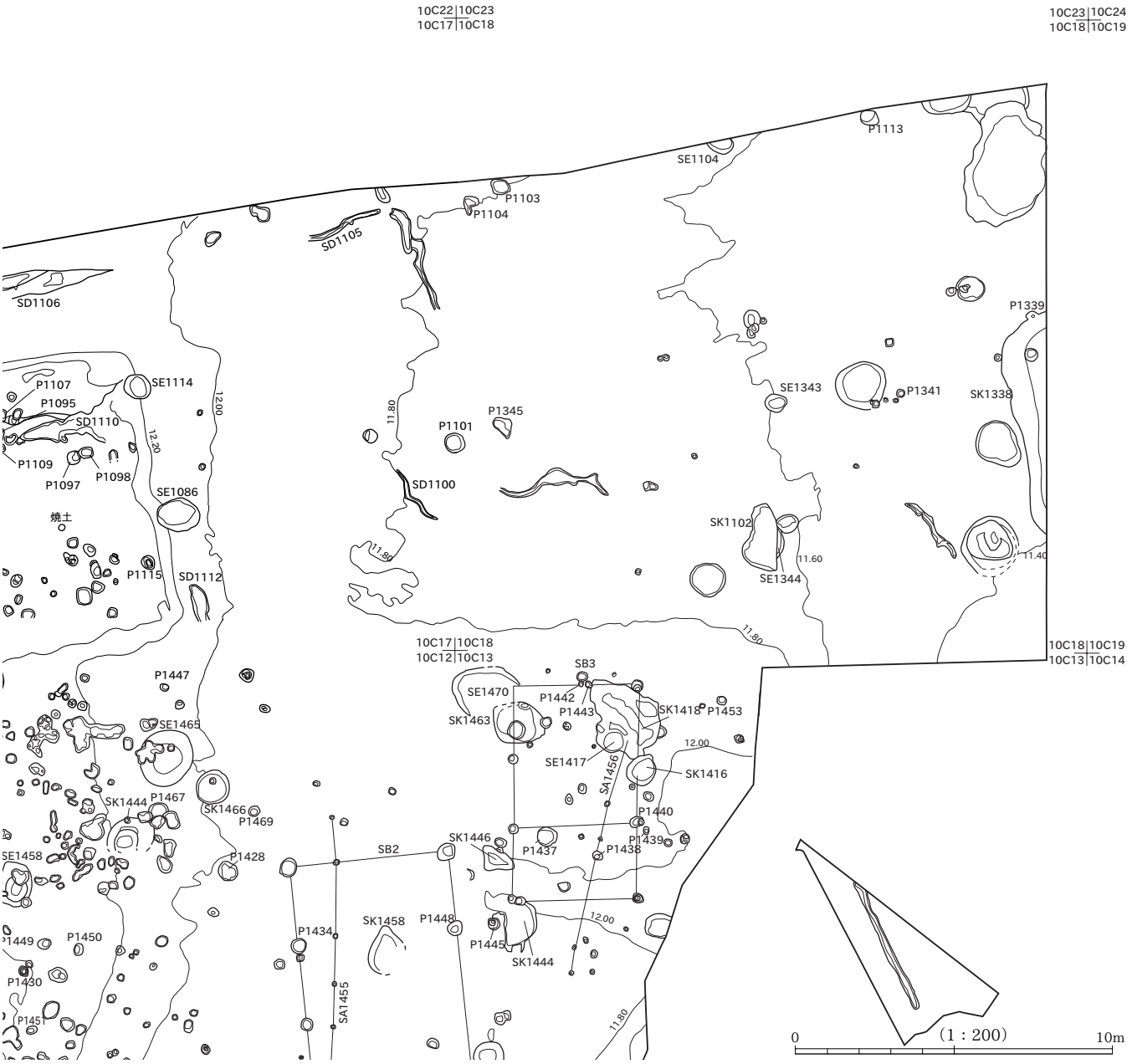

N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
9C24|9C25
9C19|9C20
0
(1：200)
10m
SE1(水西)
SE1218(東)
SE1219(東)
9C18|9C19
9C13|9C14
9C19|9C20
9C14|9C15
SE335(東)
9C13|9C14
9C8|9C9
9C14|9C15
9C9|9C10
SE901(東)
SK359(東)
P358(東)
SK925(東)

八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代８）

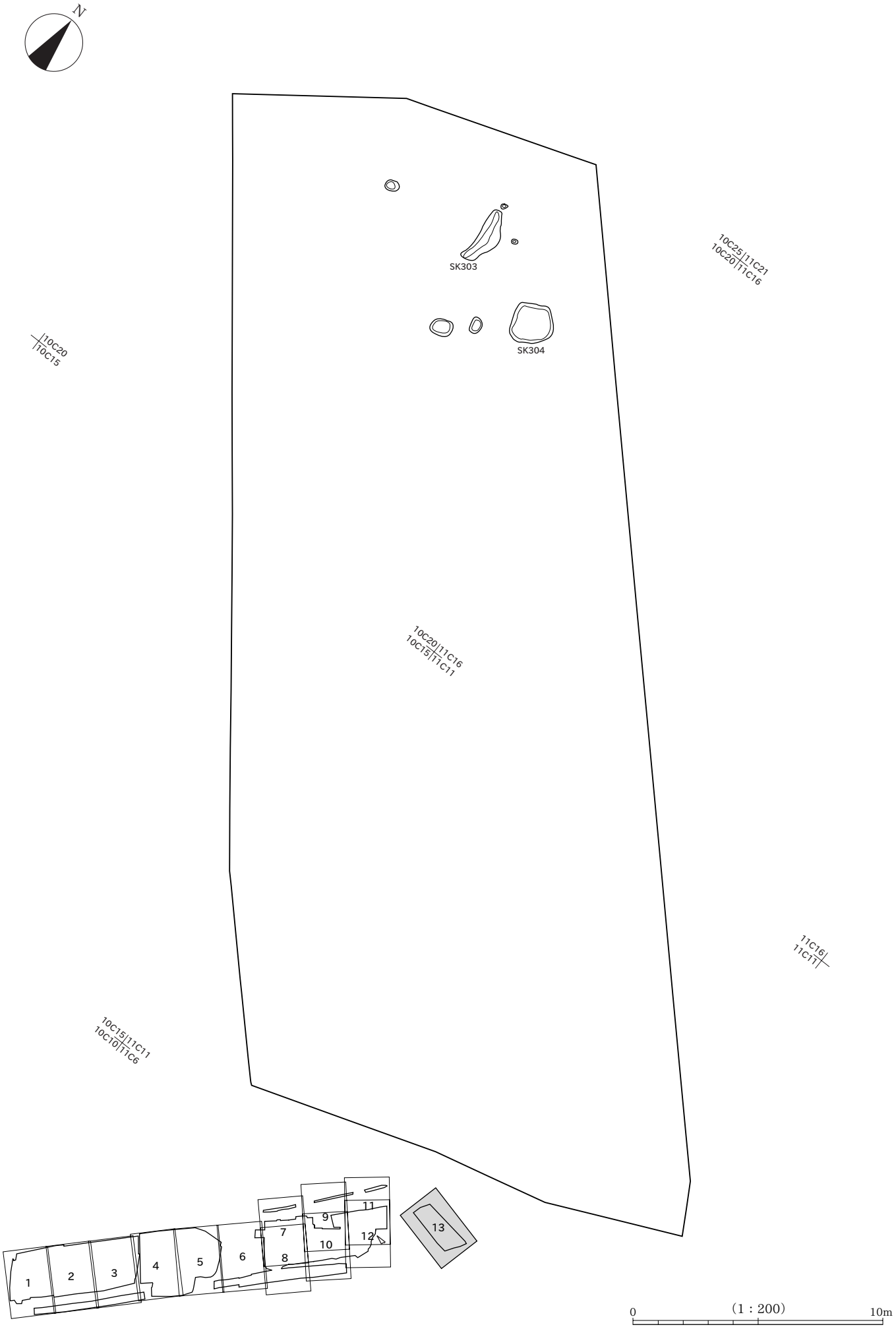

N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
0
(1：200)
10m
SK1(水中)
SK2(水中)
SE2(水中)
SE3(水中)
SE1(水中)
11.80
11.60
11.40
10C25 10C21
10C20 10C16
10C21 10C22
10C16 10C17
SD1106
P1092
P1108
P1107
P1095
P1093
P1123
P1094
P1109
P1088
P1090
P1091
焼土
12.40
12.60
12.20
10C20 10C16
10C15 10C11
10C16 10C17
10C11 10C12
P566(東)
P565(東)
P509(東)
P580(東)
P527(東)
P513(東)
P510(東)
P511(東)
P526(東)
P518(東)
P524(東)
P522(東)
P515(東)
P523(東)
SK1247
P529(東)
SE1458
SX209(東)
P588(東)
P535(東)
SE505(東)
P537(東)
SK506(東)
P581(東)
P536(東)
P533(東)
P534(東)
P531(東)
P530(東)
P532(東)
P543(東)
P544(東)
P545(東)
P555(東)
P546(東)
P556(東)
P547(東)
P1429
P1449
P1450
P1430
P1451
SE1425
12.80
13.00
13.20

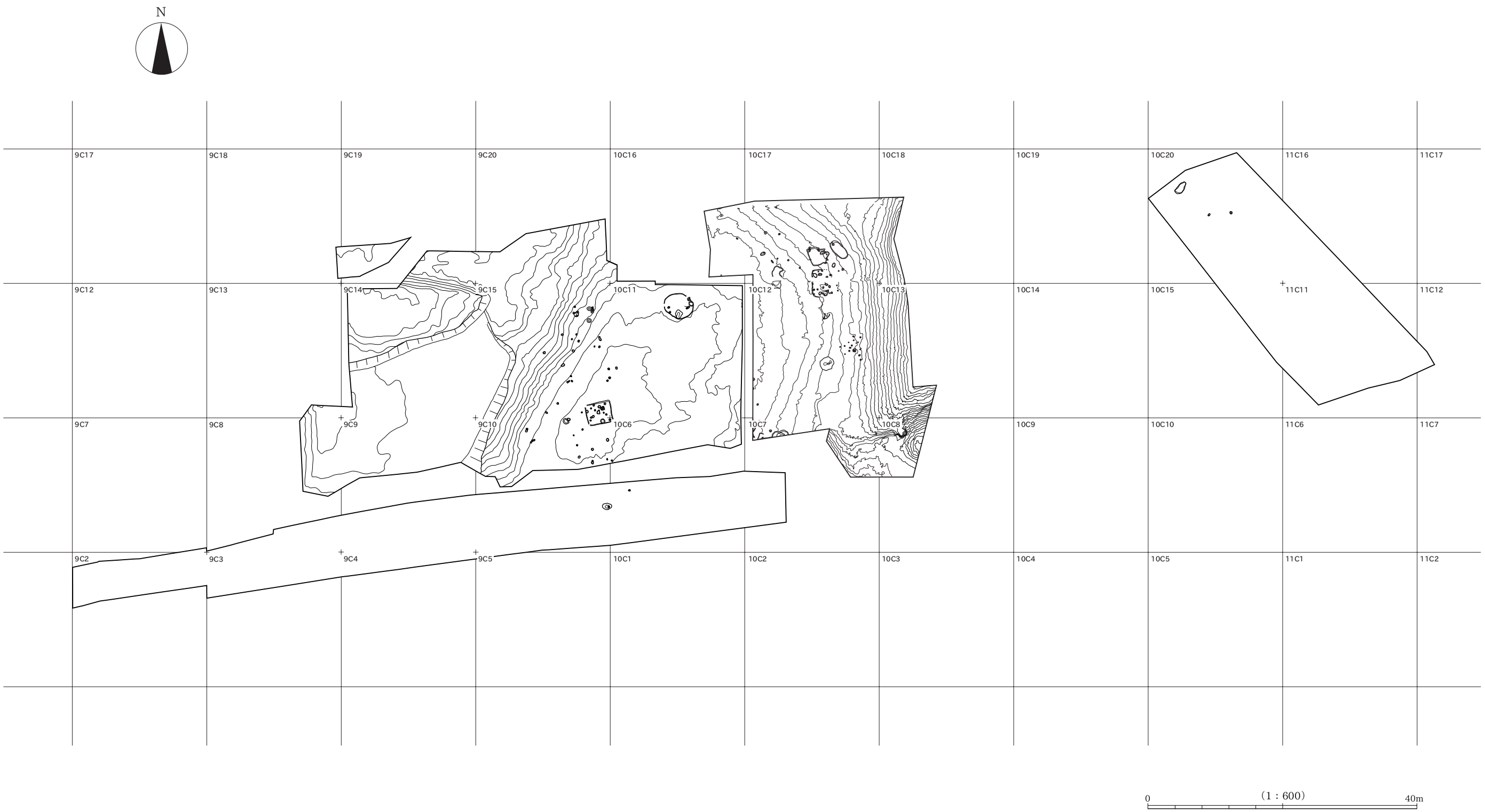
八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代10）

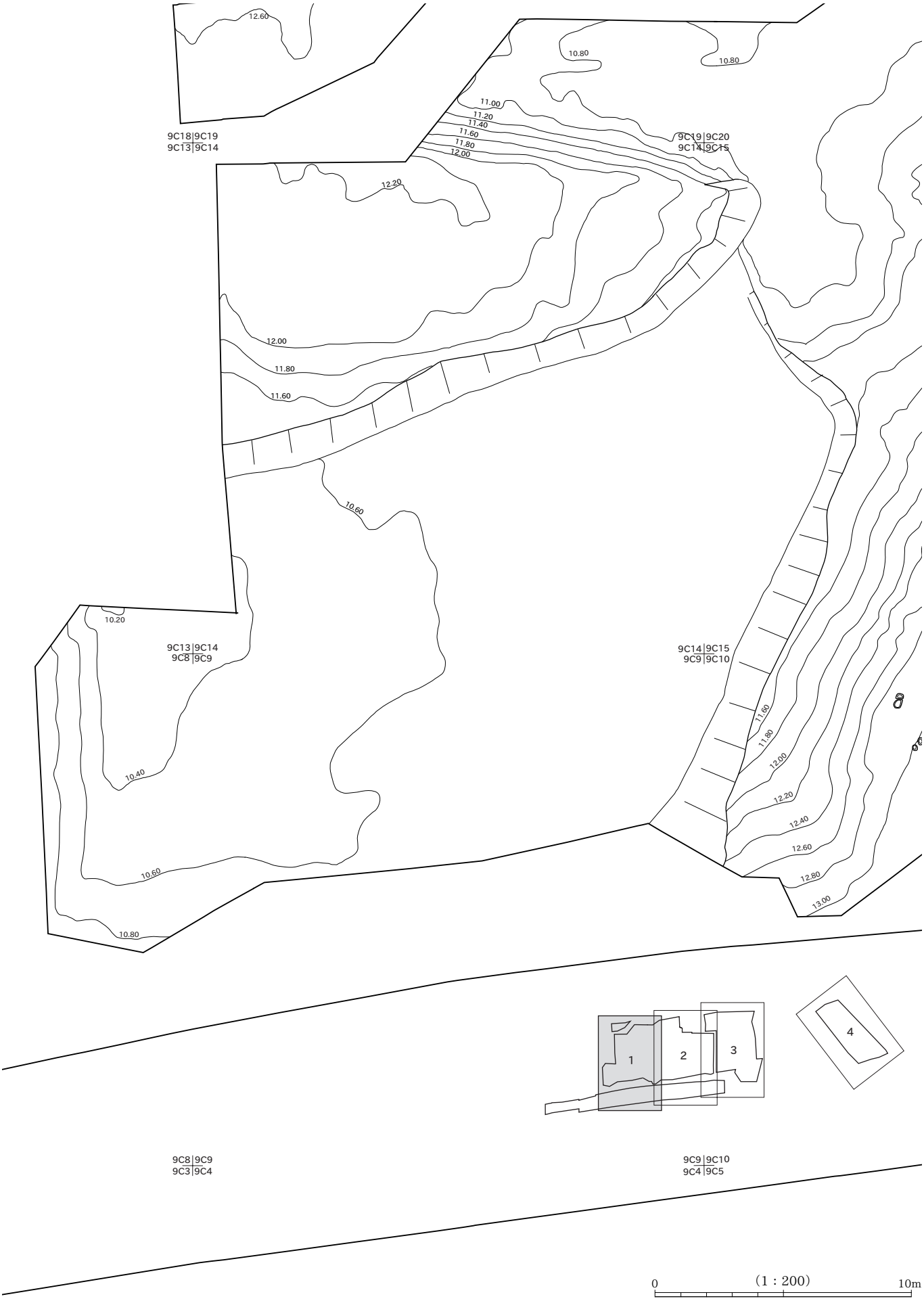

N
10C22|10C23
10C23|10C24
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
SK1(水東)
SE1(水東)
SK2(水東)
12.00


10C22|10C23
10C17|10C18
10C23|10C24
10C18|10C19
10C17|10C18
10C12|10C13
10C18|10C19
10C13|10C14
P1113
SE1104
P1103
P1104
SD1105
SD1106
P1339
SE1343
P1341
SK1338
P1107
SE1114
P1095
SD1110
P1109
P1097
P1098
SE1086
焼土
P1115
SD1112
P1345
P1101
SD1100
SK1102
SE1344
P1447
SE1465
SK1444
P1467
SK1466
P1469
SE1458
P1428
P1449
P1450
P1430
P1451
SB2
SK1446
P1437
P1434
SK1458
P1448
P1445
SK1444
SA1455
SB3
SE1470
P1442
P1443
SK1418
P1453
SK1463
SE1417
SA1456
SK1416
P1440
P1439
P1438
12.00
11.80
11.60
11.40
12.20
0
(1：200)
10m

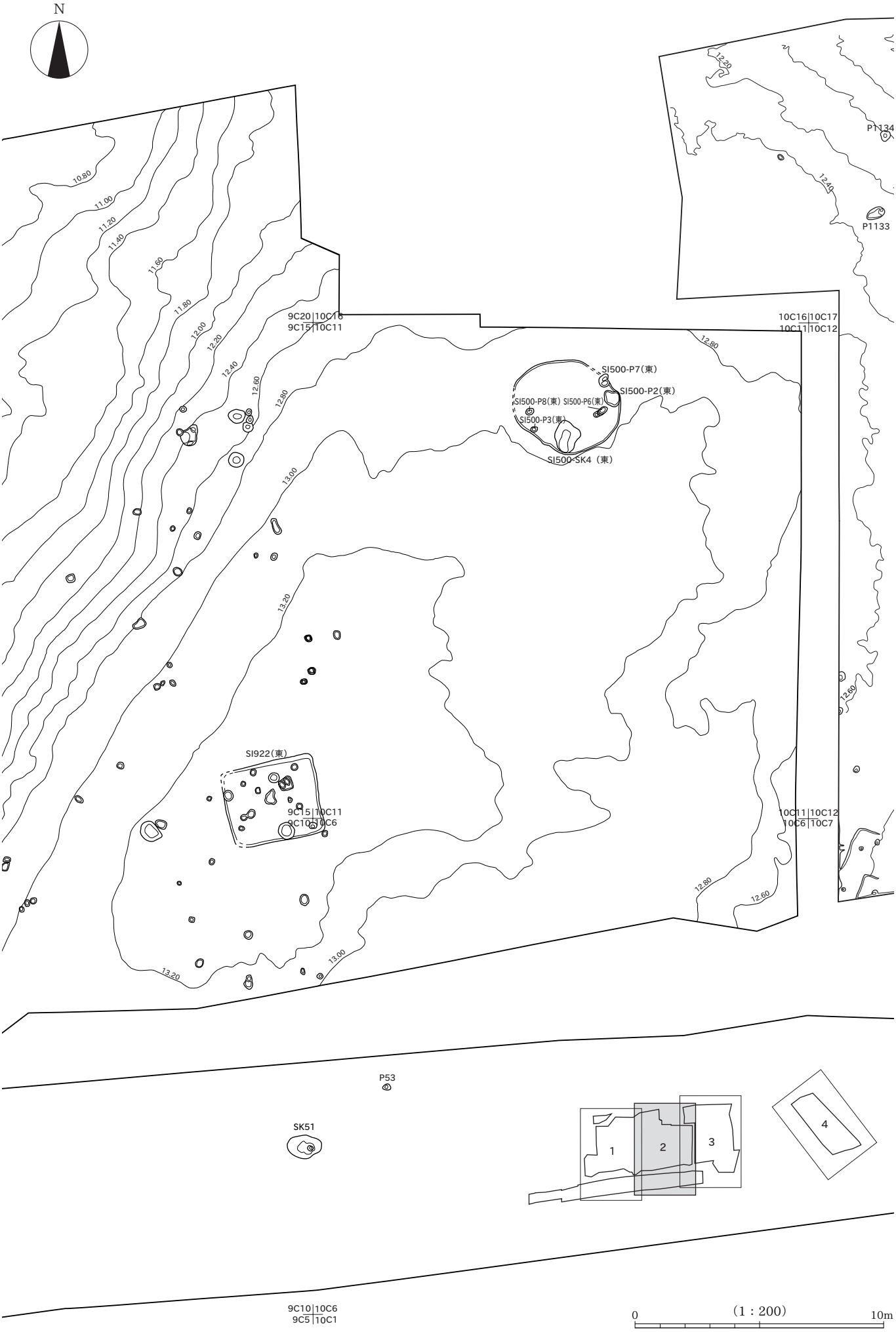
八反田遺跡遺構全体実測図（平安時代12）


N
SK303
SK304
10C25|11C21
10C20|11C16
10C20
10C15
10C20|11C16
10C15|11C11
11C16
11C11
10C15|11C11
10C10|11C6
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
0
(1：200)
10m


N
9C17
9C18
9C19
9C20
10C16
10C17
10C18
10C19
10C20
11C16
11C17
9C12
9C13
9C14
9C15
10C11
10C12
10C13
10C14
10C15
11C11
11C12
9C7
9C8
9C9
9C10
10C6
10C7
10C8
10C9
10C10
11C6
11C7
9C2
9C3
9C4
9C5
10C1
10C2
10C3
10C4
10C5
11C1
11C2
0
(1：600)
40m

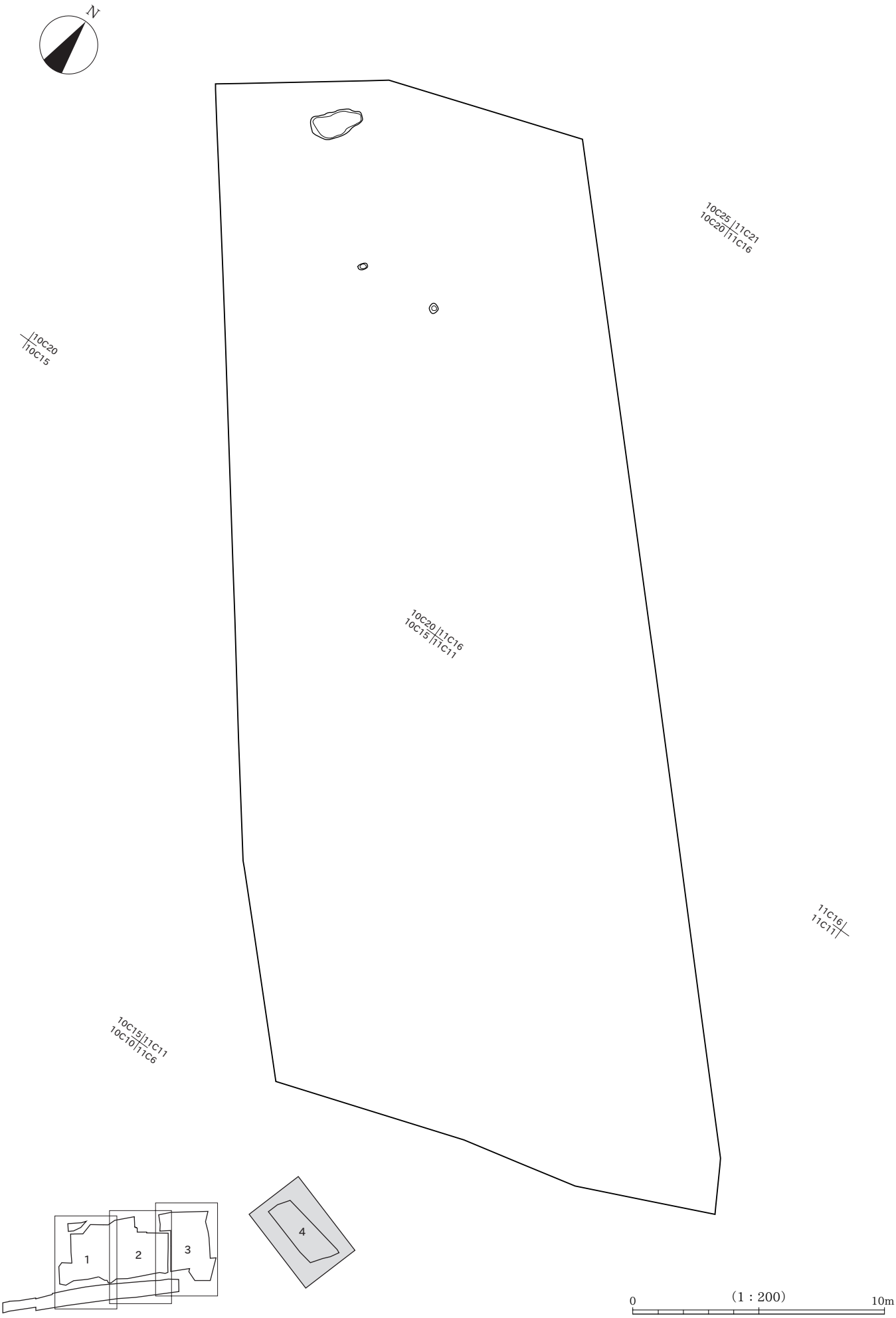

12.60
10.80
10.80
11.00
11.20
11.40
11.60
11.80
12.00
9C18|9C19
9C13|9C14
9C19|9C20
9C14|9C15
12.20
12.00
11.80
11.60
10.60
10.20
9C13|9C14
9C8|9C9
9C14|9C15
9C9|9C10
11.60
11.80
12.00
12.20
12.40
12.60
12.80
13.00
10.40
10.60
10.80
1
2
3
4
9C8|9C9
9C3|9C4
9C9|9C10
9C4|9C5
0
(1：200)
10m

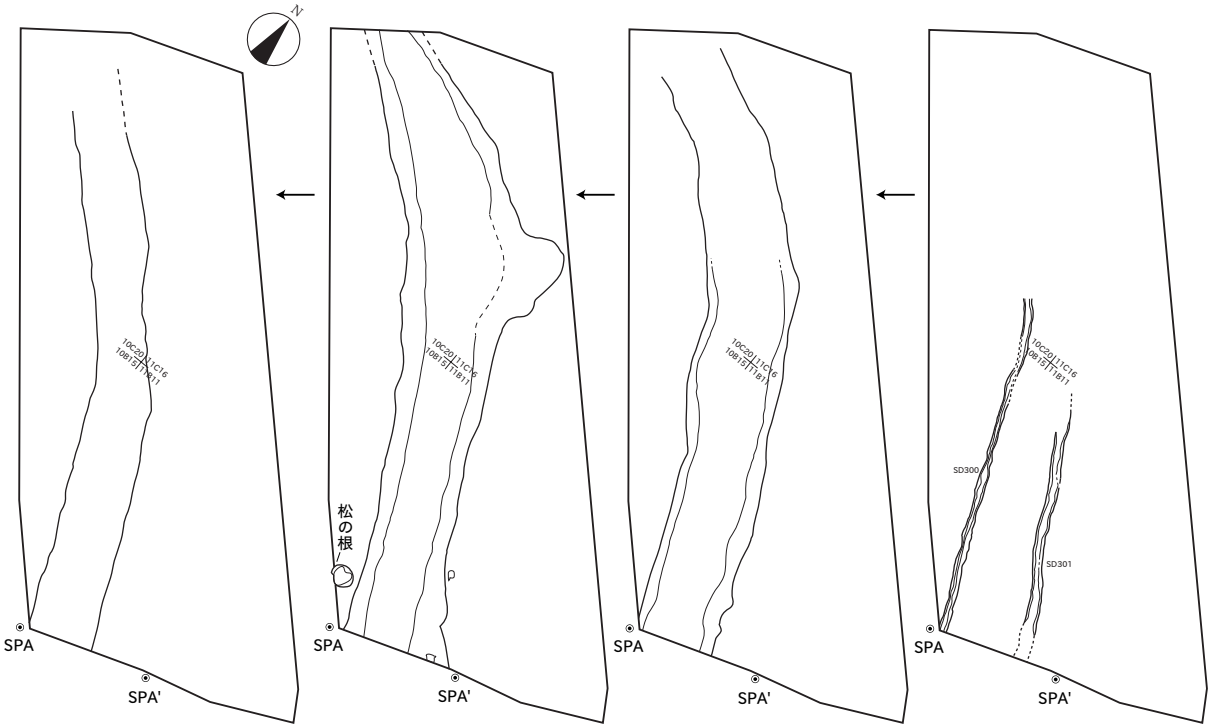
八反田遺跡遺構全体実測図（縄文時代２）



P1134
P1133
SX1135
SX1136
SI1471
SI1472
SI1313
10C16 10C17
10C11 10C12
10C17 10C18
10C12 10C13
10C11 10C12
10C6 10C7
10C12 10C13
10C7 10C8
1
2
3
4
0
(1：200)
10m

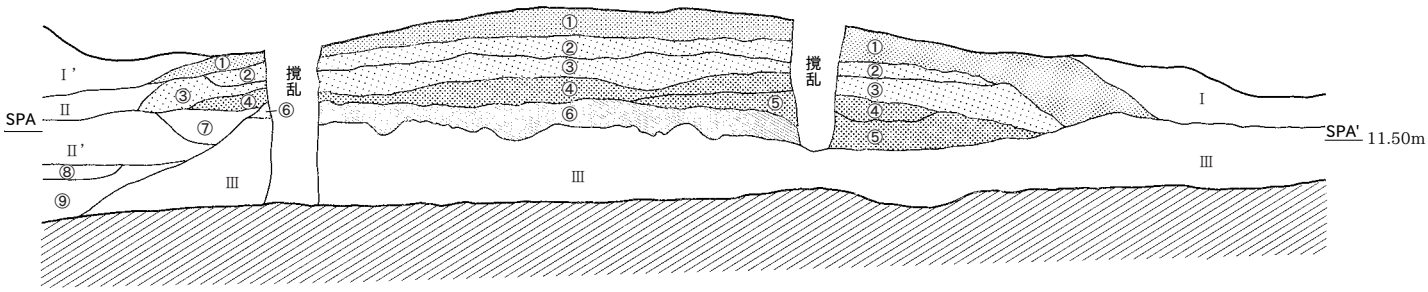
八反田遺跡遺構全体実測図（縄文時代４）





第1面（近・現代）　第2面（近世～）　第3面（近世）　第4面（近世）

0　（1：500）　20m

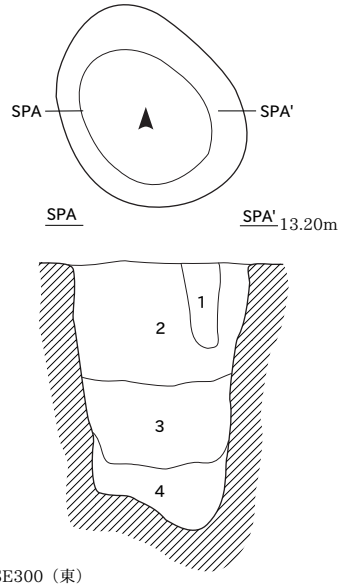


第1面　第2面　第3面　第4面

0　（1：60）　2m

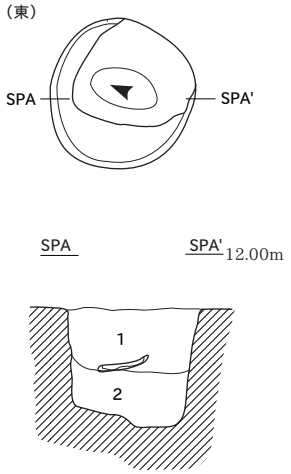
Ⅰ　灰黒褐色砂質土　水田耕作土。酸化鉄・炭化物含む。旧正善寺川河道。
Ⅰ'　赤黄褐色砂質土
Ⅱ　明黒褐色土
Ⅱ'　黄褐色砂質土
Ⅲ　灰黄褐色砂質土　旧正善寺川河道。
①　黄褐色砂質土　加賀街道第1面。
②　礫層　灰色粘土、黄褐色土混入。硬くしまる。加賀街道第2面。
③　暗黄褐色砂質土　小礫を含む。加賀街道第2面。
④　礫層　灰色粘土、黄褐色土混入。硬くしまる。加賀街道第3面。
⑤　暗黄褐色砂質土　小礫を含む。加賀街道第3面。
⑥　礫層　灰色粘土、黄褐色土混入。硬くしまる。加賀街道第4面。
⑦　黒褐色土　SD300覆土。加賀街道第4面。
⑧　灰黄褐色砂質土　Ⅱ'層に類似。SD302覆土。
⑨　灰黄褐色土　小礫を含む。SD302覆土。珠洲出土。

SE300（東）



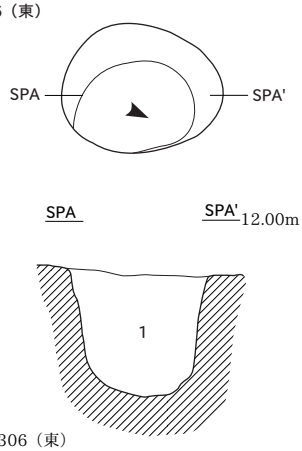
SE300（東）
1. 暗褐色シルト　炭化物含む。中世陶器含む。
2. 暗褐色シルト　灰白色シルト、黄褐色シルトブロック含む。
3. 褐色シルト　黄褐色・黒褐色シルトをブロック状に混入。
4. 黒褐色シルト　褐色シルトを混入。

SE303（東）



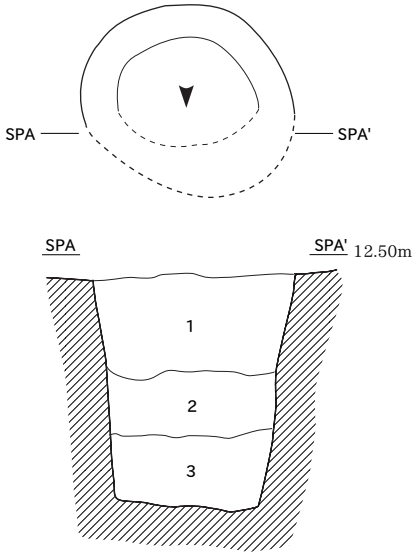
SE303（東）
1. 橙色砂　酸化鉄を多量に含む。
2. 灰黒砂質土　櫛、珠洲出土。

SE306（東）



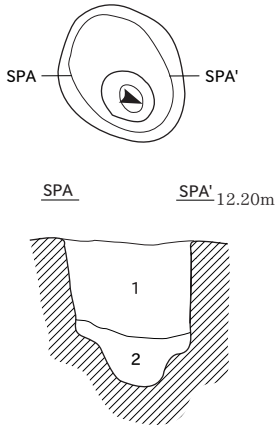
SE306（東）
1. 緑黒色砂質土　酸化鉄、緑灰色シルトブロック状に含む。

SE323（東）



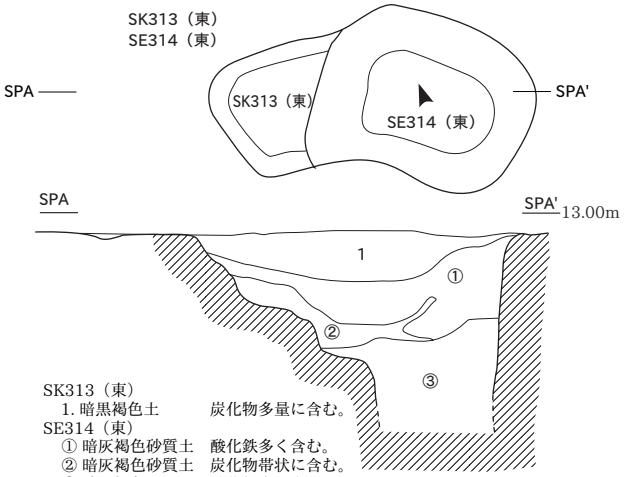
SE323（東）
1. 黄褐色砂質土
2. 灰色砂質土
3. 青灰砂質土　小量の黒灰色粘土ブロック状に含む。

SE307（東）



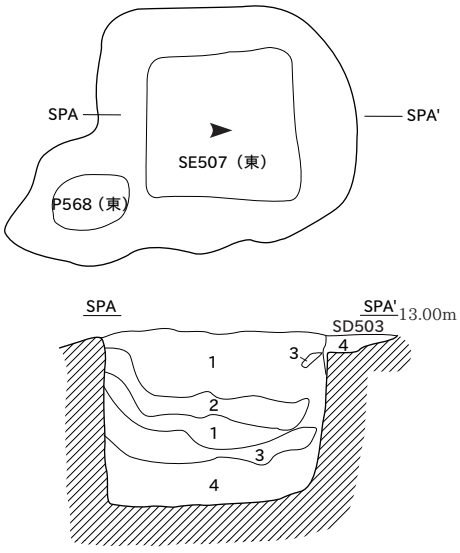
SE307（東）
1. 明褐色砂質土　酸化鉄多量に含む。
2. 黒褐色砂質土

SK313（東）
SE314（東）



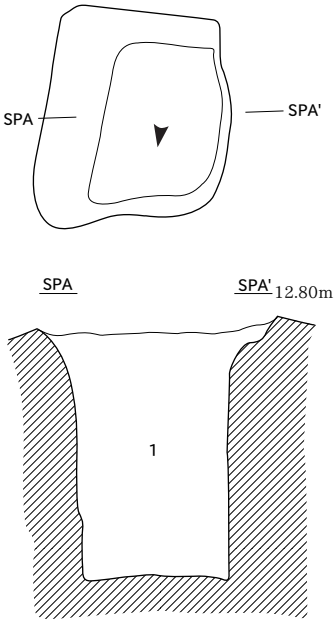
SK313（東）
1. 暗黒褐色土　炭化物多量に含む。
SE314（東）
① 暗灰褐色砂質土　酸化鉄多く含む。
② 暗灰褐色砂質土　炭化物帯状に含む。
③ 暗灰褐色シルト　酸化鉄多く含む。

SE507（東）



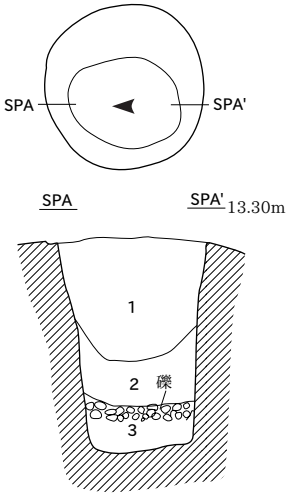
SE507（東）
1. 黒褐色土　黄褐色土の小ブロックを斑状に含む。
2. 黄灰砂
3. 黄灰砂
4. 黒褐色土

SE508（東）



SE508（東）
1. 黒色土　平山層をブロック状に含む。

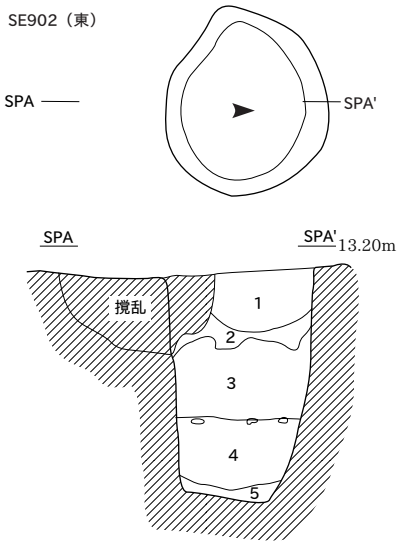
SE900（東）



SE900（東）
1. 黒褐色土　黄褐色土を小量含む。黄砂を極小量含む。
2. 黒褐色土　黄褐色土を多量に含む。黄砂を小量含む。
3. 黒褐色土　黄褐色土を多量に含む。黄砂を小量含む。上面に径5cmの自然礫を多量に含む。

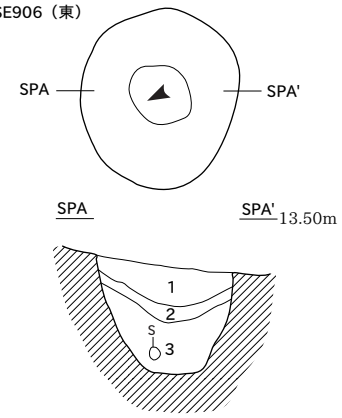
0　（1：40）　2m

SE902（東）



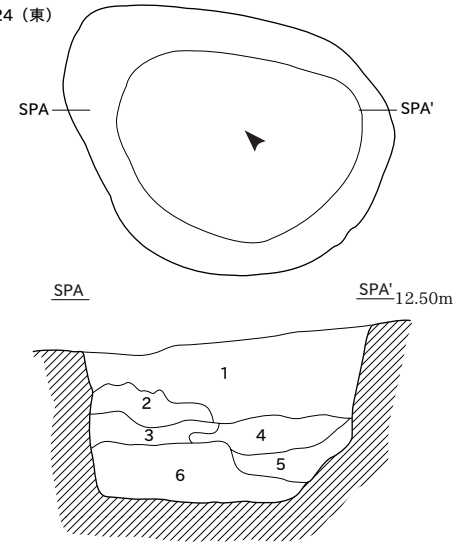
SE902（東）
1. 黒褐色土　黄褐色土を小量含む。黄砂を極小量含む。
2. 黒褐色土　極小量の黄灰色砂質土、青灰砂質土を含む。
3. 黄灰色土　青灰砂質土ブロック状に含む。
4. 黒褐色土　極小量の黄灰色シルト、青灰色シルトを含む。
　　上面に径4cmの自然礫を少量含む。
5. 黒色土　　ロームブロックを小量含む。

SE906（東）



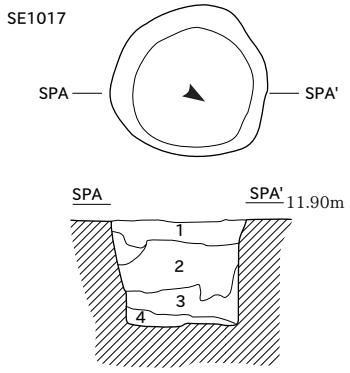
SE906（東）
1. 黒色土　1～6mmの炭化物含む。
2. 炭化物層
3. 黒色土　1～6mmの炭化物含む。

SE924（東）



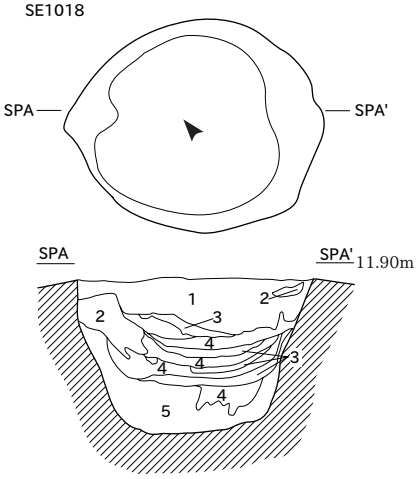
SE924（東）
1. 黒色土　　1～4mmの炭化物含む。酸化。
2. 黒色土　　1～4mmの炭化物含む。
3. 灰白色粘土
4. 黒色土　　1～4mmの炭化物多量に含む。
5. 黒色土
6. 暗灰色粘土　黒色土を多量に含む。

SE1017



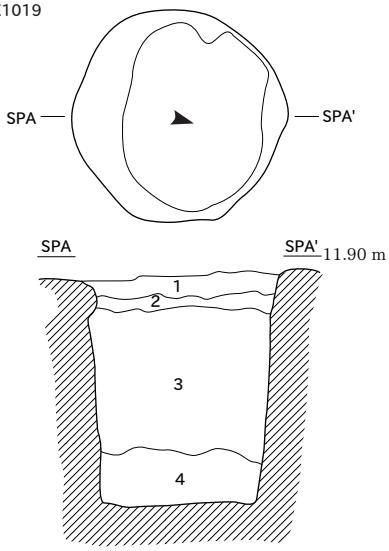
SE1017
1. 灰黄褐色土
2. 暗灰黄褐色土
3. 灰色粘土　　酸化鉄を含む。
4. 灰黄色砂質土　酸化鉄を含む。

SE1018



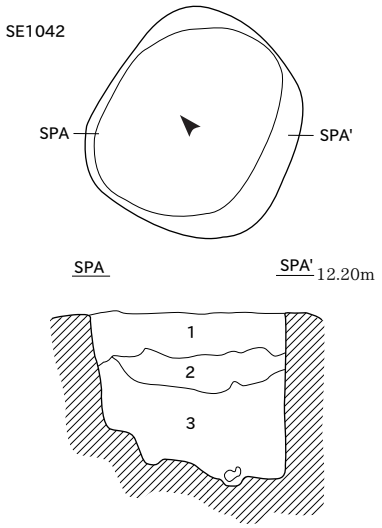
SE1018
1. 灰黄褐色砂質土　酸化鉄を含む。
2. 灰白色砂質土　　酸化鉄を含む。
3. 灰色粘質土　　炭化物を多量に含む。
4. 暗灰色粘質土　　炭化物を小量含む。
5. 灰黄色砂質土　　酸化鉄含む。

SE1019



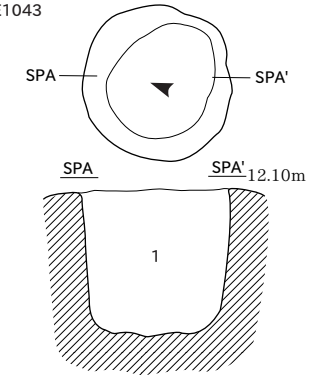
SE1019
1. 灰黄褐色砂質土　　酸化鉄を含む。
2. 暗灰黄褐色シルト　酸化鉄を含む。
3. 暗灰色粘質土　　炭化物を含む。
4. 暗灰色粘質土　　炭化物を含む。

SE1042



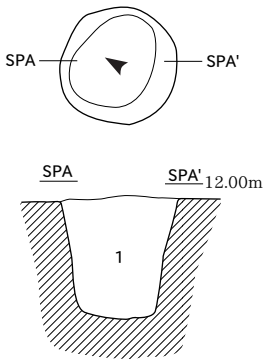
SE1042
1. 灰色シルト　　灰白色シルトを斑状に含む。酸化鉄を含む。
2. 暗灰色シルト　灰白色シルト斑状に含む。炭化物小量含む。
3. 暗灰色シルト　酸化鉄を含む。炭化物小量含む。

SE1043



SE1043
1. 灰色シルト　灰白色シルトを斑状に含む。
　　酸化鉄を含む。

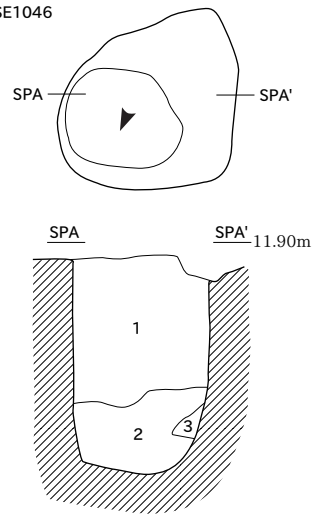
SE1044



SE1044
1. 灰色シルト　灰白色シルトを斑状に含む。
　　酸化鉄を含む。

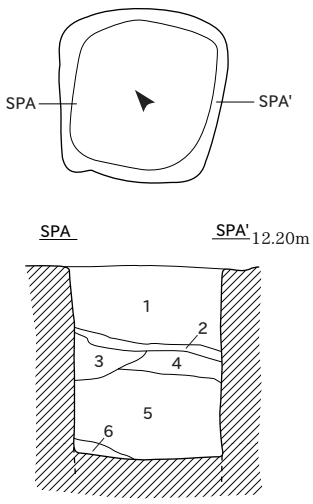
0　（1：40）　2m

SE1046



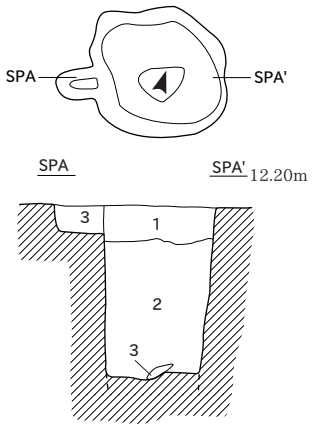
SE1046
1. 灰色シルト　灰白色シルトを斑状に含む。酸化鉄を含む。小石、炭化物少量含む。
2. 暗灰色シルト　炭化物多量に含む。漆塗り椀出土。
3. 灰色シルト　酸化鉄を含む。

SE1216



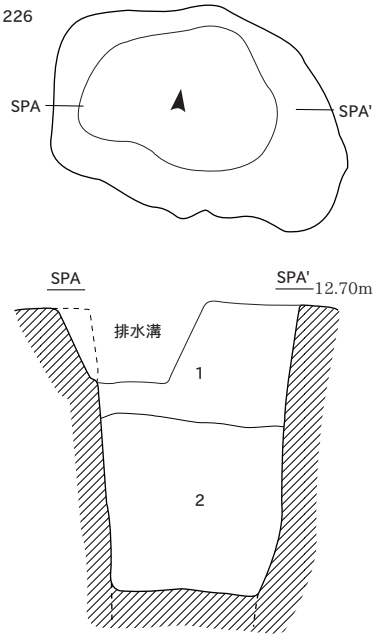
SE1216
1. 灰白色粘質土
2. 炭化物層
3. 暗青灰色粘質土　酸化鉄含む。
4. 暗青灰色粘質土
5. 暗青灰色粘質土　にぶい灰白色粘質土ブロック含む。
6. にぶい灰白色粘質土

SE1217



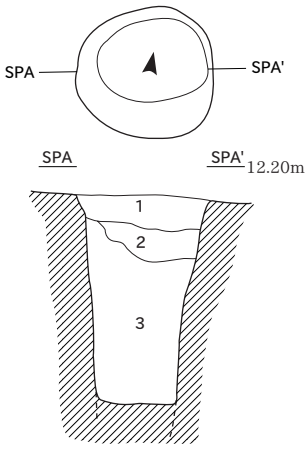
SE1217
1. 灰白色粘質土
2. 暗緑灰色粘質土　明緑灰色粘質土の小ブロックを含む。
3. 灰色粘質土

SE1226



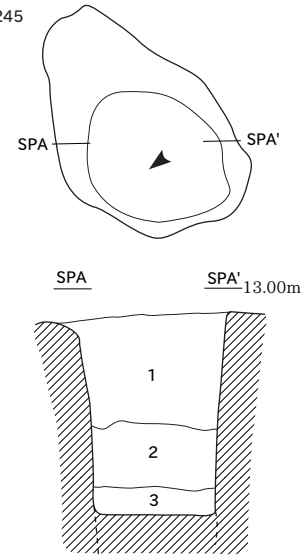
SE1226
1. 青灰砂質土　暗褐色砂質土多量に含む。炭化物極小量含む。
2. 暗青灰色粘土　ロームブロックを含む。

SE1218



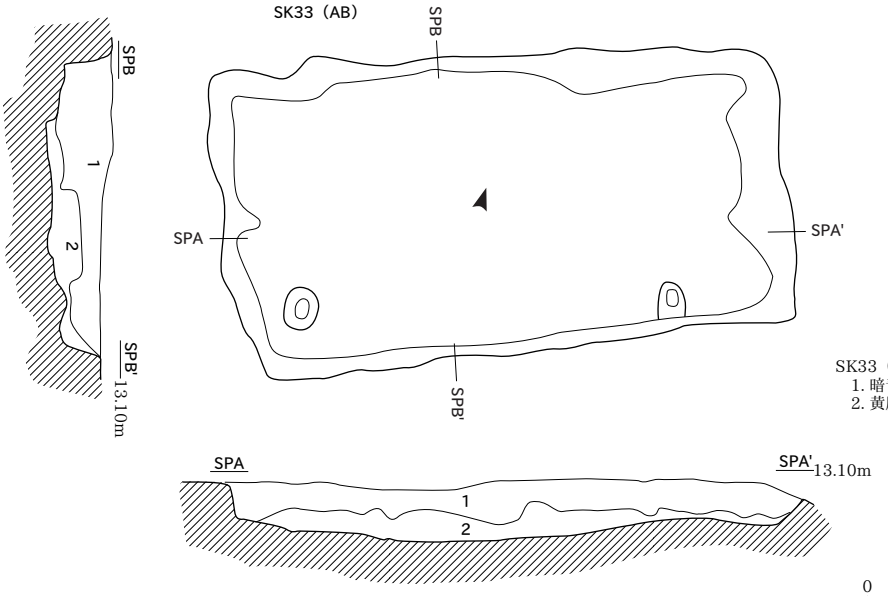
SE1218
1. 灰白色粘質土
2. 暗緑灰色粘質土
3. 緑黒色粘質土

SE1245



SE1245
1. 暗褐色砂質土
2. 青灰色砂質土
3. 青灰色粘質土

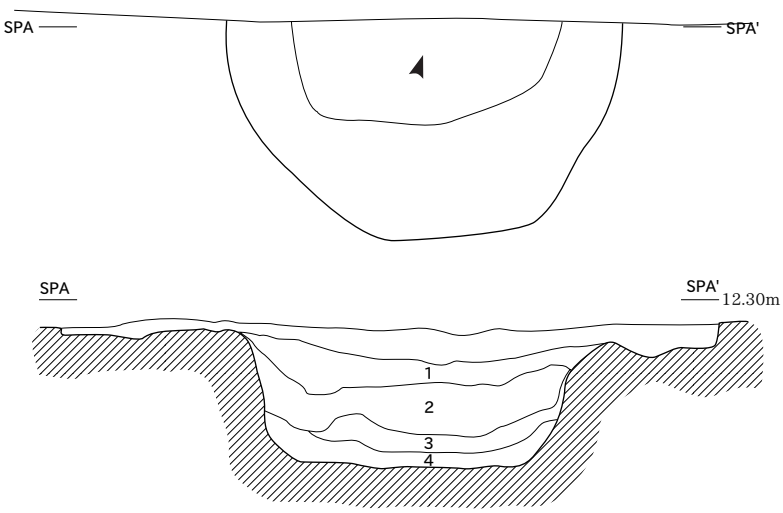
SK33（AB）



SK33（AB）
1. 暗青灰色土　炭化物を含む。
2. 黄灰褐色粘質土　暗青灰色土ブロックを含む。

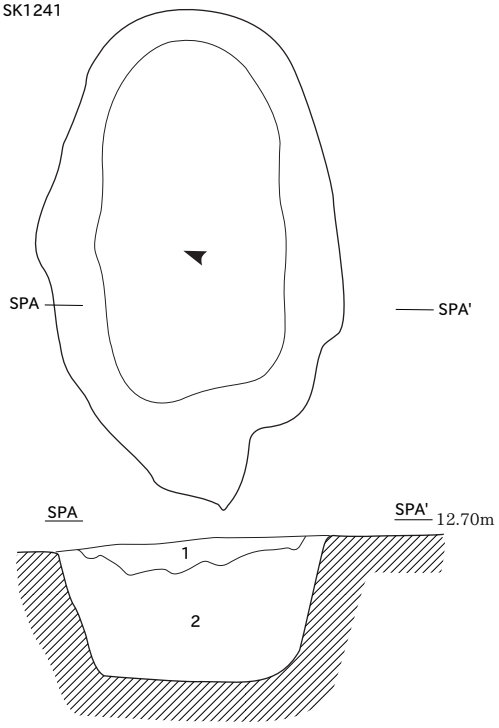
0　（1：40）　2m

SK1211（東）



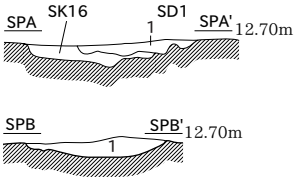
SK1211（東）
1. 灰黄褐色土
2. 灰黄褐色土　炭化物多量に含む。珠洲、糸巻き出土。
3. 灰黄褐色土　酸化鉄含む。
4. 灰白色土　炭化物含む。

SK1241



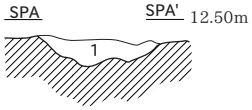
SK1241
1. 明黄褐色砂質土
2. 青灰色砂質土　酸化鉄多量に含む。

SD1（AB）



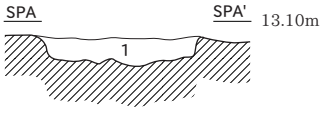
SD1（AB）
1. 黒褐色土　灰色粘土ブロック、ロームブロック含む。
炭化物小量含む。

SD302（東）

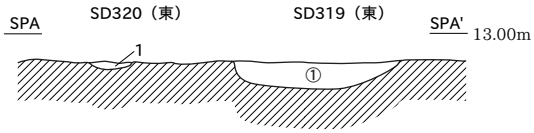


SD302（東）
1. 暗青灰砂　酸化鉄を帯状に含む。

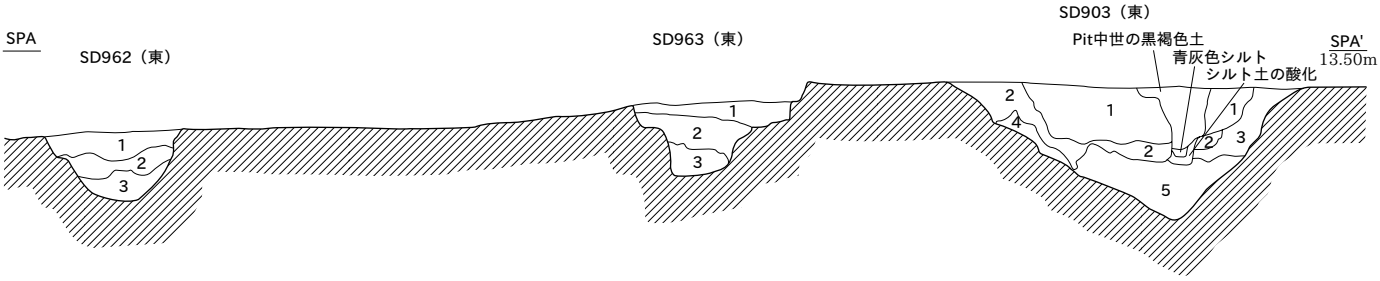
SD311（東）



SD311（東）
1. 暗褐色砂質土　酸化鉄、青灰色砂をブロック状に含む



SD319（東）
① 暗青褐色砂質土　炭化物小量含む。
SD320（東）
1. 暗青褐色砂質土　炭化物小量含む。



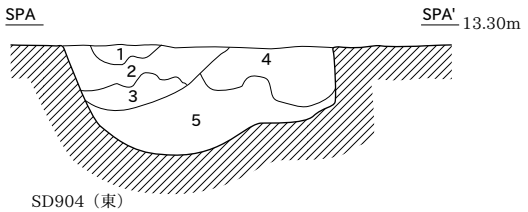
SD962（東）
1. 青灰砂質土　黒色土ブロック大量に含む。
2. 黄褐色砂質土　茶褐色土極少量含む。
3. 黄褐色砂質土

SD963（東）
1. 黒褐色土　茶褐色土を多量に含む。
2. 黒褐色土　茶褐色土、青灰色粘土ブロック多量に含む。
3. 青灰色シルト

SD903（東）
1. 黒褐色砂質土
2. 黄褐色砂質土　青灰色シルトブロック含む。
3. 黒褐色砂質土　黄褐色砂質土多量に含む。
4. 青灰砂質土　黒色土ブロック大量に含む。
5. 黄褐色砂質土

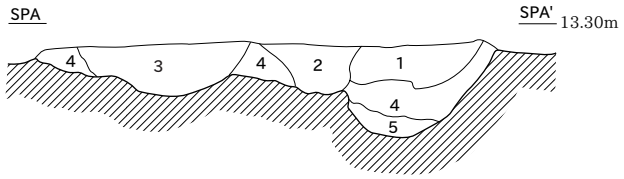
0　（1：40）　2m

SD904（東）

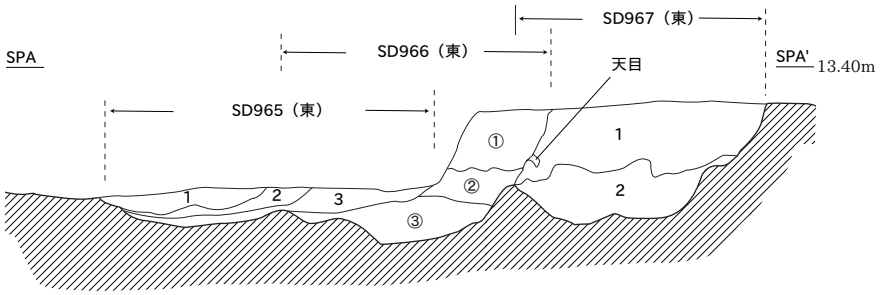


SD904（東）
1. 黒褐色土
2. 黄褐色土
3. 黄褐色土　酸化した砂を多量に含む。
4. 黄褐色土　青灰色砂質土、黄灰色砂質土多量に含む。
5. オリーブ灰色砂

SD905（東）



SD905（東）
1. 黒褐色土　　ローム多量に含む。
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土　　黄褐色砂質土ブロック状に少量含む。
4. 黄褐色砂質土　白色粘土ブロック状に多量に含む。
5. 青灰色砂

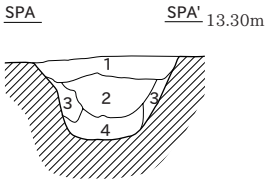


SD965（東）
1. 青灰色粘土
2. 灰黄褐色シルト　ビニール、ガラス片出土
3. 灰黄褐色シルト　3cm大の多量の自然礫が敷き詰めたように出土。

SD966（東）
① 黒褐色砂質土
② 黒褐色砂質土　青灰色粘土ブロック含む。
③ 褐灰色砂

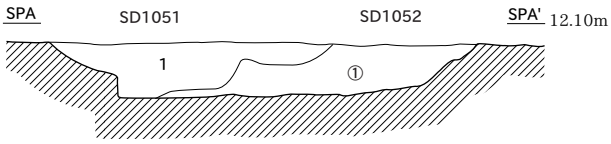
SD967（東）
1. 黄褐色砂質土
2. 黄褐色砂質土　青灰色粘土ブロック多量に含む。

SD961（東）



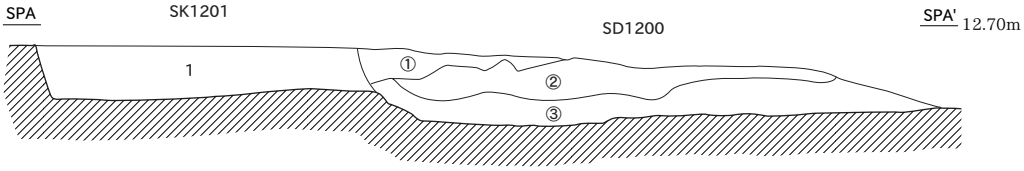
SD961（東）
1. 黄褐色砂質土　青灰色砂質土を多量に含む。
2. 黄褐色砂質土　青灰色砂質土を大量に含む。
3. 青灰色粘土　　黄褐色粘土（壁崩壊土）
4. 青灰色砂質土

SD1051
SD1052



SD1051
1. 灰色砂質土　灰白色土を斑状に含む。酸化鉄を含む。

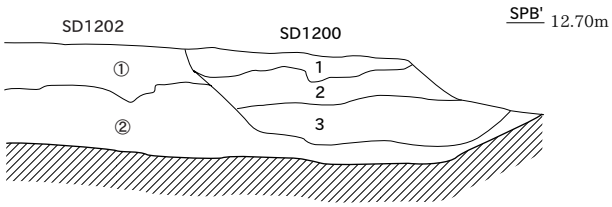
SD1052
① 灰色砂質土　酸化鉄を含む。



SD1200
① 暗褐色砂質土　　青灰色砂質土をブロック状に含む。
② 青灰色砂質土　　酸化鉄多量に含む。
③ 青灰色砂質土

SK1201
1. 明黄褐色砂質土　青灰色砂質土の大ブロックを含む。

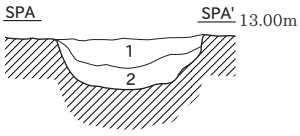
SD1200
SD1202



SD1200
1. 暗褐色砂質土
2. 青灰色砂質土　酸化鉄多量に含む。
3. 青灰色砂質土

SD1202
① 明黄褐色砂質土
② 青灰色砂質土　灰白色粘質土ブロックを含む。

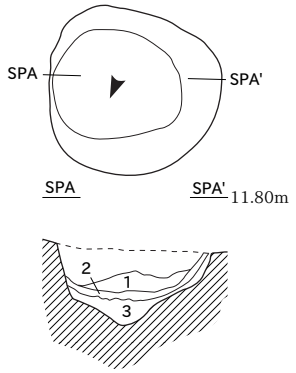
SD1215（東）



SD1215（東）
1. 明黄褐色砂質土
2. にぶい黄橙色砂質土

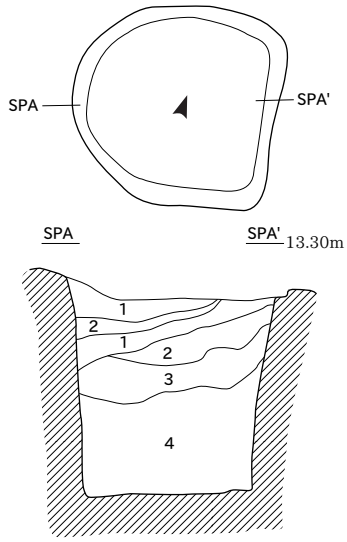
0　（1：40）　2m

SE335（東）



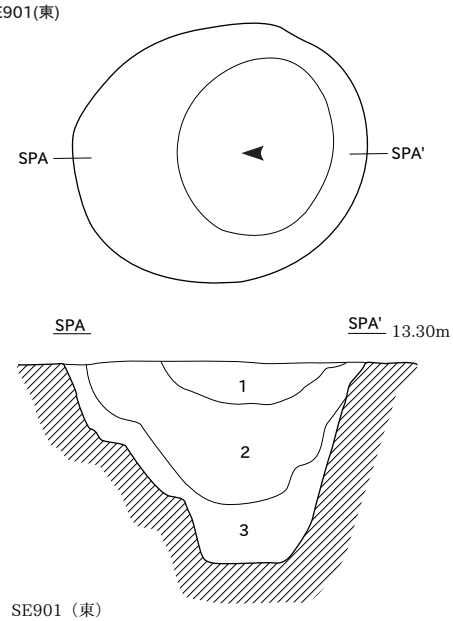
SE335（東）
1. 黒色土　植物腐植土
2. 黒色土　植物腐植土
3. 青灰色粘土　極小量炭化物含む。

SE505（東）



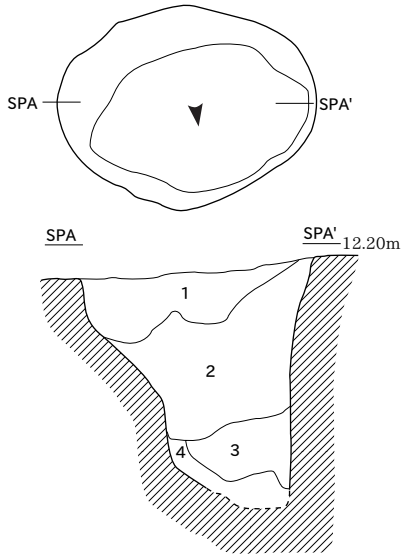
SE505（東）
1. 黒褐色土　黄褐色土大量に含む。
2. 黒褐色土　小量の黄褐色土をブロック状に含む。
3. 黄褐色土
4. 黒褐色土

SE901(東)



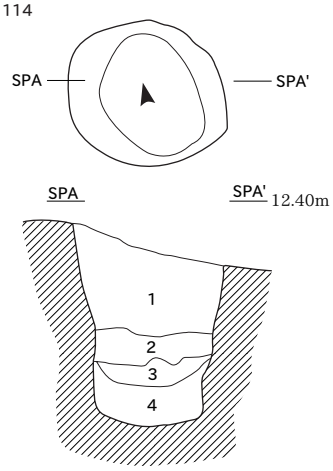
SE901（東）
1. 黒褐色土　小量の黄灰色砂質土、青灰色砂質土を含む。
2. 黒褐色土　小量の黄灰色シルト、青灰色シルトを含む。
3. 黒褐色土　極小量の黄灰色シルト、青灰色シルトを含む。

SE1086



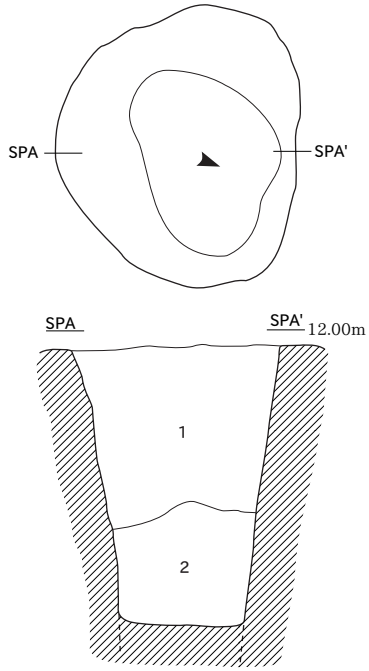
SE1086
1. 灰白色シルト　酸化鉄を含む。炭化物小量含む。
2. 暗灰黄色シルト　酸化鉄を含む。炭化物小量含む。灰白色シルト小量含む。
3. 暗灰黄色シルト　酸化鉄含む。小石を含む。
4. 暗青灰色粘土　酸化鉄を含む。

SE1114



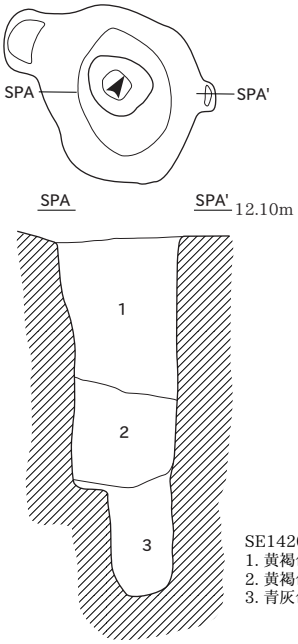
SE1114
1. 明褐色砂質土　酸化鉄多量に含む。
2. 明褐色シルト　酸化鉄小量含む。
3. 黒褐色シルト　炭化物を含む。
4. 明褐色シルト　小石を小量含む。

SE1419



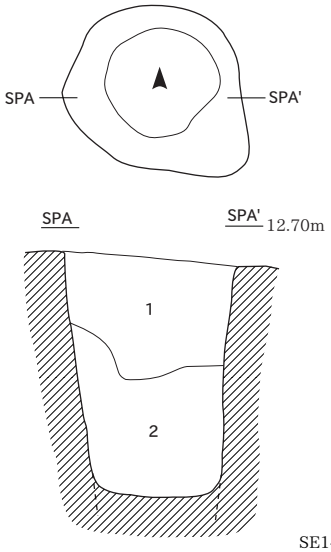
SE1419
1. 明灰白色シルト　暗青灰色シルトを斑状に含む。酸化鉄を含む。
2. 暗青灰色粘土

SE1420



SE1420
1. 黄褐色土　暗褐色土、黒色土斑状に少量含む。
2. 黄褐色土　暗褐色土、黒色土斑状に多量に含む。
3. 青灰色粘質土　炭化物小量含む。酸化鉄含む。

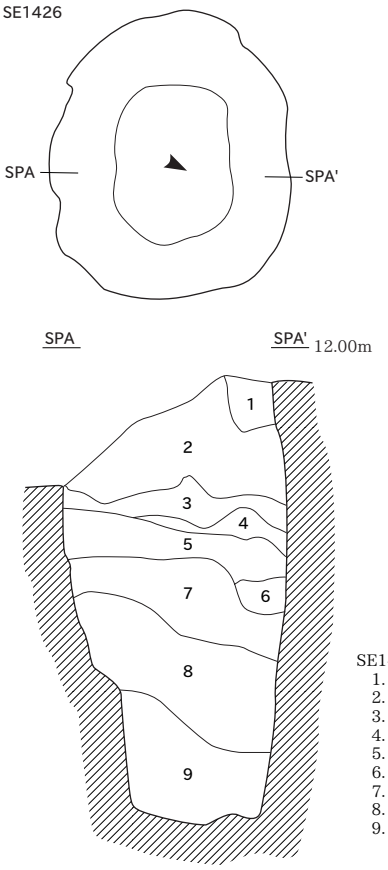
SE1425



SE1425
1. 褐色土　黄褐色シルト斑状に含む。
2. 褐色土　暗青灰色シルト斑状に含む。

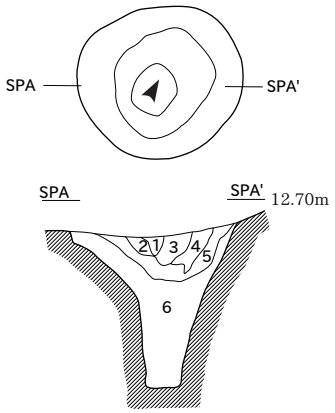
0　（1：40）　2m

SE1426



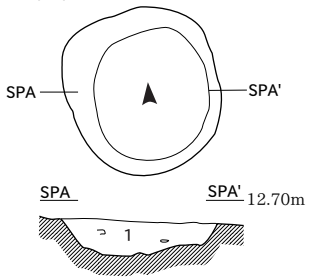
SE1426
1. 灰白色シルト　褐色土小量含む。
2. 暗褐色土橙色シルト　灰色土、黄橙色土斑状に含む。
3. 暗褐色シルト　橙色土小量、灰色土多量、黄橙色土小量斑状に含む。
4. 黄橙色シルト　褐色土小量含む。
5. 黄橙色シルト　暗褐色土斑状に含む。
6. 黄橙色シルト　暗褐色土斑状に多量に含む。
7. 灰白色粘土
8. 灰白色粘土　灰色土、黒色土をブロック状に含む。
9. 緑白色粘土　灰色土、黒色土をブロック状に含む。

SB1-SK2



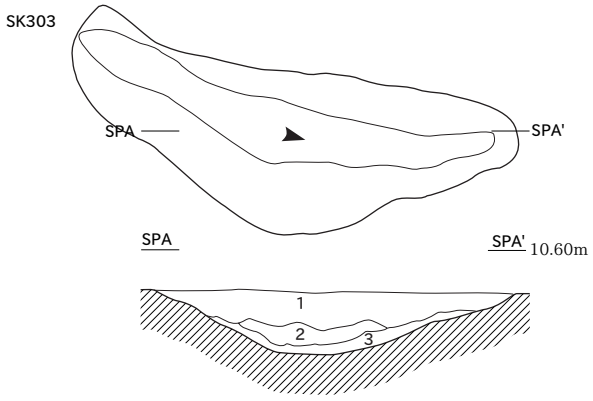
SB1-SK2
1. 黒色土　炭化物を含む。
2. 黒褐色土　炭化物含む。
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土　暗青灰色土ブロック状に含む。
5. 明青灰色粘質土　炭化物含む。
6. 暗青灰色土粘質土　炭化物含む。

SK3（AB）



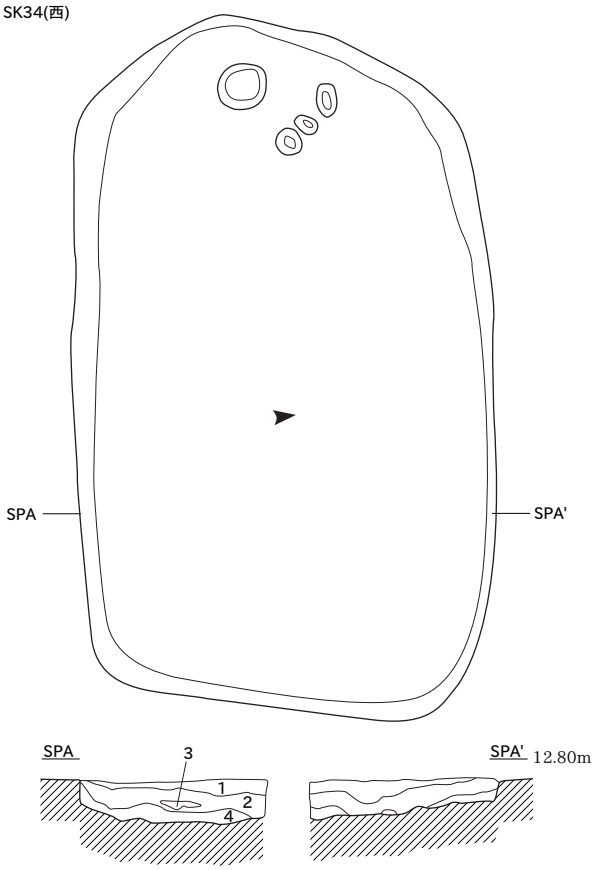
SK3（AB）
1. にぶい青灰色土　フイゴ羽口、土師器、須恵器出土。

SK303



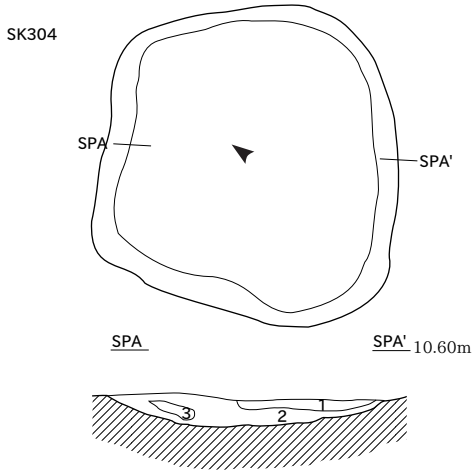
SK303
1. 黒褐色土　炭化物含む。
2. 暗黒褐色土
3. 灰黒褐色土

SK34(西)



SK34（西）
1. 灰色砂質土　青灰色砂質土をブロック状に含む。
2. 灰色砂質土　炭化物小量含む。
3. 黒灰色砂
4. 青灰色土　灰色砂質土小量含む。

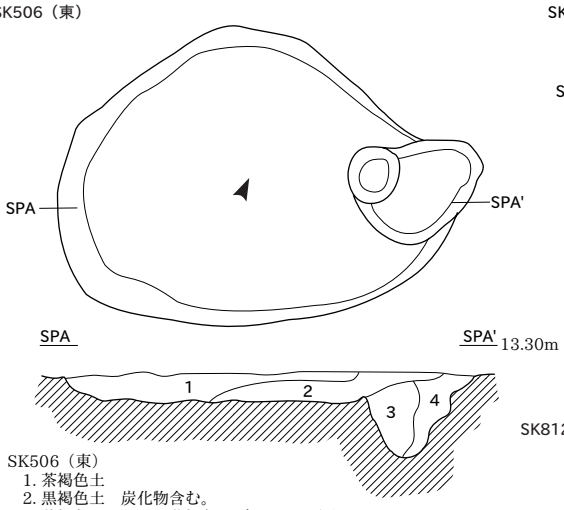
SK304



SK304
1. 暗灰色土
2. 灰黒褐色土
3. 灰黄色砂質土

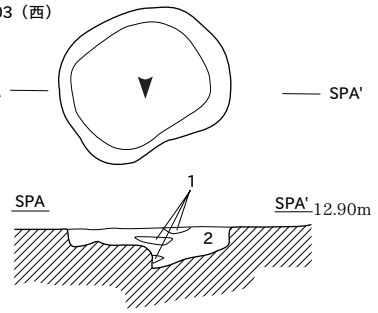
0　（1：40）　2m

SK506（東）



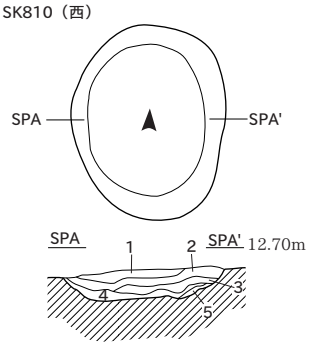
SK506（東）
1. 茶褐色土
2. 黒褐色土　炭化物含む。
3. 茶褐色土　小量の黄褐色土ブロックを含む。
4. 茶褐色土　多量の黄褐色土ブロックを含む。

SK803（西）



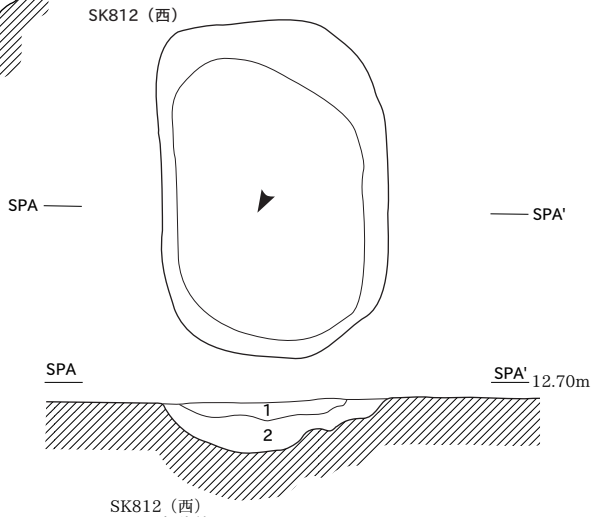
SK803（西）
1. 緑白色土
2. 赤紫色粘質土　炭化物を小量含む。

SK810（西）



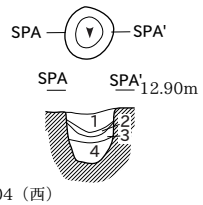
SK810（西）
1. 灰色土　青灰色砂質土斑状に含む。
2. 灰黒色砂質土　炭化物極小量含む。
3. 青灰色土　灰黒色土ブロック状に含む。
4. 灰色土

SK812（西）



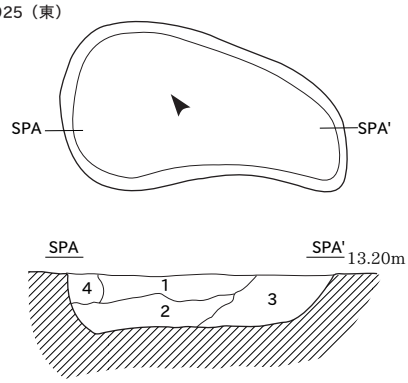
SK812（西）
1. 灰色砂質土
2. 青灰色砂質土　灰色砂質土を多量に含む。

SK804（西）



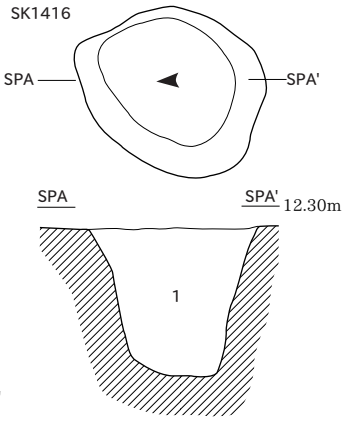
SK804（西）
1. 暗赤紫色土　炭化物多量に含む。
2. 緑白色土　炭化物小量含む。
3. 炭化物層
4. 暗緑白色土

SK925（東）



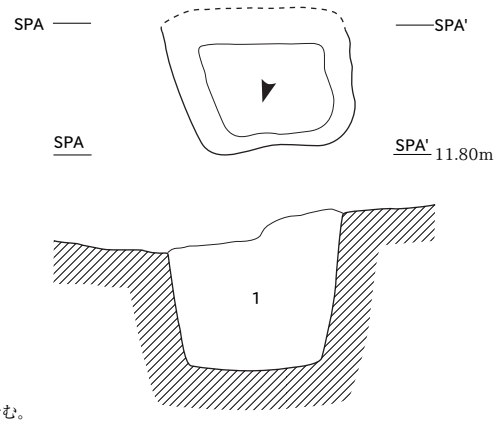
SK925（東）
1. 黒色土
2. 黒色土　酸化鉄含む。炭化物極小量含む。
3. 黒色土　酸化鉄含む。炭化物、ロームブロック極小量含む。
4. 黒色土　黄褐色砂を多量に含む。

SK1416



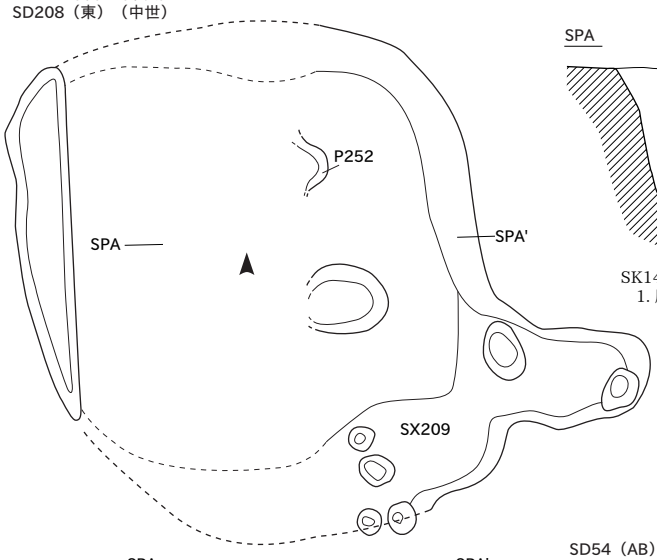
SK1416
1. 灰白色シルト　酸化鉄斑状に含む。

SK1456

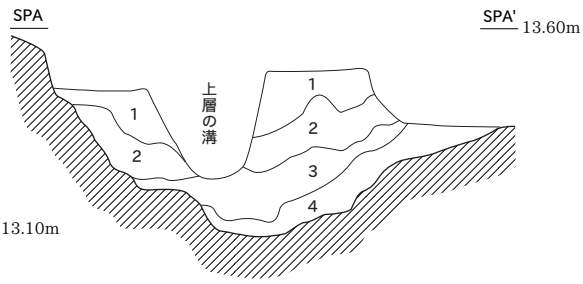


SK1456
1. 褐色土　黄褐色シルト斑状に含む。

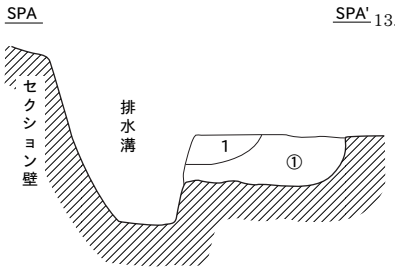
SX209（東）（平安）
SD208（東）（中世）



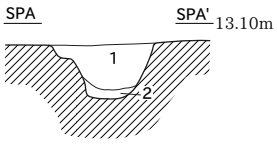
SD60（AB）



SD54（AB）



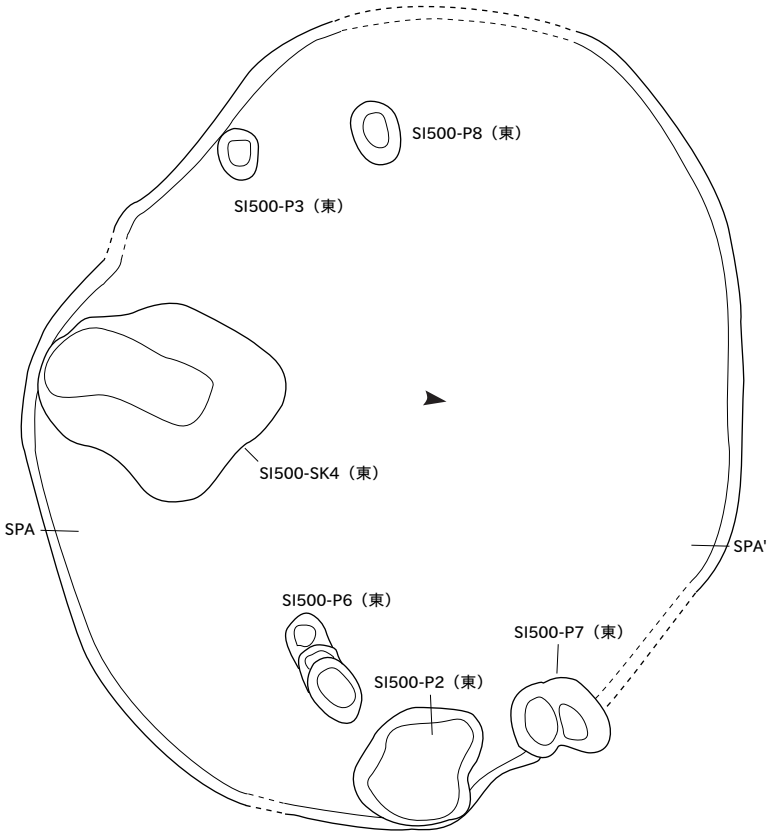
SX209（東）
① にぶい黄橙色土　橙色土をブロック状に含む。
SD208（東）
1. にぶい黄橙色土

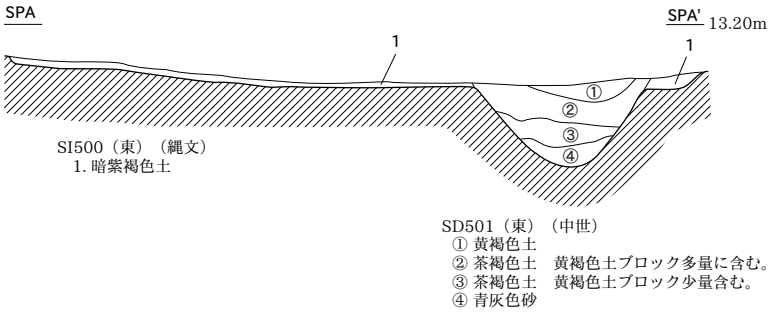


SD54（AB）
1. 黄灰色砂
2. 灰色粘土　黄灰色砂を小量含む。

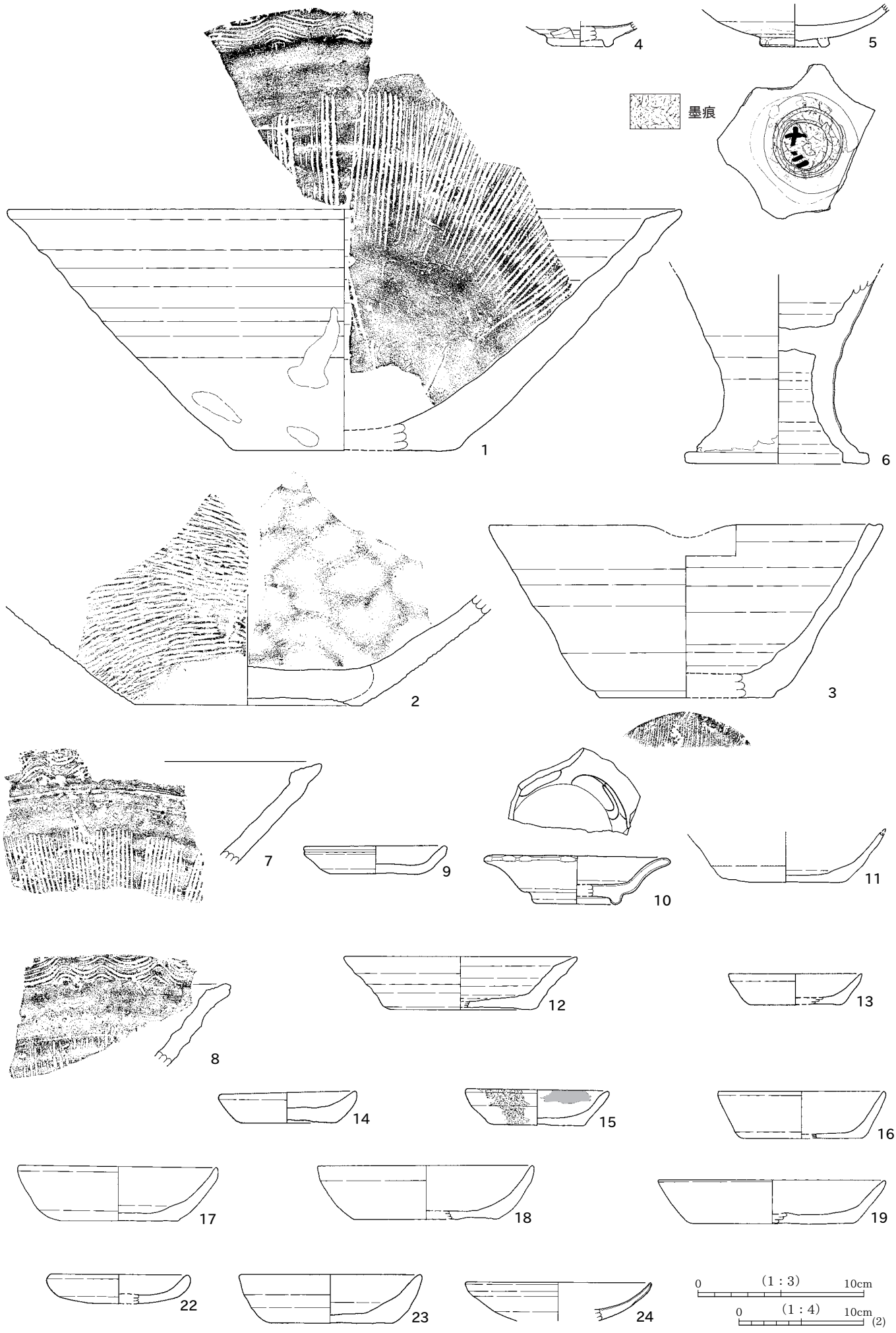
SD60（AB）
1. 褐色シルト
2. 灰褐色シルト　粘土ブロックを含む。
3. にぶい灰褐色砂質土
4. 灰色粘質土

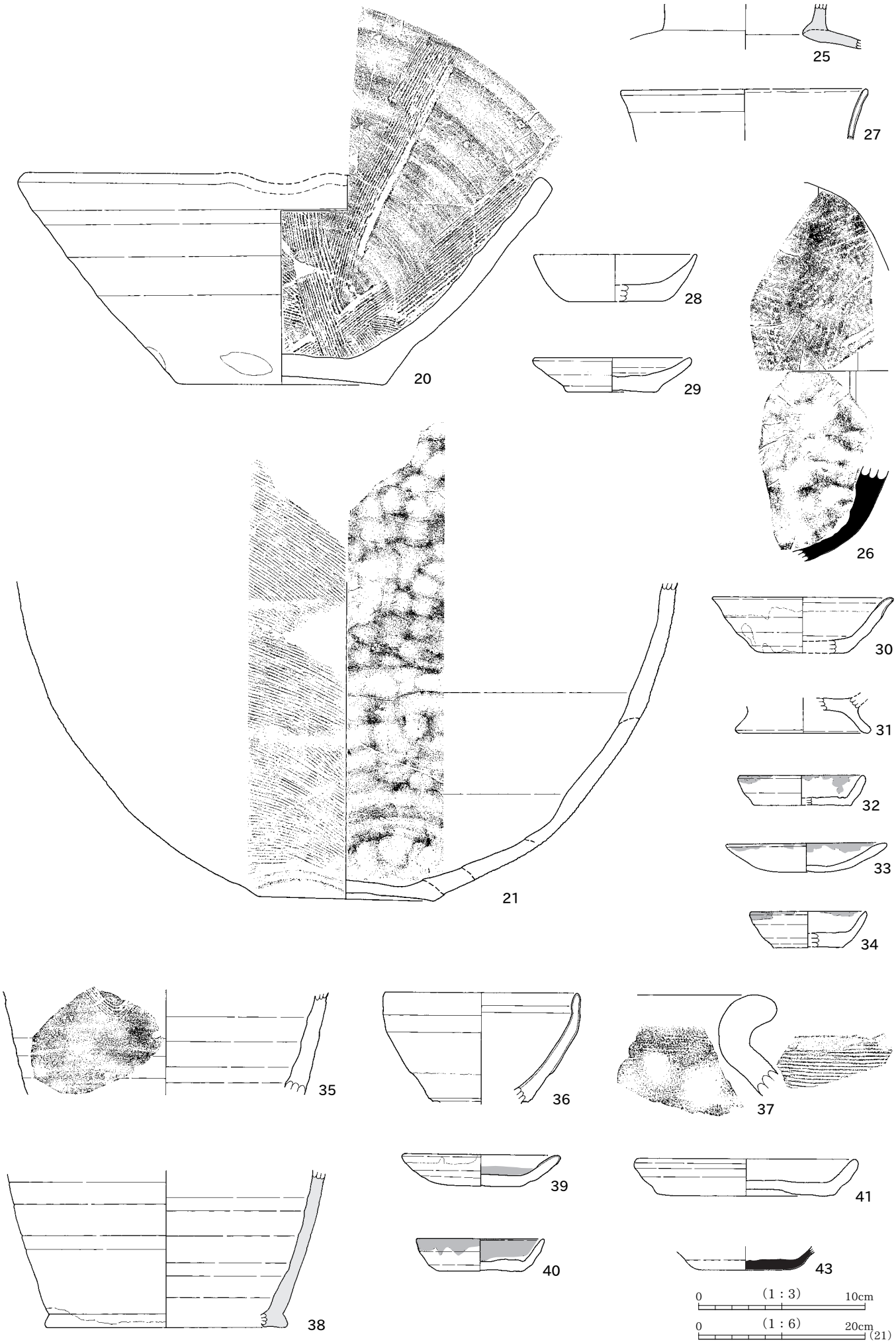
0　（1：40）　2m

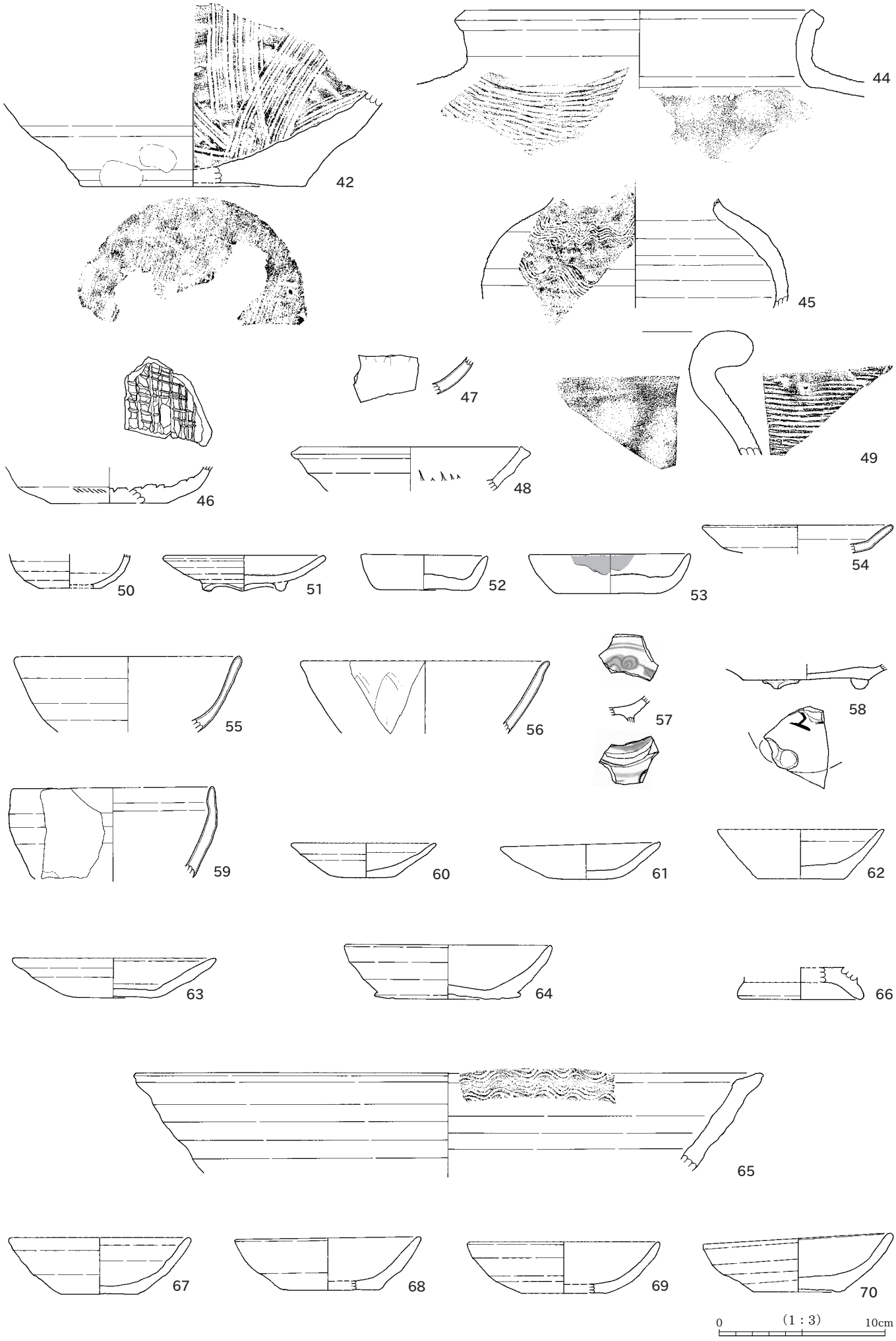

SI500-P8（東）
SI500-P3（東）
SI500-SK4（東）
SPA
SPA'
SI500-P6（東）
SI500-P7（東）
SI500-P2（東）

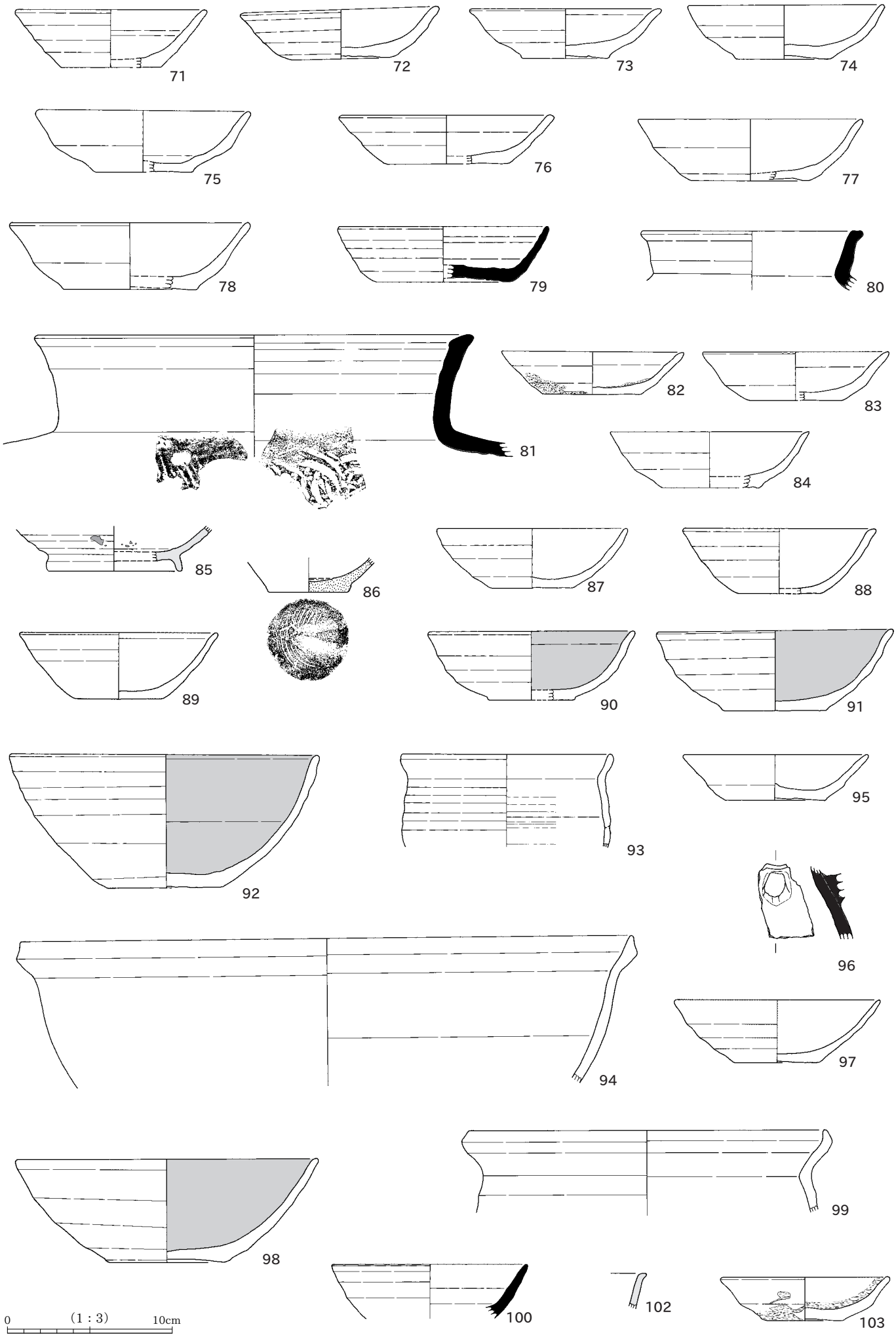

SPA
SPA'
13.20m
1
1
①
②
③
④
SI500（東）（縄文）
1. 暗紫褐色土
SD501（東）（中世）
① 黄褐色土
② 茶褐色土　黄褐色土ブロック多量に含む。
③ 茶褐色土　黄褐色土ブロック少量含む。
④ 青灰色砂

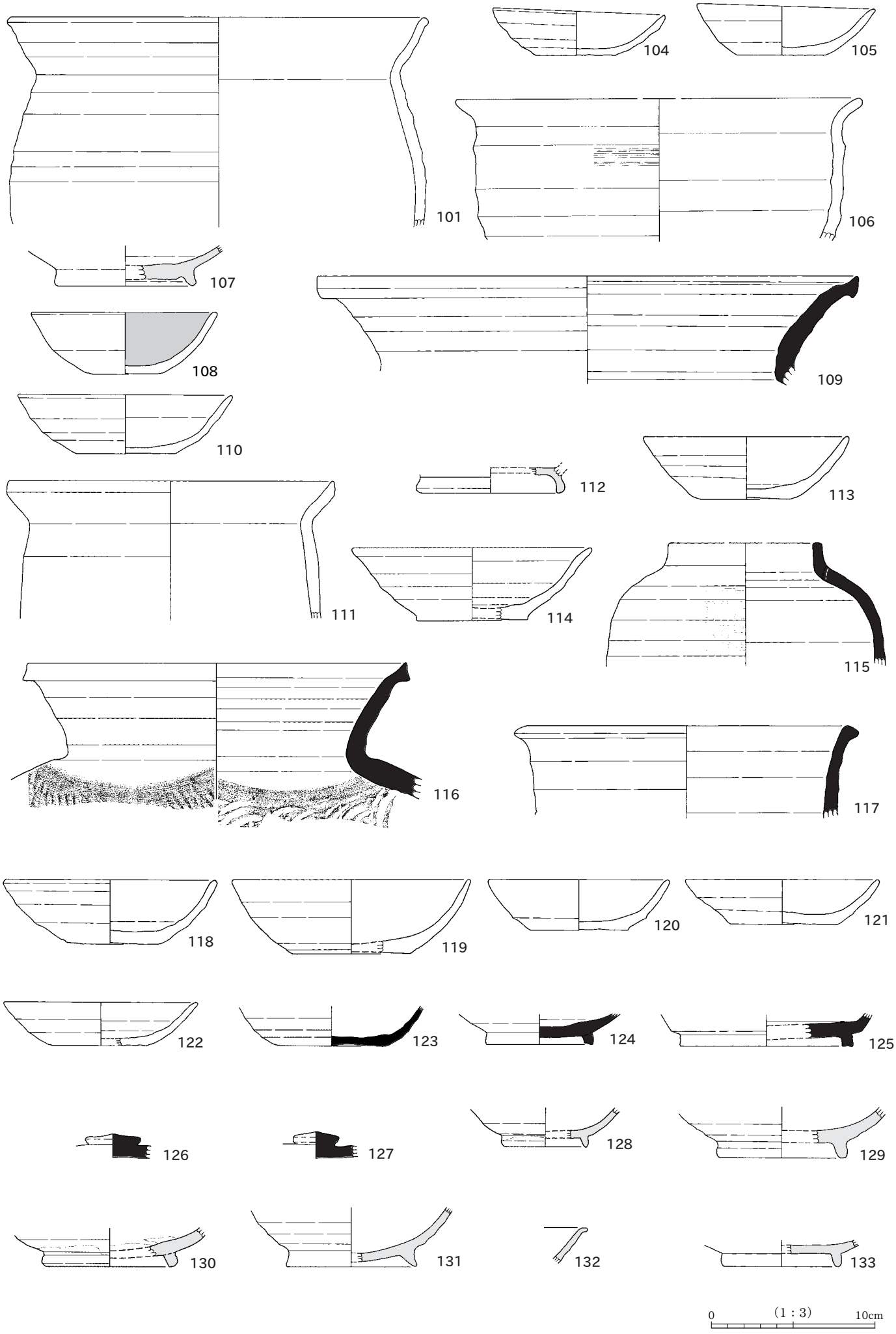
0　（1：40）　2m

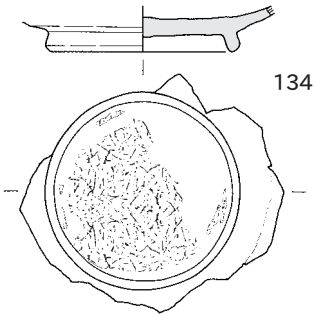

墨痕
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
22
23
24
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm
(2)

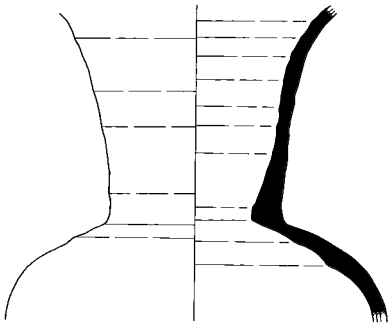

20
21
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
43
0 (1：3) 10cm
0 (1：6) 20cm

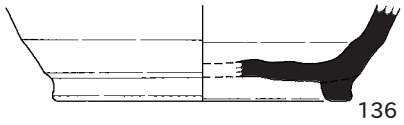

42
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
0
(1：3)
10cm

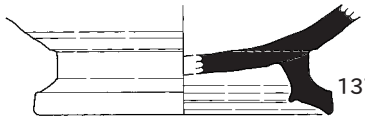

71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
95
96
94
97
98
99
100
102
103
0
(1：3)
10cm

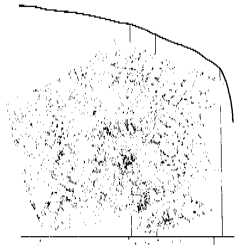

101
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
0
(1：3)
10cm

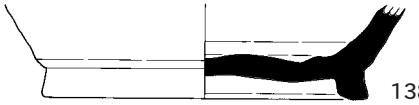

134

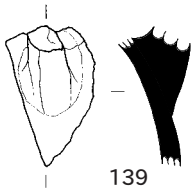

135

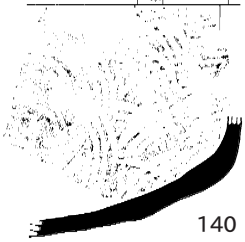

136


137

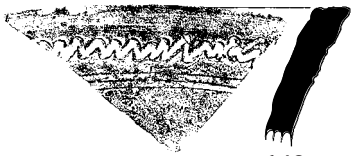



138

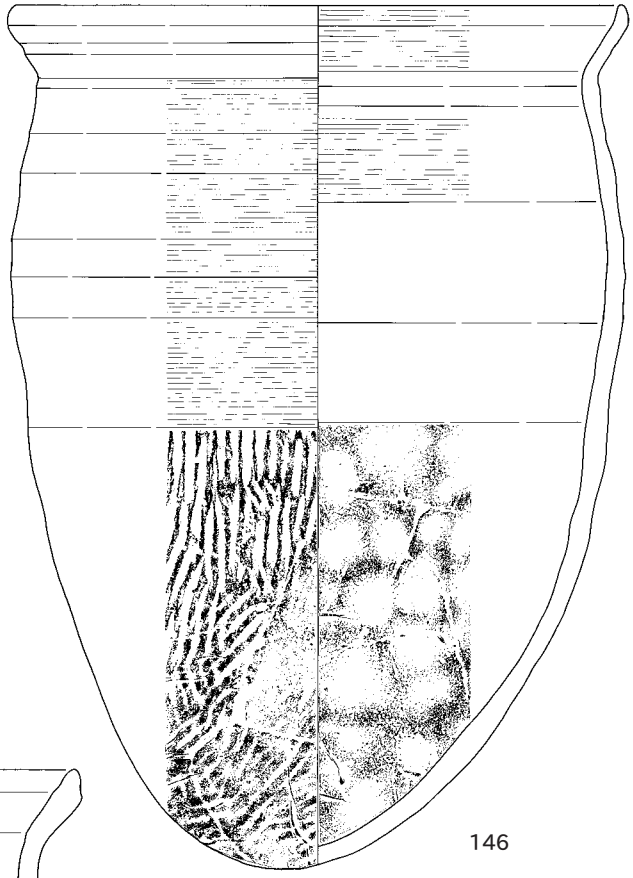

139

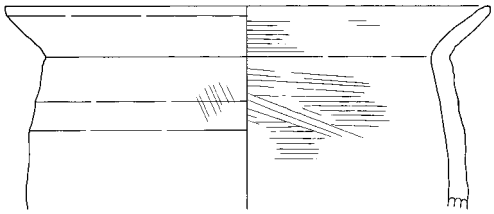

140

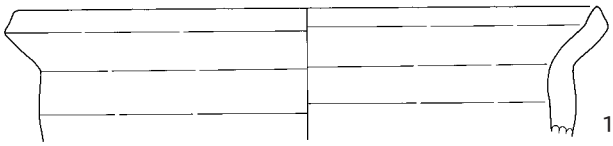
141

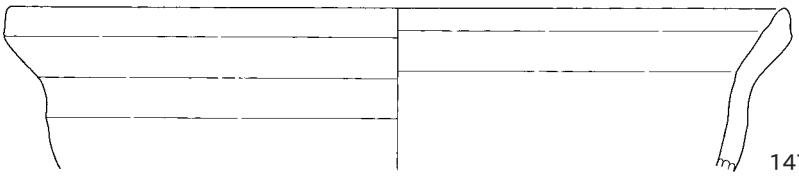

142

143

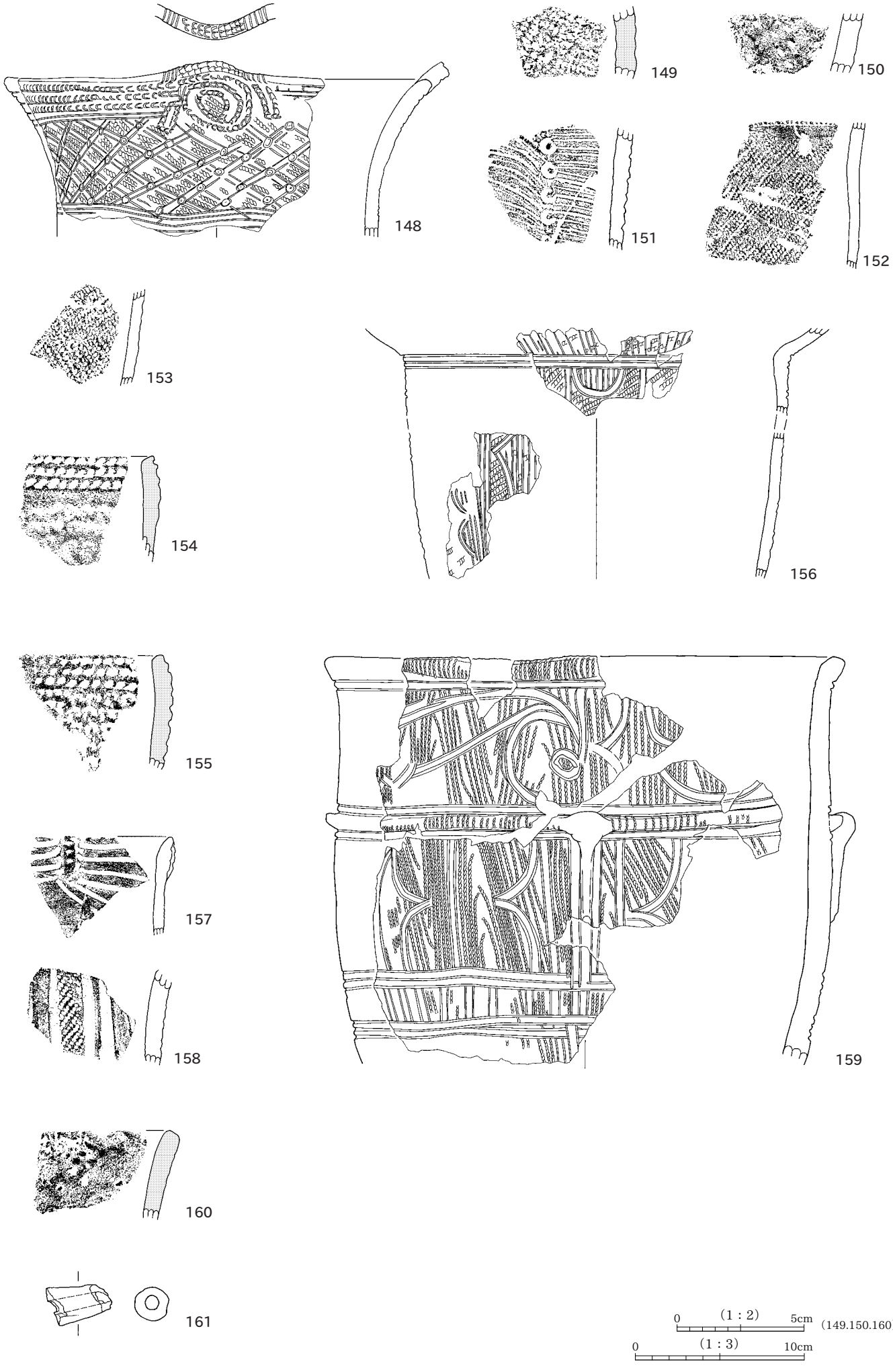

146


144

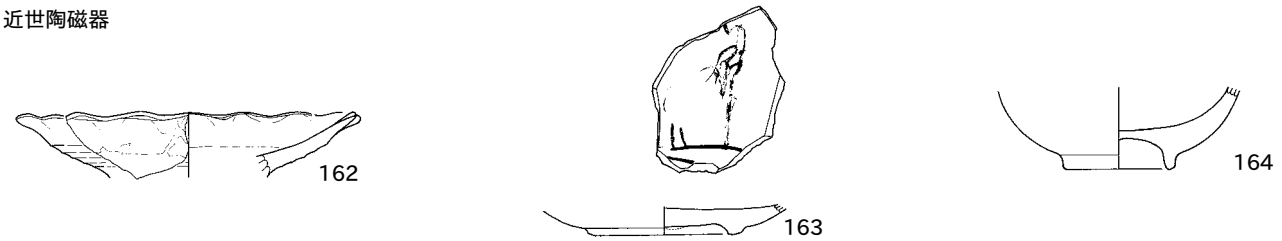

145


147

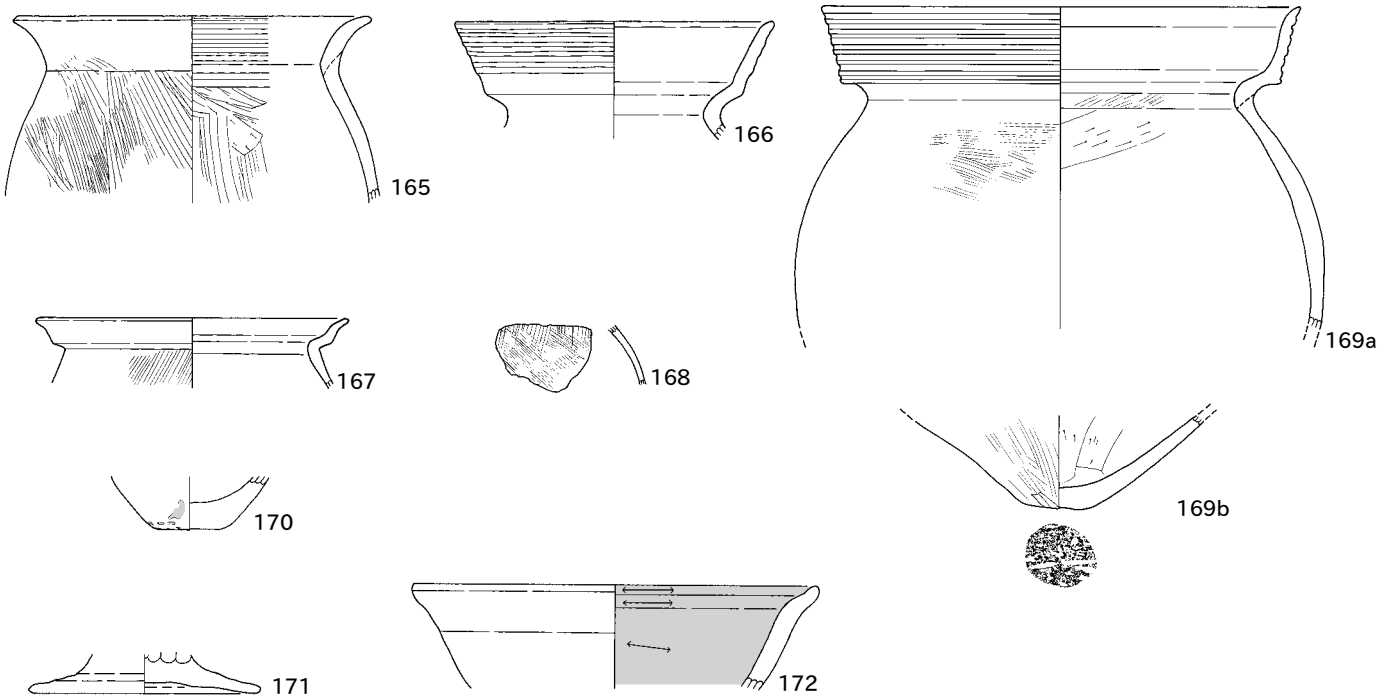
0　(1：3)　10cm


148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
0 (1：2) 5cm
(149.150.160)
0 (1：3) 10cm

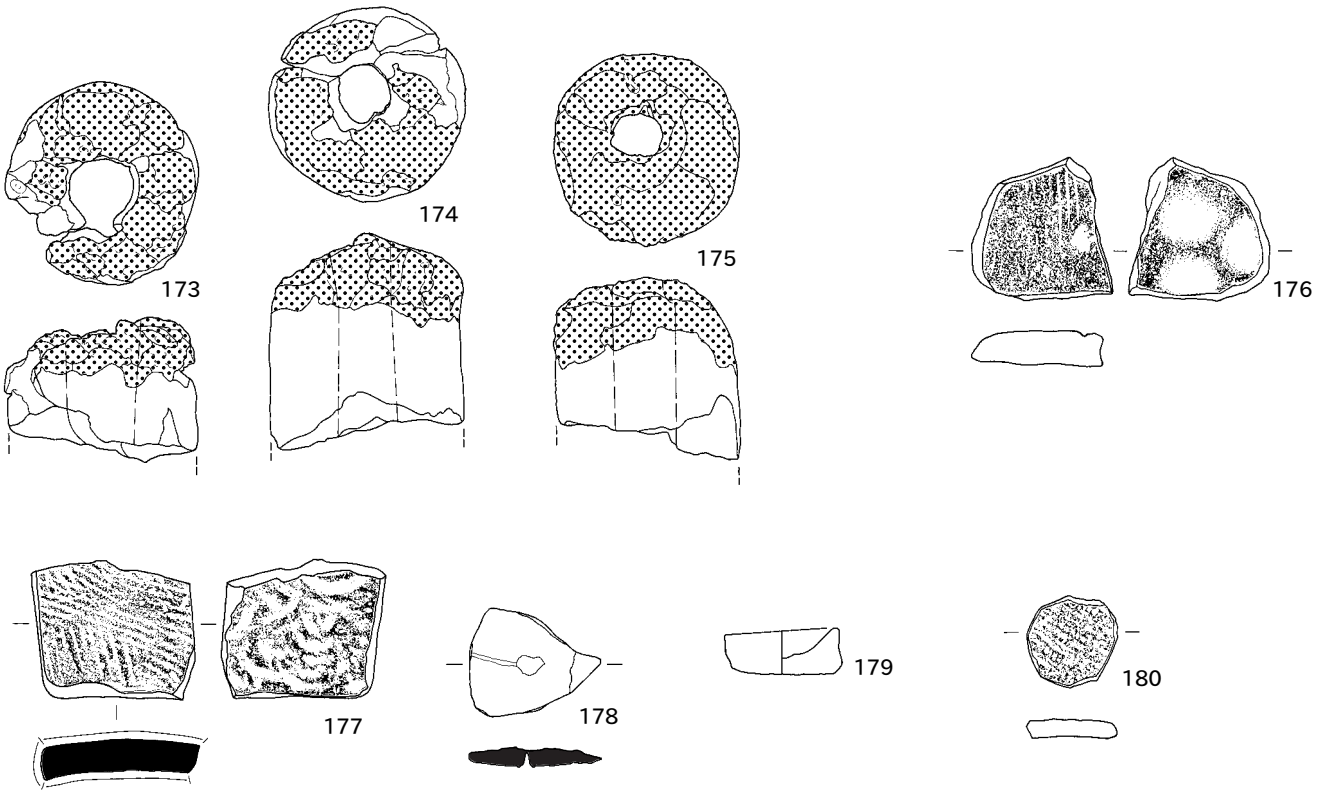
近世陶磁器

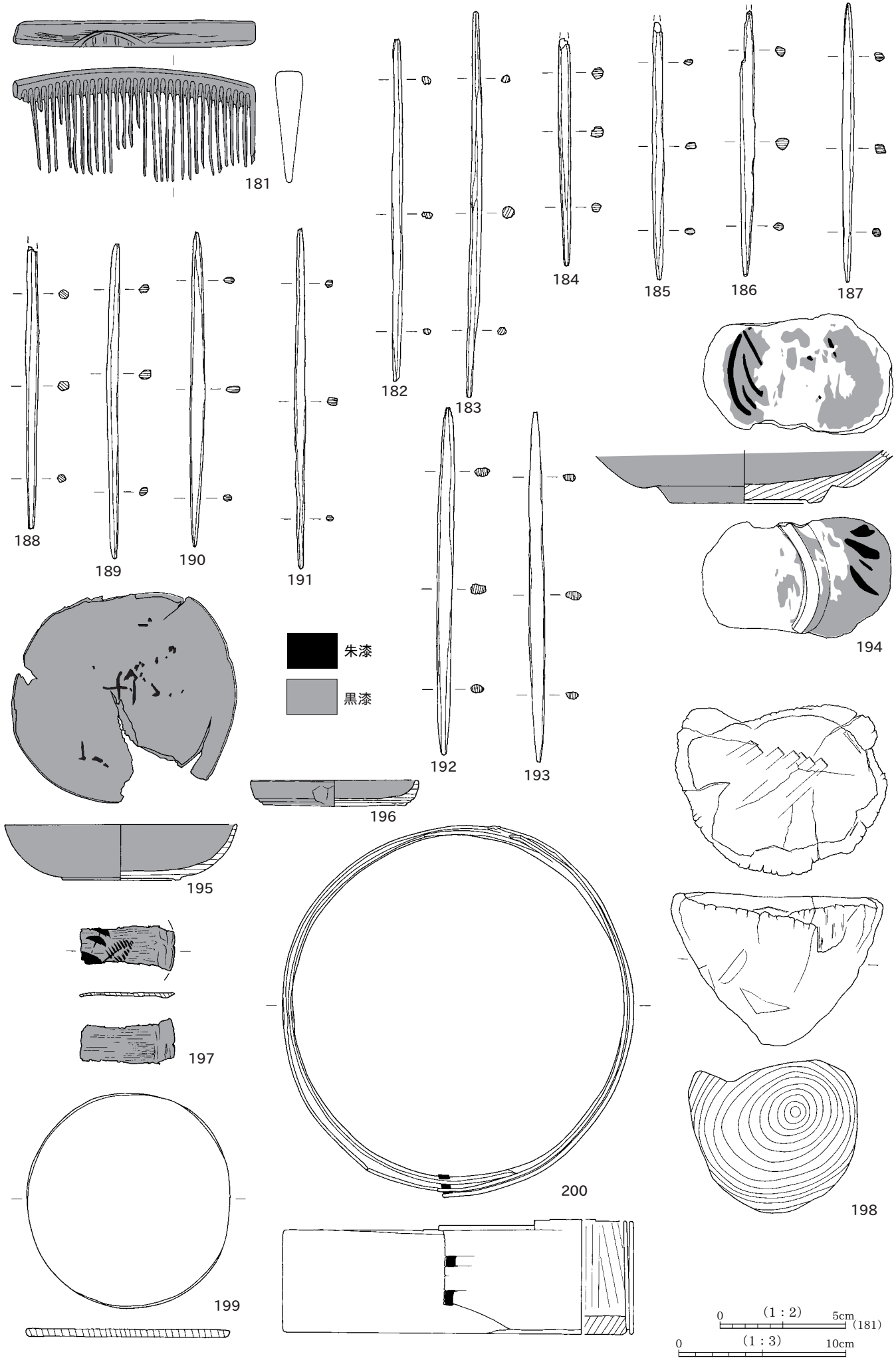


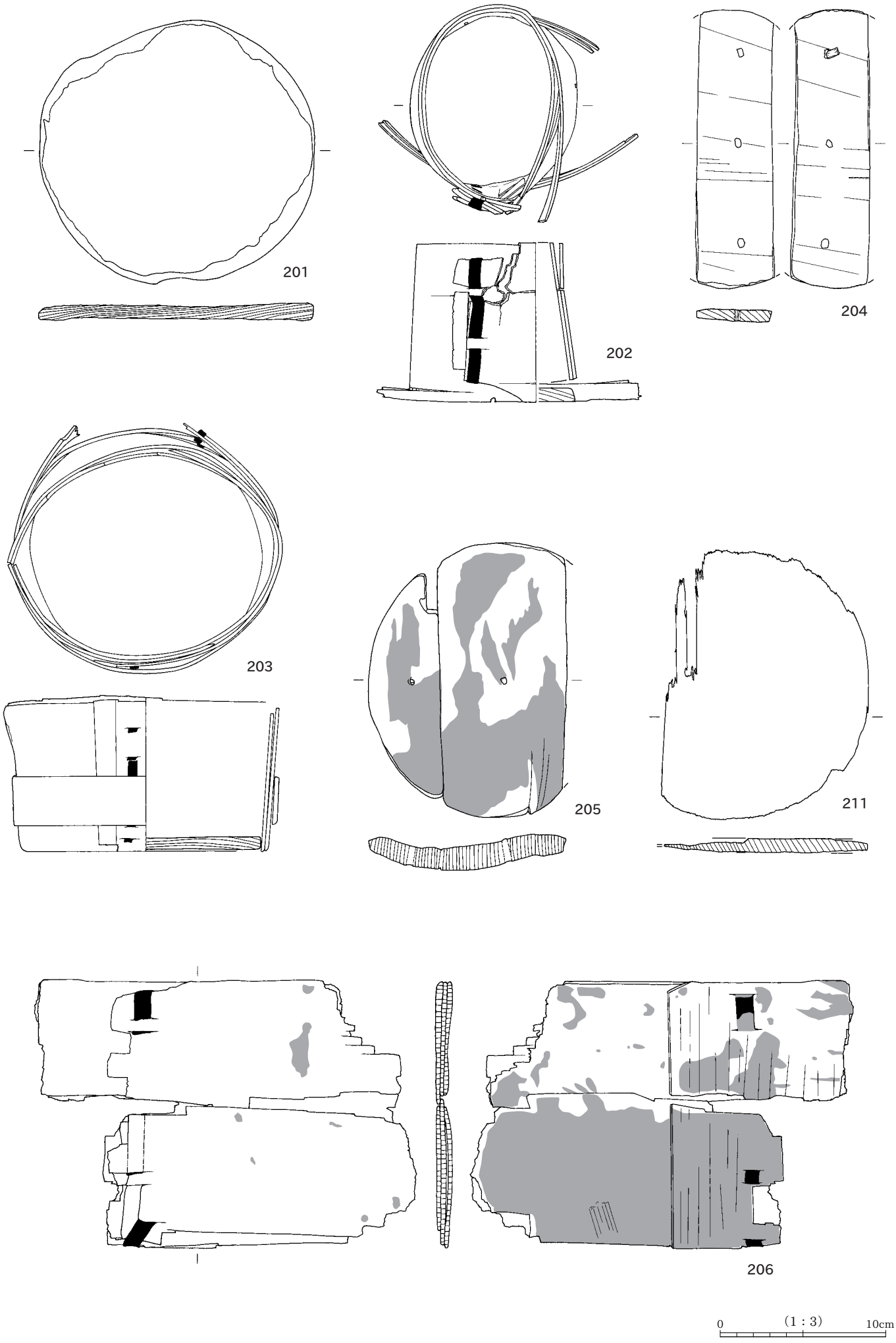
弥生時代～古墳時代土器

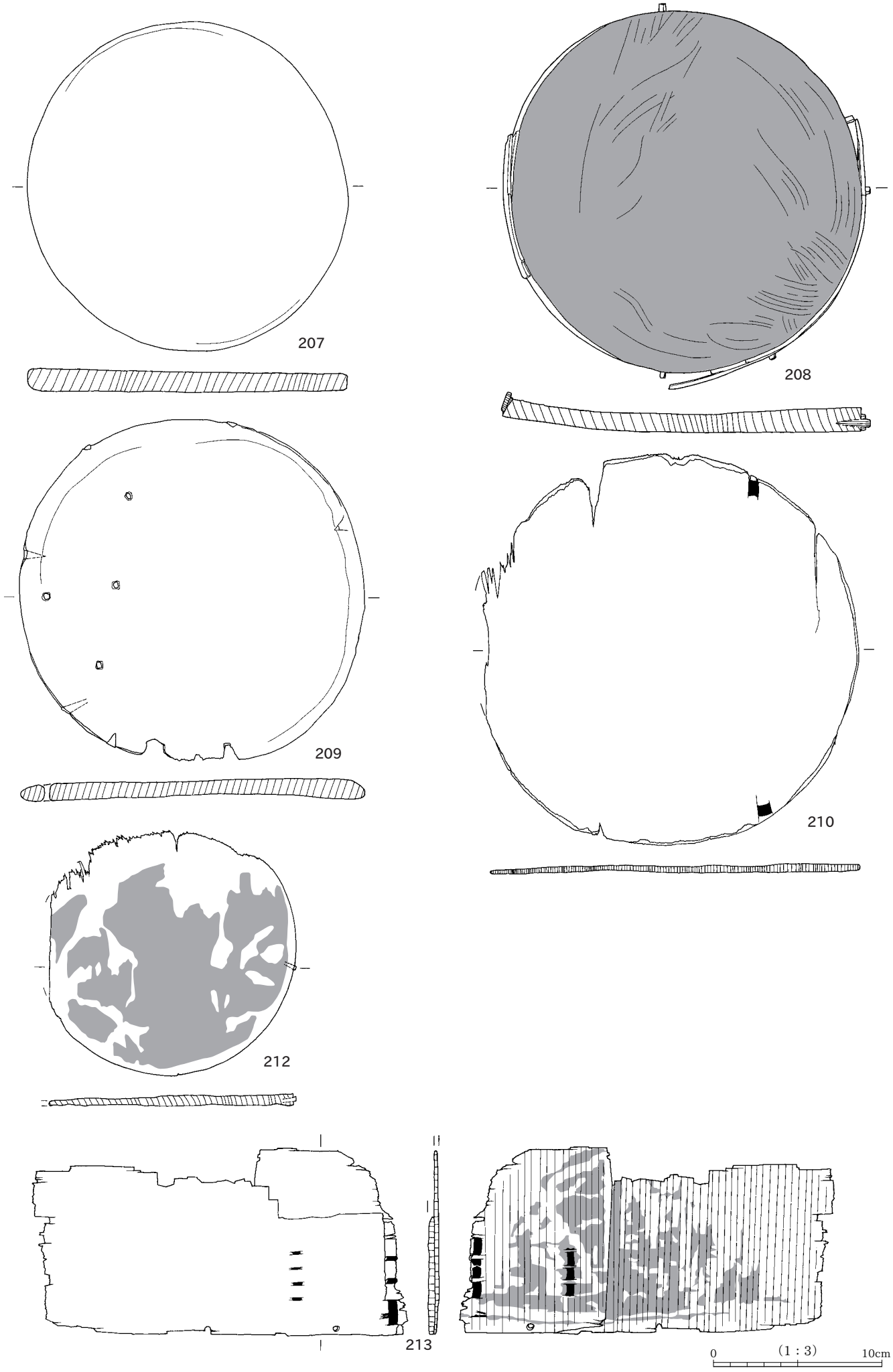


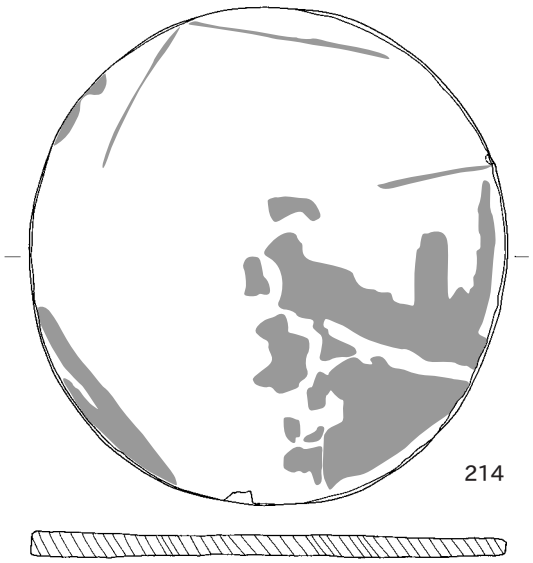
土製品

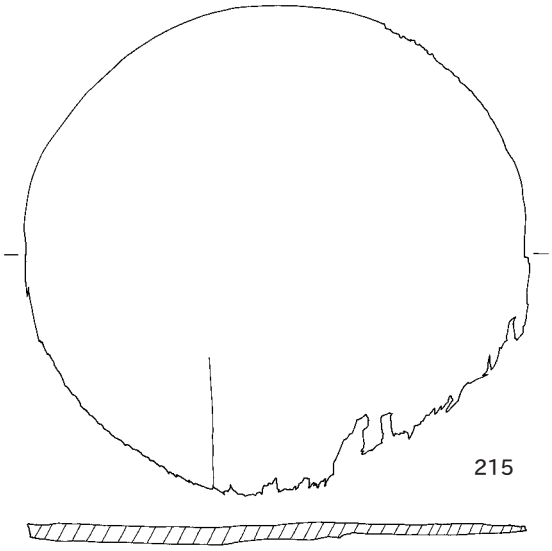


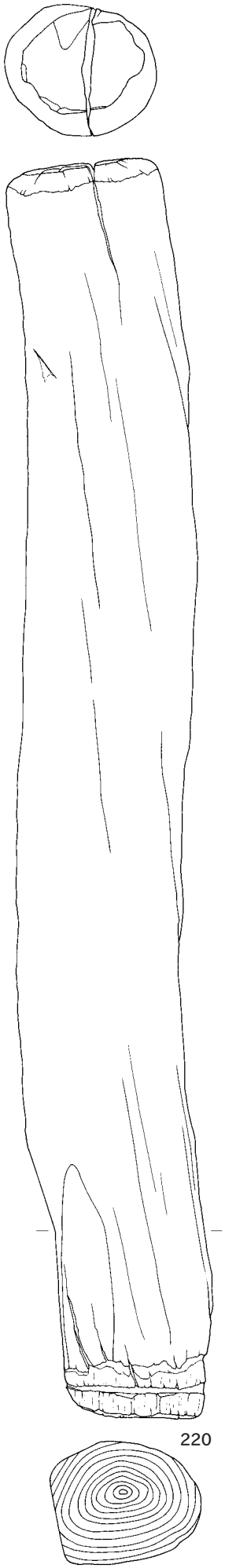

181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
朱漆
黒漆
0 (1：2) 5cm (181)
0 (1：3) 10cm


201
202
203
204
205
206
211
0
(1：3)
10cm


207
208
209
210
212
213
0
(1：3)
10cm

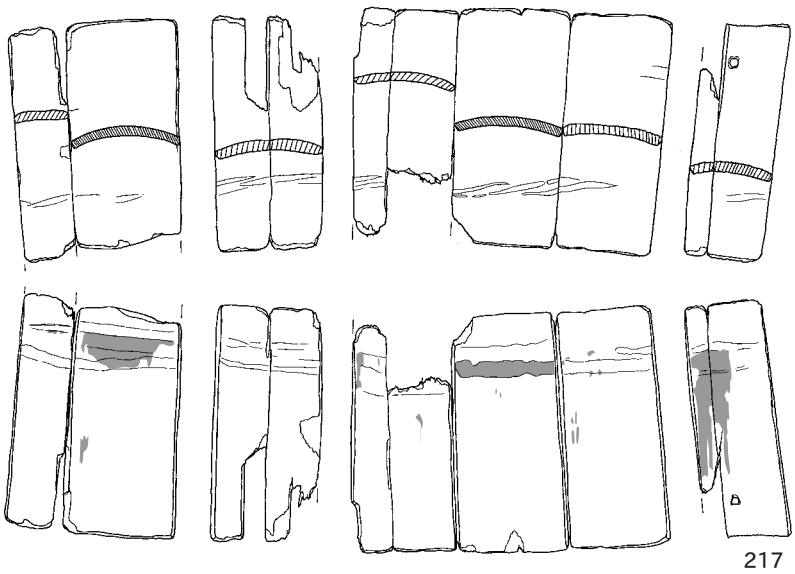


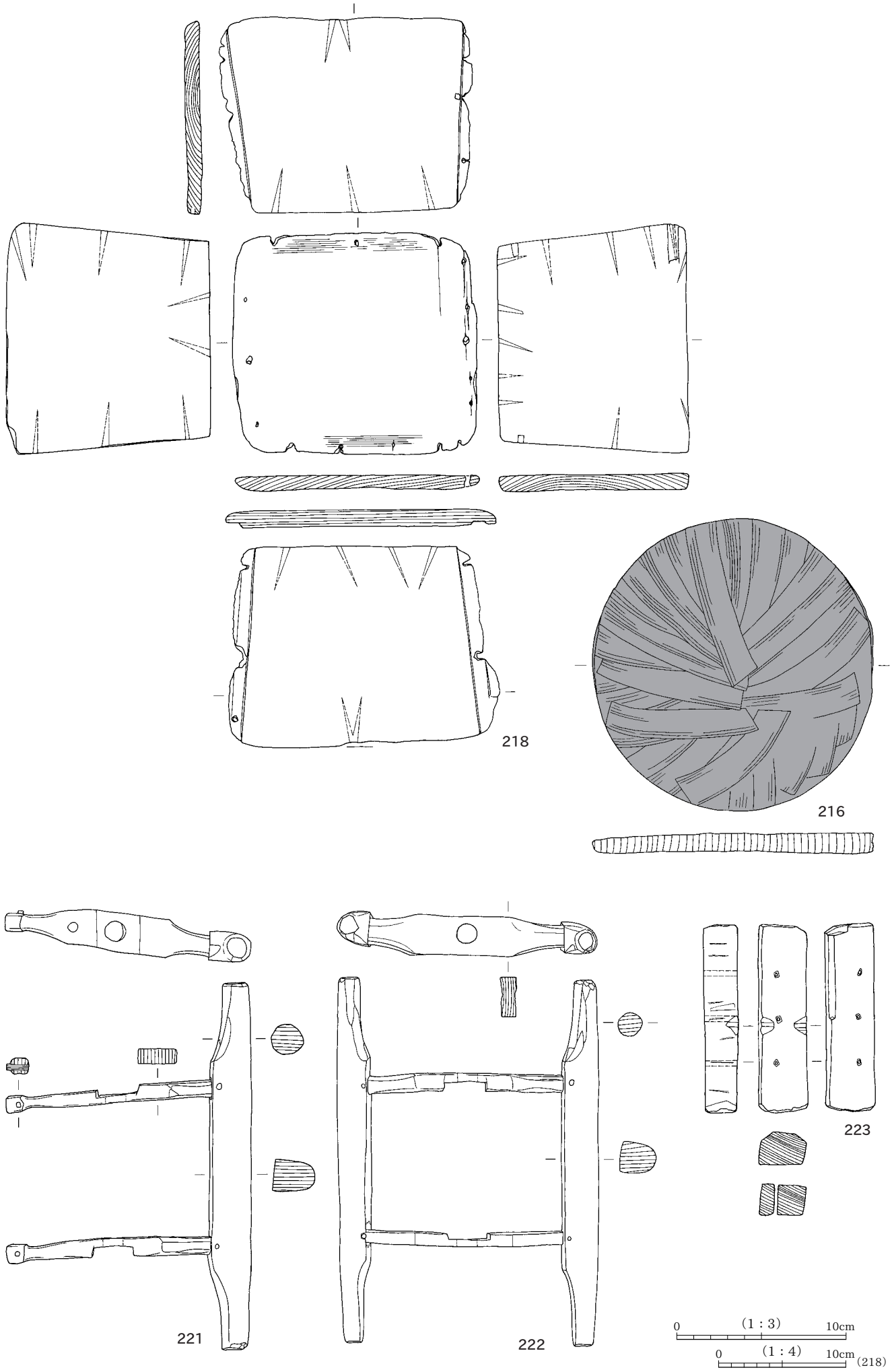


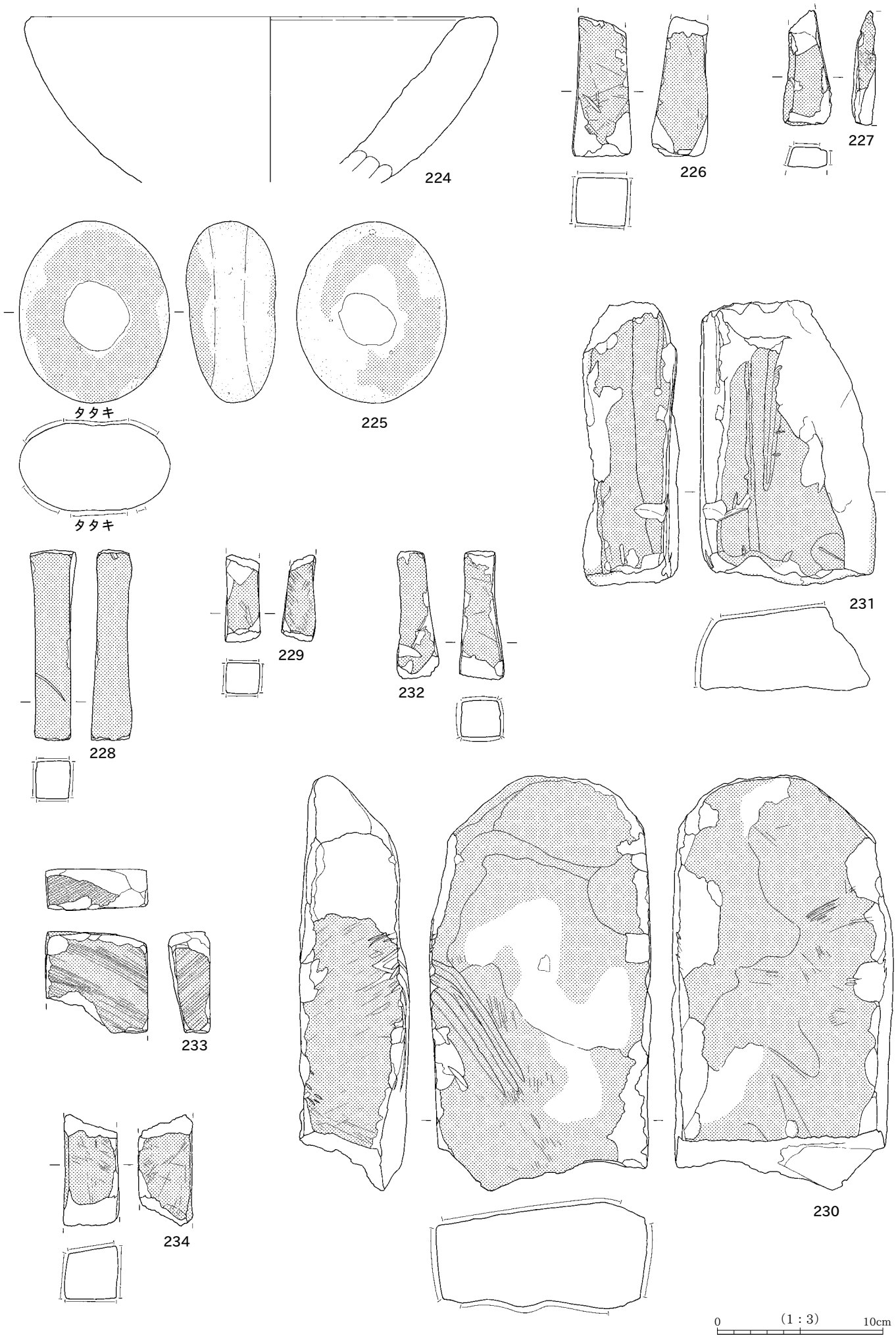


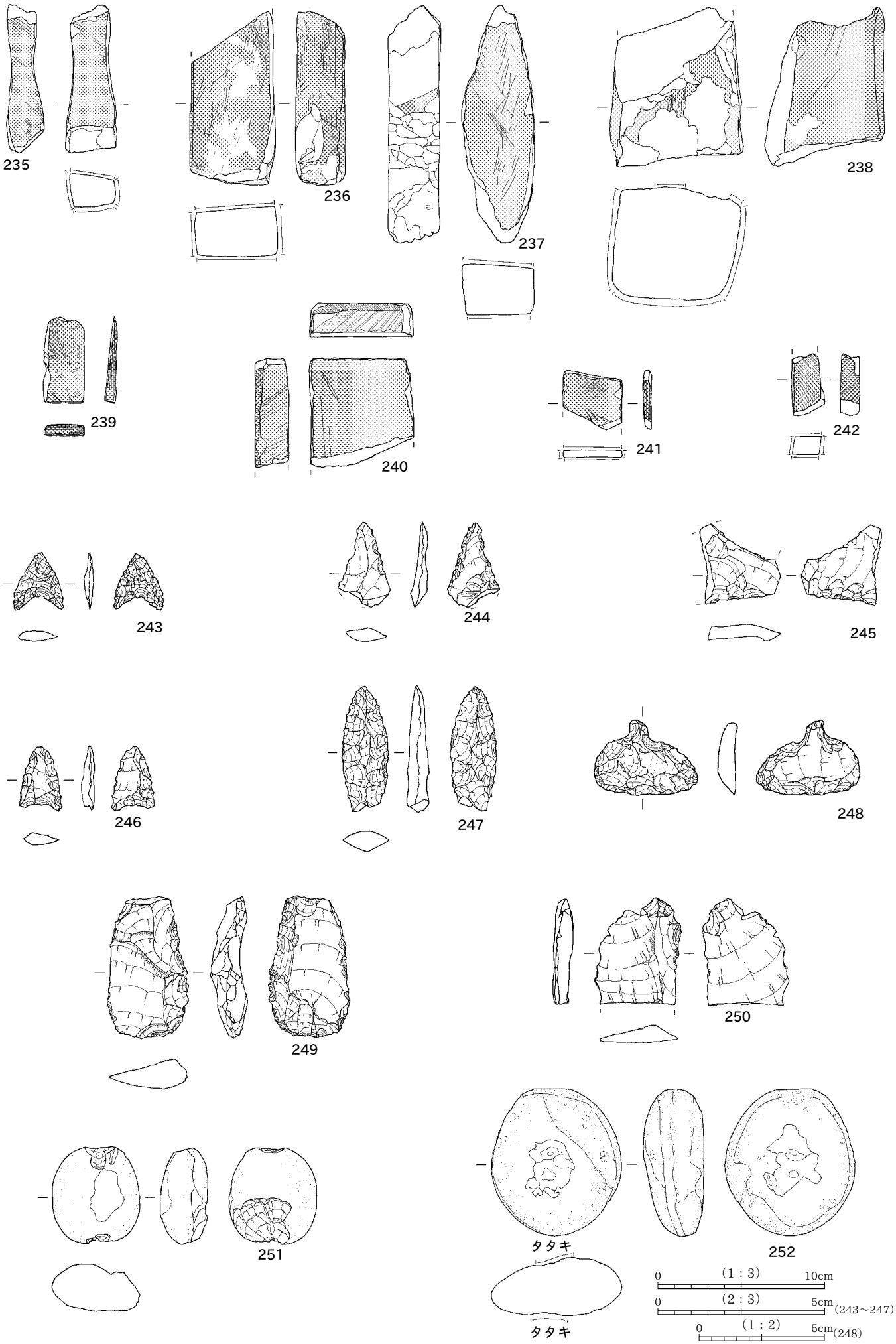
0　(1：6)　20cm (217. 220)

0　(1：3)　10cm

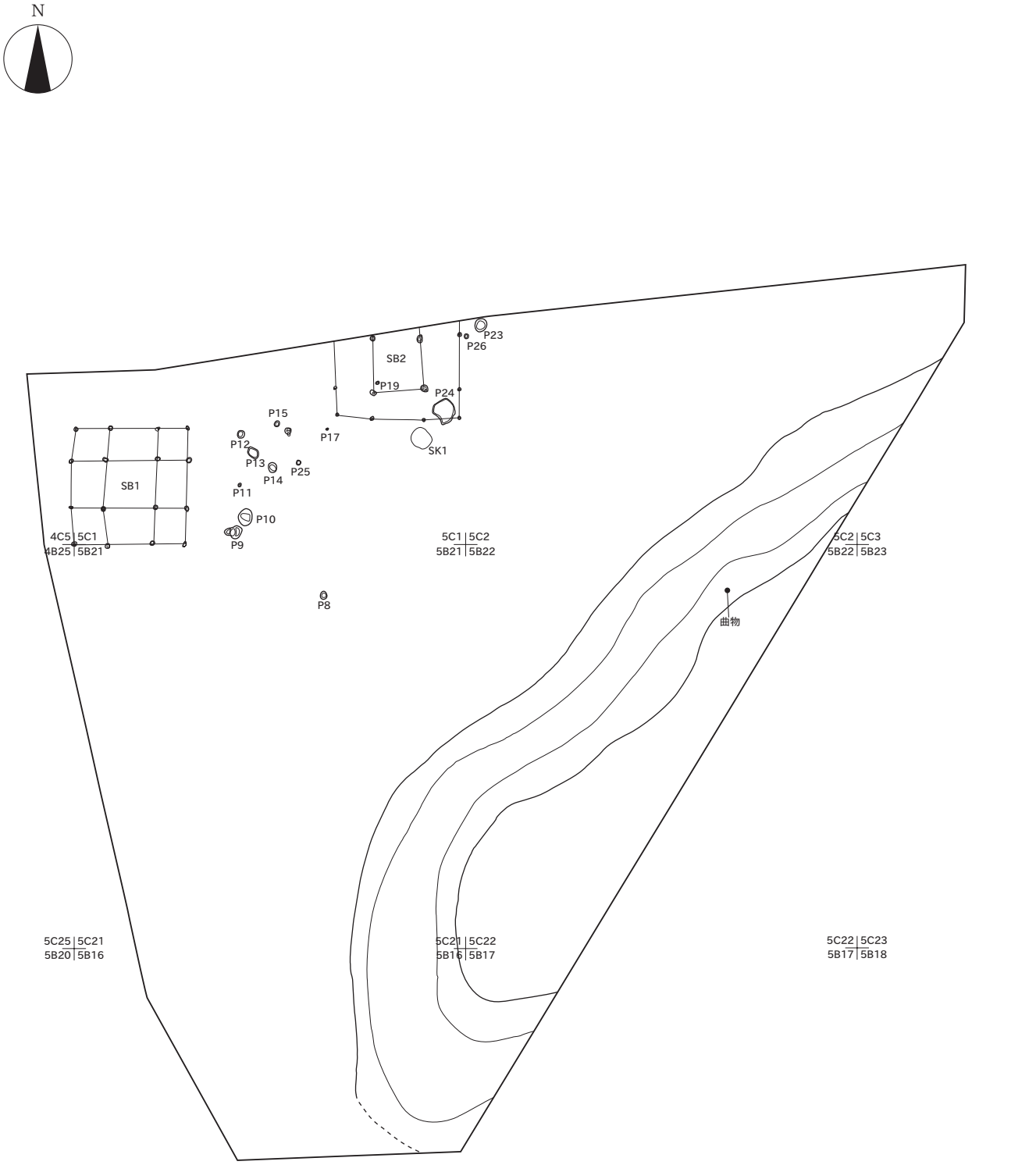



218
216
221
222
223
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm
(218)

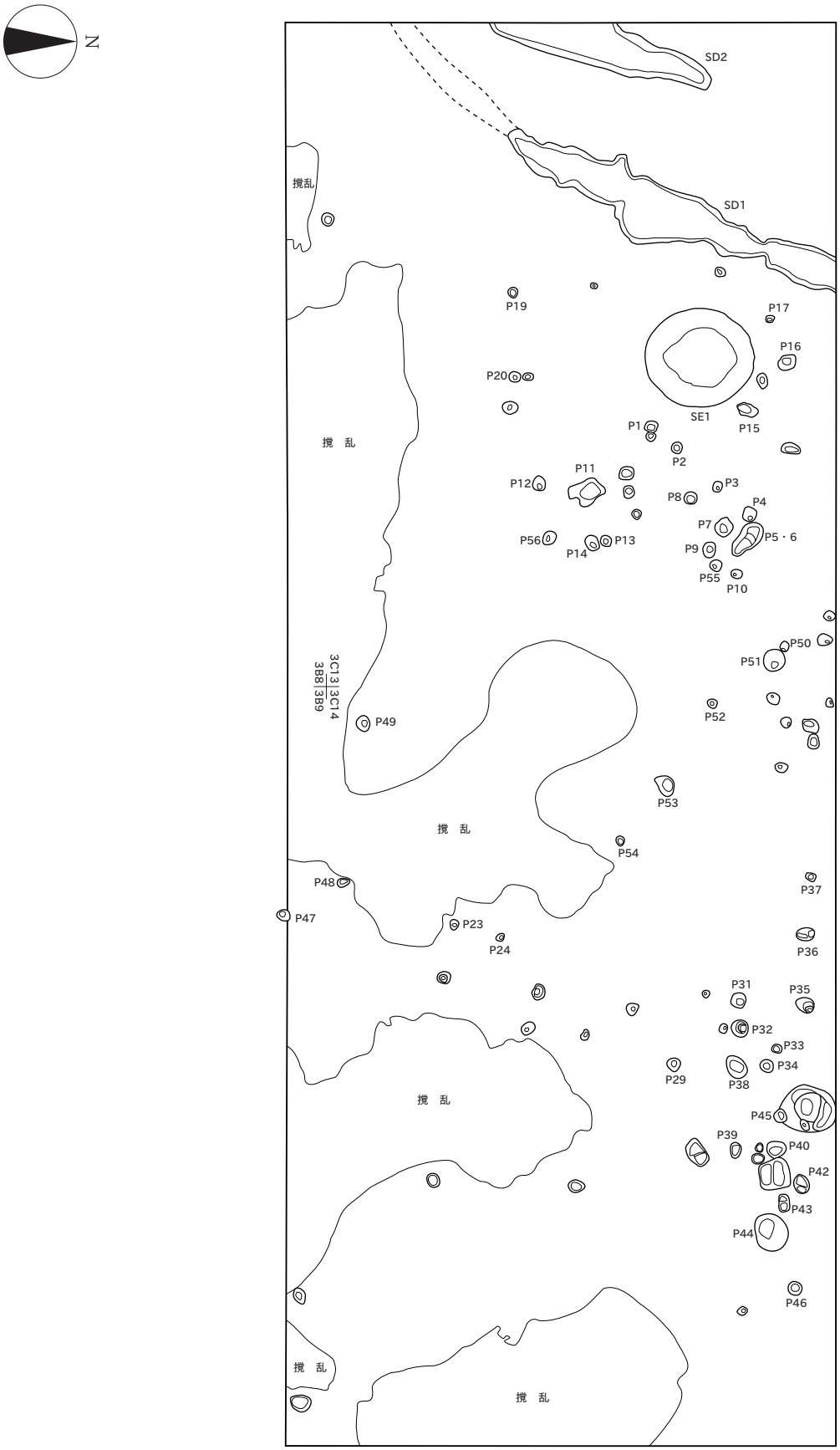

224
226
227
タタキ
225
タタキ
231
229
232
228
233
234
230
0
(1：3)
10cm


235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
タタキ
タタキ
0 (1：3) 10cm
0 (2：3) 5cm (243～247)
0 (1：2) 5cm (248)

高畑遺跡遺構全体配置図（C地点）



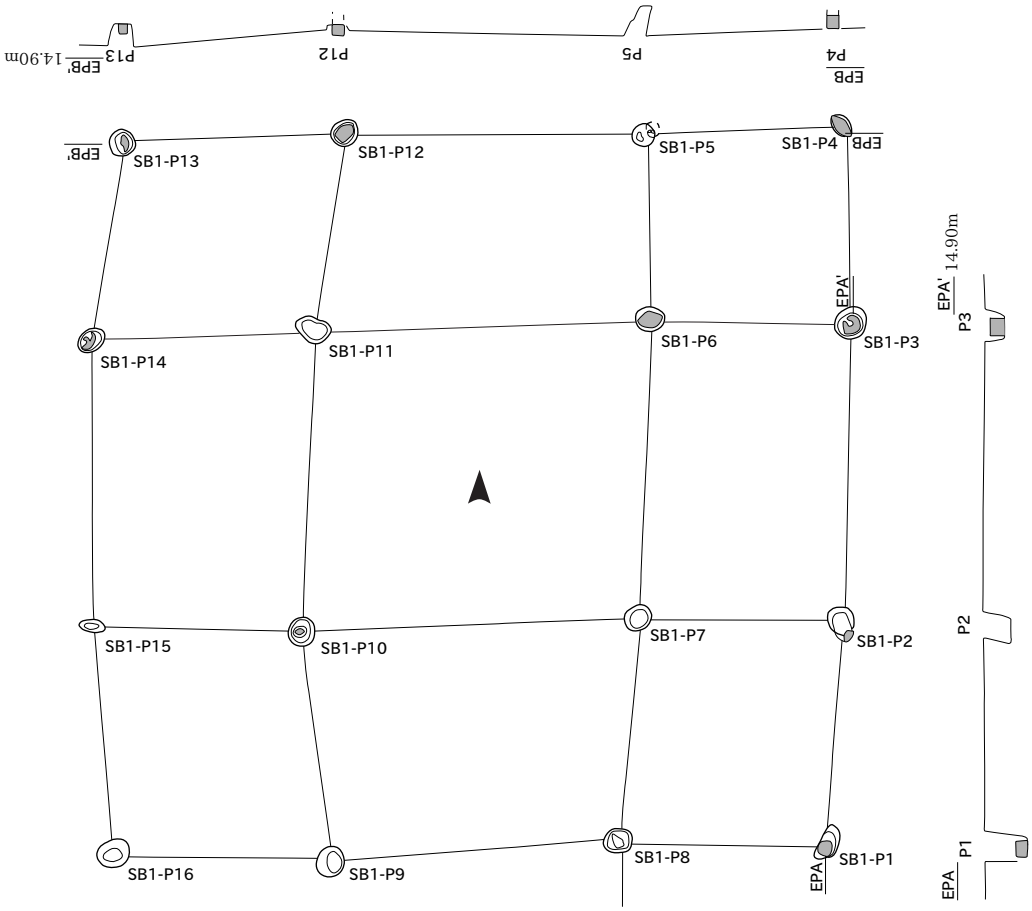
0 （1：300） 10m


N
SD2
SD1
撹乱
撹 乱
撹 乱
撹 乱
撹 乱
撹 乱
3C13 3C14
3B8 3B9
P1
P2
P3
P4
P5・6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P19
P20
P23
P24
P29
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P48
P49
P50
P51
P52
P53
P54
P55
P56
SE1

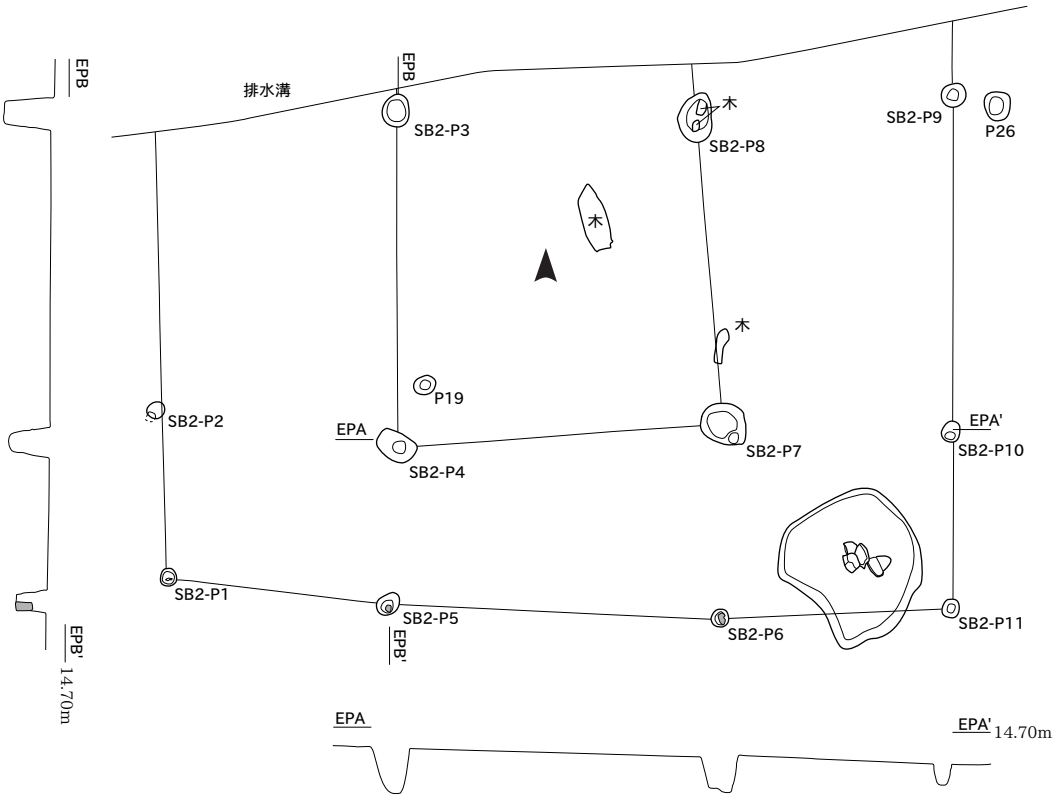
0　(1：125)　5m

C地点

SB1

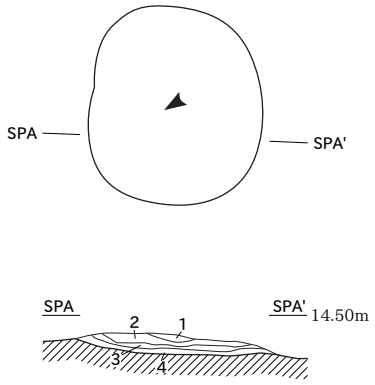


SB2



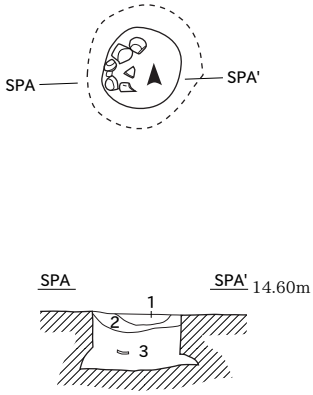
0　(1：60)　3m

C地点　SK1



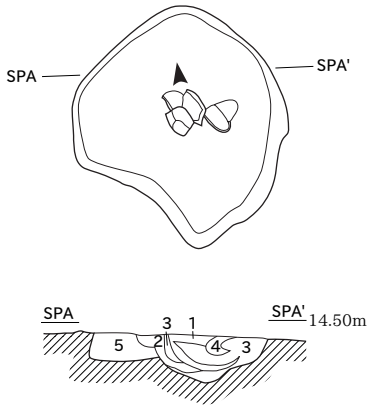
SK 1
1. 炭化物
2. 黒褐色砂質土　炭化物わずかに含む
3. 灰黒色砂質土
4. 暗灰色粘質土

P23



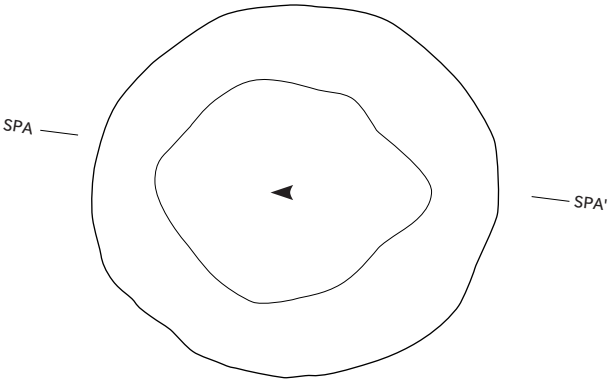
P23
1. 灰褐色粘質土　炭化物小量含む
2. 暗灰色土　粘性弱、炭化物わずかに含む
3. 暗灰黒粘質土　炭化物多量に含む

P24

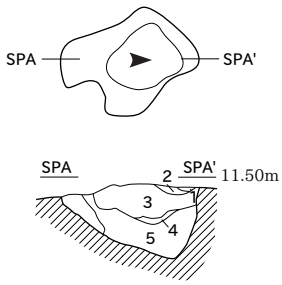


P24
1. 炭化物
2. 暗灰黒色粘質土　炭化物、暗青灰色砂質土わずかに含む
3. 青灰色土　2層が小量混入
4. 暗灰色土　青灰砂質土斑に混入
5. 暗青灰色土　しまり強

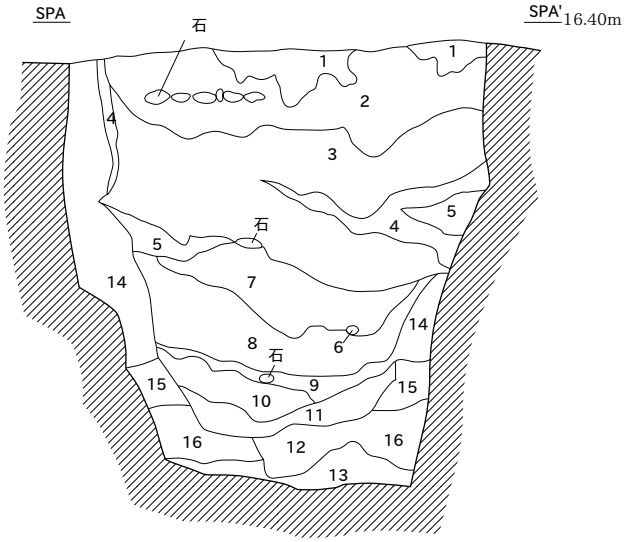
二期線　SE1



P11

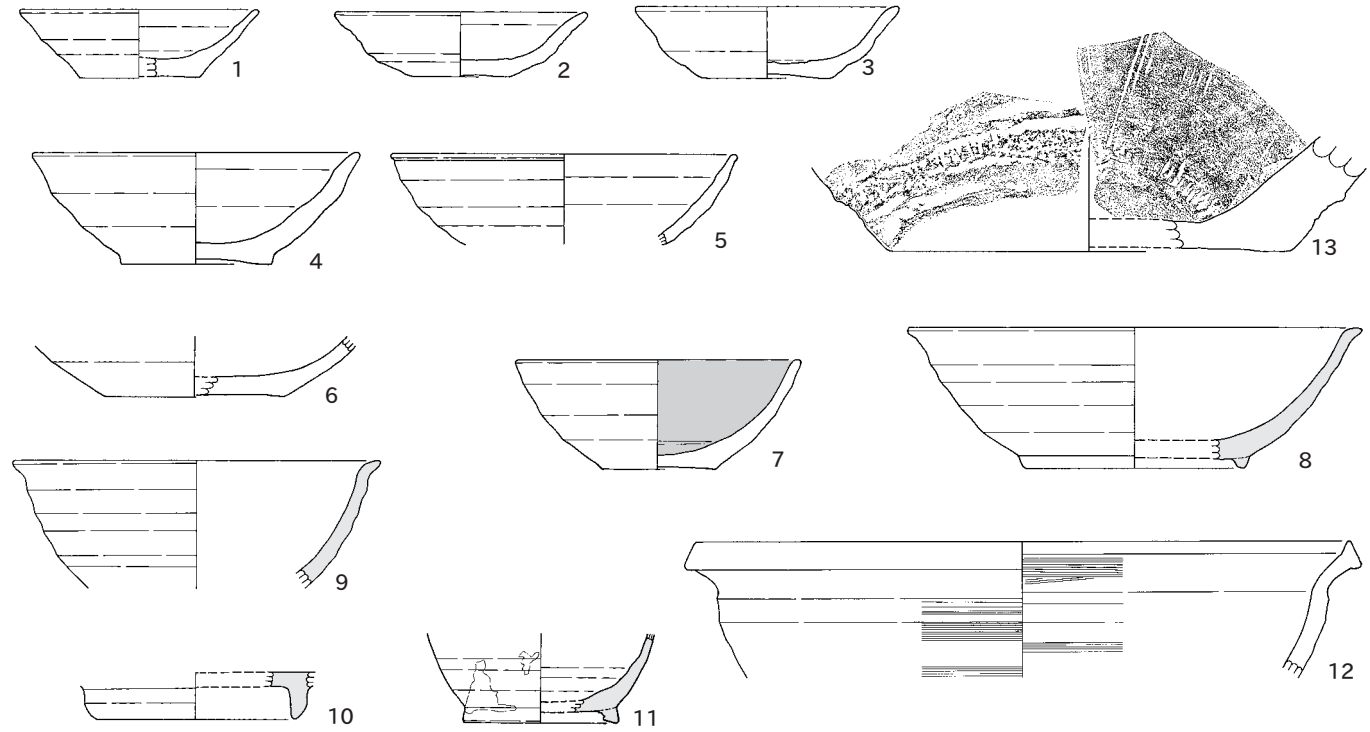


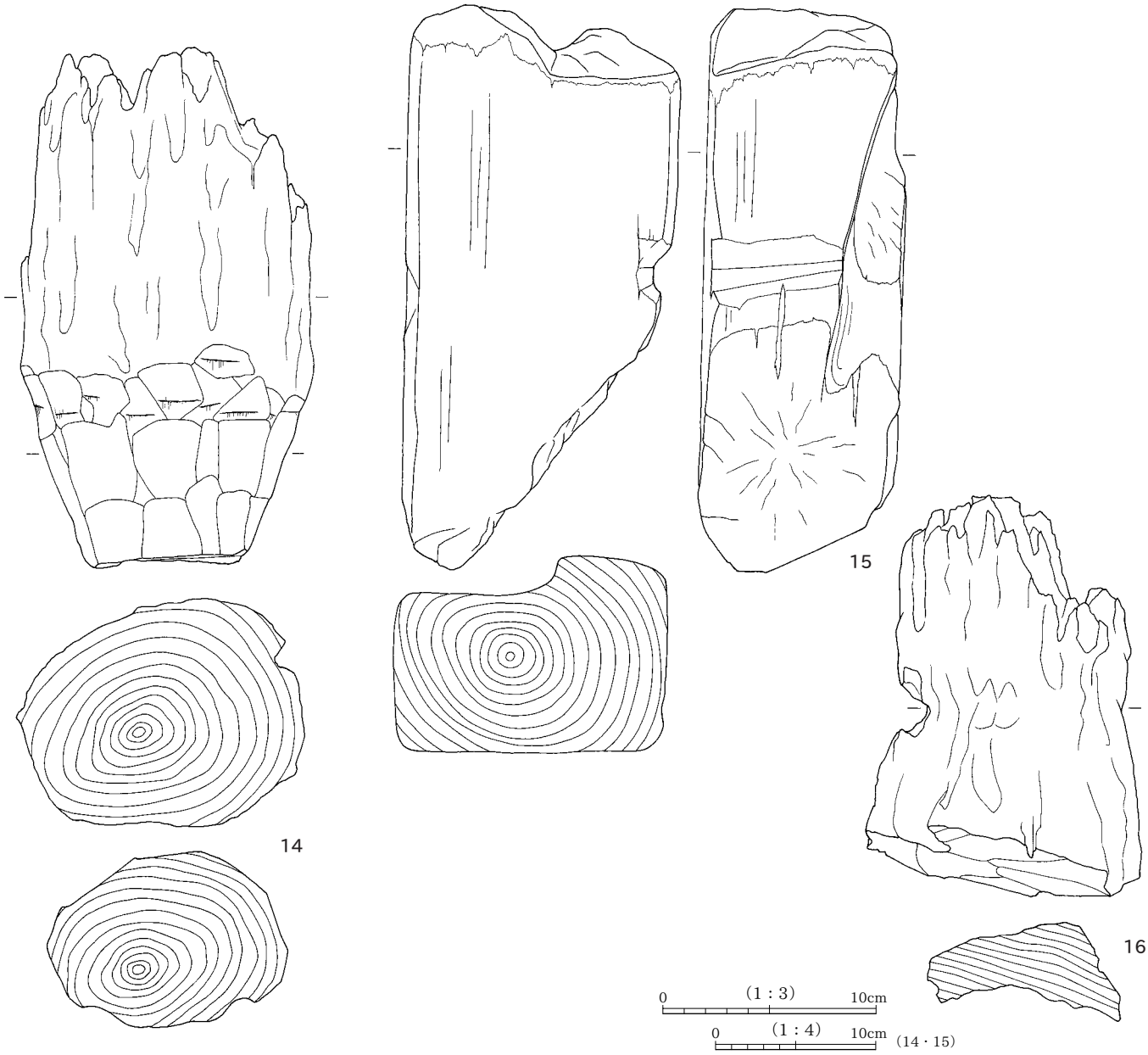
P11
1. 暗褐色土
2. 明黄褐色土
3. 暗褐色土
4. 黄褐色土
5. 褐色土

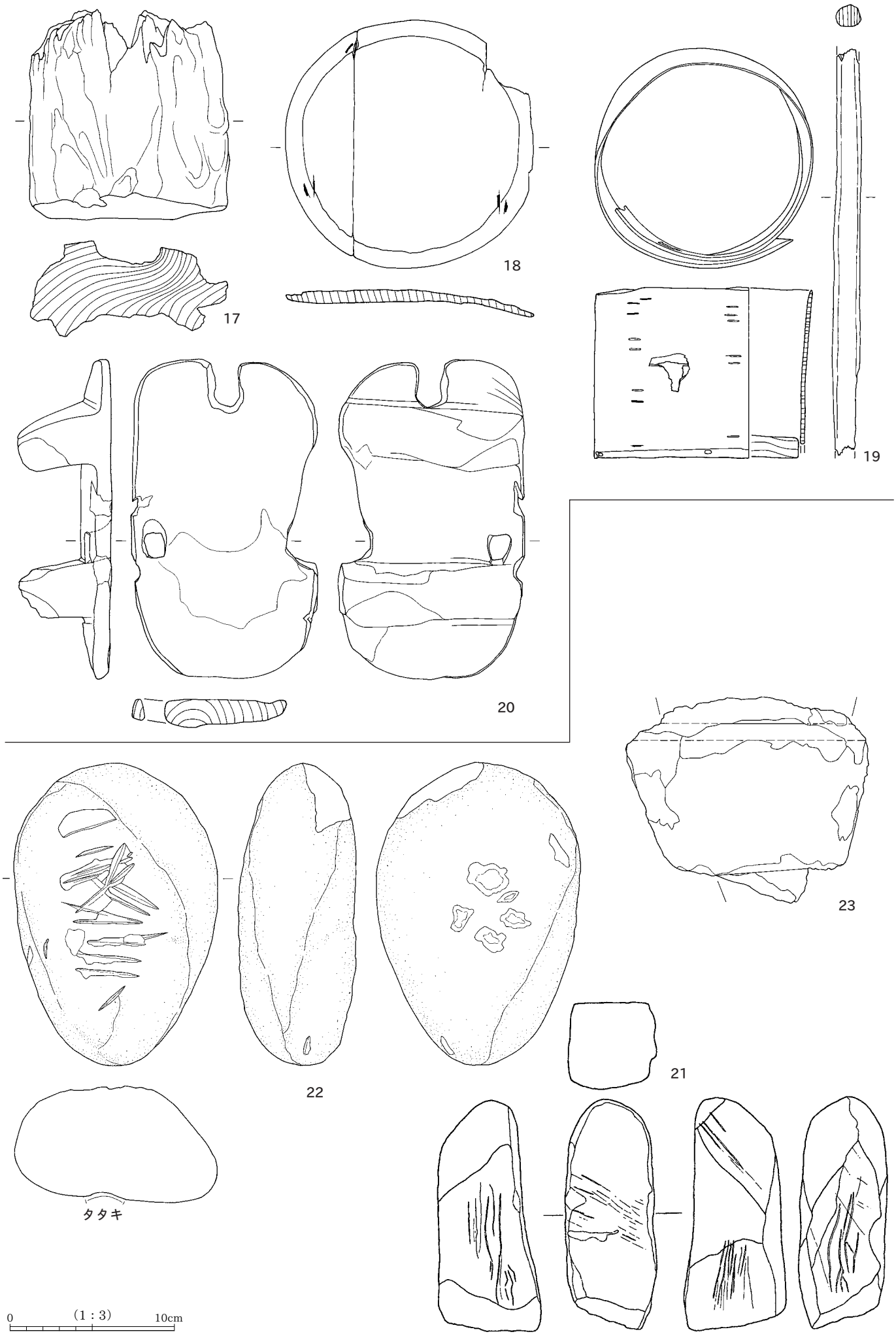


SE 1
1. 褐灰色土　礫含む
2. 黄褐色粘質土　暗褐色土斑に混入
3. 褐色土　黄褐色土斑に混入 礫、炭化物含む
4. 明黄褐色土　炭化物含む
5. 暗褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色粘質土　酸化鉄、灰白色粘質土混入
8. 暗灰黄色土
9. 黒褐色土　礫含む
10. にぶい黄色土
11. 暗オリーブ褐色土
12. 黒褐色砂質土
13. にぶい赤褐色砂質土
14. 橙色土
15. にぶい褐色土
16. 褐色土　炭化物含む

0　(1：40)　2m


1
2
3
4
5
13
6
7
8
9
12
10
11

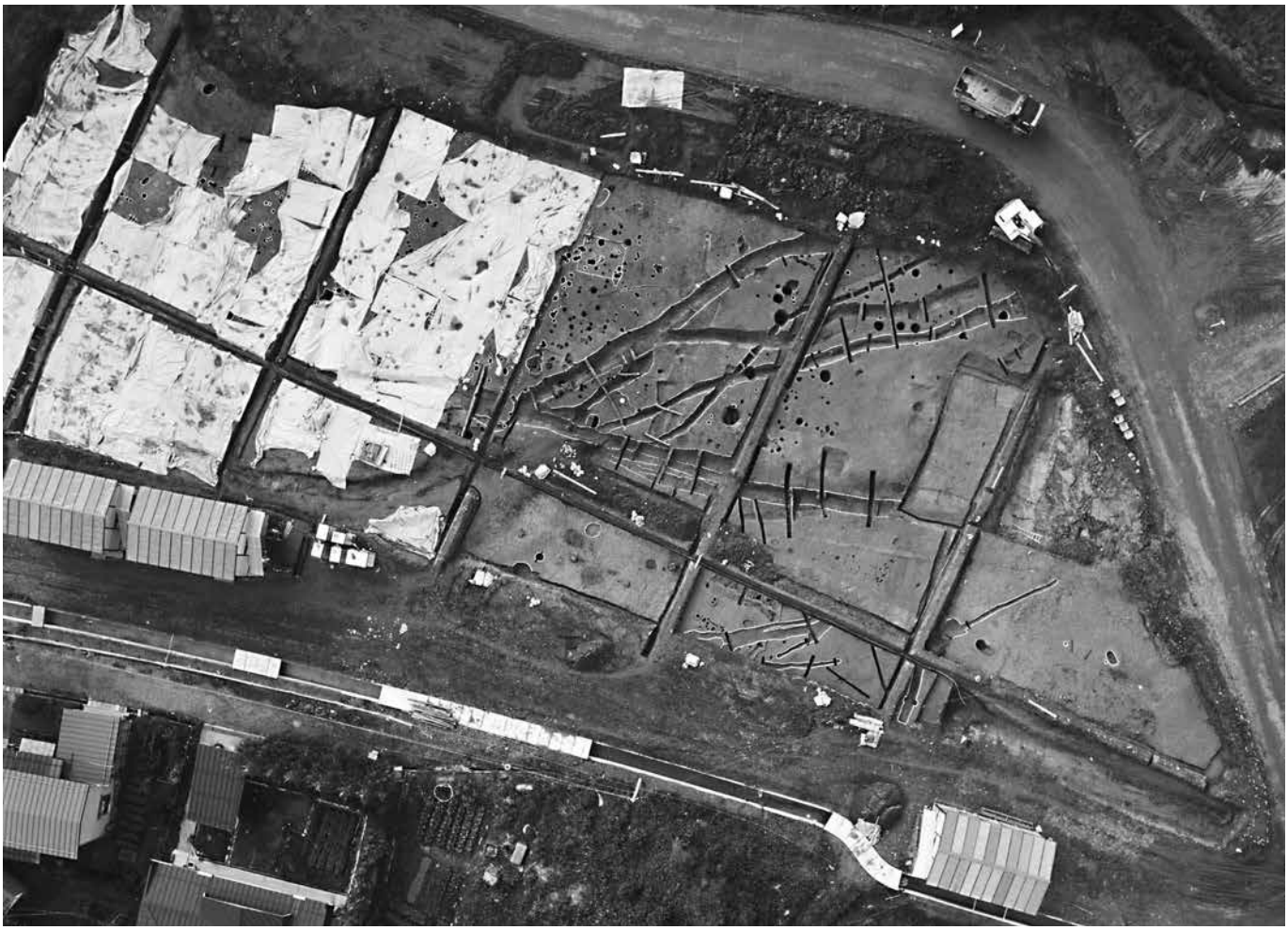

15
14
16
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm (14・15)


17
18
19
20
21
22
23
タタキ
0
(1：3)
10cm

遺跡の位置　〔日本地図センター発行　昭和22年11月4日米軍撮影　1:40,000〕

中世遺構完掘（八反田地区）

縄文時代・平安時代・中世遺構完掘（P. R. ７東地区１層目）



縄文時代・平安時代・中世遺構完掘（P. R. ７東地区２層目）

平安時代・中世遺構完掘（AB 地区）西から

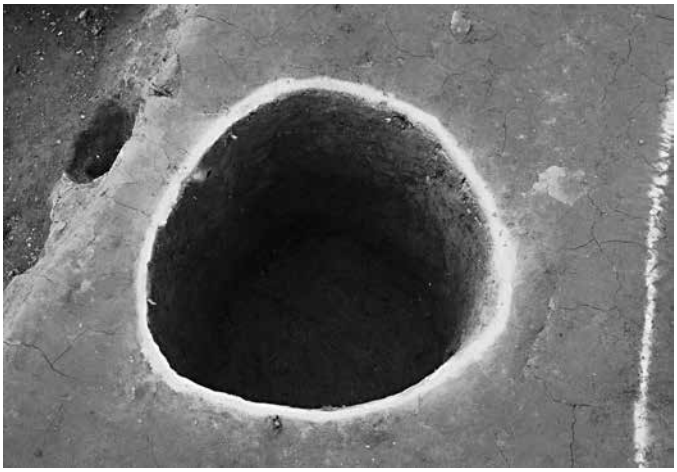
平安時代・中世遺構完掘（AB 地区）東から

平安時代・中世遺構完掘（AB 地区）東から

SE303（東）断面　西から

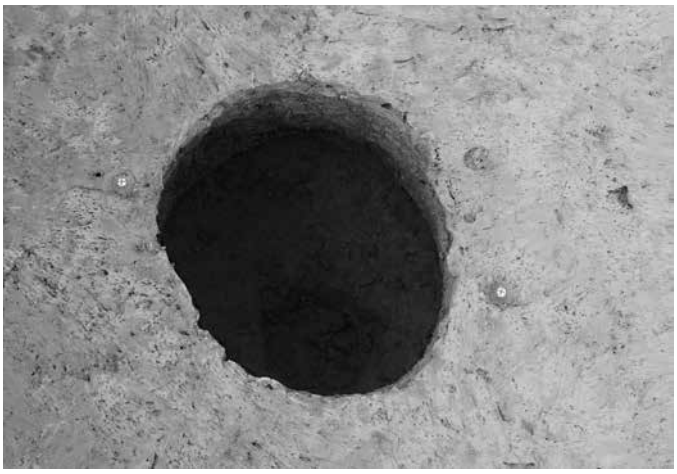
SE303（東）完掘　東から

SE306（東）断面　西から

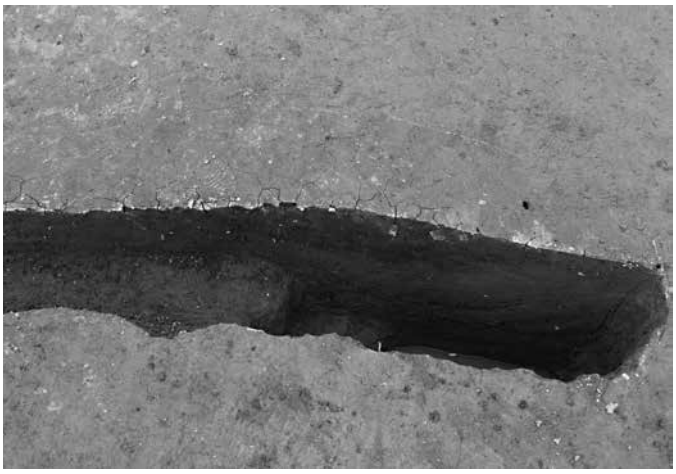


SE306（東）完掘

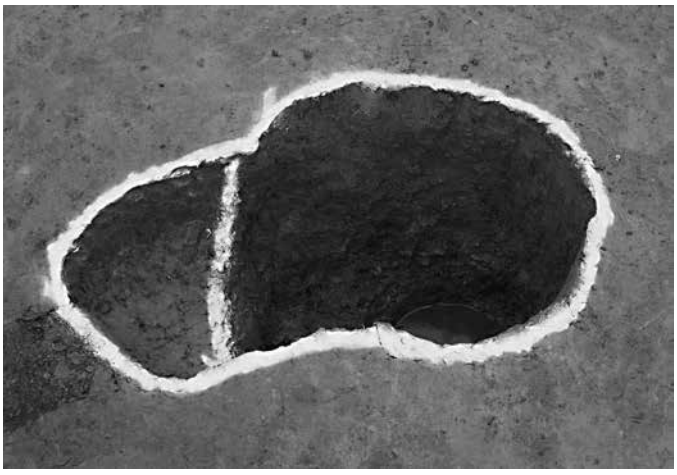
SE307（東）断面　西から



SE307（東）完掘

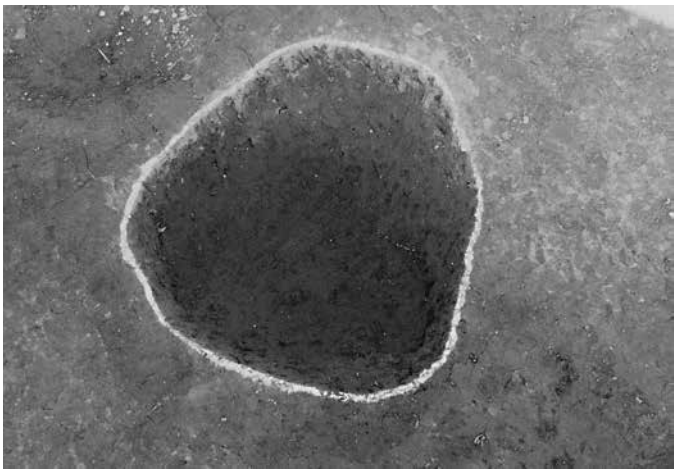


SE313（東）・SE314（東）断面　南から

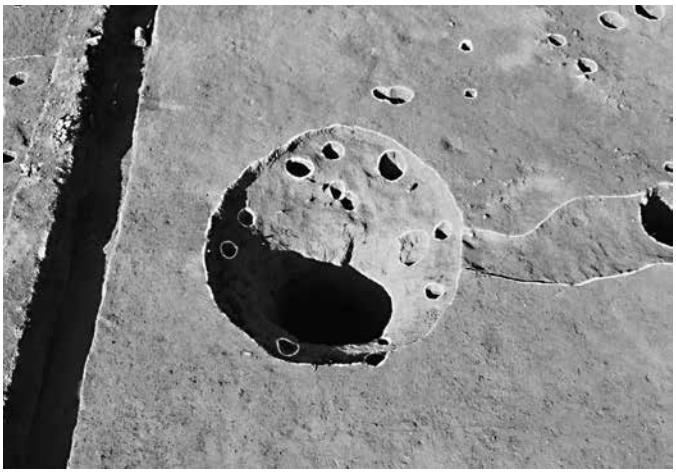


SE313（東）・SE314（東）完掘　南から

SE323（東）断面　南から



SE323（東）完掘



SE504（東）完掘　南から

SE508（東）断面　西から

SE508（東）完掘　北から

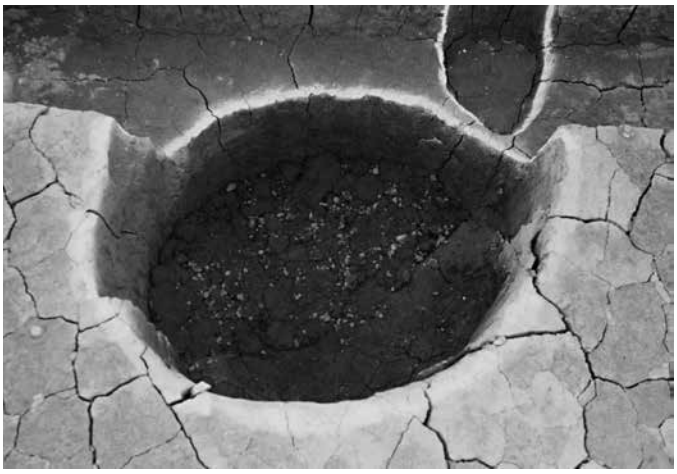
SE906（東）断面　西から

SE906（東）完掘　北から

SE924（東）断面　西から

SE924（東）完掘　北から

SE1018断面　西から



SE1018完掘　東から

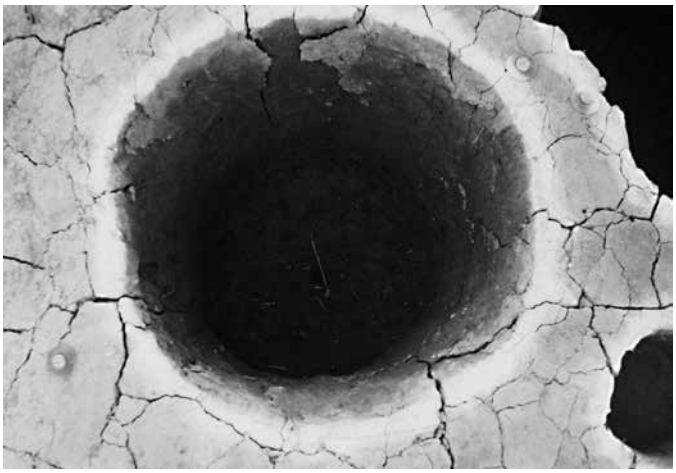
SE1019断面　東から

SE1019完掘　東から

SE1043断面　西から

SE1043完掘　東から

SE1044断面　西から



SE1044完掘　東から

SE1046断面　北から

SE1046完掘　南から

SE1216断面　西から

SE1216完掘　北から

SE1217断面　南から

SE1217完掘　東から

SE1218断面　南から

SE1218完掘　北から

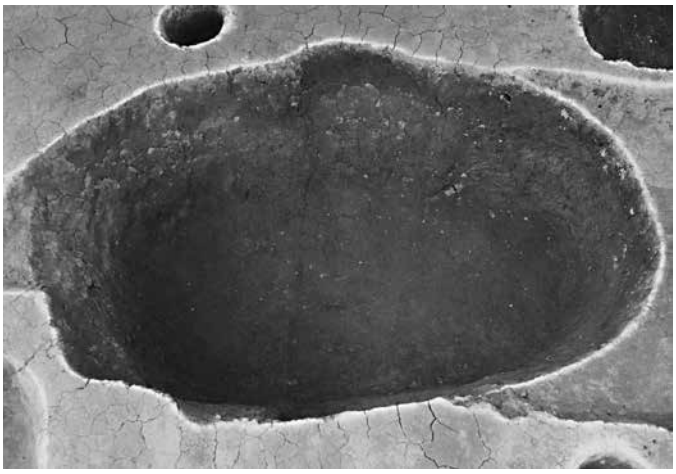
SE1226断面　南から

SE1226完掘　東から

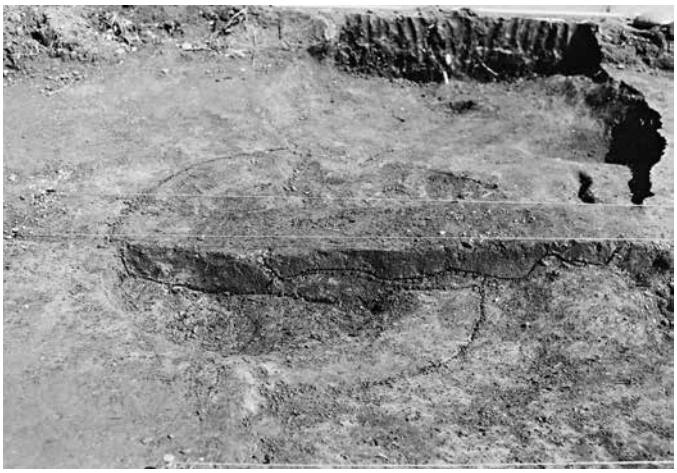
SE1245完掘　東から

SK33（AB）断面　西から

SK33（AB）完掘　西から



SK1241 完掘　南から



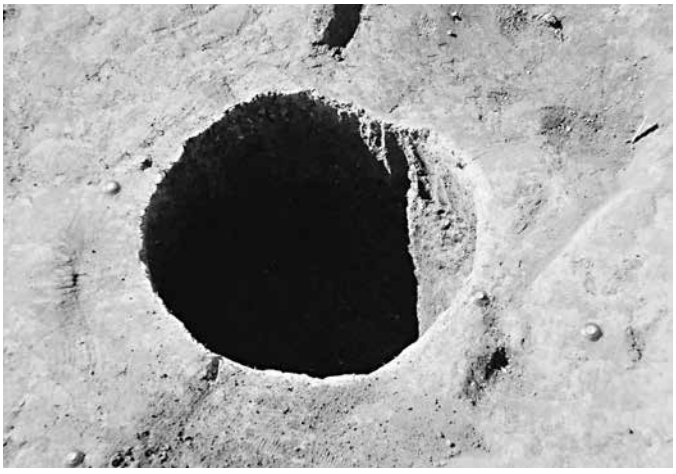
SB1-SK16・SD1（AB）断面　南から

SD1（AB）断面　南から

SD1（AB）完掘　西から

SB1-SK16断面　南から

SB1-SK16礫出土状況

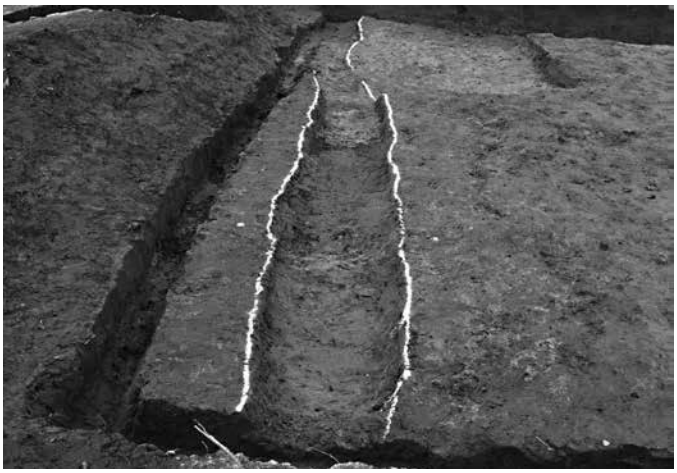


SB1-SK16完掘　南から

SK1201 断面　南から

SK1201 完掘　北から

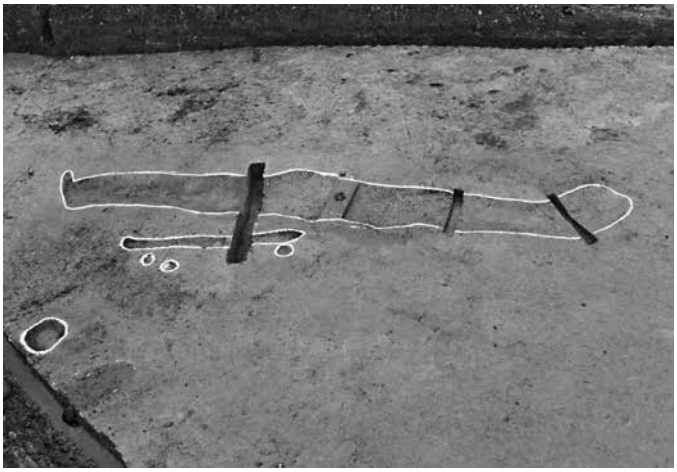
SD302（東）断面　西から



SD302（東）完掘　東から

SD311（東）完掘　南から

SD319（東）・SD320（東）断面　南から



SD319（東）・SD320（東）完掘　西から

SD903（東）断面　南から

SD904（東）断面　北から

SD905（東）断面　南から

SD961（東）断面　南から

SD965（東）・SD966（東）・SD967（東）断面　西から

SD1051・SD1052断面

SD1200・SD1202断面　南から

SD1200完掘　北から

SD1215（東）断面　南から

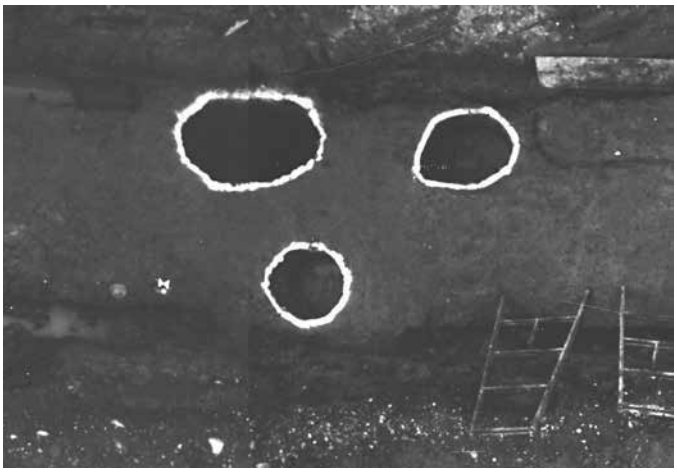
平安時代遺構完掘（八反田地区）

平安時代遺構完掘（P. R. 7東地区・3層目）

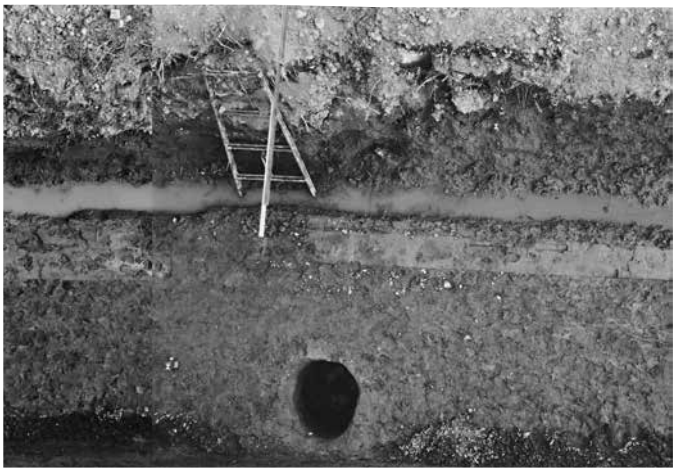
平安時代遺構完掘（P. R. 7東地区・4層目）

平安時代遺構完掘（P. R. 7西地区）

平安時代遺構完掘（P. R. 7地区）

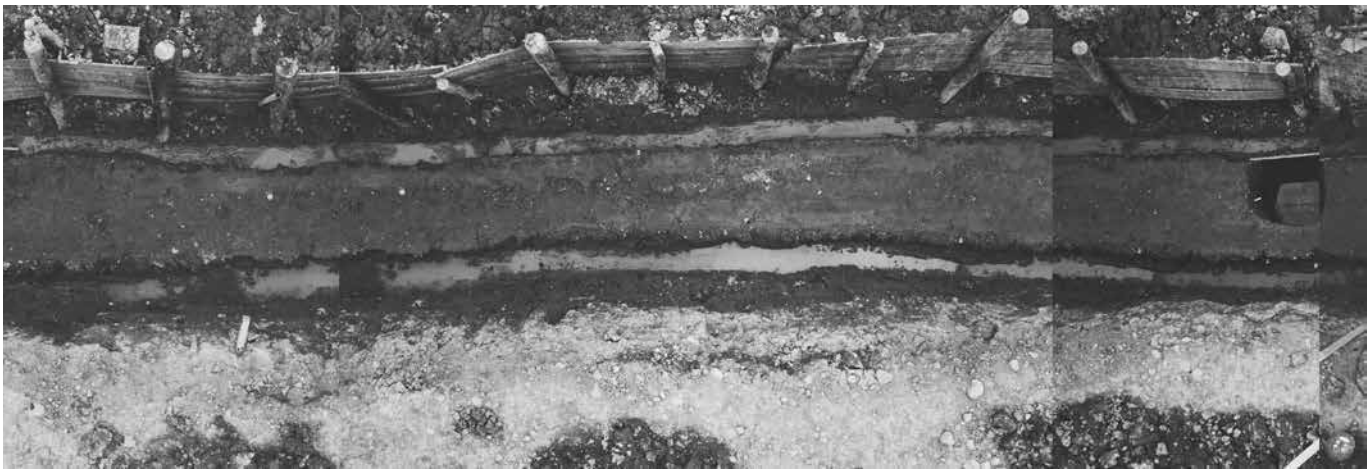


平安時代遺構完掘（水路東地区）

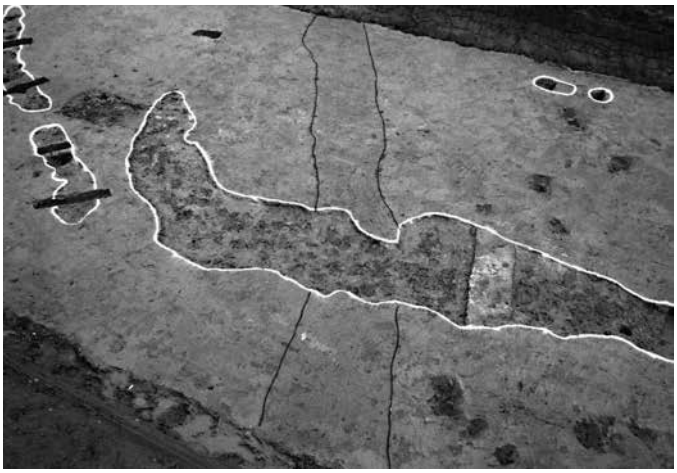


平安時代遺構完掘（水路西地区）

平安時代遺構完掘（水路中央地区）



平安時代遺構完掘（水路中央地区）



平安時代遺構完掘（C地区）

平安時代遺構完掘（C地区）

SB808（西）完掘　南から

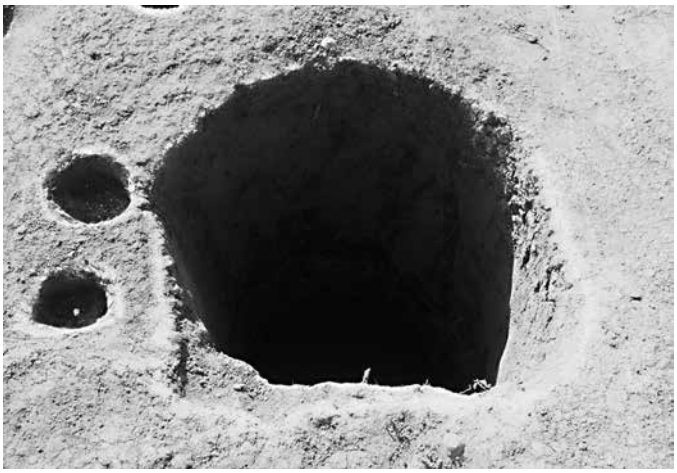
SB814（西）完掘　南から

8C3 グリッド土器出土状況　東から

SE1（水東）遺物出土状況

SE335（東）断面

SE335（東）完掘



SE505（東）完掘

SE901（東）完掘

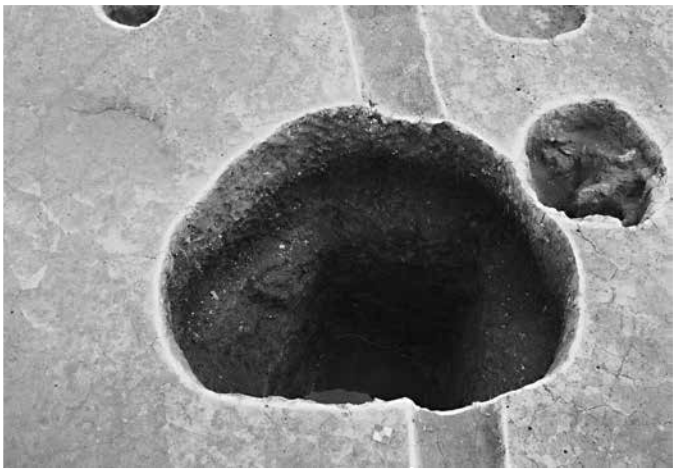
SE1086断面　北から

SE1086完掘　北から

SE1114断面　南から

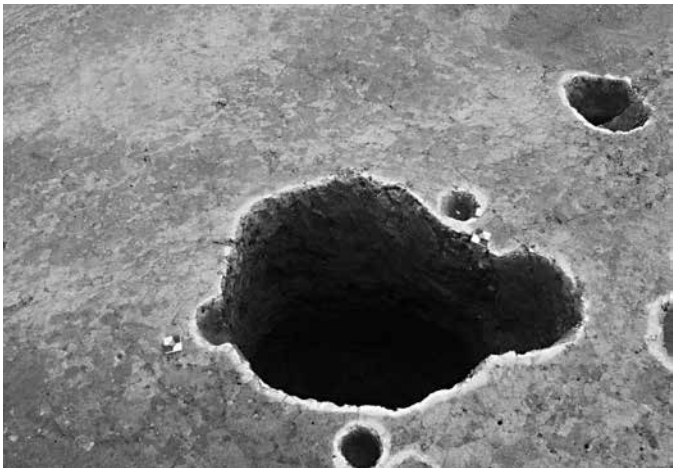
SE1114完掘　東から

SE1419断面　東から

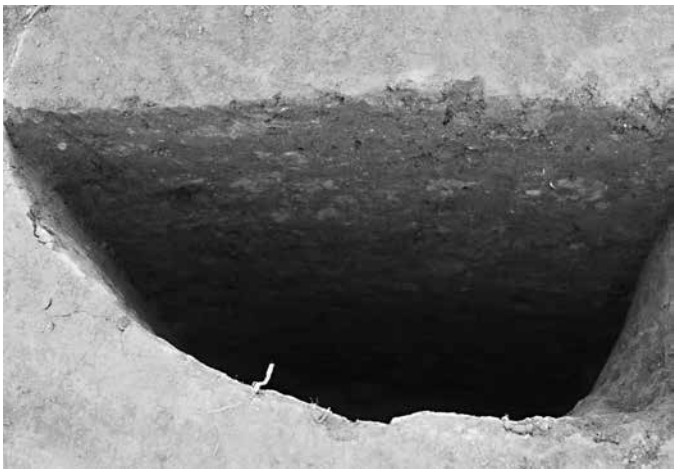


SE1419完掘　北から

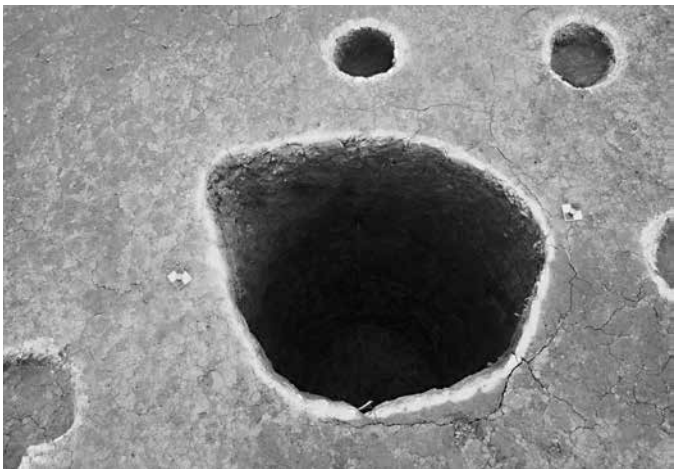
SE1420断面　南から



SE1420完掘　北から



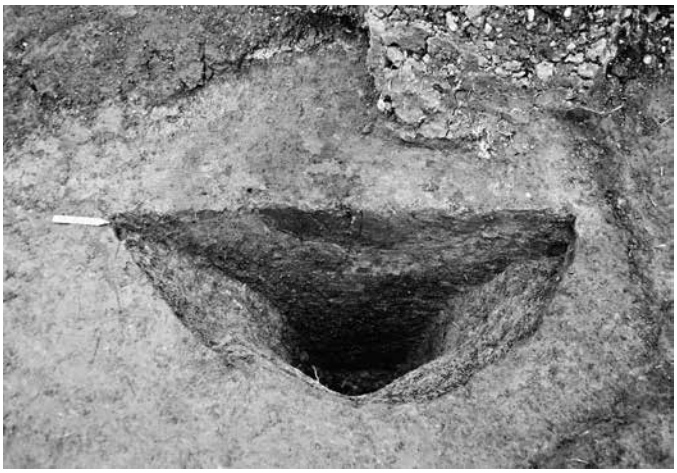
SE1425断面　南から



SE1425完掘　北から

SE1426断面　東から

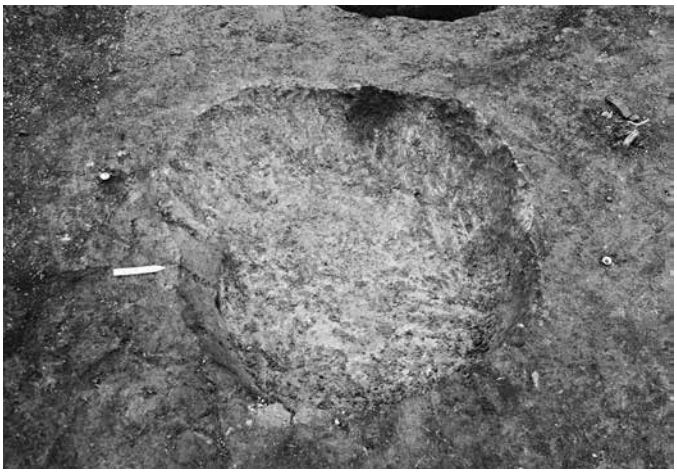
SE1426完掘　北から



SK2（AB）断面　南から

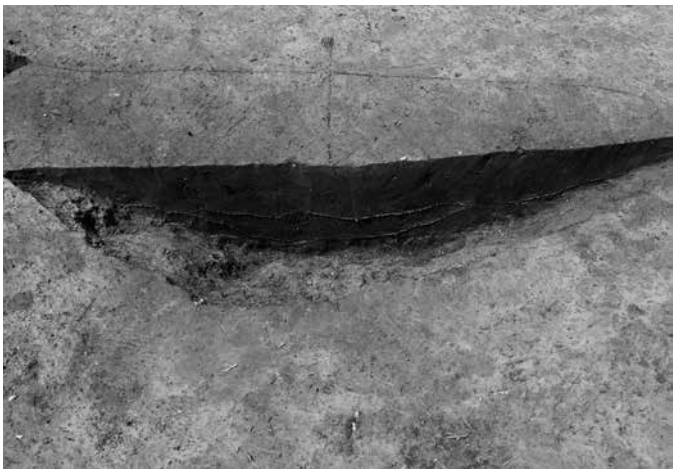
SK2（AB）完掘　北から

SK3（AB）断面　南から

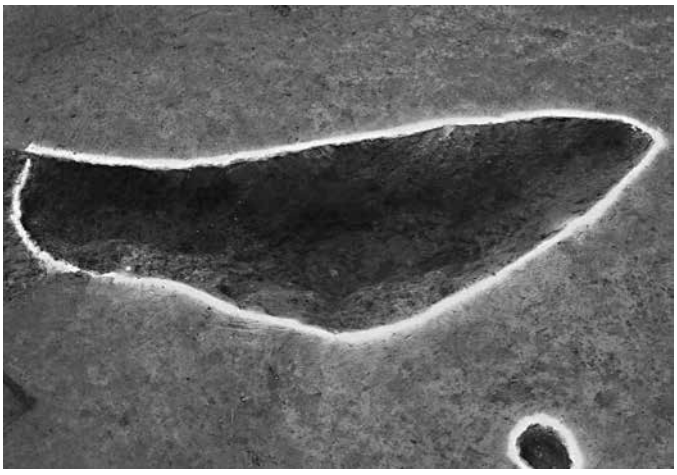


SK3（AB）完掘　南から

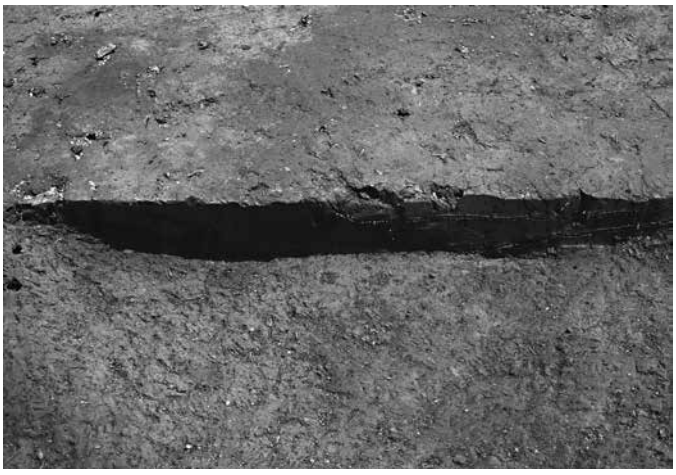
SK34（西）断面　北から



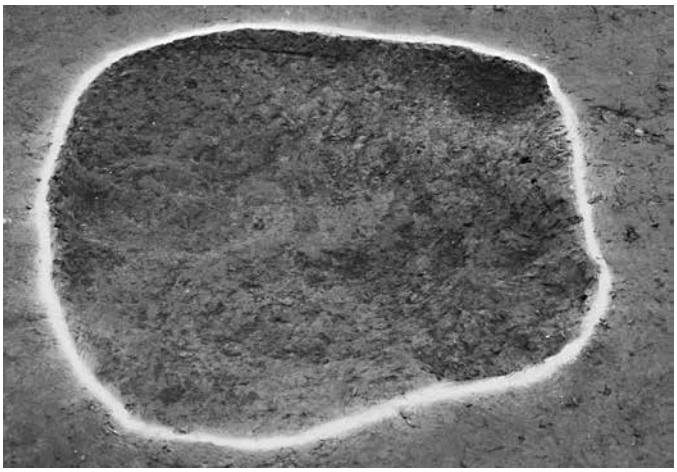
SK303（C.B.6）断面　東から



SK303（C.B.6）完掘　東から



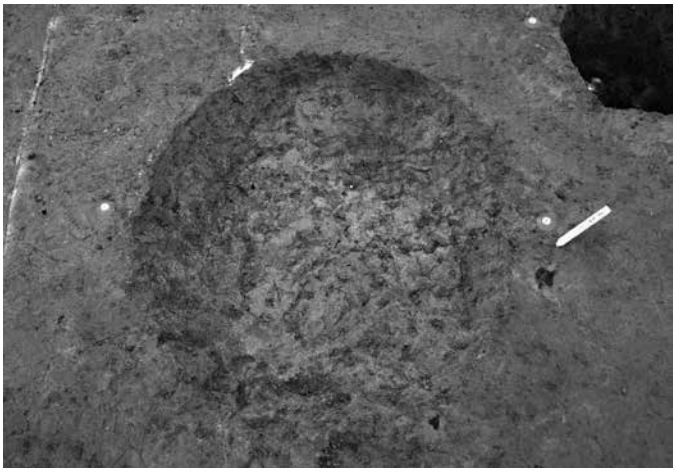
SK304（C.B.6）断面　西から



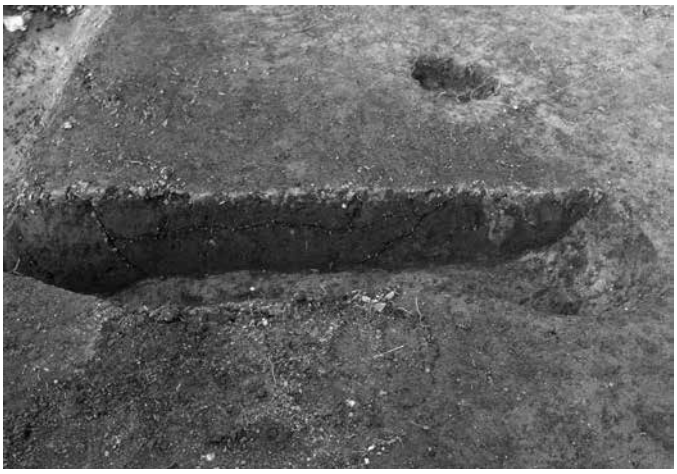
SK304（C.B.6）完掘　東から

SK803（西）断面　北から

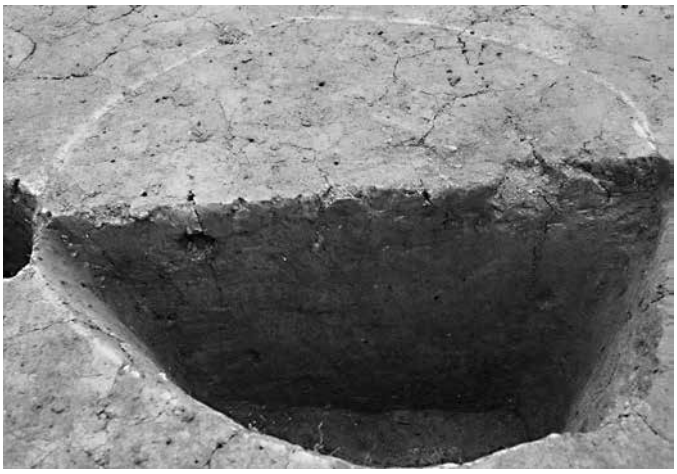
SK804（西）断面　北から



SK810（西）完掘　南から



SK925（東）断面　南から



SK1416断面　西から

SD208（東）・SX209（東）断面　南から

SD208（東）断面

SD54（AB）断面　北から

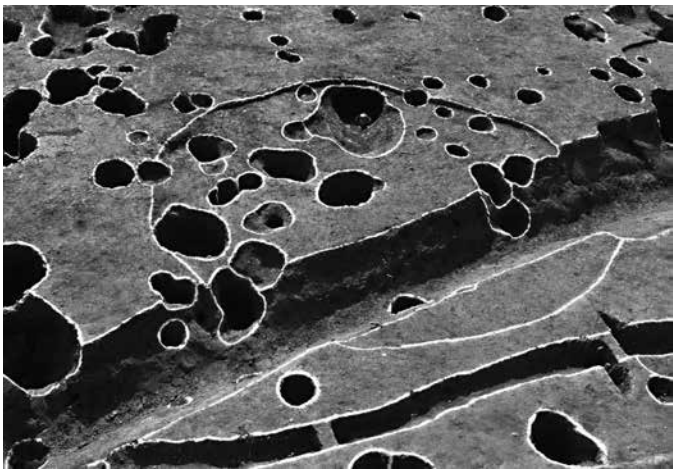
SD54（AB）完掘　南から

SD60（AB）断面　南から

SD60（AB）完掘　南から

縄文時代遺構完掘（八反田地区）

縄文時代遺構完掘（P. R. 7東地区５層目）



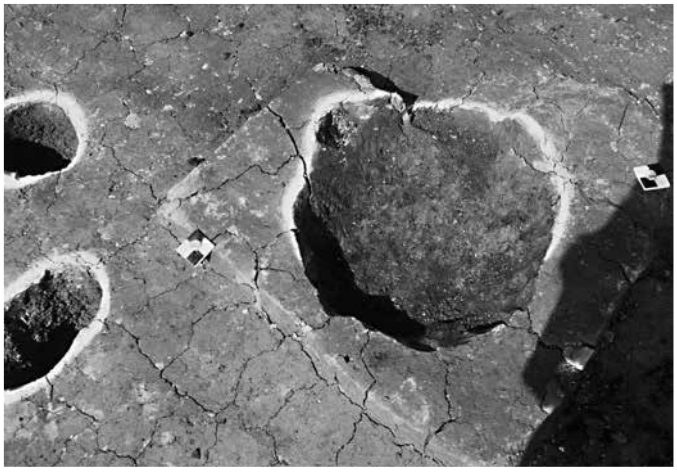
SI500（東）完掘　北から

SI500-SK4（東）断面　西から

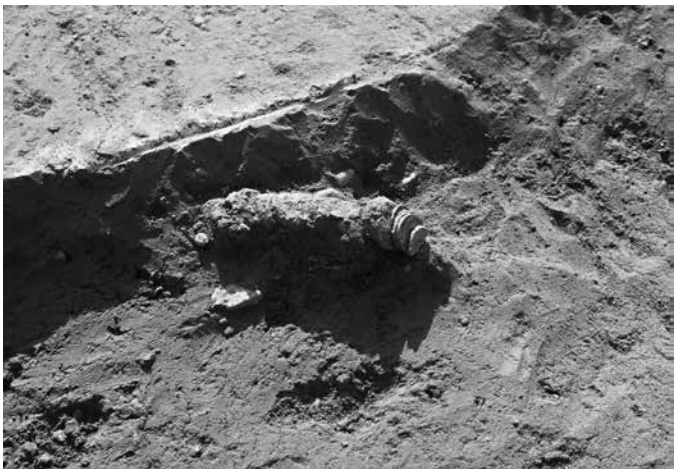
SI500-SK4（東）完掘　北から

SI922（東）完掘　北から

SI1471 完掘　東から



SI1472 炉跡完掘



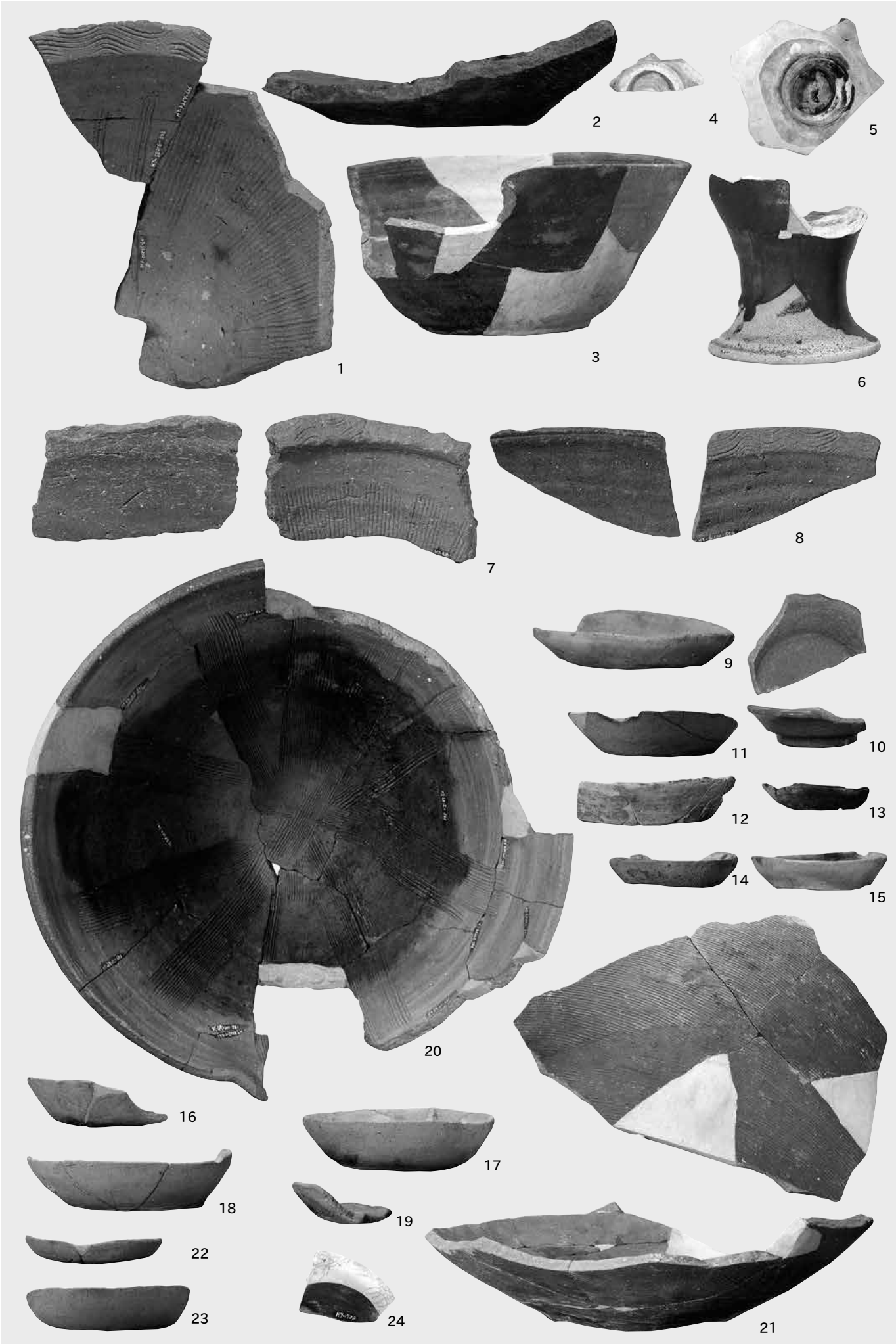
SD300 銭貨出土状況

加賀街道第２面完掘　東から

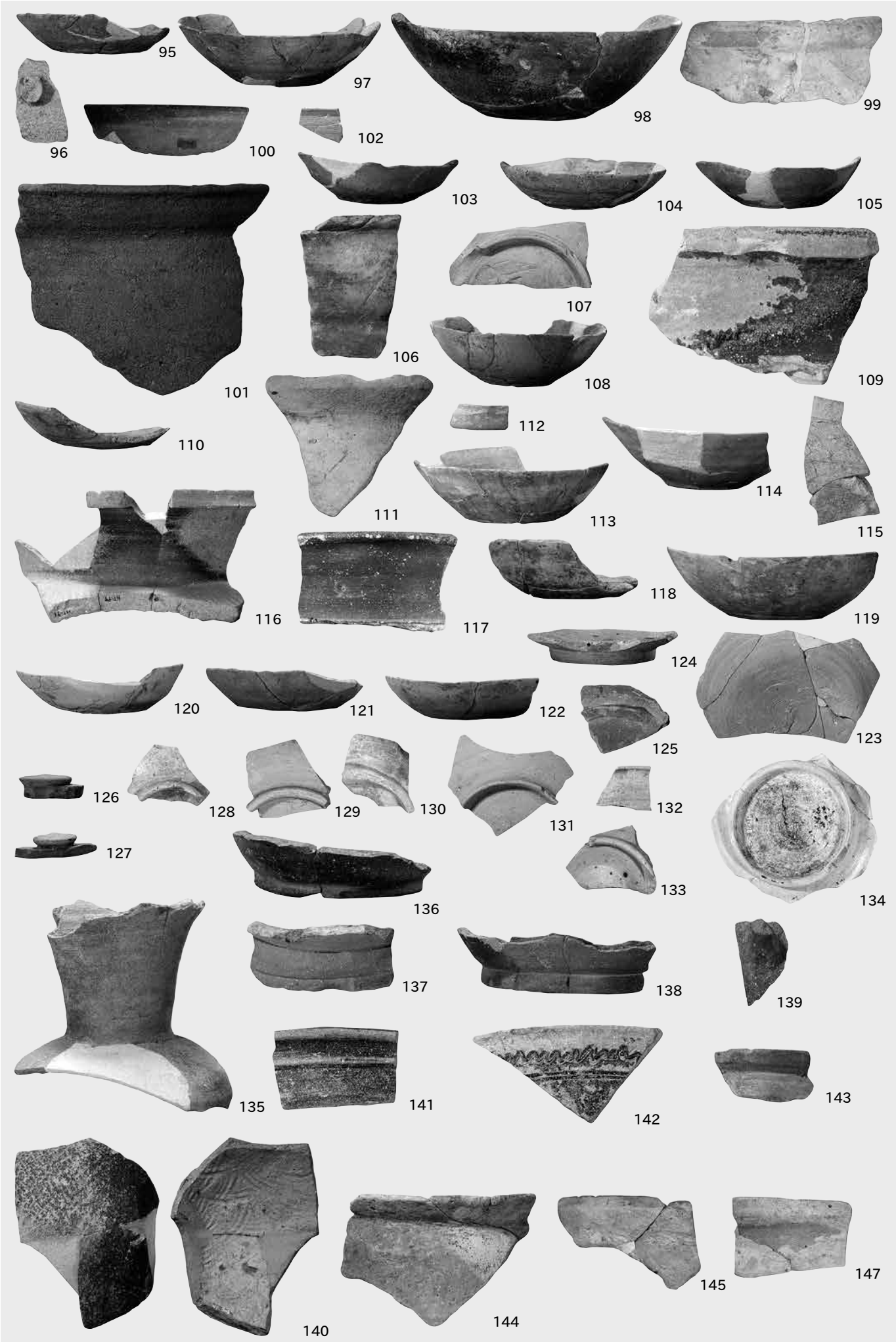
加賀街道第２面完掘　東から

加賀街道第３面完掘　東から

加賀街道第３面完掘　東から

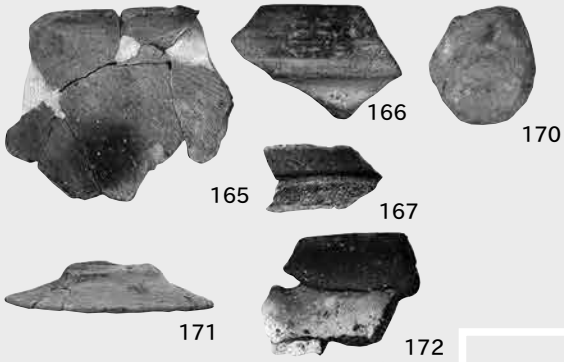

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

25
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
26
38
39
40
41
43
44
45
42
46
47
48
49
56
50
51
52
53
54
55
57
58
59
60
61
62
63
64
66
67
68
69
71
72
65
70
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
84
85
86
88
83
93
87
90
89
91
92
94

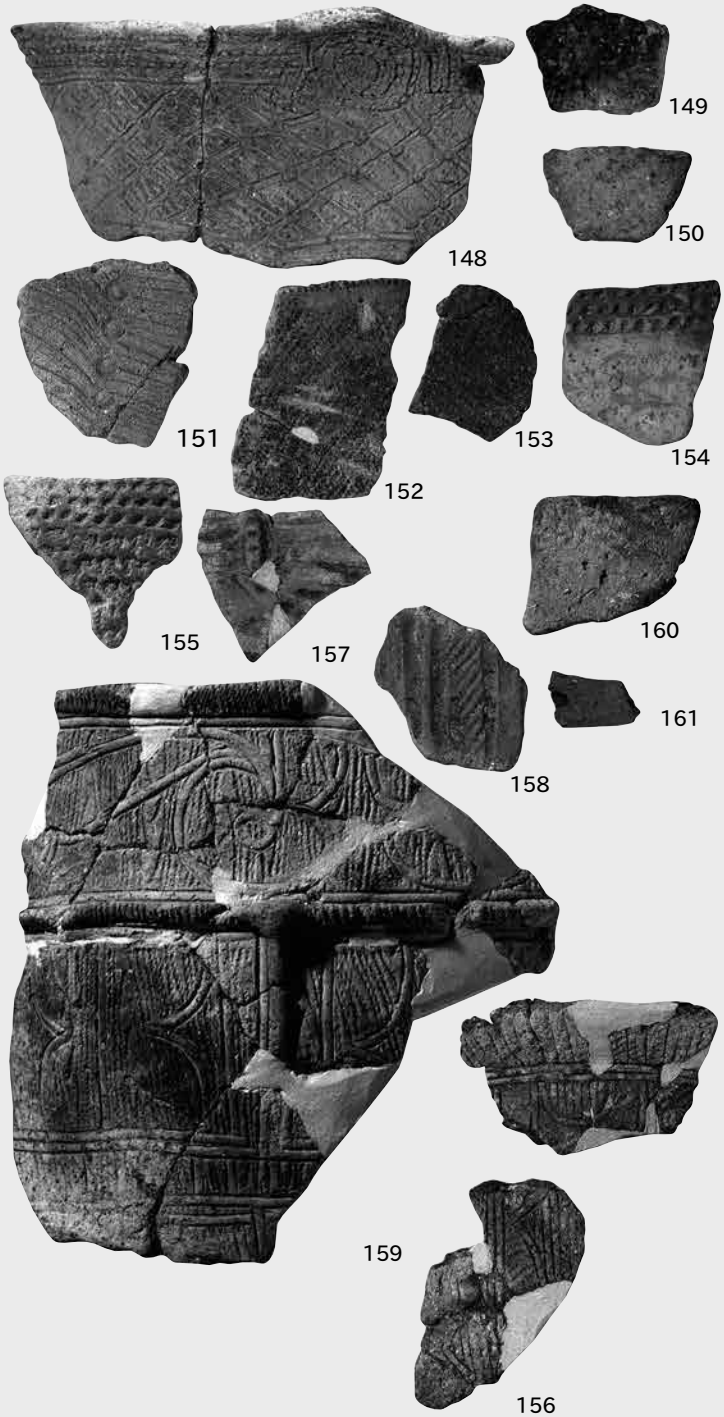

95
97
98
99
96
100
102
103
104
105
101
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
124
123
125
126
128
129
130
131
132
127
133
134
136
137
138
139
135
141
142
143
140
144
145
147

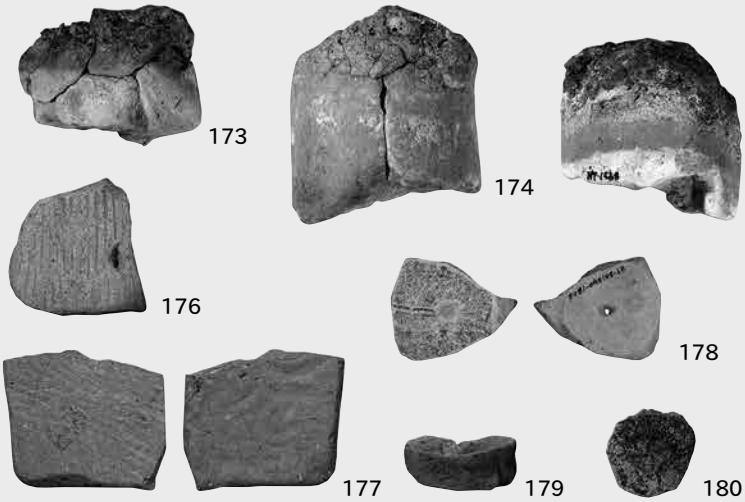
146

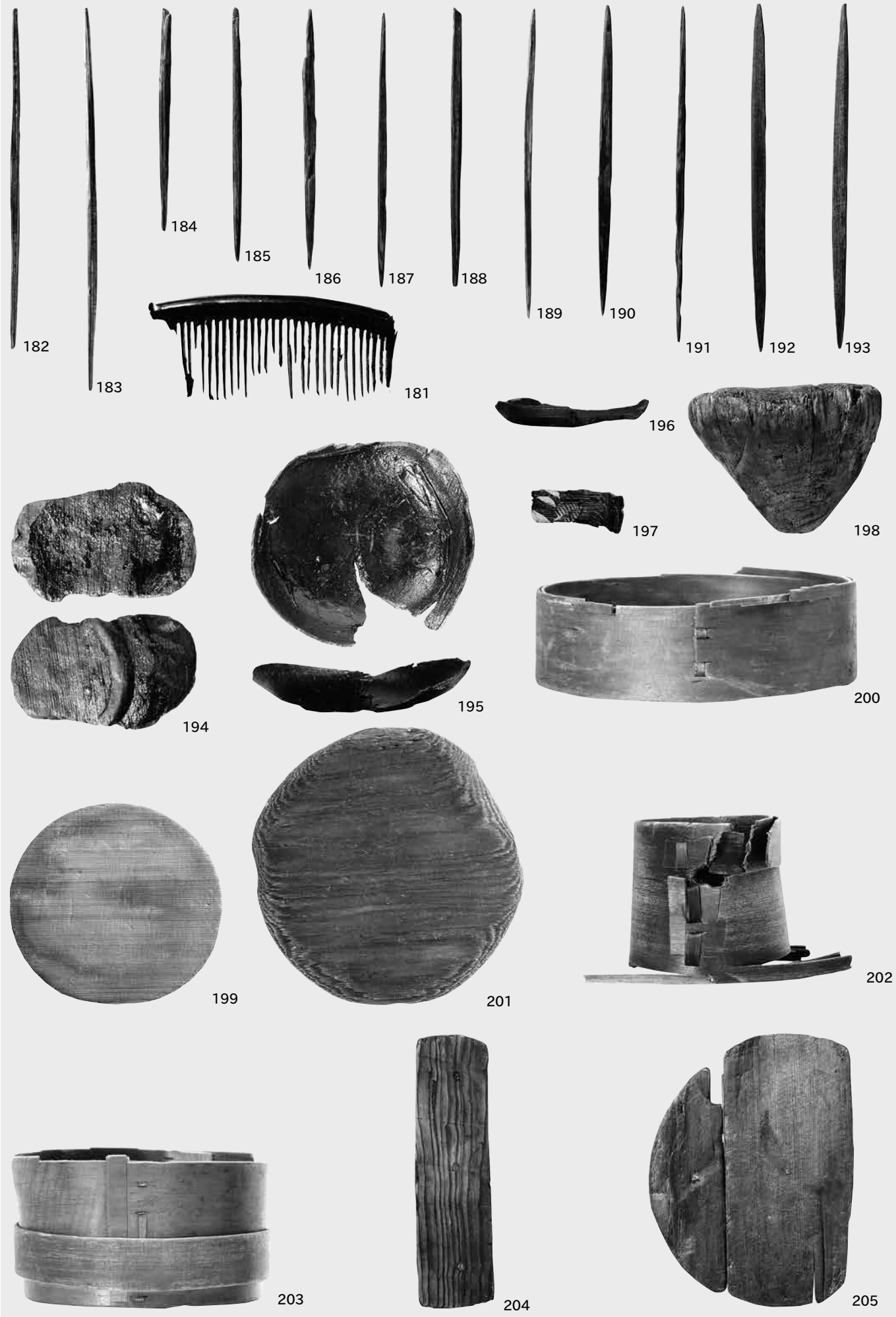
162
163

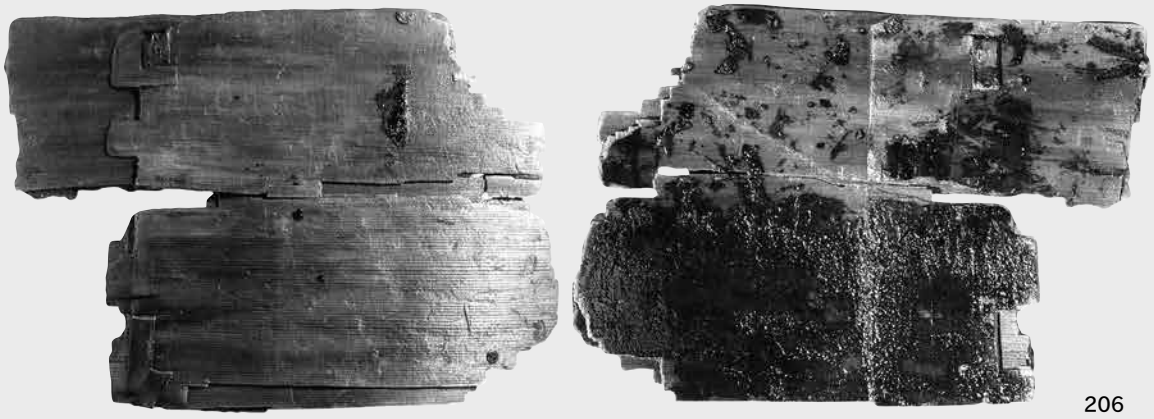

165
166
167
170
171
172

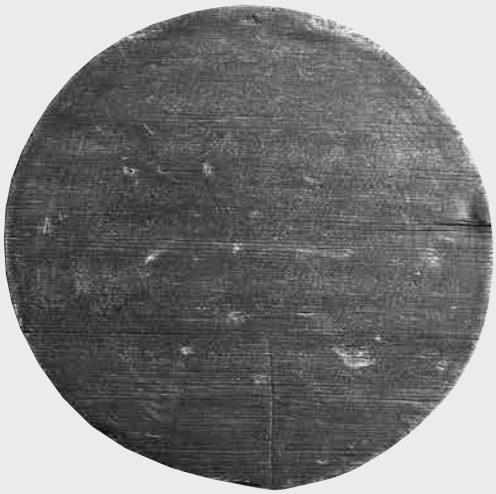
169


148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161

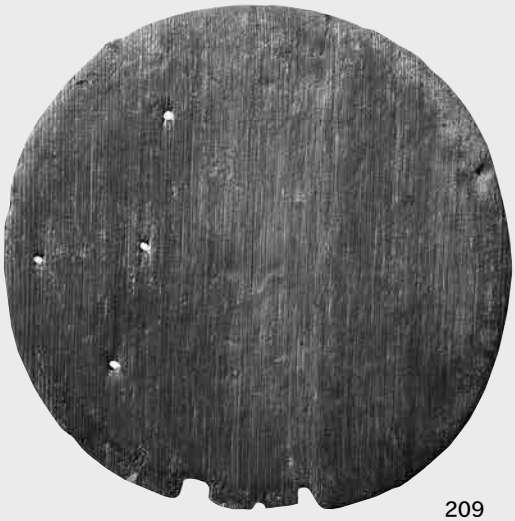

173
174
175
176
177
178
179
180


182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
181
196
198
197
194
195
200
199
201
202
203
204
205

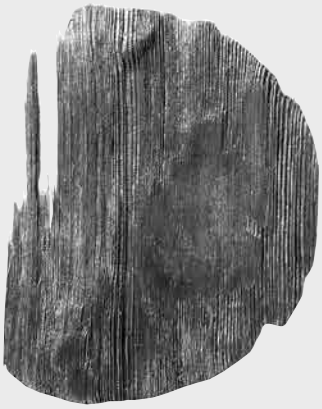

206


207

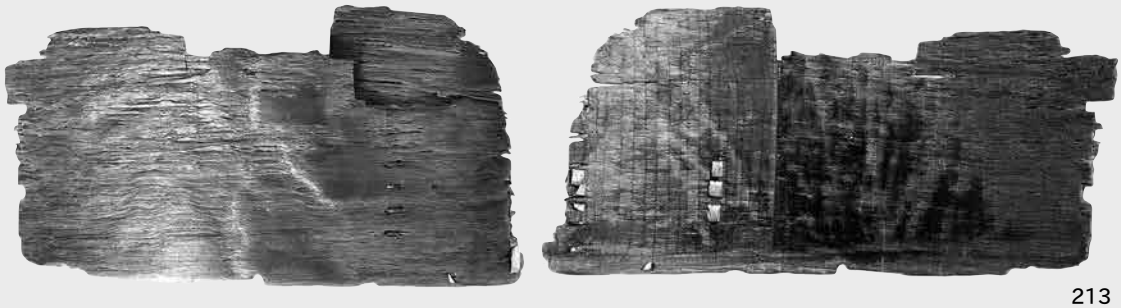
208


209

210


211

212

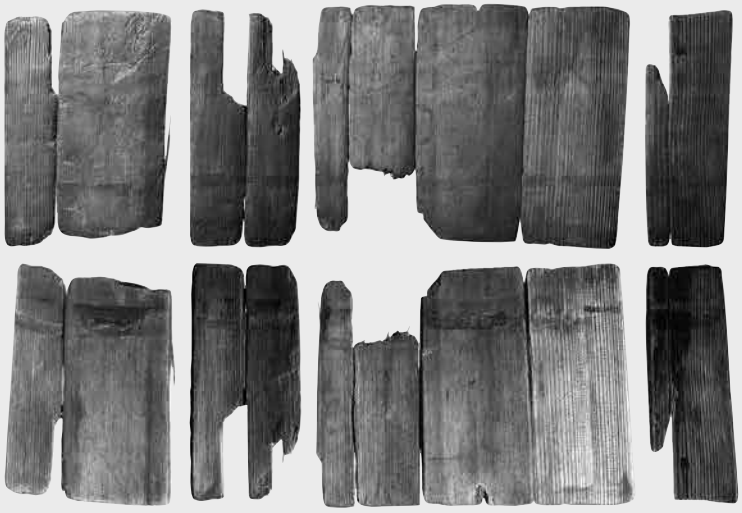


213

214

215

216



217

219

218

221

222

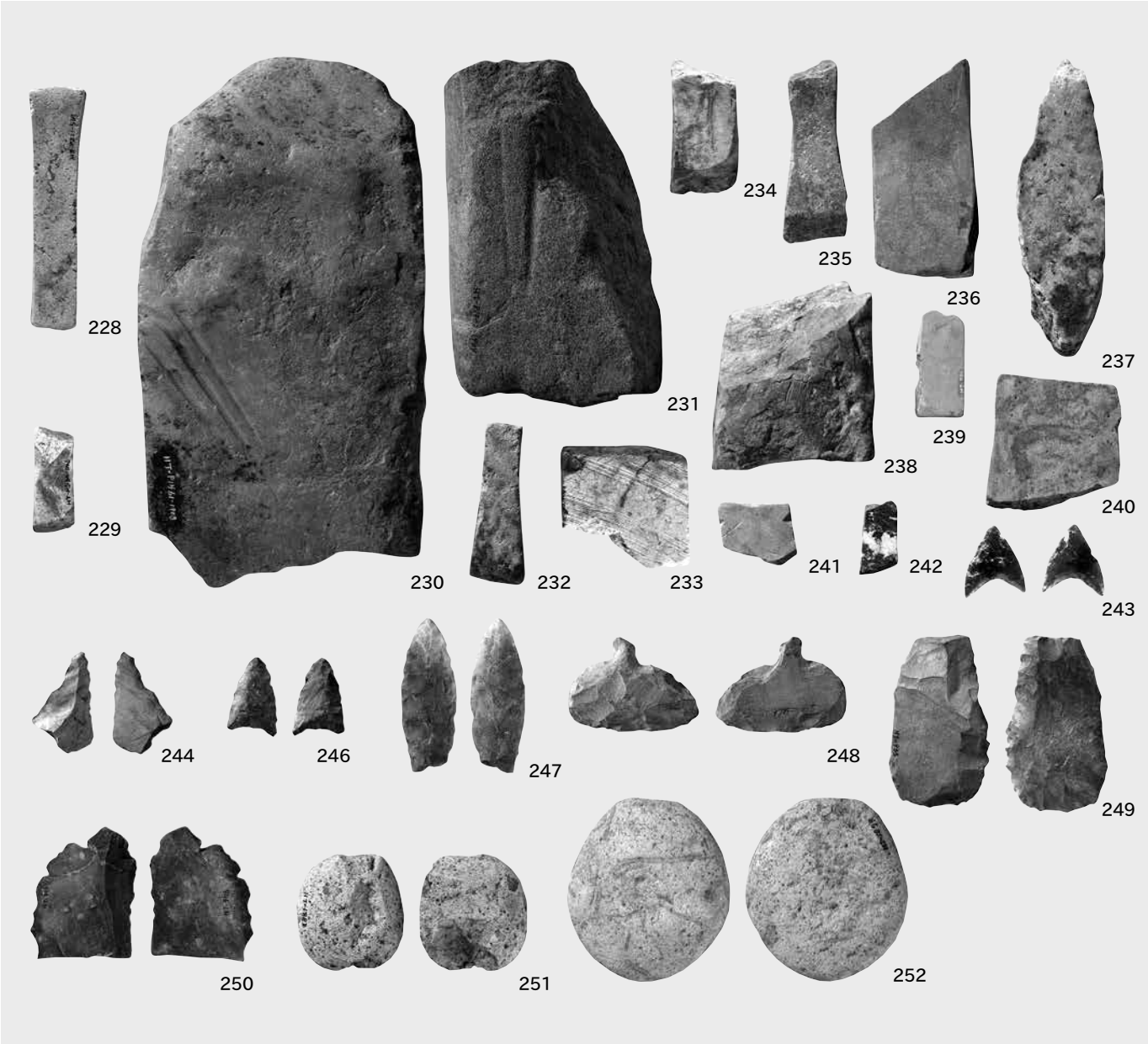
223

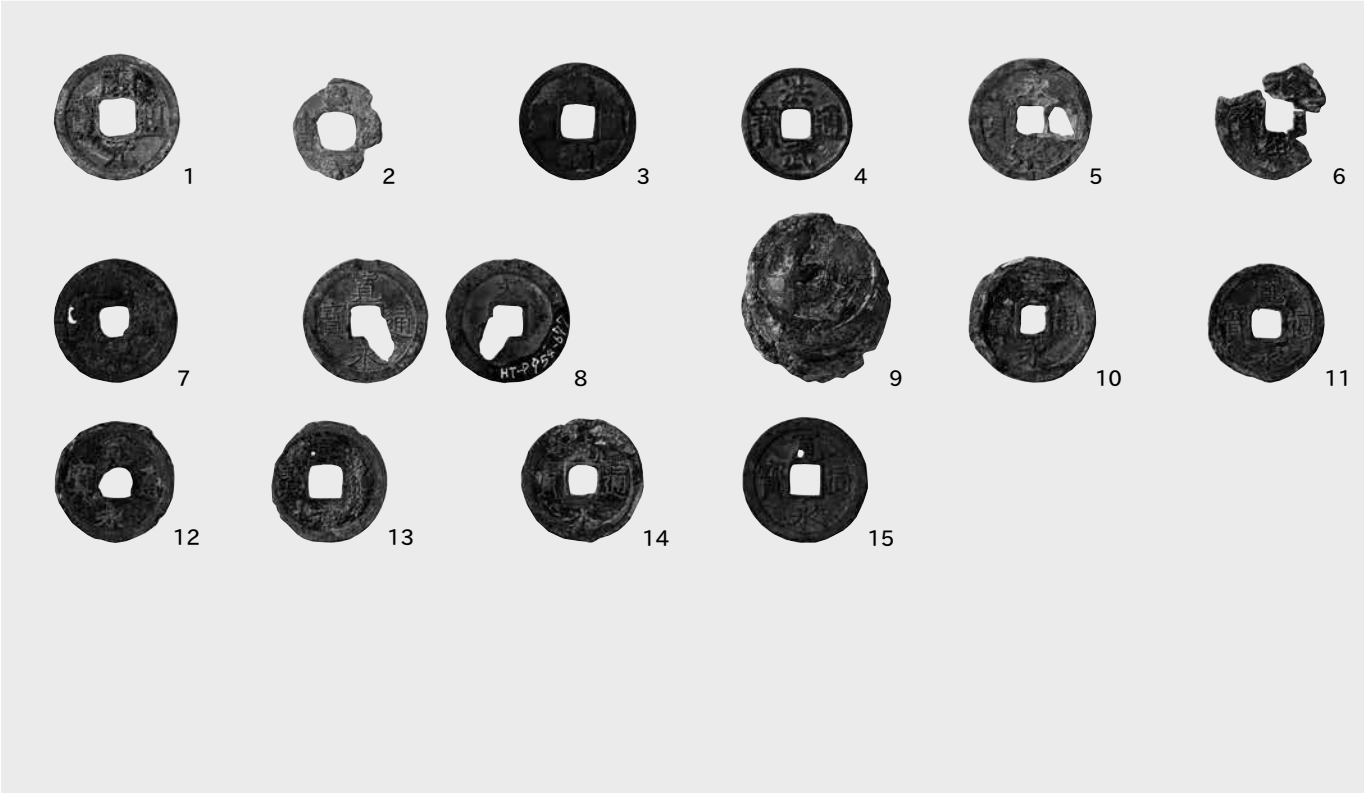
224

226

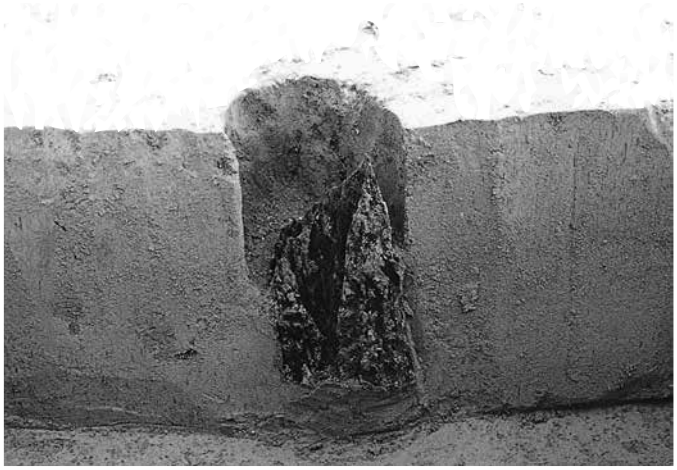
227

225

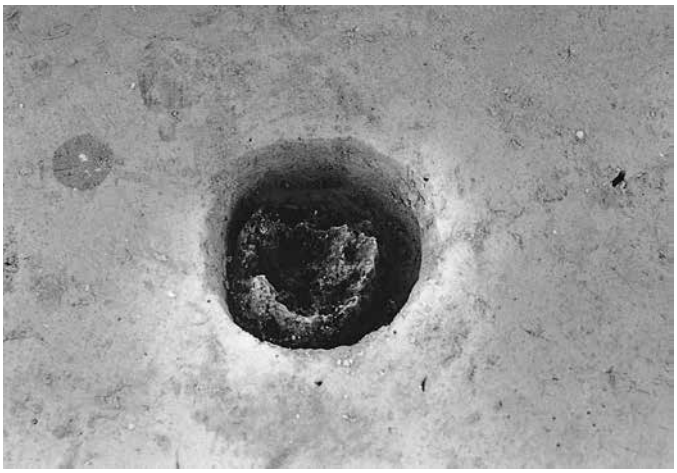

228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
246
247
248
249
250
251
252


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

C地点SB1完掘　北から

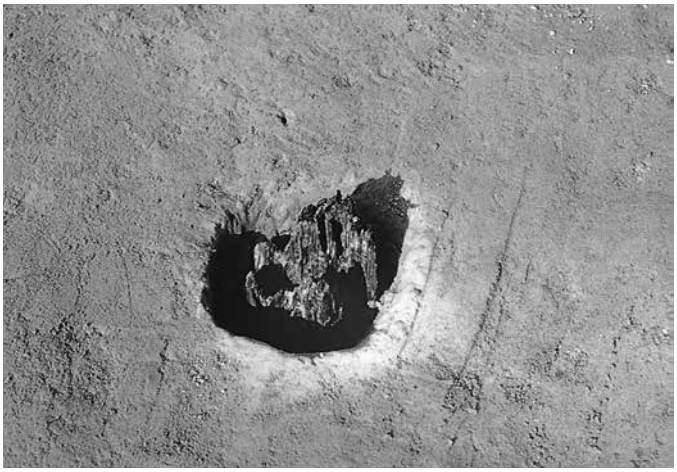


C地点SB1-P4断面



C地点SB1-P6柱根検出状況

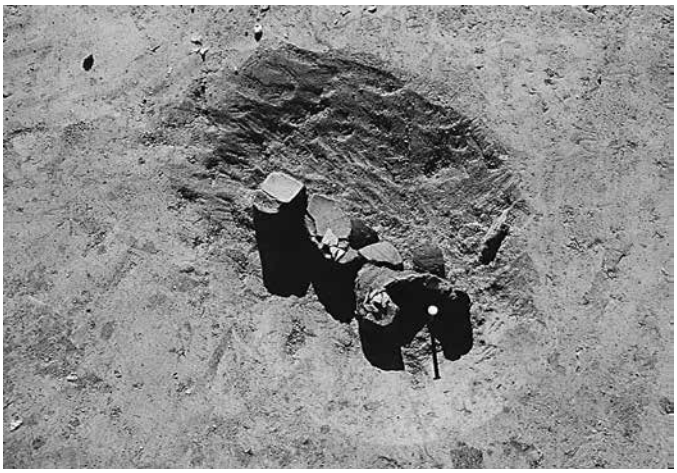
C地点SB1-P6断面



C地点SB1-P12柱根検出状況

C地点曲物出土状況

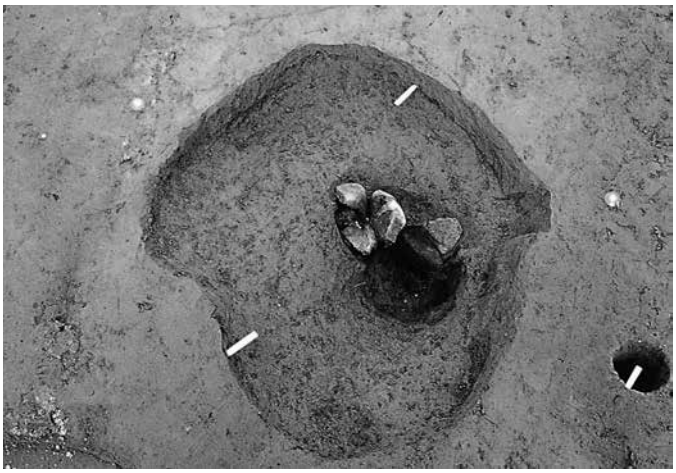
C地点SK1断面



C地点P14遺物出土状況

C地点P23断面

C地点P23遺物出土状況

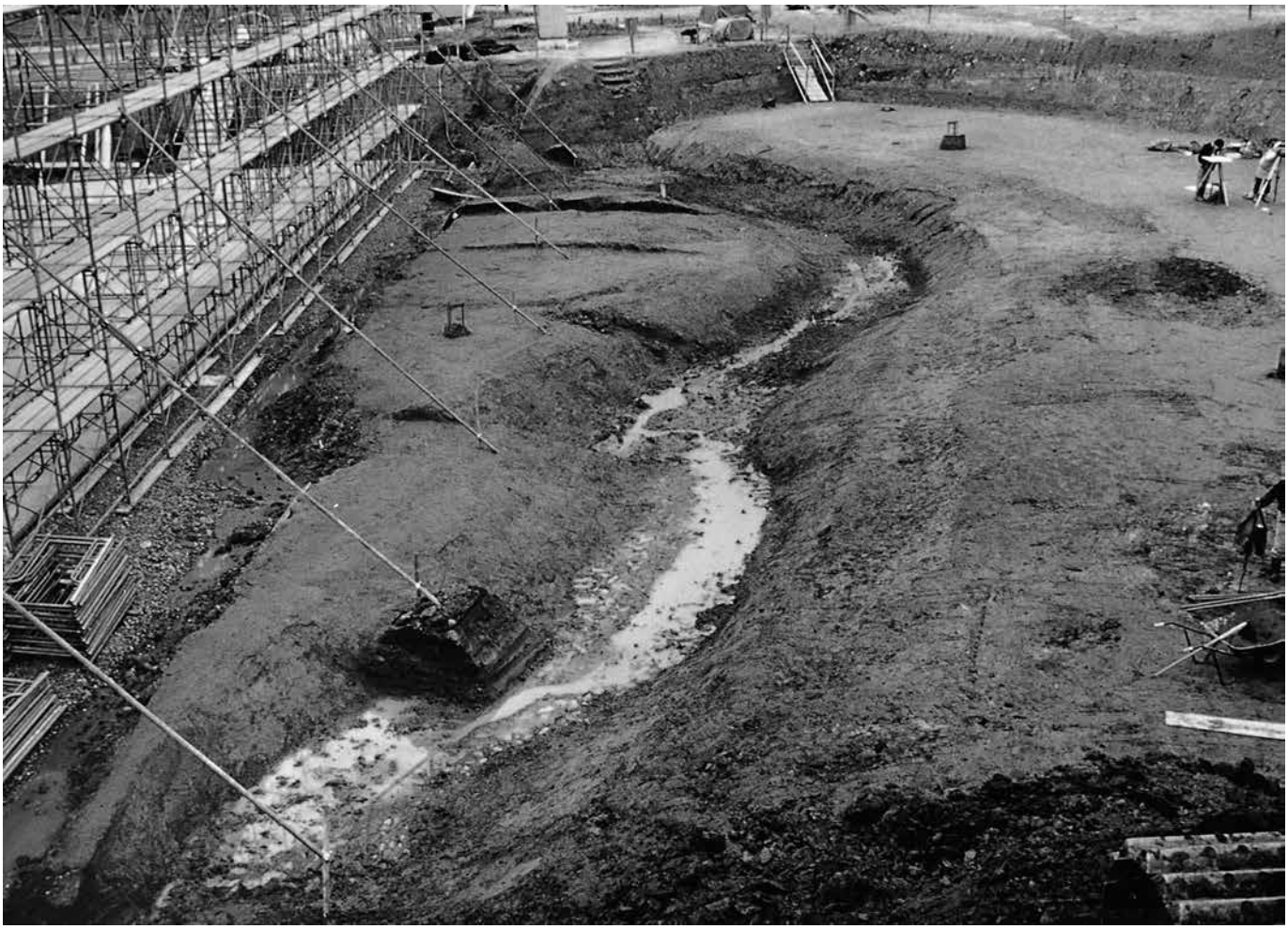


C地点P24遺物出土状況

C地点P11断面　東から

C地点SD1・２完掘　北西から

Ｃ地点SB2完掘　北から

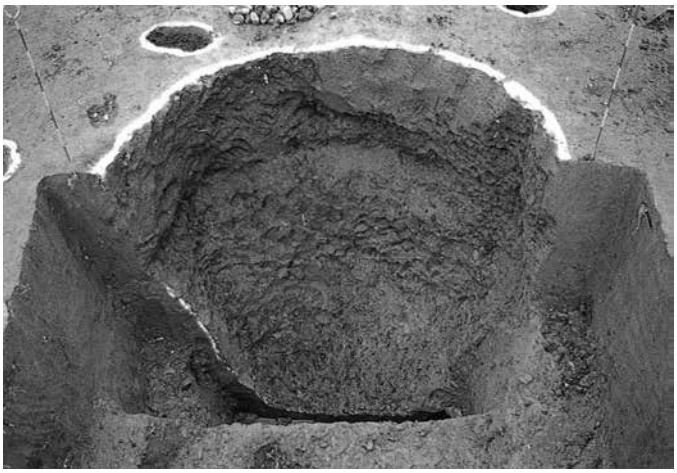


Ｃ地点黒色河川完掘　北から

二期線完掘　東から

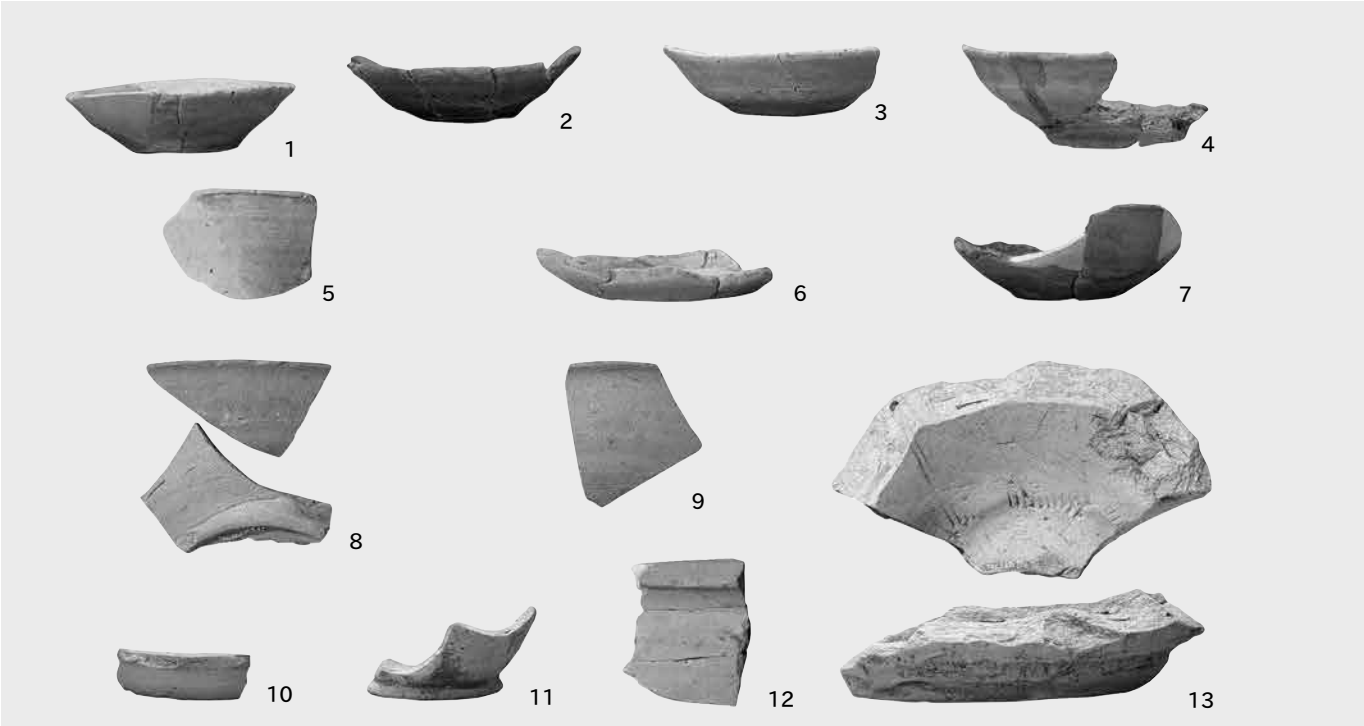
二期線 SE1 断面　西から

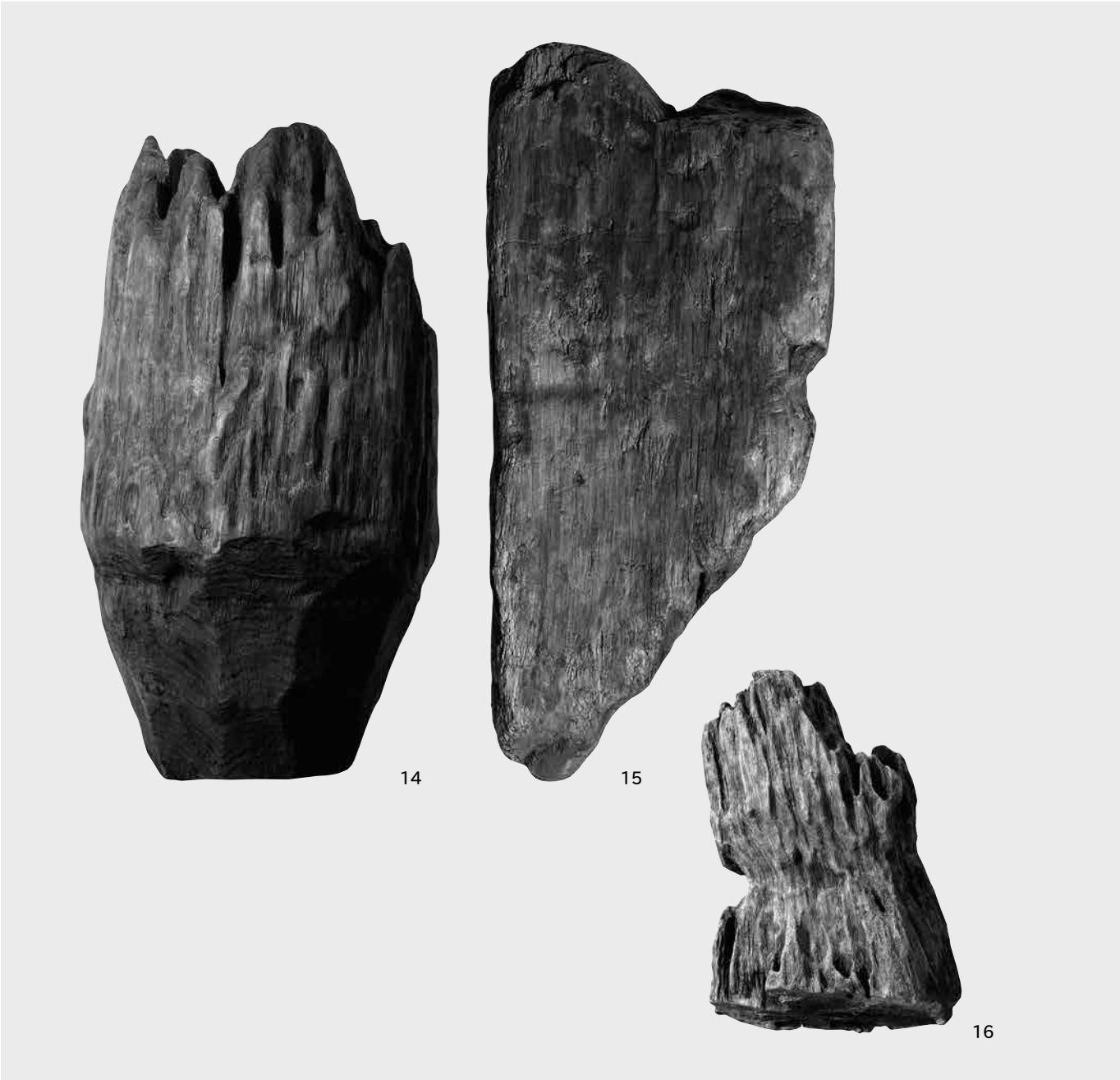
二期線 SE1 下駄出土状況　西から



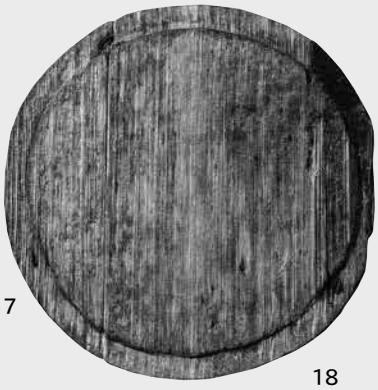
二期線 SE1 完掘　西から

二期線 SE1 出土礫


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13


14
15
16

17



18

19

20

22

23

報告書抄録

ふりがな	はったんだいせき　たかばたけいせきCちてん・にきせん
書名	八反田遺跡　高畑遺跡（C地点・二期線）
副書名	北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書
巻次	Ⅶ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第110集
編著者名	江口友子　寺崎裕助
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	2002（平成14）年3月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
八反田遺跡（はったんだいせき）	新潟県上越市（にいがたけんじょうえつし） 大字寺分字寺田（おおあざてらぶんあざてらだ） 1521ほか	15-222	103	37度 08分 15秒	138度 13分 40秒	19840703～ 19841125 19850416～ 19850716 19870911～ 19871104 19880718～ 19880902	15,106m²	道路（北陸自動車道）建設

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
高畑遺跡（たかばたけいせき） （C地点（ちてん）・二期線（にきせん））	新潟県上越市（にいがたけんじょうえつし） 大字岩木字高畑（おおあざいわきあざたかばたけ）	15-222	161	37度 08分 13秒	138度 13分 20秒	19841023・1101～ 19841117 19870901～ 19870911 19870924～ 19871015	1,507m²	道路（北陸自動車道）建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八反田遺跡	集落	中世	掘立柱建物2、井戸、土坑、ピット、溝	中世土師器、珠洲、瀬戸・美濃、輸入陶磁器、漆器、木製品、石製品、羽口、鉄滓、銭貨	溝に囲まれた屋敷地
	集落	平安時代	掘立柱建物4、柵列、井戸、土坑、ピット、溝	須恵器、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、木製品、石製品	
	集落	縄文時代前期	竪穴住居4、土坑	諸磯a・b式土器、関山Ⅰ式土器、石器	
	散布地	弥生～古墳時代		月影式土器、S字状口縁台付甕	
	交通	近世	路面4、溝	寛永通寶、肥前陶磁器	加賀街道
高畑遺跡（C地点・二期線）	集落	平安時代～中世	掘立柱建物2、井戸、ピット、溝、河川跡	土師器、灰釉陶器、珠洲、石製品、木製品	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第110集

北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅶ

八反田遺跡　高畑遺跡（C地点・二期線）

平成14年3月28日印刷
平成14年3月29日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　新高速印刷株式会社
〒950-0963　新潟市南出来島2丁目1-25
電話　025（285）3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第110集『八反田遺跡 高畑遺跡（C地点・二期線）』 正誤表追加

2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	八反田遺跡　東経（旧座標）	１３８度１３分４３秒	１３８度１３分４０秒
抄録	高畑遺跡　東経（旧座標）	１３８度１３分２３秒	１３８度１３分１９秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第110集

八反田遺跡・高畑遺跡（Ｃ地点・二期線） 正誤表

頁	行	誤	正
26	26	須恵器が１点出土しているが、周辺に縄文土器も散布しており、時期は不明である。	周辺では縄文土器が散布しているが、住居内からは須恵器片が１点出土していることや方形プランを呈することなどから、古代の住居跡の可能性が高い。

上記表のとおり訂正くださるよう、お願いします。

新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団